スーパーロボット大戦Z　魔王が進む覇道

有頂天皇帝

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二次スーパーロボット大戦Ｚ再世編のゼロレクルートで登場人物を追加したりなどしてリメイクしました。原作ルートとは異なる展開や追加シナリオがあります。

参戦作品

無敵超人　ザンボット３
無敵鋼人　ダイターン３
無敵ロボ　トライダーＧ７
宇宙大帝　ゴッドシグマ
宇宙戦士　バルディオス
太陽の使者　鉄人２８号
六神合体　ゴッドマーズ
戦闘メカ　ザブングル
装甲騎兵ボトムズ
超時空世紀　オーガス
機動戦士Ｚガンダム
機動戦士ガンダム　逆襲のシャア
新機動戦記ガンダムＷ
機動新世紀ガンダムＸ
∀ガンダム
機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ
機動戦士ガンダム００

超獣機神　ダンクーガ
獣装機攻　ダンクーガ　ノヴァ
マクロス７
マクロス　ダイナマイト７
マクロスＦ
真（チェンジ!!）ゲッターロボ　世界最後の日
真マジンガー　衝撃！Ｚ編
地球防衛企業ダイ・ガード
ＴＨＥビッグオー
オーバーマン　キングゲイナー
超重神グラヴィオン
超重神グラヴィオンツヴァイ
創聖のアクエリオン
コードギアス　反逆のルルーシュ
コードギアス反逆のルルーシュＲ２
天元突破グレンラガン
劇場版　天元突破グレンラガン　紅蓮編
劇場版　天元突破グレンラガン　螺巌編
交響詩篇エウレカセブン　ポケットが虹でいっぱい
新規参戦予定
スーパーロボット大戦ＯＧジ・インスペクター
スーパーロボット大戦３０
スーパーロボット大戦Ｖ
クロスアンジュ
機動戦士Ｇガンダム
機動戦士Ｖガンダム
機動戦士ガンダムＡＧＥ
機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ
マジンカイザーＳＫＬ
コードギアス　亡国のアキト
コードギアス　双貌のオズ

コードギアス　ナイトメア・オブ・ナナリー
鋼鉄神ジーグ
機獣創世記ゾイドジェネシス
ゾイドワイルドシリーズ（ゾイドのみ参戦）
ナイツ＆マジック
銀河機攻隊マジェスティックプリンス
ＳＴＡＲ　ＤＲＩＶＥＲ　輝きのタクト
キャプテン・アース
革命機ヴァルヴレイヴ
アルドノア・ゼロ
蒼穹のファフナーＥＸＯＤＵＳ
ガン×ソード
勇者王ガオガイガーＦＩＮＡＬ
勇者警察ジェイデッカー
勇者特急マイトガイン
劇場版機動戦艦ナデシコ　―Ｔｈｅ　ｐｒｉｎｃｅ　ｏｆ　ｄａｒｋｎｅｓｓ―
ＳＳＳＳ．ＧＲＩＤＭＡＮ
ＳＳＳＳ．　ＤＹＮＡＺＥＮＯＮ
宇宙戦艦ヤマト２１９９
ノブナガ・ザ・フール
境界戦機

目次

キャラ設定
機体設定1 ―― 1
キャラ設定1 ―― 13
再世編
プロローグ　鎮魂歌への始まり ―― 25
第一話　騎士と亡霊と鋼の戦士たちの出会い ―― 40
第二話　覇王の序章 ―― 58
第三話　動き出す覇王 ―― 72
第四話　ナナリーの決意、会談の前夜 ―― 82
第五話　ＺＥＸＩＳとの会談 ―― 97
第六話　潜む悪意 ―― 117
第七話　眠れぬ夜の始まり ―― 134
第八話　開戦 ―― 156
第九話　進撃 ―― 188
第十話　思いを剣に乗せて ―― 220

キャラ設定
機体設定１

サザーランド・アビス
第七世代相当ＫＭＦ
全高：４．３９ｍ
全備重量：８．５７ｔ
動力：エナジーフィラー、プロペラントタンク
推進機関：ランドスピナー、フロートユニット
武装：内蔵式対人機銃　、スラッシュハーケン×２　、スタントンファー×２　、アサルトライフル
、対人用ライフル　、大型電磁ランス　、ケイオス爆雷　、大型キャノン、ＭＶＳ、ヴァリス、ヒートアックス、レールガン、ザッテルヴァッフェ、ブレイズルミナス、

サザーランドの改修機として第零騎士団と深淵騎士団の一般団員たちが使用する量産機。その性能はヴィンセント・ウォードと同等でありながら規格がサザーランドと同じことから整備のしやすさが売りである。ブレイズルミナスやヴァリスを使用するためにマリオの使用したサザーランド・カスタムのデータを元に機体の各部に増設エナジータンクが装備されておりその部位も守るため通常より装甲が分厚くなっている。主武装はヴァリス、ヒートアックス、ザッテルヴァッフェ、ブレイズルミナスであり、ほかの武装としてアサルトライフル、大型キャノン、ＭＶＳ、レールガン、電磁ランス、ケイオス爆雷などパイロットの特徴に合わせて追加装備されている。

グロースター・アビス
第七世代相当ＫＭＦ
全高：４．２９ｍ
全備重量：８．７５ｔ
動力：エナジーフィラー、プロペラントタンク

推進機関：ランドスピナー　、フロートユニット
武装・内蔵式対人機銃　、対ナイトメア戦闘用大型ランス　、スラッシュハーケン×２　、ケイオス爆雷　、アサルトライフル　、大型キャノン　、ザッテルヴァッフェ　、ＭＶＳ×２、ブレイズルミナス、レールガン、ヴァリス、
グロースターの改修機として第零騎士団と深淵騎士団の一般団員が使用する量産機。サザーランド・アビスと同じようにサザーランド・カスタムのデータを元にしているため機体各部に増設エネジータンクとその上に増設装甲がつけられている。主武装は電磁ランス、ＭＶＳ、ザッテルヴァッフェ、ヴァリス、ブレイズルミナス。ほかの武装としてアサルトライフル、ロケットランチャー、ケイオス爆雷、レールガンなどパイロットの特徴に合わせて追加装備されている。
ゲッターα
全高：４２．５ｍ
全備重量：２８５ｔ
武装・ゲッタートマホークｘ２、ゲッターマシンガンｘ２、ゲッターカッターｘ２、ゲッターバズーカ、ゲッタービーム
作業用ロボットであるゲッター１とゲッターチームの戦闘データを元に製造された量産型ゲッターロボ。空陸戦を得意とするゲッターロボ。武装はゲッター１のゲッタートマホークとゲッターマシンガンの他に真ゲッター１のゲッターレザーより短い刃が両腕に生やし、ゲッター線を放出させるゲッターバズーカを新たに装備させている。（イメージとしては新ゲッター１に近い）
ゲッターβ
全高：４２．５ｍ
全備重量：２８５ｔ
武装：ドリルアーム、ゲッタークロスシザー、マシンガンサブアームｘ２、
作業用ロボットであるゲッター２とゲッターチームの戦闘データを元に製造された量産型ゲッターロボ。
陸での高速移動及び地中活動が可能なゲッターロボ。武装はゲッ

ター2と同じゲッタードリルと腰に新たにつけられた2本のサブアームによるゲッターマシンガン、ペンチ型だったゲッターアームはハサミ型のゲッタークロスシザーに変更された。またゲッタークロスシザーはヒートアックスのように刃部分が高熱とかして敵を溶かしながら斬ることも可能。（イメージは新ゲッター2）

ゲッターγ

全高：３４．８ｍ

全備重量：２８５ｔ

武装：ゲッターミサイル、ゲッターキャノンｘ２、ゲッターシールド、ゲッターハンマーアックス、ゲッターバズーカｘ２、

作業用ロボットであるゲッター3とゲッターチームの戦闘データを元に製造された量産型ゲッターロボ。重量戦及び水中活動に適したゲッターロボ。武装は上半身を覆うほどの大きな大盾であるゲッターシールドとゲッターハンマーアックスを主武装としており、装甲も他の2機に比べて重装甲となっている。（イメージは新ゲッター3に装甲を増加したもの）

この3機のゲッターロボは戦闘用に改めて開発された機体であるがパイロットは強化スーツを着なければまともに操縦することができない。この3機のゲッターロボは3人のパイロットによって操縦する量産型と1人のパイロットによって操縦する簡易量産型が存在する。量産型ゲッターロボは変形することは可能であるがその合体スピードはゲッターチームに比べてかなり遅れる。簡易量産型ゲッターロボは1人で操縦するため量産型ゲッターロボに比べてスペックは劣り、合体機能もオミットすることで1人で操縦出来ることからコストはかなり抑えられ操縦性と整備のしやすさから数の面ではこちらが優れている。

グフ・デスペラード

全高：１８．７ｍ

全備重量：８５．６ｔ

武装：ガトリングシールド改×２、マグナブレード×２、ヒートロッ

ド、ビームガトリング砲×２、ミサイルポット×４、チェーン・マイン、対艦大型ライフル、ビームライフル、グレネード、

グフ・カスタムを元に改修された機体。砲撃戦に特化しており両腕部に装備したグフ・カスタムのガトリングシールドを改良し実弾・ビーム弾の撃ち分けが可能。背中のバックパックコンテナには対艦大型ライフルやチェーン・マイン、ビームライフルなど複数の射撃武装を搭載している。（イメージはガンダムビルドファイターズのラルさんの仕様ガンプラ《グフＲ３５》のカラーリングを深い紺にして重武装化したもの）

ヴィンセント・アビス

全高：４．４４ｍ

全備重量：７．５８ｔ

推進機関：ランドスピナー、フロートユニット

武装：ＭＶＳ×４、ハドロンブラスター、スラッシュハーケン×４、ニードルブレイザー×２、

本国にて製造されていたランスロット・コンクエスターの予備パーツと予備武装を使いヴィンセント指揮官専用型を改良した機体。武装はランスロット・コンクエスターのものを引き継いでおりその性能は第八世代相当の性能を誇る。（イメージはランスロット・コンクエスターとヴィンセント指揮官専用型を足して２で割ったものを黒いカラーリングにしたもの）

アルトアイゼン・クリンゲ

全高：２３．８ｍ

全備重量：１５８．３ｔ

武装：スプリットミサイル、５連チェーンガン、プラズマホーン、リボルビング・バンカー、レーゲンクス・クレイモア、リボルビングガンハルバード

アイドネウス島で発見された半壊状態のアルトアイゼン・リーゼを改修した機体。火薬入りのチタン弾からゲッター合金の弾に変更し威力を上げた《レーゲンクス・クレイモア》はアルトアイゼン・リーゼの《アヴァランチ・クレイモア》よりも射程・威力があがっている。

さらに身の丈ほどあるリボルバーを組み込んだハルバードの《リボルバーガンハルバード》によるハルバードの刃による斬撃とハルバードの刃の反対側の銃口には特殊弾頭が内蔵されており、ハンマーのように叩きつけることで至近距離から攻撃が可能。クリンゲはドイツ語で刃という意味。（イメージは漆黒のアルトアイゼン・リーゼに《鉄血のオルフェンズ》の《ガンダム・ガミジン》のリボルバーガンアックスの刃を長くしたのを装備させたもの）

アズールリッター

全高：２２．９ｍ

全備重量：１９２．８ｔ

武装：スプリットミサイル、バックラー、ＧＮビームランス、ハウリング・ランチャーＧ、シールドビット×２０

アイドネウス島で発見された半壊状態のヴァイスリッターとアルトアイゼン・リーゼに残っていたライン・ヴァイスリッターの戦闘データを元に改修された機体。接近戦にも対応できるようブレイズルミナスを展開することが出来るバックラーとＧＮビームランスを装備している。ゲッター合金の実弾とゲッタービームを使い分ける《ハウリング・ランチャーＧ》と青白い羽根型のビット兵器《シールドビット》によるビームと斬撃による攻撃を使い分け砲撃する。（イメージはライン・ヴァイスリッターを紺碧と黒のカラーリングにし、２対の鳥の翼に変更したもの）

コキュートス

全高：２１．５ｍ

全備重量：７６．２ｔ

武装：アブソリュートバスター×２、ジークヴルム×２、ミサイルコンテナ、ダガービット×１２、アサルトライフル、ビームライフル、ハンドガン×４、

アイドネウス島にて発見された半壊状態のヴァングネクスをより銃撃：砲撃戦に特化するよう強化された機体。背中のバックパックに小型の銃剣型ビット兵器《ダガービット》やミサイルコンテナ、ハンドガン、アサルトライフル、ビームライフルなど多種多様の武装を搭

載しており、片手で持てるサイズの小型レールガン《ジークヴルム》と背中のバックパックの両側に懸架する大型の陽電子砲《アブソリュートバスター》をメインに圧倒的な火力による殲滅を得意とする。
（イメージは白銀のカラーリングをしたヴァングネクス）

餓者髑髏
全高：５．０８ｍ
全備重量：９．２８ｔ
武装：鬼切、虎徹、スラッシュハーケン×４、小太刀×４、ルミナスブレイズ、ルミナスコーン

キョウト六家の桐原泰造が秘密裏にブリタニア軍に潜ませたスパイから盗ませたランスロットのデータを元に日本製ランスロットとして開発されていたが、ブラックリベリオン時にて桐原が捕まり処刑されたことで開発途中でフレームのみの状態でフジの地下に封印されていたのを桐原からその事を聞いていたルルーシュが確保し、ランスロット・コンクエスターとガーリオン・カスタム〝無名〟の戦闘データを元により強力な機体として製造された。主武装は桐原が自ら名付けた日本刀型ＭＶＳの《虎徹》と《鬼切》による近接戦闘と斬撃を飛ばす。
（イメージは日本鎧風の東部に紅い三本角を生やした漆黒のランスロット・コンクエスター）

グルンガスト帝式
全高：６０．２ｍ
全備重量：４５９．８ｔ
武装：ブーストナックル、ブースタードリル、バーストミサイル、斬艦斧

アイドネウス島にて発見された半壊状態のグルンガスト参式を改修した機体。１人乗り仕様になっているためＧ―ラプター、Ｇ―バイソンへの分離機構はオミットされその分動力源として大型のゲッター炉心の搭載や脚部や腕部にバーストミサイルを搭載などがされておりグルンガスト参式より高出力・高火力を誇る機体となった。参式斬艦刀に変わる武装として巨大な両刃の戦斧（イメージは真ゲッ

タードラゴンのゲッタートマホーク）《斬艦斧》を装備している。斬艦刀と同じ液体金属であるゾル・オルハルコニウム合金で造られた斬艦斧はその刃を伸縮自在に変化させることが可能。
（イメージは漆黒のカラーリングのグルンガスト参式）

ルルーシュ皇帝軍・部隊編成

第一機甲師団

師団長：ゼハート・ガレット　ガンダムレギルス

部隊長：フラム　フォーンファルシア、レイル・ライト　ギラーガ改、ドール・フロスト　ジルスペイン、ザナルド・ベイハード　ザムドラーグ

一般団員機：ガフラン、バクト、ゼダス、ドラド、クロノス、ゼイダルス、ダナジン、ゴメル、ウロッゾ、レガンナー、

第二機甲師団

師団長：アレン・フォルネウス　ガンダム・バルバタウロスシュトルゥム

部隊長：ローグ・カロック　レギンレイズ・ソード、

一般団員機：グレイズ、グレイズリッター、グレイズシルト、ランドマン・ロディ、ユーゴー、マン・ロディ、ガルム・ロディ、獅電、漏影、百錬

協力者：アルフレード・ガラント　アルシエル、ビゾン・ジェラフィル　ネルガル、ラーシャ・ハッカライネン　クリシュナ、タルジム・ヴァシリー　オーガ、ヒナ・リャザン　カルラ

一般団員機：クーゲル、クーゲル指揮官機、

第三機甲師団

師団長：モニカ・クルシェフスキー　フローレンス・フィオーレ

部隊長：キューエル・ソレイシィ　サザーランド・イカロス、

一般団員機：ヴィンセントロイヤルガード機、ガレス、サザーランド、グロースター、ヴィンセント・ウォード、ジンクスＩＩＩ、アヘッド、

第四機甲師団

師団長：ルミナス・アルカディア　モルガン・アヴァリス

部隊長：衛宮景義　朧直参仕様、ジル・ハルベルトン　アヘッド・カスタム、アイザック・ハウライト　イフリート・シュナイド
一般団員機：暁、無頼、無頼改、サザーランド、グロースター、ザクＩＩＩ、グフ・カスタム、ドム・ノーミーデス、ヒルドルブ改、ゼー・ズール、ドライセン、シュツルム・ガルス、ガ・ゾウム、ズサ
協力者：ブラッド・ワット　ブレイディファントム、
無人機：ブレイディフォックス、ジョーハウンド、
第一機獣師団
師団長：ヴォルフ　ジェノスピノ
部隊長：ゴルバ　グラキオサウルス・ボルカノ、メイア　ハンターウルフ改、シド　ファングタイガー改、
一般団員機：デスレックス、スティレイザー、ストームソーダ、キャノンブル、アイアンコング、レッドホーン、ディバイソン、ガブリゲーター、グラキオサウルス、ゴジュラス、アンキロックス、バキゲトストリケラドゴス、ギャンザ、コズー、メズー、ホーダイン、ゲッソー、カトラ・リーダー、カトラ・ゲイ、モウキーン
無人機：エンキドウドウ、セイルーン、ビャコウ、ゲンバー、シュザック、デススティンガー
第二機獣師団
師団長：エスデス・フリューゲル　オメガレックス
部隊長：リヴァイ　ギルラプターＬＣ、ベント　ガトリングフォックス、
一般団員機：ギルラプター、ダークホーン、スナイプテラ、バズートル、キルサイス、ファングタイガー、ハンターウルフ、ブラックレドラー、セイバータイガー、ブラストルタイガー、ハンマーヘッド、ナックルコング、ディメパルサー、ステゴゼーゲ、クワガノス、カブター、スコーピア、クワーガ、ラプトール、ソニックバード、
協力者：ザーツバルム　ディオスクリアＩＩＩ、クーロン　ヴォルケーノ、ヒルデガルト　ユグドラシル
一般団員機：ステイギス、スカイキャリア
第一混成師団

師団長：ミリアルド・ピースクラフト　ガンダムエピオン
部隊長機：
一般団員機：リーオー、トラゴス、エアリーズ、キャンサー、パイシーズ、トーラス、ビルゴ、ビルゴＩＩ、ビルゴＩＩＩ、
協力者：キア・ムベッキ　ジャイオーン、クン・スーン　？α？・アジール、マスク　カバーカーリー、バララ・オベール　ユグドラシル、マニィ・アンバサダ　ジーラッハ
一般団員機：ズサ、ガザＤ、ドライセン、ザクＩＩＩ、
第二混成師団
師団長：ティア・エリザベート　ゲシュペンスト・シヴァ
部隊長機：コトー・ハガクレ　ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩＩ、マルス・ミットレイ　ヒュッケバインＭａｒｋ―ＩＩＩ、
一般団員機：量産型ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩ、量産型ヒュッケバインＭａｒｋ―ＩＩ、ビルトシュバイン、ランドグリーズ、量産型アシュセイヴァー、エルアインス
協力者：アンジュ　ヴィルキス、ヒルダ　アーキバス：ヒルダカスタム、ヴィヴィアン　レイザー、ロザリー　グレイブ：ロザリーカスタム、エルシャ　ハウザー：エルシャカスタム、クリス　ハウザー：クリスカスタム、サリア　アーキバス：サリアカスタム、タスク　アーキバス：バネッサカスタム、サラマンディーネ　焔龍號、ナーガ　蒼龍號、カナメ　碧龍號
第三混成師団
師団長：アリサ・ヴィエルジェ　ベディヴィエール・ディアマンテ
部隊長機：デンジ、エレイン、バッカス　ゲッターノワールＧ、フェイタン・シュートル　グルンガスト参式、
一般団員機：量産型ゲッター？α？、量産型ゲッターβ、量産型ゲッターγ、ジガンスパーダ、量産型グルンガスト弐式、雷光、カーペンタリー、
協力者：オダ・ノブナガ　ザ・フール、ジャンヌ・カグヤ・ダルクオルレアン
一般団員機：小型イクサヨロイ、中型イクサヨロイ

第一独立師団
師団長：ウォーダン・ユミル　シュヴェルトクリーガー
部隊長：アイク　スレードゲルミル、
無人機：デストロイガンダム、ビルゴＩＩＩ、トーラス、ゲイツ、ケルベロスバクゥハウンド、ザクウォーリアー、グフイグナイテッド、バビ、ガズウート、ゾノ、プロヴィデンスザク、ザクファントム、ドムトルーパー、量産型グルンガスト弐式、ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩ、ヒュッケバインＭａｒｋ―ＩＩ、グロースター・ソードマン
協力者：バン・バ・チュン　ヴァルシオン改タイプＧＦ
一般団員機：リオン、ガーリオン、シーリオン、バレリオン、ランドリオン、ケルベリオン
第二独立師団
師団長：グラハム・エーカー
部隊長：ジン・ウォーカー　アドヴァンスドジンクス、バルカ・ハルキューレ　オーバーフラッグ、エンリ・シァスティフォン　マスラオ、
一般団員機：ジンクスＩＩＩ、アヘッド、トリロバイト、エンプラス、フラッグ、イナクト、ティエレン、ティエレン長距離射撃型、
第三独立師団
師団長：ノクス・フリーデン　ヒュッケバイン・リッパー
部隊長機：タツミ・エンバンス　アクセルレイトジンクス、ウェイブ・シーカー　スペルビアジンクス、
一般団員機：ＥＷＡＣジェガン、ザクＩＩＩ強行偵察型、ペイルライダー・キャバルリー、ペイルライダー・デュラハン、リゼル、グスタフカール、ロト、
第零騎士団
師団長：ライ　アーサー・イルジオン
部隊長：ルシア・スカーレット　アルトアイゼン・クリンゲ、リルカ・スカーレット　アズールリッター、獅子王刃矢　餓者髑髏、銀城阿含　コキュートス、ユキナ・グランベルム　グルンガスト帝式
一般団員機：サザーランド・アビス、グロースター・アビス、デス

レックス、ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩ、ヒュッケバインＭａｒｋ―ＩＩ、ワイルドライガー、ジンクスＩＩＩ、
無人機：ビルゴＩＩＩ、トーラス、ヴァイエイト、メルクリウス、トールギス
深淵騎士団
師団長：マリーカ・ソレイシィ　ブリュンヒルデ
部隊長：更識刀奈　ロスヴァイセ、エウルア・ゼフィロス　オルトリンデ、シノン・ヘカーティア　シグルドリーヴァ、シャルロット・デュノア　グフ・デスペラード、スノウ・フェアウルフ　ヴィンセント・アビス、篠ノ之箒　エストレージャ　マリオ・ディゼル　ペルセウス、マーヤ・ディゼル　アキレウス　ヤザン・ゲーブル　ハンブラビ
一般団員機：サザーランド・アビス、グロースター・アビス、ジンクスＩＩＩ、ギラ・ズール、ジルスペイン、ヴァルシオーブ、量産型νガンダム、量産型Ｚガンダム、量産型ハイペリオンガンダム、シールドライガー、ジェノザウラー
大グリンダ騎士団
指揮官：マリーベル・メル・ブリタニア　エルファバ
指揮官補佐：ヨハン・シュヴァルツァー　ヴィンセント・グラム
オイアグロ・ジヴォン（ウィザード）　アグラヴェイン
リドールナイツ：ヴィンセント・グリンダ、サザーランド・グリンダ、グロースター・グリンダ、ポートマン、ポートマンＩＩ、
ＯＺ
地球連邦軍総司令：トレーズ・クシュリナーダ　トールギスＩＩ
一般団員機：リーオー、エアリーズ、トラゴス、パイシーズ、キャンサー、トーラス、
皇帝軍直属
軍部代表：ジェレミア・ゴッドバルト　サザーランド・ジーク
協力者：ロロ・ランペルージ　ランスロット・フロンティア、デビルガンダム、東方不敗　マスターガンダム、キョウジ・カッシュ　ガンダムシュピーゲル、

ギャラルホルン革命軍
代表：マクギリス・ファリド　ガンダムバエル
補佐：石動・カミーチェ　ヘルムヴィーゲ・リンカー
一般団員機：グレイズ、グレイズリッター、レギンレイズ、ゲイレール、ゲイレール・シャルフリヒター、フレック・グレイズ
協力者：一大寺大和　ムサシ、浅海輝　スパークマンウェイブ、土方龍吾　ガウディアアーマード、雨宮零士　アーサーライザー、霧島ジュン、早乙女桃々香　マキシマスブレイズ、九世政宗　ファイアローダー、万波シズカ　ブラームスソルジャー、ヴィクト　ムサシオー、
一般団員機：零６号、ロビンソン、カーネギー

キャラ設定１

ライ

『ＬＯＳＴＣＯＬＯＲＳ』の主人公として登場したルルーシュと同じ『絶対遵守』のギアス所持者。ナイトオブワンを超える最強の騎士の称号『[[ｒｂ：終焉の騎士＞ナイトオブゼロ]]』の称号とギアスの紋様が彫られた水色のマントを持つ騎士。１８歳。元・黒の騎士団の作戦参謀にしてエースパイロット。

元々は現代の人間ではなく過去の日本皇族とブリタニア皇族のハーフである。母と妹を護るために父と異母兄弟を殺している。キョウト六家の皇家とは確実に親戚であるということがラクシャータの分析によりわかっているが、その血筋は１００年ほど前に途絶えているという。そして同じギアスを持つゼロ＝ルルーシュの最も信頼する友としてその正体と本心を明かされ、過去とギアスを持つが故の苦悩に共感しており、総帥と参謀以上の関係を築いている。

ブラックリベリオン時にてノネット・エニアグラムのランスロット・クラブを半壊にまで追い込んだがその戦闘で月下先行試作機の武装も殆どが尽き、その状態でルルーシュを追って神根島に向かった枢木スザクと神根島で戦闘したが、なすすべもなく月下先行試作機は破壊され、ルルーシュ共々捕まりシャルル・ジ・ブリタニアの下へ連行される。

友を売ってまで地位を求めるスザクにキレたライは無理やり拘束を解きシャルルを盾にルルーシュを助けようとしたが、ナイトオブワンのビスマルク・ヴァルトシュタインによって阻まれてしまった。その気概を気に入ったシャルルによって記憶を書き換えられ、新しい機体『アヘッド近接戦闘型改』と共にブリタニア騎士の称号を与えられる。

グリンダ騎士団の派遣騎士として、そしてナイトオブラウンズたちの参謀としてブリタニア軍及び地球連合として活動するようになり、黒の騎士団時代の参謀としての能力とＫＭＦ操作技術も合わさって遺憾無くその力を発揮したことでグリンダ騎士団のマリーベル、オル

ドリン、ソキア、ティンク、レオンハルトから共に戦う仲間として信頼し合う関係を築き、ナイトオブラウンズのジノ、アーニャ、モニカ、ノネット、ドロテアから気に入られていき、その腕前から「いつか共に同じ場所（ラウンズ）に来ることを楽しみにしている」と評価されていた。

しかしアロウズのやり方を認めず作戦を妨害され続けていたアロウズや同じような一部のＯＺの兵士たちにとってライは厄介者でしかなく露骨な嫌がらせをすることも暫しあった。

そしてアザディスタン王国でＺＥＸＩＳとの戦闘途中でガンダムダブルオーライザーの発動したトランザムによってシャルルのギアスの呪縛が解かれ、そのままＺＥＸＩＳに戻った。

そして再び黒の騎士団参謀の地位に戻ったライはかつての愛機である月下先行試作機の改良機である『朧』と共にＺＥＸＩＳと共に再び戦うのだった。

そして第二次ブラックリベリオンでの戦いの後、黒の騎士団の裏切りによってルルーシュがシュナイゼルに売り渡されそうになった所をロロと協力して脱出した。

そしてＣの世界にてルルーシュがシャルル皇帝たちを打ち倒した後、ルルーシュの立てた計画である『ゼロレクイエム』の完遂のため終焉の騎士として協力するが、友としてその計画を止めたいという気持ちに板挟みされていた。

運命の騎士（ナイトオブフォーチュン）

第３代地球連邦代表にして第９９代ブリタニア皇帝であるルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが、ライに続く自身直属の騎士として選んだ１２人の精鋭にして神聖ブリタニア帝国軍の最高幹部たちの総称。全員がルルーシュに忠誠を誓っており、メンバーはルルーシュからタロットカードの称号とタロットカードを象徴とする紋様を刻んだマントを与えられている。

そして、皇帝であるルルーシュから、神聖ブリタニア帝国軍と地球連邦の各師団の指揮官や上級管理職などの特権も与えられており、ジェレミアとトレーズらと共に軍事面でもルルーシュをサポートす

る。

第一機甲師団団長：ゼハート・ガレット
第二機甲師団団長：アレン・フォルネウス
第三機甲師団団長：モニカ・クルシェフスキー
第四機甲師団団長：ルミナス・アルカディア
第一機獣師団団長：ヴォルフ
第二機獣師団団長：エスデス・フリューゲル
第一混成師団団長：ミリアルド・ピースクラフト
第二混成師団団長：ティア・エリザベート
第三混成師団団長：アリサ・ヴィエルジュ
第一独立師団団長：ウォーダン・ユミル
第二独立師団団長：ノクス・フリーデン
第三独立師団団長：グラハム・エーカー
第零騎士団団長：ライ

１２人全員が終焉の騎士であるライの直属の部下となっているが、立場は対等でありその実力はラウンズを超えるラウンズとしての権威の高さを持っている。さらにシュウ・シラカワを筆頭に様々な分野で天才と呼ばれる博士達によって改修・強化及び製造された専用機体を与えられた。どの機体もキャメロットが開発した至高のＫＭＦであるランスロット・アルビオンと紅蓮聖天八極式を超えると言っても過言ではなく、彼ら彼女らもそれを使いこなすほどであり、その実力と素質は伊達では無い。

アレン・フォルネウス

ルルーシュ直属の精鋭騎士『[[ｒｂ：運命の騎士＞ナイトオブフォーチュン]]』の１人。２４歳。『[[ｒｂ：審判の騎士＞ナイトオブジャッジメント]]』の称号と、翼の紋様が彫られた青のマントを持つ。第二機甲師団の師団長を務める。金髪のロングヘアに翡翠色の瞳をした軽装の鎧を纏った美青年。（イメージは『転生したらスライムだった件』の魔王の１柱であるレオン・クロムウェル）

表情をあまり動かすことがなく氷のような男と周りからはそう評

されていたが恋人であるメアリー・クロイツの前では普通の人間のように笑顔を見せる。
　しかしアレンがエリア４でのテロリストたちによる大規模な反乱を制圧した直後部下からメアリーが死んだことを知り、急いで本国へ戻ったアレンが目にしたのは凌辱された上に体の至る所に拷問の痕が残っていたメアリーの死体だった。
　その死を受け入れきれずしばらくの間死人のように過ごしていた。そして復讐するためにメアリーを殺した犯人を探すとあっさりと犯人は見つかった。メアリーを殺したのは第十四皇子チャルロス・ベン・ブリタニアとその配下である貴族だった。それを知ったアレン単身チャルロスの屋敷に乗り込みチャルロスと貴族たち、そしてその家族たちを全員皆殺しに屋敷を血の海に変えた。
　ビスマルクとノネットたちが屋敷に乗り込んだ時には臓物をぶちまけられ四肢を切り落とされたチャルロスの頭を踏み砕いている血塗れのアレンの姿があった。その後アレンは皇族殺しの大罪人として監獄に幽閉された。そして監獄でメアリーの死を事故死として処理されたことをノネットから知らされ世界に絶望したアレンは狂ったように笑うことしかできなかった。
　そして血筋のみでしか判断せず強者であるという理由で理不尽に大切なものを奪うこの世界に絶望したアレンは生きる屍として日々をただ過ごしていた。そんなある日、アレンの元にトレーズの紹介でルルーシュがやって来た。
　ルルーシュから愚かな皇族の頂点であるシャルル・ジ・ブリタニアを滅ぼしたことを教えられ、そしてルルーシュの目的を教えられたアレンは自分と同じように絶望の淵に落とされながらも這い上がった闘志と執念、ほかの皇族や貴族にはない気高き心を見てこの方のために剣を振るいたいと思ったアレンはルルーシュの騎士の１人となることを誓った。
　ヴォルフ
　ルルーシュ直属の精鋭騎士『[[ｒｂ：運命の騎士＞ナイトオブフォーチュン]]』の１人。２０歳。『[[ｒｂ：戦車の騎士＞ナイトオブ

チャリオット]]』の称号と車輪の紋様が彫られた赤のマントを持つ。短い黒髪に野性的な紅色の瞳を持った青年。（イメージは家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！の雲雀恭弥）第一機獣師団の師団長を務める。惑星Ｚｉと呼ばれるはるか遠くの星のソラシティと呼ばれる都市の人間だった。かつては恋人のシノアとたった１人の血の繋がった家族であるミーナと共にゾイドとより親しくなれるように観察と研究を行っていた。その際に地上に降りることは何度もあったために何時かシノアたちと共に地上で平和に暮らしていたいと思っていた。しかしゾイドの研究資料としてソラシティに保管されているゾイドに関する資料の中でヴォルフたちは世界を滅ぼしかけたとあるゾイドについて知ってしまった。その資料を見つけたヴォルフたちはその資料を危険なものとして秘密裏に処分し誰の目にも入らないように関連する資料とデータを完全に消し去った。しかし運悪くその姿をジーンに見られてしまった。それによってジーンはフェルミたちソラシティの上層部に表向きはバイオゾイドたちの強化の名目でシノアとミーナの２人をディガルドに連れていかれた。人造ゾイドであるバイオゾイドに対してあまり快く思っていなかったヴォルフたちにとってその呼び出しは不可解だったが断る口実もないため仕方なくその命令を受けた。しかし、その結果シノアとミーアはジーンの手によって意識不明の状態で返された。そしてそれがジーンによる機械兵の量産実験と２人が知ってしまったゾイドの情報を無理やり聞き出したことによる後遺症だと知ったヴォルフは愛棒であるシールドライガーと共にジーンを殺すためにディガルドに乗り込み、三割の戦力とディガルド四天王に大打撃を与えジーンのバイオティラノを追い詰めたが、数の差は覆せずシールドライガーはゾイドコアを破壊されヴォルフも捕まってしまった。その後、ジーンのディガルドへの攻撃と多くの冤罪をかけられたヴォルフはソラシティの監獄に幽閉された。ヴォルフはプロメたちにジーンの危険性と地上の民とソラシティが危ないと伝えたが、プロメたちにとってジーンがソラシティに歯向かうなど有り得ないと断定しさらに元から地上を見下していたため地上がどうなろうとソラシティには関係の無いもので

あるためヴォルフよりもジーンの意見を優先した。それによりヴォルフは騒乱罪の容疑をかけられＳ級犯罪者としてソラシティの地下牢に幽閉された。大切な２人を奪ったジーンと無能なソラシティの人間たちに憎悪を抱きながら必ず復讐することを誓って耐え忍んだ。そしてソラシティ崩壊の時に牢屋のロックが解除されたすきに研究施設に保管していた飛行ゾイドプテラスに乗り込み脱出するが、その時にバイオラプターグイと激突し落下したはずが、気がつけば地上に用意していた研究施設で目を覚ましていた。死んだと思っていたヴォルフは思わぬことに動揺していたところを暗黒大陸にて複数発生した次元震の調査にやって来たルルーシュに保護され、ルルーシュからこの世界について様々なことを教えてもらった。そしてこの世界に自分だけでなくディガルド武国と国王となったジーンがいることを知り、ジーンに復讐するため、そしてルルーシュが語った理想を成し遂げルルーシュをこの世界の皇帝として君臨させようとルルーシュに忠誠を誓った。現在は研究施設にてゾイドコアを休眠させていたゾイドたちの他に暗黒大陸に散らばっている野良ゾイドの捕獲、そしてヴォルフ自身も知らなかった研究施設に新たに残された資料を元に別世界の化石となったゾイドを復元などして戦力を増加させていた。また、さらなる強力な戦力の確保を目的に南極の底に沈んでいるあるゾイドたちの発掘作業を進めている。

アリサ・ヴィエルジェ

ルルーシュ直属の精鋭騎士［［ｒｂ・運命の騎士＞ナイトオブフォーチュン］］の１人。１７歳。

『［［ｒｂ・皇の騎士＞ナイトオブスター］］』の称号と星の紋様が彫られた青のマントを持つ。腰まで伸びた長い金髪をポニーテールに纏めた翡翠色の瞳をした美少女。（イメージはソードアート・オンラインのリーファ）第三混成師団団長を務める。元はブリタニア・ユニオンの男爵家の一人娘だったが、父であるオーウェン・ヴィエルジェが仕える皇族の派閥の侯爵家が犯した不祥事を擦り付けられたことで貴族としての地位を没収されオーウェンは妻と娘の生活を保証してもらう代わりにエリア５の特攻部隊として爆薬の詰まったヘリオンに

乗せられ敵基地に突貫し、機体と共にその命を散らした。しかし、オーウエンの約束は守られずアリサは母であるローラ・ヴィエルジェと共には家を追い出されスラム街へと落とされた。ミーナはアリサだけでもまともな暮らしをさせようと体を酷使させて必死に稼いたが、劣悪な環境と元からそこまで体が丈夫でなかったこともありアリサが１２歳の頃に亡くなってしまった。それからアリサは自分から全てを奪ったブリタニア貴族とその上である皇帝や皇族たちへの怨みを抱きながら1人で生きていた。そしてある日、いつも通りスリを行おうと街中を歩いていたところ、偶然ルルーシュの財布を盗もうとしたのをライによって取り押さえられた。その自分と同じように憎しみの籠った瞳をしたアリサに興味を持ったルルーシュはアリサを拾うことにした。そして同じようにルルーシュに拾われたものたちと共にＫＭＦやＭＳ、ゾイドなどのシュミレーターを行ったアリサはそこで好成績を残し、更に実践で初めて操縦するＭＳで元アロウズの兵士たちを圧倒した。そしてかつて父を貶めた侯爵家がルルーシュに反逆を起こした際にアリサは実験機であったジンクスＩＩＩカスタムに乗って単身で反乱軍を殲滅した。その類まれなる才能と復讐心に興味を持ったルルーシュはアリサと会話をした。そしてそこでアリサはルルーシュがかつての自分のように強者から大切なものを奪われたことを知り、絶望の淵に落されながらもそこから這い上がり復讐を成し遂げたことを知った。そしてルルーシュの理想を知ったアリサにとってそれは両親を亡くしてから今まで生きることに絶望していた中で初めて見た希望の光だった。ルルーシュの理想に敬服したアリサはルルーシュに忠誠を誓い自らの全てを捧げるのだった。幼い頃から貧しい生活だったためにお金と食事に目がない。特にルルーシュの作る料理が好きで、お金の使い道も貯金とルルーシュが喜んでもらえるようにオシャレなどに使っている。

エスデス・フリューゲル

ルルーシュ直属の精鋭騎士。『[[ｒｂ：運命の騎士＞ナイトオブフォーチュン]]』の1人。２０歳。

『[[ｒｂ・悪魔の騎士＞ナイトオブデビル]]』の称号と山羊の頭の紋様

が彫られた青のマントを持つ。青みがかった腰まで伸びた薄銀色の長髪に紺碧色の瞳をした軍服を見に纏った美女（イメージはアカメが斬るのエスデス）

第二機獣師団団長を務める。元は傭兵団の娘として傭兵の一員として働いていたが、とある戦で父を含めた傭兵団が壊滅し唯一生き残ったエスデスは生きていくための食い扶持を稼ぐためにブリタニア軍に入隊した。傭兵時代の経験と元からの戦闘に関する天賦の才によって瞬く間にブリタニア軍で自らの地位を獲得した。成り上がり風情とブリタニア貴族などから見下され中にはエスデスを妾や愛人として飼ってやると命令した者もいたが、彼らは運悪くエスデスと戦場を共にした時にその命を落としていたためそのようなことを言うような輩は激減した。家柄だけで軍の地位を得たものばかりな上に自らを強者と勘違いし驕り他者を見下すことしか出来ない連中ばかりでエスデスはブリタニア軍を辞め、適当な傭兵団でも結成し戦場で暴れ回ってやろうかと考えていたある日、ブリタニアに全てを奪われながら自らの力で這い上がり世界を相手に戦える戦力を築き上げたルルーシュの存在を知った。そしてどんな人物なのかと興味を持って自ら探していた時に、ルルーシュからコンタクトがあり実際に会合した。その時、ルルーシュが話した目的を知り、彼の見せた凶々しくも美しい笑顔に惹かれて、初めて他人のために従うことを選んだ。

ティア・エリザベート

ルルーシュ直属の精鋭騎士。『[[ｒｂ：運命の騎士＞ナイトオブフォーチュン]]』の１人。１９歳。

『[[ｒｂ：月の騎士＞ナイトオブムーン]]』の称号と三日月の紋様が彫られた緑のマントを持つ。薄い紫色の入った腰まで伸びた長い銀髪に頭頂部に触覚のような２本のアホ毛が生えた翡翠色の瞳をした手甲脚甲など体の一部を覆う軽装の鎧にレオタード衣装の美少女。（イメージはハイスクールＤｘＤのロスヴァイセ）第二混成師団団長を務める。

侯爵家であるハロルド・ヴォルトローンが当時酒場で一番人気の歌

い手だったティアの母であるマレーナ・エリザベートを貴族の特権を利用して無理やり手篭めにし配下のものたちと共にその美しい体を汚した。そして飽きて捨てられたマレーナはその身にハロルドの子を宿したのを誰にも知られないままティアを1人で育てていた。しかしティアが8歳の時、どこから嗅ぎつけたのかティアに自分の娘であることを知ったハロルドが本妻との間に跡取りの子供が生まれないことからティアを自分の娘として家に入れ、他家の貴族と婚約させその産ませた子供を跡取りにすることを考えていた。マレーナは大切な娘であるティアを守るために反論したが、それが気に食わなかったハロルドはマレーナをその場で殺し、ティアを無理やり連れていった。その後ティアはヴォルトローン家にて貴族として嫁がせる際に恥をかかせないように貴族としての一般教養などを無理やり叩き込まされる上に本妻や親戚、使用人に至る全ての人間から平民の血が入っていることを理由に理不尽な虐待を毎日受けていたティアの心は母親を失ったばかりもあり崩壊寸前だった。何とか現状を変えようと士官学校に入学したが、そこでも平民の血が半分入っていることと類稀なる才能と技量に対しての嫉妬から教官や学生たちから嫌がらせをされていた。長年の受けていたティアの心は擦り切れ世界に絶望し自殺を考えていたある日、優秀な騎士を探していたルルーシュの目に入り最初は親衛隊の1人としてスカウトされたが、初めて自分を肯定してくれた存在にあったティアはルルーシュのために全てを捧げることを厭わない狂信者となることを選び騎士になることを望んだ。その後、幾つかの実戦を通してティアはルルーシュの騎士の一人となった。その後、実家であるヴォルトローン家がルルーシュに対して反逆の意志を示した際、見せしめと復讐の意味を持ってティアは1人でハロルドたち一族と使用人を含めた全てを皆殺しにした。故に家柄だけの人間を嫌悪している。

ノクス・フリーデン

ルルーシュ直属の精鋭騎士。『[[ｒｂ：運命の騎士＞ナイトオブフォーチュン]]』の1人。１７歳。

『[[ｒｂ：死神の騎士＞ナイトオブデス]]』の称号と髑髏の紋様が彫ら

れた赤いマントを持つ。腰まで伸びた長い黒髪に赤い瞳の黒い改造セーラー服を纏った美少女。（イメージはアカメが斬るのアカメ）第二独立師団団長を務める。

幼い頃に両親に酒代の足しにブリタニアの暗部に売られ暗殺者として育てられた。生き残るために必死のノクスは選定試験を生き延び暗部による厳しい訓練を乗り越えた。訓練は過酷なものであり昨日話していたものが次の瞬間には命を落としていき試験を生き残ったものはノクスを含め１０人に満たないほどだった。そしてノクスは暗部の一員としてブリタニア・ユニオンにとって都合の悪い敵国の人間や国内で反抗的な貴族たちなどを暗殺してきた。ブラックリベリオンにてゼロの暗殺を依頼されていたが、その時は暴走したジェレミアによるジークフリートの妨害によって暗殺は失敗に終わってしまった。そして６万人もの人質を巻き込んだアフリカタワー崩壊及び破壊されたピラーによる地上に多大なる被害を与えた大規模テロ事件、ブレイク・ピラーがアロウズの手によるものだと世界に知られ、その際にアロウズに協力していた暗部のトップであるバルブロ・ハーレインがリボンズ・アルマークの指示を受けたアリー・アル・サーシェスによってトカゲの尻尾切りとして殺されたことで混乱に陥った暗部に対して、暗部のスポンサーでもあった一部のブリタニア貴族たちは使えなくなった暗部を処理と情報漏洩の防止を兼ねて子飼いの信頼のおける騎士たちで編成したＫＭＦ部隊とオートマトンによる殲滅作戦を実行した。これにより暗部の上層部は全員死亡し、多くの暗殺部隊のメンバーもその命を散らした。ノクスもまたあと少しのところでその命を落とそうとしたその時、ルルーシュを先頭にライとジェレミア、トレーズ、ミリアルドたちによってＫＭＦ部隊とオートマトンは全て破壊され行き場を失ったノクスたち暗部の生き残りはそのままルルーシュに保護された。そして人並みの生活を保証されたノクスたちは道具としてでなく人として接してもらうことに感謝し、その身をルルーシュに捧げることを誓った。現在はエスデス、アリサ、ティア、ルナの『運命の騎士』の女性メンバーで時折女子会という体のルルーシュに手を出してもらうための作戦会議を開く際に

有力な情報を一番確保していた。

ルミナス・アルカディア

ルルーシュ直属の精鋭騎士。『[[ｒｂ：運命の騎士＞ナイトオブフォーチュン]]』の１人。１８歳。『[[ｒｂ：正義の騎士＞ナイトオブジャスティス]]』の称号と剣の紋様が彫られた黒のマントを持つ。灰かぶった短い銀髪に金色の瞳の端々がボロボロで炎を思わせるように赤く染まっている黒いドレスを思わせる衣装の上に腕や足、腰周りなどを黒い鎧身に纏った美少女。（イメージはＦａｔｅ／Ｇｒａｎｄ Ｏｒｄｅｒのジャンヌ・ダルクオルタの第二再臨姿）第四機甲師団団長を務める。

かつてはエリア１８にて反ブリタニア組織『ラ・ピュセル』のリーダーとして多くのレジスタンス兵たちを率いてブリタニアから祖国を取り返さんとばかりに苛烈に戦った。兵の士気も高くルナ自身の実力が恐ろしく強かったこともあり次々と拠点を落とされ勢力をましていった。それに危機感を覚えたエリア１８の総督は本国に救援要請を行い、救援として『[[ｒｂ：第四席＞ナイトオブフォー]]』ドロテア・エルンストと『[[ｒｂ：第八席＞ナイトオブエイト]]』デシル・クォーバーと３個師団に及ぶ最新鋭機体であるヴィンセント・ウォードやジンクスＩＩＩたちが派遣された。数はルナたちの方が上回っていたが、扱っている機体の殆どがブリタニア軍から鹵獲したサザーランドやグロースター、フラッグ、リーオーなどの旧型だったことからルナたちは防戦一方になってしまった。何とか逆転を狙いルミナスはルミナス専用にカスタマイズされたグロースター・カスタムでドロテアに勝負をしかけたが、ドロテアのバロミデスに何とか後退を促すだけの損傷を与えたがそれによってグロースター・カスタムは破壊され何とか脱出したルナは残存戦力をまとめて拠点へと撤退した。しかし、ルミナスの首を条件に戦後での地位をデシルによって約束された別のレジスタンス組織たちが裏切ったことでルナを除いた生き残り部隊は壊滅してしまった。そして何とかアジトまで戻ったルナだったがアジトに残っていた連中も命おしさにルナを裏切り弱っていたルナを捕まえブリタニア軍に売り飛ばされてしまった。

最初は総督は愚かな反逆者の象徴として大々的に民衆の前で火刑を行うつもりだったが、ルミナスの才覚に興味を持ったドロテアによってルミナスの身柄は預かられ本国の留置所へと連行した。

独房の中、ルナは自分をこんな目にあわせたブリタニアを、今まで守ってきたはずなのに自らの命おしさに見捨てて売り飛ばしたかつての同胞たちに対する復讐の怨嗟を抱き呪詛の言葉を吐きながら憤怒の炎を燃やしていた。それによって美しく艶のある金髪は色素を失い、灰かぶった銀髪へとなってしまった。そんなある日、トレーズの紹介でルミナス存在を知ったルルーシュによって独房から解放され自由の身となったが、自分を貶めたブリタニアと裏切った仲間たちに対する復讐を果たすため、そして自分と同じように仲間に裏切られながらもこの理不尽な世界に憎悪を抱き破壊することを考えるルルーシュに惹かれ彼のために戦うことを決め、騎士になることを誓った。

再世編

プロローグ　鎮魂歌への始まり

ブリタニア・ユニオンの首都である帝都ペンドラゴン・神聖ブリタニア帝国皇宮。

この『多元世界』の地球を統べる巨大組織・地球連邦の代表国の中枢であるこの場所には、思い思いに着飾り、天井の高いその室内に集まった人間は、まさにブリタニアの中枢に座る者たち――――ブリタニア皇族、ブリタニアでも有数の高級官僚たち、政府首脳だ。豪華な装飾が施された広間――――謁見の間に、人々のざわめきが満ちていた。

そんな謁見の間の最奥にある玉座の近くで、白と紫を基調とした軍服と黒いマントを優雅に着こなした金髪の青年が、どよめき続けるブリタニアの首脳たちに呼びかけた。

「――――それでは、こちらにお集まり頂いた皇族の方々、そして世界中の皆さんに、連邦軍総司令官に就任した私から新たな地球連邦代表を紹介させていただきます」

彼の名は、トレーズ・クシュリナーダ。自分でも公言した通り、地球連邦軍の総司令官に新たに就任して間もない人物だ。

そのトレーズの言葉で、ざわめきは収まった。人々が神妙にかしこまり、その人物の登場を待つ。トレーズは玉座の背後にある通路を振り返り、こう声高に呼びかけた。

「どうぞ、お入りを――――ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア皇帝」

そのトレーズの言葉と同時に、人々が驚きの声を発した。

無理もない。そこに姿を現したのは、白い皇族の服と帽子に身を包んだひとりの黒髪の少年だったのだ。艶やかな黒髪をなびかせ、堂々とした態度で人前に出ると、そのまま玉座に腰を下ろす。

そして、不敵さと威厳とを絶妙にブレンドさせた声で、少年はこう宣言した。

「私が、第3代地球連邦代表に就任した――――ルルーシュ・ヴィ・ブ

リタニアです。同時に今日を以ちまして、第９９代ブリタニア皇帝に就きます」
数瞬の静寂が、謁見の間を包み込む。
が、すぐにそれは蜂の巣をつついたような騒ぎになってかわった。
そんな騒ぎをトレーズと共に冷然とした表情で一瞥した後、ルルーシュは声高に言った。
「静粛にしていただこう。消息不明の前代表にして……」
そう言ってからルルーシュは、一呼吸おいてこう宣言した。
「私を地獄へと突き落とした実父で、帝国を、地球連邦を、世界を歪めた暗君――――第９８代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアは、私が殺した」
ルルーシュのその宣言に、皇族たちが一瞬無表情となった。それをさらに冷たく一瞥してから、ルルーシュはさらに声高に言い放った。
「よって、次の皇帝は私となり、同時に地球連邦の統治者である代表の座も私が継ごう。皇族やラウンズなどの力を独占し、私腹を肥やし、その挙句に臣民や同じ血族ですら使い捨てにし合う……。このブリタニアはおろか、地球連邦を、そして地球をもそうした醜い争いの舞台に作り替えておいたシャルル・ジ・ブリタニアは、まさに暗君に他ならない。そして、その愚かなる暗君によって腐敗し、堕落し、頽廃に満ちたこの世界の全てを、今こそこの手で変えるのだ!!」
高々と宙に右手をかざしながらの、ルルーシュのその挑発的な宣言。
そして、「私腹を肥やす」というフレーズに、数人の皇族たちが色めき立つ中、ブリタニア帝国第1皇子のオデュッセウス・ウ・ブリタニアが、慌てふためいた表情で進み出てきた。
「ルルーシュ……君が生きていたのは喜ばしい事だけど、冗談が過ぎるんじゃないかな?」
言葉を濁す実兄のひとりを、ルルーシュはトレーズと共にさらに冷たく一瞥した。
「では、わかりやすくお話ししよう――――」
ルルーシュは不敵な笑いを浮かべ、自分の両目にすっと手をかざし

た。それを見たトレーズが素早く後ろへ下がり、自分の視界から消えたのを見計らってから、両目を覆っていた2つのコンタクトレンズを外した。

「――――この場の全ての人間は、我を認めよ!!!」

ルルーシュの双眸が赤く輝き、その輝きの中から紅い翼のような光が、オデュッセウスの中に飛び込んだ。

いや、オデュッセウスだけではなかった。謁見の間でルルーシュの前にいた全ての者の目に、彼の光は、魔眼(ギアス)の輝きは侵入した。

「……」

その魔眼の輝きに魅入られなかったのは、トレーズ・クシュリナーダただひとりだった。彼は玉座の後ろへと下がり、そしてルルーシュの詠唱と共に目を閉じたからだ。

「――――イエス・ユア・マジェスティ!」

目を赤く輝かせ、嬉々として片手を振り上げて賛歌を唱えるオデュッセウス。

少なくとも、オデュッセウスと名乗っていた時の人格も意思も何もない。

「オール・ハイル・ブリタニア! オール・ハイル・ルルーシュ!」
「オール・ハイル・ブリタニア!! オール・ハイル・ルルーシュ!!」
「オール・ハイル・ブリタニア!!! オール・ハイル・ルルーシュ!!!」

続けて、奴隷となった皇族や首脳たちの賛歌が響き渡る。

熱狂的に、機械的に、声を合わせて――――力ずくで命じられて。

その光景を、瞼を開くと共に見たトレーズは一瞬息を呑み、これは面白い、と言いたげに冷然とした笑みを浮かべた。

「そして、紹介しよう。我が最強の騎士たちを」

ルルーシュがさっと右手を挙げると、最奥の両の袖からブリタニア皇帝に使える最強の騎士の称号である『ナイト・オブ・ラウンズ』が身につけるそれと同じマントを身に纏った13人の騎士と思わしき人間が現れた。

１３人の騎士は、ルルーシュとトレーズのいる玉座の前に並ぶ。
「名乗るがいい・・・まずは、そこのお前からだ」
ルルーシュは、左端にいる騎士のひとりを指差した。
白のマントを羽織り、騎士礼装に身を纏った長い金髪に左右の髪を赤いリボンでまとめた少女が、前へと進みでる。
「『女帝の騎士（ナイトオブエンプレス）』――モニカ・クルシェフスキー」

――モニカ・クルシェフスキー。
かつて『ナイト・オブ・ラウンズ』の『第１２席（ナイトオブトゥエルブ）』として名を馳せた彼女だが、今ではルルーシュの騎士となっている。
彼女はブリタニア貴族としてブリタニアに忠誠を誓っていたが、貴族としての務めも果たさず己の欲望を満たすためだけに他者を乏しめるだけのそんざいとなっている貴族たち。そしてそれらに対して何もしないブリタニア皇帝であるシャルルに対する忠義が揺れていた。
そんな時、シャルルを殺害したルルーシュと出会った。最初はシャルルを殺害したルルーシュをナイトオブラウンズとして処断しようとしたが、ルルーシュのほかの貴族や皇族からは感じられなかった皇帝の素質と皇族としての理想の姿を見せつけられた。
そしてルルーシュの目的を教えられ、シャルルによって歪められた世界を正すべく、ルルーシュの剣の１つとなることを誓った。
ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアを護り、その行く手を阻む愚者を断罪するために――。

緑のマントを羽織り、ブリタニアの騎士礼装に身を包んだ白髪の青年が一歩前へ進み出た。
「『塔の騎士（ナイトオブタワー）』――ゼハート・ガレット」
――ゼハート・ガレット。
この世界とは別の次元の世界で死んだはずの彼だったが、目が覚めた時にはこの世界に存在していた。そしてこの世界について知り、ルルーシュがかつてゼハートが仕えていた主と同じようにある目的を

実現するためにその力を振るうことを覚悟しているのを聞いたゼハートはその目的を成し遂げるためにその力を振るうことを誓った。
それがかつての友と戦うことになると分かっていても、ゼハートの意思は固く、不変なものだった。
ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが望む世界を実現するために――。

赤のマントを羽織り、ブリタニアの騎士礼装に身を包んだ黒髪の青年が一歩前へ進み出た。
「『戦車の騎士（ナイトオブチャリオット）』――――ヴォルフ」

――――ヴォルフ。
地球から遠く離れた星である『惑星Ｚｉ』のソラシティの住人でありディガルドによって最愛の恋人とたった１人の妹を実験体にされ、ディガルドを滅ぼそうとしたが、ソラシティの人間たちによって大罪人の無実の罪をきせられ幽閉されていた。
ソラシティの独房の中で胸に復讐の怨嗟を抱き続けていたある日、次元震に巻き込まれ多元世界へとやって来た。そしてルルーシュに出会い、彼の目的と彼の王としての姿に魅入られ、彼に忠誠を従うことを決意した。
ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの障害となる存在全てを、破壊し尽くすために――――
青のマントを羽織り、鎧を身に纏った長い金髪の男が一歩前へ進み出た。
「『審判の騎士（ナイトオブジャッジメント）』――――アレン・フォルネウス」

――――アレン・フォルネウス。
かつては最もラウンズに近い騎士として非常に優れた素質を持っていたことから多くのブリタニア兵たちの憧れとして戦場を駆けていた。
しかし、婚約者であった同じ騎士であった女性をとある皇族がその地位を使って無理矢理手篭めにすると陵辱し、ゴミのように捨てたこ

とからが彼の凋落のきっかけとなった。
愛した女性を殺されたアレンは戦場から帰った足でそのままその皇族とその配下の貴族たちを皆殺しにした。その結果、皇族殺しの大罪人として騎士として築きあげたものを全て失い、絶望に心を落としていたところをルルーシュに出会った。
そして自分と同じ絶望の底から這い上がるほどの闘志と執念、愚かな皇族の頂点たるシャルルを滅ぼしたその力と志に魅入られ、傘下へと入る。
自分の絶望に光を当てたルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの行く道を、その剣で切り砕くために――――。

青のマントを羽織り、その下に白のレオタード風の衣装を身に纏った、長い金髪の少女が前に出る。

「『星の騎士（ナイトオブスター）』――。アリサ・ヴィエルジュ」

――――アリサ・ヴィエルジュ。
とあるブリタニア貴族の一人娘だったが、男爵である父がとある貴族の汚職の罪を擦り付けられ処刑されたことをきっかけに親戚たちに財産を全て奪われ平民であった母とアリサは家を追い出されてしまった。
それからの生活は悲惨なもので母は娘であるアリサを育てるために身体を酷使した結果アリサが幼い頃に死んでしまった。母が死んでからアリサは家族を奪ったブリタニアという国に憎悪を抱きながらいつか復讐を果たすことを胸に誓いスラム街で1人生きのびていた。
しかし、自分のようにブリタニアに家族を奪われたルルーシュと出会い、ブリタニアを破壊し新たに想像するために戦っていたことを知った時から、絶望の中で唯一の光を見つけたようだった。
前皇帝であるシャルルを殺し新たな皇帝となった少年の理想に敬服し忠誠を誓った彼女は、ルルーシュの為にその全てを捧げる。

自分に光(希望)を与えてくれたルルーシュを護り、刃向かう愚かなもの達を滅ぼすために――――。

紫のマントを羽織り、その下に陣羽織を着た和風な仮面の男が、前へと進み出る。

「『愚者の騎士(ナイトオブフール)』――――グラハム・エーカー!!」

――――グラハム・エーカー。またの名をミスター・ブシドー。

かつてはブリタニア・ユニオンのフラッグファイターとしてその名を馳せていたが、ガンダムによって敬愛する師を、戦友を、全てを奪われたことで地獄に堕ちるも、執念にも似た闘志と意地をもってその地獄を生き抜いた若き勇士。

ガンダムの使い手である刹那・Ｆ・セイエイとの激闘によって顔や脇腹、背中に傷を負い、それを仮面と陣羽織で隠して『ミスター・ブシドー』としてアロウズに所属し戦っていた。

ソレスタルビーイングのガンダムマイスターである刹那・Ｆ・セイエイのガンダムダブルオーライザーに敗北してからは彼に勝利するために１人修行をしていたところ、ルルーシュの筆頭騎士の少年と出会ったことで転機が得る。

その後、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが語った真の目的に共感し、自らの［［ｒｂ：宿願＞願い］］と引替えに彼の敵を倒す『剣』の１人として仮面を外し、再びグラハム・エーカーとして表舞台にたった。

全ては刹那・Ｆ・セイエイとガンダムとの、愛も憎しみも宿命も超越した戦い。ただそれひとつのために――――。

白いマントを羽織り、赤い軍服を身に纏った長い金髪の男性が前へと進みでる。

「『隠者の騎士(ナイトオブハーミット)』――――ミリアルド・ピースクラフト」

――――ミリアルド・ピースクラフト。

かつて一度滅ぼされた完全平和主義を唱えたサンクキングダム王国の王子にして、復讐のために仮面を被り、ゼクス・マーキスとしてＯＺの軍人となっていた。
コロニーのガンダムパイロットの１人であるヒイロ・ユイとは何度も戦い、そしてヒイロを含めたＺＥＸＩＳと何度も戦っているうちに彼らの生き方に影響を受け、自らの戦士としての有り様に疑問を持つようになっていた。
そんな心に迷いを抱えながら戦場をかけていたある日、ルルーシュとトレーズに出会ったことをきっかけに彼もまた自らの進むべき道を定めるようになった。
その後、ルルーシュとトレーズの目的を知ったミリアルドはＯＺの軍人であるゼクス・マーキスとしての仮面を捨て、グラハムと同じようにミリアルド・ピースクラフトとして表舞台に姿を現す。
死んでいった部下たちと彼と思いを同じくするものたちの願いを叶えるために、その剣を振るうのだった――――。

青のマントを羽織り、その下に軍服を身に纏った長い青髪の女性が前に進みでる。
「『悪魔の騎士（ナイトオブデビル）』エスデス・フリューゲル」

――――エスデス・フリューゲル。
その武力と才能だけで平民から騎士に成り上がった女傑。その出自故にブリタニア貴族や皇族からは疎まれているがそんな他者（弱者）の事など気にすることなく彼女は戦うことに生きがいのようなものを感じていた。
故に貴族や皇族という地位だけで自らを強者だと勘違いしているブリタニアという国家に見切りをつけていたが全てを奪われながら自らの力のみでブリタニアと対等に戦える戦力を築き上げたルルーシュの存在を知り、どんな人物なのかと興味を持ち探していた時にルルーシュからコンタクトがあり実際に会合した。
その時、ルルーシュが話した目的を知り、彼の見せたふたつの笑顔

を見て初めて自分のためではなく他人のために戦おうと彼に従うことを選んだ。
自らの戦いを求める本能とルルーシュへの想いの２つを抱きながらルルーシュに歯向かう敵を蹂躙するのだった――――。

赤のマントを羽織り、その下に黒いセーラー服を身に纏った長い黒髪の女性が前に進みでる。

「『死神の騎士（ナイトオブデス）』――――ノクス・フリーデン」

――――ノクス・フリーデン。
両親に酒代の足しとして幼い頃に売られブリタニア軍の暗部に買われた。その後は暗殺者として過酷な訓練を施され何十人もの犠牲の上に生まれた暗殺者。暗部に命じられるままに多くの人間を殺してきた。
しかし暗部のトップであった人間が殺されたことをきっかけに暗部は解体。暗部に秘密を握られていた一部のブリタニア貴族たちは秘密裏に処分しようとＫＭＦ部隊を投入したがルルーシュの率いる部隊によってブリタニア貴族の部隊を壊滅させられ生き残ったノクスを含めた暗部の人間はそのままルルーシュに拾われた。
ノクスは暗部に拾われてから常に死と隣り合わせで安らぎを感じる時など一度もなく暗闇で生きてきたがルルーシュに助けられたことで陽の光のある場所に歩むことができたことをノクスは感謝し、ルルーシュのためにその命を捧げても構わないと感じた。

ルルーシュの影として生き、彼に牙を剥く愚かな敵を斬り捨てるのだった――――。

緑のマントを羽織り、ブリタニアの騎士礼装に身を纏った長い銀髪の女性が前に進みでる。

「『月の騎士(ナイトオブムーン)』――ティア・エリザベート」

――ティア・エリザベート。

とあるブリタニア貴族と平民の間で生まれ、自分の中に貴族の血があることを知らずに母と2人で暮らしていた。そんなある日、ブリタニア貴族である父の実家に跡取りがいないことから政略結婚の道具として呼び出された。それに抵抗しようとした母を目の前で殺され、ティアは無理やり父の実家に連れていかれた。

それからの生活は地獄のようなものだった。親戚から使用人にいたる全ての人間から嫌がらせを受け、心休まる日もないことから軍に逃げるように入隊した。軍に入隊してからは才能があったのかみるみる頭角を表したが上官や貴族の子息たちからのやっかみによって一般兵でしかなかった。

そんな弱い自分に嫌気がさしていたある日、優秀な人材を探していたルルーシュの目にとまった。今まで他者から否定されてばかりだったティアは自らを一人の人間として認め、ティアの力を求めてくれた。

自分の存在を認めてくれたルルーシュのために立ちはだかる敵を、そして人類の敵となる存在を殲滅するのだった――。

黒のマントを羽織り、その下に腕や胴元など体の一部を黒い甲冑で覆っている長い白髪の女性が前に進みでる。

「『正義の騎士(ナイトオブジャスティス)』――ルミナス・アルカディア」

――ルミナス・アルカディア

かつては反ブリタニア勢力の一つであるレジスタンスの象徴的存在として戦っていたがナイトオブフォードロテア・エルンスト率いるブリタニア軍との戦いに敗れ生き残った部隊と共に敗走していたがそこを別のレジスタンス組織の裏切りにあいルナを除いた部隊のメ

ンバーは全滅し、生き残ったジャンヌは命からがら逃げ延びたがアジトに戻った彼女に待っていたのは味方からの裏切りだった。
アジトに残っていた人間はブリタニア軍からルミナスを差し出せば命だけは助けてやるという甘言に騙され逃げ帰って来たルミナスを捕まえそのままブリタニア軍に引き渡した。
捕まったルナは牢の中でブリタニアを、自分を裏切ったかつての仲間たちを、この世への憎悪を抱きながら日々を過ごしていた。
トレーズからルミナスの存在を知った彼女に会いに来たルルーシュ。自分と同じように仲間に裏切れ、この理不尽な世界に憎悪を抱くルルーシュに興味を抱き、ルルーシュの目的を知った上で自らの復讐にも協力してくれるルルーシュに力を貸すことを誓った。

憎悪を胸に抱きながらルルーシュが自ら進むと決めた地獄のような道を共に進み、立ちはだかる敵と裏切り者たちを焼き尽くすのだった――――。

黒のマントを羽織り、その下に紺色の軍服を身に纏った素顔を兜と麺頬に似せた厳めしい鉄仮面で口部を除いて覆い隠されている男が前に進みでる。

「『皇帝の騎士（ナイトオブエンペラー）』――――ウォーダン・ユミル!!」

――――ウォーダン・ユミル。
この世界とはまた別の次元の世界に存在する組織『シャドウミラー』がある敵を倒すために創り上げた人造人間『Wシリーズ』の一人、W（ダブリュー・ワン・ファイブ）１５。ゼンガー・ゾンボルトという一人の武人の人格を元に作られた。
本物のゼンガーと戦い倒すことで自らの存在を掴もうとゼンガー・ゾンボルトと一騎打ちを行い、敗北し命を落とした。
そしてウォーダンは気がつけばこの多元世界で目を覚まし、ルルーシュの筆頭騎士である少年と出会ったことでこの多元世界のことを

知った。
ウォーダンは再びかの人物と刃を混じえる日に備えて鍛え、そして自分に新たなる力を与えてくれたルルーシュと筆頭騎士の力になるためにその力を振るうことを誓った。
全てはゼンガー・ゾンボルトに勝利し、自らが唯一無二の存在となるためにその剣を振るうのだった――――。

そして12人の騎士たちを代表するかのように水色のマントを羽織り、黒い学生服を着た銀髪の少年が騎士たちの前に進みでる。
「『終焉の騎士(ナイトオブゼロ)』――――ライ」

――――ライ。
元黒の騎士団参謀にして紅月カレンと双璧を成すエースパイロットで、同じギアスの力を持つものとしてルルーシュと深い絆を結んだ少年。
神根島でルルーシュと共に枢木スザクに捕らえられ、シャルル・ジ・ブリタニアの気まぐれによって記憶を改竄されブリタニアの騎士として一時期ルルーシュたちＺＥＸＩＳの敵として立ちはだかった。
アザディスタン王国での戦いの時にルルーシュとの再会とガンダムダブルオーライザーのちからによってシャルルのギアスの呪縛が解かれ、再び黒の騎士団参謀としてその力を振るうのだった。
第二次ブラックリベリオンの戦いの後、黒の騎士団の裏切りによってルルーシュがシュナイゼルに売り渡されそうになった所をロロと協力して脱出した。
そしてＣの世界にてルルーシュがシャルル皇帝たちを打ち倒した後、新たな決意を持って皇帝となったルルーシュの目的を果たすためにその障害となる全てを斬り伏せる覚悟を持って最強の騎士として再び表舞台に姿を表わす。

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアと共に、この世全ての罪と悪、そし

て戦いと争いをなくす『鎮魂歌(レクイエム)』を奏で、全てを終わらせるために――

◆◆◆◆

「ライとこの12人――モニカ、ゼハート、ヴォルフ、アレン、アリス、グラハム、ミリアルド、エスデス、ノクス、ティア、ルミナス、ウォーダンにはそれぞれ騎士(ラウンズ)を超える騎士(ラウンズ)の称号を与えた。それが『終焉の騎士(ナイトオブゼロ)』と『運命の騎士(ナイトオブフォーチュン)』だ」

ライを中心にして目の前に並んだ13人の騎士の名乗りが終わったところでルルーシュは冷たく目を細めながら言った。

「今この瞬間、『終焉の騎士(ナイトオブゼロ)』ライと、彼に次ぐ『運命の騎士(ナイトオブフォーチュン)』が、無能なる先帝シャルル・ジ・ブリタニアに仕えた紛い物の騎士団に代わる存在となる。そう――ここにいる13人の我が騎士たちが、新たなる帝国と、地球連邦の象徴にして守護者となるのだ」

それから、ライたち13人の騎士が左右に退いて視界を開けた後、ルルーシュは玉座から立ち上がった。

「全ての民は我に従え。世界は――我と共にある!!」

拳を高く掲げ、ルルーシュは高らかに叫んだ。

そして僅かな間、しん、と静まり返った空気を――。

「――イエス・ユア・マジェスティ!」

騎士たちの名乗りの時から沈黙を守っていたオデュッセウスが、再び嬉々として手を振り上げ、賛歌を唱える。続いて、

「「オール・ハイル・ブリタニア! オール・ハイル・ルルーシュ!」」

「「オール・ハイル・ブリタニア!! オール・ハイル・ルルーシュ!!」」

「「オール・ハイル・ブリタニア!!! オール・ハイル・ルルーシュ!!!」」

熱狂的に、だが機械的な賛歌が、巨大な謁見の間へと満ち満ちる。
そんな賛歌を響かせながらギアスの力に屈しルルーシュの奴隷となったもの達を、モニカ、ゼハート、ミリアルド、ティアはそのあまりの光景に息を呑み、ヴォルフ、アレン、アリス、エスデス、ルミナスは冷たい笑みを浮かべ、グラハム、ノクス、ウォーダン、ライは無表情で奴隷たちを見ていた。

（・・・聞こえるか、ＺＥＸＩＳ。そして黒の騎士団。この俺を称える声が・・・）
賛歌が響き渡る中、ルルーシュは再び玉座に座りその上で冷たく残虐な笑みを浮かべながら脳裏でかつて共に仲間として戦ったもの達と、自分を追放し、殺そうとしたもの達を思い浮かべていた。
（さぁ始めようじゃないか。俺たちとお前たち、そして世界の全てを巻き込んだ戦争を!!）

そして、その拍手喝采を、奥の両端にひとつずつある舞台袖から観衆として見ている者たちがいた。
「……さすがは、ルルーシュお兄さまだわ」
右の舞台袖で、マリーベル・メル・ブリタニアは冷たく目を細め、不敵に笑っていた。
「これがギアスの力・・・いえ、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの力ですか」
同じく右の舞台袖でシュウ・シラカワは不敵な笑みを浮かべながらルルーシュを見ていた。
「・・・・・・」
「アンジュ・・・」
「アンジュ様・・・」
同じく右の舞台袖でアンジュが黙ってルルーシュを見ているのをタスクとモニカを心配そうにアンジュを見ていた。
「中々に面白い余興だな。さて、ここからどうするのか・・・」
左の舞台袖でザーツバルムはこれからルルーシュが何をなすのか

期待するように笑みを浮かべていた。
「ルルーシュ・・・」
「これから始まるんだな。俺たちの世界への復讐が」
同じく左の舞台袖でルルーシュの力の一端を見てマーヤ・ディゼルとマリオ・ディゼルはこれから始まるルルーシュとの戦いに改めて決意を高めるのだった。

――ルルーシュと13人の騎士、そしてルルーシュたちの協力者たちはこの日、世界にその名を轟かせたのだった。

――これは今の世界を壊し、新たな世界を想像するために地獄のような苛烈な道を進むことを選択したルルーシュと仲間たち。
しかし、世界はたった一つのきっかけで思わぬ方向へと進んでしまうものだ。
この世界がどのような道を歩むのか、それは神すらもが知りえぬ物語なのであった――。

第一話　騎士と亡霊と鋼の戦士たちの出会い

ルルーシュが第９９代ブリタニア皇帝にして第３代地球連邦代表に就任してから１ヶ月の月日が流れた。

本来のルルーシュの計画ならばこの１ヶ月の間に地位を奪われた貴族や皇族たち、ナイトオブラウンズが襲撃を仕掛けてくると予想しそれをライとウォーダンたちが迎撃しその力を世界に見せつけるはずだった。

しかし、それもルルーシュが即位してから一週間後に発生した大時空震によって計画が狂ってしまった。

大時空震によりこの多元世界にまたしても別次元の世界の国々がこの世界と融合してしまった。

宇宙にヴァース帝国、暗黒大陸にディガルド武国とキダ藩、日本に竜宮島。そしてブリタニア・ユニオンに神聖ミスルギ皇国とギャラルホルン、さらには人類に敵対するフェストゥムなどが出現したことで世界のバランスはまたしても崩れてしまった。

故にルルーシュはゼロレクイエムの成功とその後に人類が戦うべき相手に対抗する手段を残すためにも現在ルルーシュは戦力の増強と内政に力を入れていた。

戦力の増強として次元震によってこちらの世界に飛ばされた機体を回収しその技術を用いて機体の強化を行ったり、かつての戦いで破壊した量産型ゲッターGから秘密裏に回収したゲッター炉心を用いてゲッター合金とゲッター線でコーティングした特殊弾頭などの製造を行うなど戦力を着々と強化していた。

さらにルルーシュがかの『閃光のマリアンヌ』の息子であることからジェレミアのようなマリアンヌに憧れを抱いていた若い騎士たちやトレーズに忠誠を誓ったＯＺの兵士、そしてアロウズのやり方についていけなくなった兵士たちなど兵士の数を増やしていった。

内政に関してもルルーシュとトレーズという優秀な指導者を筆頭にモニカやレディ・アンなどを中心に行っていることで新皇帝が現れたことで混乱していたブリタニア・ユニオンはある程度の落ち着きを

見せていた。
しかしルルーシュたちが戦力を整えている間にも世界はさらなる悪意によって否応なしに歩み始めるのだった。
◆◆◆
ブリタニア・ユニオンの領土の一部であった場所に突如、大時空震によって出現した神聖ミスルギ皇国。その国の人々は『マナ』と呼ばれる魔法のような技術を使え、マナを使うことが普通の人間としての絶対条件であるこの国ではマナを使えない人間――『ノーマ』と呼ばれるもの達は人間扱いされないのであった。
大時空震によって多元世界へと飛ばされたミスルギ皇国だが、転移してからの1ヶ月は酷いものであった。ミスルギ皇国以外の国はマナを使えない人間しかいないことから皇帝であるジュリオ・飛鳥・ミスルギは支援を申し出た他国に対して見下すような態度な上に一方的に支援しろと命令した為に他国から見切られ孤立してしまった。その上で次元獣やインベーダーなどの襲撃を何度も受けたことによって国の防衛力はズダボロになっており先日のとある事件の影響も含めて国としてボロボロとなっていた。
「くそっ!これも全てあの女のせいだ!!」
王宮の間にてジュリオは苛立ちを隠さずに手に持っていたグラスを床に叩き落としながら怒鳴るように叫んでいた。
ノーマである妹だったアンジュリーゼ・飛鳥・イスルギの処刑を行おうとしたあの日、突如発生した大時空震によってアンジュリーゼに逃げられた上にこんな世界に飛ばされたジュリオは己の思いどおりに進まないことにストレスを感じていた。
「随分と荒れているようだねジュリオ陛下」
「!?こ、これはエンブリオ様!!お見苦しい所をお見せして申し訳ありません」
音もなく突然現れた男――――エンブリオの声を聞いたジュリオは先程までの苛立ちの表情から一転して顔を青ざめながらエンブリオの前に膝まづいた。
「そう畏まらなくていい。今日は君にいい情報を与えに来たのだよ」

「情報、ですか？」
「行方不明だったアンジュリーゼの居場所だよ」
「!!」
　エンブリオの突然の情報にジュリオは驚くがエンブリオはそれを無視して話を続ける。
「どうやら彼女はブリタニアの新皇帝のルルーシュの元にいるようだ」
「ルルーシュっ!!あのクソガキの元に!!」
　ルルーシュの元にアンジュリーゼがいることを知ったジュリオは忌々しそうに顔を歪める。ルルーシュと出会ったのはモニター越しの一度だけだったが、自分より年下の小僧が自分を見下してきたのはジュリオのプライドを傷つけアンジュリーゼに次いで始末してやろうと思える相手だった。
「私からも新たな戦力を提供しよう。それを使ってアンジュリーゼ共々ブリタニアを滅ぼしたまえ」
「承知しました!!必ずやご期待応えてみせます!!」
　エンブリオはそう言うと退出しエンブリオの姿が見えなくなるまでジュリオは頭を下げるのだった。
「へっ！間抜け面した大将だがコレで思う存分暴れるってもんだぜ!!あんたもそう思うだろ？」
「・・・・・・」
　別室にて待機している顔が焼けただれている男は獣のような獰猛な笑みを浮かべながら隣にいる大男に声をかけるが何も言わない。
「けっ！黙りかよ。元は敵同士だったが同じドクロ野郎に恨みを持つもの同士、今は協力し合おうってのによ」
「出し抜こうと考えている貴様には言われたくはないわ。キバ」
「ハッ!!よく分かってんじゃねぇか、ガランのおっさん!!」
　焼けただれた顔の男――――キバが挑発するように言うと大男――――ガランは口を開きそう短く答えるとキバは笑みを隠さずにそう返した。
「ドクロ野郎がいることは分かってるんだ!!とっとと戦場に出て今度

こそ奴らの息の根を止めてやる!!」
　キバは本能で宿敵がこの世界に存在していることを感じ、次こそは勝利してみせると吠える。それをガランは冷めた目で見ながらも自らも内心は髑髏の魔神と再び相見えることを期待していたのだった。
◆◆◆◆◆
「――――にしても新皇帝様は未だ行動しないね」
　カンボジア租界のブリタニア軍基地。その一角にてナイトオブラウンズの1人である［［ｒｂ・第九席／ナイトオブナイン］］ノネット・エニアグラムは溜め息をついた。その近くにはグリンダ騎士団であるオルドリン・ジヴォン、レオンハルト・シュタイナー、ティンク・ロックハート、ソキア・シェルパがいた、
　大時空震の影響で世界がさらなる混沌とかしたためにルルーシュも自らの国を立て直すために行動しなくてはならなかったためにそれも仕方がないことかもしれないが、こうも何も無いと怪しすぎる。
「しかしルルーシュ皇帝の勢力は確実に増しています」
「ロイヤルガードにＯＺ、純血派、元アロウズとその数はかなりのものとなってる」
「しかも皇帝陛下の騎士のクルシェフスキー卿は元ラウンズで他の騎士たちもそれと同等だと考えればかなり厄介だよね」
「そうね。それにフォルネウス卿はともかく・・・まさかあのフリューゲル卿がルルーシュ皇帝の配下につくだなんて・・・」
　ノネットの言葉に対して上からレオンハルト、ティンク、ソキア。そしてオルドリンの最後の言葉にオルドリンを含めて全員が頷いた。
　エスデス・フリューゲル。ナイトメアやモビルスーツの操縦技術は勿論、レイピアによる剣術の剣技はかなりのもので、その名はオルドリンたちも何度か耳にした。オルドリンも何度かエスデスとは手合わせをしてもらったが結果は完敗だった。エスデスの力を見てマリーベルもグリンダ騎士団に勧誘していたが断られていた。そんなエスデスが何故ルルーシュの配下となったのかは全く分からなかった。
「・・・それはさておき、私たちはこれからどうするんだろうね」

ソキアが、それとなく言った。彼女その一言でオルドリンたちは先日このカンボジア租界のブリタニア軍基地から離れたシュナイゼルたちのことを考えていた。先日完成した空中要塞ダモクレスに先のエリア11のトウキョウ租界での大戦にて使用された戦略兵器『フレイヤ』を多く積み込んだ上にここにいるノネットとルルーシュの元にいるモニカを除いた11人の[[rb:円卓の騎士>ナイトオブラウンズ]]とその専用機を搭載した上に新たに協力関係を得た黒の騎士団とディガルド武国、ギャラルホルンの戦力を加えた上でルルーシュのいるブリタニア本国へと軍を動かしていた。

「・・・正直シュナイゼル殿下が何を考えているのかわからないわ。ルルーシュ皇帝が今までのブリタニアを否定しそれを破壊しようとしているのをシュナイゼル殿下は止めようとしているけど・・・」

「そのためにルルーシュ皇帝の実の妹であるナナリー皇女を担ぎあげようとしている」

オルドリンは闇夜に沈んだ遠くの景色を窓越しに眺めながら全員に聞こえるように言うとティンクが続けるように言った。

「ナナリー皇女はそれに納得しているのでしょうか・・・」

「そんなの関係ないんじゃない？大事なのはルルーシュ皇帝を倒すことなんだからその神輿でしかないナナリー皇女のことなんかどうでもいいんじゃないかにゃ？」

「それは・・・」

レオンハルトは担ぎあげられたナナリーのことを心配してそう言うが、ソキアは戯けながらそう言ったためにオルドリンたちは思わず黙ってしまった。

そんなことはないと言い切りたいが、先日のトウキョウ租界で敵味方双方に多大な被害を与えたフレイヤ弾頭の威力を知っていながらその使用を躊躇う気のないシュナイゼルには正直オルドリンたちにも思うところがある。しかも昨夜、ノネットの食客でナナリーの付き人であるはずの篠崎咲世子に対して刺客を放ち殺害しようとした。刺客を制圧した後、咲世子はオルドリンに礼を言ってからダモクレスから去っていった。

その事からオルドリンたちはシュナイゼルに戦力から外されこの基地の防衛としてランスロット・クラブを整備中のノネットと共に残されたのであった。
「とにかく私らも今後の身の振り方ってもんを考える必要がありそうだね」
ノネットが頭をかきながらオルドリンたちにそう告げたその時だった。基地全体に警報が鳴り響いた。
『12時の方向から所属不明の機体群が接近中!!基地内に待機している騎士たちは至急出撃してください!!』
「ちっ!まさかこの基地を攻めてくる奴らがいるとはね。いくよお前たち!!」
「「「イエス・マイロード!!」」」
司令室のオペレーターからの出撃要請にノネットは舌打ちをしながらもオルドリンたちに指示を出すとそのままグリンダ騎士団の母艦であるグランベリーに格納されている自分たちの愛機であるナイトメアの元へと走るのであった。
◆◆◆◆
カンボジア租界・ブリタニア軍基地は現在正体不明の敵の襲撃を受けていた。シュナイゼルが殆どの戦力を連れてこの基地を発っていったために現在基地に残っている戦力はノネットとオルドリンたちを除いて最低限の基地の防衛として残されたのは型落ちしたグラスゴーやリアルドのみだった。
それに対してこの基地に襲撃を仕掛けてくる敵は上空からはフラッグとヴィンセント・ウォード、ガレス、そして量産型ゲシュペンストMk―IIとエルアインス。地上からはティエレンとティエレン長距離射撃型、グロースター、暁、そしてランドリオンとエルアインスによる混成部隊が現在ブリタニア軍基地へと進行を仕掛けており、戦力差は絶望的なものでオルドリンたちも敵の多さに圧倒されていた。
『くっ!数が多すぎる!!』
オルドリンは愛機であるランスロット・グレイルで戦場を駆りなが

らマシンガンを撃ってくる暁やティエレンの攻撃をかわし、そのままシュロッター鋼ソードで胴体を薙ぎ払うように斬り捨てる。既に戦闘が始まってから一時間以上経っており、オルドリンたちもかなりの敵を敵を撃墜させているが敵の数は一向に減らずむしろその数は最初の頃に比べて増しているように見えた。

『あーもう鬱陶しいなぁ!!』

ソニアはシェフィールド・アイのコックピットの中で文句を言いながらもウァテス・システムで制御された12基の［［ｒｂ：自律型対象捕捉型ハーケン＞　Ａｕｔｏｎｏｍｕｓ―Ｃａｐｔｕｒｉｎｇ―Ｏｂｊｅｃｔ］］――――ＡＣＯハーケンで高精度の行動予測によって半自立型でフラッグやガレスの動力部を攻撃し、次々と撃墜させる。

『増援は来ないんですか!?』

レオンハルトはブラッドフォード・ブレイブをフォートレスモードに変形させて量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱのスプリットミサイルとヴィンセント・ウォードのアサルトライフル、ティエレン長距離射撃型による砲撃による銃弾の嵐を回避しながら距離をとるとナイトメアモードに変形しメギドデュアルハーケンを合体させ、ハドロンスピアーを薙ぎ払うように発射し上空の量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱやヴィンセント・ウォードを次々と撃墜させる。

『残念だけどＥＣＭのせいで通信が妨害されてて近くの基地からの応援は期待できそうにないね』

ティンクはレオンハルトの言葉に対して苦笑しながらゼットランド・ハートのオールレンジ・ボマーを発動させ、全身から小型ミサイルを発射し地上にいるランドリオンやティエレン長距離射撃型を殲滅していく。一向に増え続ける敵に対してこちらで残っている戦力はオルドリンたちグリンダ騎士団とノネットのランスロット・クラブの５機とグリンダ騎士団の母艦であるグランベリー一隻のみとなっており基地は既に壊滅状態となっていた。

『弱音を吐くんじゃないよ!!今はここから生き延びることだけを考えな!!』

ノネットはオルドリン立ちにそう叱責しながらエルアインスの放

つＧ・レールガンをかわしながらエルアインスに接近しランスロット・クラブがスライディングするようにエルアインスの下を滑り背後をとるとそのままランスでエルアインスの胴体を貫く。既に基地の防衛という目的が果たせない以上突破口を開いてこの戦場から抜けることをノネットは第一に考えているが現状の戦力では難しかった。

その事を理解しているからかオルドリンたちの表情も固くなっており５人のコックピットの中ではエナジー残量が危険域を知らせるレッドアラートが鳴り響いていた。絶体絶命の窮地に陥られてオルドリンたちは冷や汗を流しているとグランベリーの管制室からオペレーターであるエリス・クシェシスカヤが叫ぶようにオルドリンたちに連絡を入れた。

『エニアグラム卿！この中域に次元震の反応が感知されました!!』

『こんな時にっ!!』

エリスからの突然の次元震の発生に舌打ちをするのと同時にノネットたちがいる場所を中心に空間が歪んだかと思えばノネットたちの前にモニカ・クルシェフスキーの専用機であったフローレンスの元になったＡＥＵのナイトメアであるアレクサンダ・ドローンと似た機体であるアレクサンダＴｙｐｅ０２とアレクサンダ・リベルテ、アレクサンダ・レッドオーガ、そして３機のアレクサンダ・ヴァリアントが、そして壊滅したブリタニア軍基地の上空にはＺＥＸＩＳに所属するＳ．Ｍ．Ｓの母艦であるマクロスクォーターより巨大な艦首がドリル上になっている赤と黒で塗装された戦艦と翼のある赤い戦艦が出現した。

突然この場に現れたことに驚いているのはノネット達だけではなかった。

『これはいったい・・・』

アレクサンダＴｙｐｅ０２のコックピットの中でレイラ・フォン・ブライスガウは動揺していた。ＡＥＵにて仲間であるｗＺＥＲＯ部隊のメンバーたちとかつて出会った老婆たちと共に旅をしていたのだが次元震に巻き込まれ、気がついたらアレクサンダＴｙｐｅ０２のコックピットの中にいた。

『レイラ、大丈夫ですか』
『え、えぇ私は大丈夫です。それよりもこれは・・・』
アレクサンダ・リベルテからレイラの愛する人である日向アキトの声が聞こえてアキトがいることに安堵をしつつも今の状況が理解出来ず困惑していた。
『どうして僕たちがアレクのコックピットの中にいるのかな？』
『この機体はみんなあの時の戦いで殆ど壊れて使い物に無くなってたよね？』
『あぁ、なのにまるで新品同然だぜこりゃ』
アレクサンダ・ヴァリアントのコックピットの中で上から成瀬ユキヤ、香坂アヤノ、佐山リョウは今自分たちが乗っている機体を見て動揺していた。半年前、ヴァイスボルフ城でのユーロブリタニアとの戦いにおいてアヤノのアレクサンダ・ヴァリアントとアレクサンダ・レッドオーガ以外の機体は全て破壊されヴァイスボルフ城に放棄されていたのだが今ここにある機体はあの時と比べても遜色ないほど万全だった。
『しかもあそこにいるのは［［ｒｂ：円卓の騎士＞ナイトオブラウンズ］］の１人である［［ｒｂ：第九席＞ナイトオブナイン］］ノネット・エニアグラムにあのグリンダ騎士団だぜ？』
アレクサンダ・レッドオーガのコックピットの中でアシュレイ・アシュレイは目の間にいるランスロット・クラブとランスロット・グレイルたちを睨むように見ながらレイラたちにそう告げる。ナイトオブラウンズはもちろんのこと、エリア２４にて第二のユーロ・ブリタニアとまで言わしめるほど異様な程に戦力を所持していたことから危険視されたグリンダ騎士団。
その上に見たことも無い二隻の巨大戦艦の存在とナイトメアやモビルスーツなどによる混成部隊のブリタニア軍基地への襲撃を見てレイラたちはどう対処すべきか考える暇も与えられずブリタニア軍基地を襲撃した混成部隊がレイラたちと二隻の巨大戦艦に攻撃を仕掛けてきた。
『ちっ！こっちの状況もお構い無しってことかよ!!』

『攻撃してくるってんならこっちもやってやるよ!!』
アシュレイとリョウはアレクサンダ・レッドオーガとアレクサンダ・ヴァリアントをインセクトモードに変形させて銃撃の嵐をかわしながら接近すると再びナイトメアモードに変形しアレクサンダ・レッドオーガは二振りのヒートソードを取り出し近くにいたグロースターを×の字に切り裂き、アレクサンダ・ヴァリアントは対ナイトメア戦闘用可変アックスを取り出すとその場を飛び上がりランドグリーズの頭部に振り下ろす。
『レイラとユキヤは後方で援護を頼む。俺とアヤノはアシュレイとリョウと共に前衛で戦う』
『わ、わかりました!!』
『了解。２人とも気をつけてね』
『そっちもね』
アキトはユキヤとレイラにそう指示を出すとアヤノと共にアレクサンダ・リベルテとアレクサンダ・ヴァリアントのランドスピナーを展開しアシュレイたちの元へと向かう。
アキトたちが襲撃者と戦っているように攻撃を受けている二隻の戦艦――――クロガネとヒリュウ改もまた同じように攻撃を受けており、その攻撃をＥフィールドで防御しながら部隊を出撃させていた。その中でヴァイサーガのコックピットの中でラミア・ラグレスは量産型ゲシュペンストＭｋ―ＩＩとエルアインスを見て眉を顰めていた。
（あれらの機体はシャドウミラーのものだ。まさかレモン様たちもこの世界に飛ばされたというのか？）
ラミアは自分たちがたった今この世界に飛ばされたようにかつてラミアが所属していた組織であるシャドウミラーがこの世界に存在しているのではないかと思えた。
『どうしたラミア』
『いえなんでもないでございます』
『そうか。だが今は戦闘に集中しろ』
「了解でありんす」
アルトアイゼン・リーゼのパイロットであるキョウスケ・ナンブが

様子のおかしかったラミアに声をかけるとラミアは問題ないと答える。キョウスケはそれ以上特に何も言わずに通信をきった。ラミアも気持ちを入れ替えヴァイサーガの背中に装備されている五大剣を構える。

クロガネとヒリュウ改からサイズの異なる機体が次々と発進すると量産型ゲシュペンストＭｋ―ＩＩたちへ攻撃を仕掛けるのだった。

◆◆◆◆◆

鋼龍戦隊とｗＺＥＲＯ部隊が次元震によって現れてから戦闘が開始され既にかなりの数の敵機の残骸が破壊されたブリタニア軍基地に転がっているがそれ以上の数の敵が確認され更にはその中に新たな機体としてデストロイガンダムにユーグリット、ビルゴ、ジンクスＩＩの姿も確認されていた。しかし数こそは敵が上回っているが、機体性能は勿論パイロットの操作技量に圧倒的なまでの差があることから次々と撃墜させていった。

『ザイン・ナッコォ!!』

ＳＲＸチームの駆る合体ロボットＳＲＸのザイン・ナックルが新たに現れたデストロイガンダムの胴体を貫く。デストロイガンダムは胴体にＳＲＸの拳が刺さっていながらも攻撃をしようと両腕のシュトルゥムファウストの銃口をＳＲＸに向ける。

『させませんわ!!ラトゥーニ!!』

『はい、シャイン王女!!』

シュトルゥムファウストからビームが放たれようとした瞬間、シャイン・ハウゼンのフェアリオンタイプＧとラトゥーニ・スゥポータのフェアリオンタイプＳによる両腕から展開したソニック・スウェイヤーによる斬撃でデストロイガンダムのビーム砲を破壊して攻撃を防いだ。

『サンキューシャイン王女、ラトゥーニ!!くらえ!ガウン・ジェノサイダー!!』

ＳＲＸのパイロットの１人であるリュウセイ・ダテが２人に礼を言うとそのままＳＲＸの頭部のゴーグルから放たれるガウン・ジェノサ

イダーによってデストロイガンダムの上半身を消し飛ばした。
『ファイナルビーム!!』
『ギガ・ワイド・ブラスター!!』
イルムガルド・カザハラが駆るグルガンスト改とタスク・シングウジが駆るジガンスクード・ドゥロの2機から放たれたファイナルビームとギガ・ワイド・ブラスターによって地上にいる暁とティエレン長距離射撃型、ランドリオンたちを破壊する。
『ティンクさん!!』
『オーライ、オズ!!』
オルドリンにティンクが応えると、ゼットランド・ハートが砲撃形態に変形した。その背後にハイグレイルが素早く騎乗し、両機のユグドラシルドライブが直結され、合体する。
『『ユグドラシルドライブ・ダイレクトコネクション――――ランスロット・グレイル・チャリオット!!!!』』
ランスロット・グレイルに搭載されている機能であるドッキング形態によってゼットランド・ハートとドッキングすることで砲撃形態のチャリオットになるとそのままユーグリットやビルゴⅠたちに向けて高出力砲撃――――メガハドロンランチャー・フルブラストをぶちかました。
『いくぜアキト!!』
『あぁわかっている』
アシュレイの駆るアレクサンダ・レッドオーガとアキトの駆るアレクサンダ・リベルテはスラッシュハーケンを使って縦横無尽に動きながらシュロッター鋼ソードでエルアインスを斬り伏せる。
戦闘は彼らの優位に進み敵の増援も尽きたのかその数は減っていきこの調子なら問題なく戦闘が終了すると誰もがそう思っていたその時だった。
『ぐっ!?』
『な、なにこれっ!?』
『く、くるっ!!』
最初に気づいたのはＳＲＸチームの念動力者であるリュウセイと

アヤ・コバヤシ、マイ・コバヤシだった。そして遅れるように他の念動力者たちがそれに気づいたのと同時にそれは地面を砕きながら現れた。
巨大なその機体は下半身は巨大な顔を模した形になり更にそこから無数のケーブルが生えているその機体は禍々しさすら感じさせる。そしてその周囲にはかなりの数の巨大な頭部が繋がっている無数のケーブル――ガンダムヘッドが現れた。
その禍々しい姿に誰もが言葉が出ない中、ゲシュペンスト・タイプRを駆るギリアム・イェーガーは目の前に現れた機体――デビルガンダムの存在に驚愕を隠せないでいた。
(デビルガンダムっ!!なぜ奴がこんなところに!?いや、今はそれよりも)
ギリアムは突然のデビルガンダムの出現に驚いたが、動きを見せないデビルガンダムの様子からまだ目覚めたばかりだと判断し先に動き出す前に破壊を試みようとメガ・バスターキャノンを構えるとそのまま引き金を引きデビルガンダムに向けてビームを放った。それは射線上にいたガンダムヘッドを破壊しながらデビルガンダムに命中したが、装甲を一部破壊しただけで完全にデビルガンダムを破壊するには至らなかった。
『くっ、やはりこの程度の攻撃では仕留めることは出来ないか』
ギリアムは破壊された装甲を再生させているデビルガンダムに対して顔を顰める。そしてデビルガンダムはそのツインアイを怪しく輝かせると近くにいたエルアインスと量産型ゲシュペンストＭｋ―ＩＩたち襲撃部隊の機体の胴体にガンダムヘッドを噛みつかせた。噛みつかれたエルアインスたちはぎこちなく機体を軋ませたかと思えばガンダムヘッドの口から離れると同時にデビルガンダムとガンダムヘッドに付き従うように鋼龍戦隊とグリンダ騎士団、ｗＺＥＲＯ部隊に攻撃を仕掛けてきた。
『いかんっ、奴らの攻撃に触れるな!!奴らの攻撃に触れれば我々もデビルガンダムの支配下に置かれてしまう!!』
ギリアムは向かってくるガンダムヘッドやエルアインスたちを破

壊しながら周囲の人間立ちに聞こえるようにオープンチャンネルで注意を促す。
　ギリアムの言う通り、デビルガンダムとガンダムヘッドに最初は攻撃していたデストロイガンダムたちがデビルガンダムたちの攻撃を受けた途端、デストロイガンダムたちはデビルガンダムを守るようにギリアムたちに攻撃を仕掛けてきた。
『くそっ！次から次へと厄介だな!!』
　グルンガスト改を駆るイルムガルドは計都羅喉剣でグルガンスト改に噛み付こうとしてくるガンダムヘッドを両断しながら思わずそう愚痴ってしまう。ガンダムヘッドとデビルガンダムに支配されたエルアインスたちの攻撃をかわしながら迎撃するが、地面から湧き続けるガンダムヘッドと一向に数が減らないエルアインスたちにこの場にいる全員が不気味さを感じていた。
『きゃぁっ!?』
　ガンダムヘッドのビームをかわしきれずランスロット・グレイルの右腕を破壊されその爆発の衝撃で地面に倒れ込む。その隙をつくようにガンダムヘッドが口を大きく開けてランスロット・グレイルを噛み砕こうと迫る。ソキアたちはオルドリンを助けようとするも敵に行く手を阻まれてしまい助けにいけないでいた。
『『『オズーーー!!』』』
『くっ!?』
　ガンダムヘッドの牙がランスロット・グレイルの胴体に迫るのをオルドリンは抵抗しようと左手にシュロッター鋼ソードを握りガンダムヘッドに突き刺そとする。しかしガンダムヘッドの牙がランスロット・グレイルの胴体に触れる瞬間、ガンダムヘッドの頭部が斬り落とされランスロット・グレイルの横に転がった。
　そしてランスロット・グレイルの前に二振りのナイトソードを握る漆黒のグレイズリッターが立っていた。突然現れたグレイズリッターに誰もが新たな敵が現れたかと警戒しているとグレイズリッターの後ろにグランゾンとスレードゲルミルが上空より降りてきた。
『シラカワ博士、ウォーダン。デビルガンダムたちの相手は僕がやり

ます』
『援護は必要ですか？』
『必要ありません。それよりもお２人はもしもの時の場合に備えてください』
『承知した』
『えぇ分かりました。それではお気をつけて』
　漆黒のグレイズリッターを駆るライはグランゾンを駆るシュウ・シラカワとスレードゲルミルを駆るウォーダン・ユミルにそう告げるとグレイズリッターのスラスターを噴かせてデビルガンダムに向かった。一人で攻撃を仕掛けようとするのを見てキョウスケたちもそれに続こうとしたがグランゾンとスレードゲルミルがその行く手を阻む。
『シュウ!!テメェなんのつもりだ!!』
『あなたがたに動かれるのはこちらとしては困るのですよ。もしこの先に進みたいというのならばこの私のグランゾンとウォーダンのスレードゲルミルを倒してからにしてもらいましょうか』
　サイバスターを駆るマサキ・アンドーがディスカッターの剣先を向けながらシュウになぜ邪魔をするのか聞くが、それに対してシュウはその理由を応えずグランゾンのグランワームソードを、スレードゲルミルは斬艦刀を構える。
　そしてキョウスケたちがシュウたちによって動けないでいる間にもライのグレイズリッターはデビルガンダムに接近していた。
『邪魔だ』
　ライはＧＮランスを構えながら突撃してくるジンクスＩＩの突進をナイトブレードで起動を逸らしながら反対の手に握るもう一振のナイトブレードでジンクスＩＩの胴体を斬り捨てながら倒したジンクスＩＩのＧＮランスを掴みとるとデストロイガンダムの腹部に向かって投げつける。腹部にＧＮランスか突き刺さったことで一瞬動きを止めたデストロイガンダムの隙を見逃さずライはデストロイガンダムの下を潜りながらナイトソードで両脚を斬り裂く。脚を破壊されたデストロイガンダムは後ろに倒れほかの機体を巻き込み破壊

した。
『す、凄い・・・』
ブラッドフォード・ブレイブとゼットランド・ハートに支えられながらグランベリーに戻るのをコックピットの中でオルドリンはグレイズリッターの姿に目を奪われていた。
グレイズリッターの通った道には一撃で両断された敵機が転がっており、グレイズリッターは一度も脚を止めることなくそれらの敵を一刀のもとに斬り伏せていた。その姿には力強さと剣舞のような美しさがあり、オルドリンは思わず見惚れてしまい言葉を零すことしか出来なかった。そしてグレイズリッターはとうとうデビルガンダムの前にまで辿り着いた。
『これがデビルガンダムか。なるほど確かに悪魔の名を与えられるのに相応しい機体だな』
ライはデビルガンダムを見上げながら思わずそう呟く。しかしすぐに気持ちを入れ替えナイトブレードを構えデビルガンダムに接近する。デビルガンダムも素直に接近するのを許す訳もなくガンダムヘッドたちによるビーム攻撃を仕掛ける。しかしグレイズリッターはビームによる弾幕の隙間を縫うようにしてかわして接近する。ビームが当たらないと見るやデビルガンダムはビーム攻撃から噛みつき攻撃に変更しガンダムヘッドたちがグレイズリッターに迫る。
『遅い』
しかしグレイズリッターに迫るガンダムヘッドたちはナイトブレードによって斬り裂かれていく。そしてグレイズリッターはデビルガンダムの目の前にまで辿り着くとナイトブレードを振り下ろしデビルガンダムの両腕を斬り落とす。しかしデビルガンダムはすぐに修復しようと斬り落とされた両腕に触手を伸ばそうとするがそれよりも早く胴体にナイトブレードが突き刺されデビルガンダムはカメラアイから光が消え、その動きを停止した。そしてデビルガンダムが停止したのに合わせてデビルガンダムに支配されていた機体たちもまたその動きを停止させた。
『終わった、のか?』

虎龍王を駆るブルックリン・ラックフィールドことブリットは戦闘が終了したのかと思いそう呟くがそれに対して誰も答えることが出来なかった。確かにデビルガンダムは倒したが彼らの前にはまだグランゾンとスレードゲルミル、そしてデビルガンダムを倒したグレイズリッターがいる。彼らがこちらに対して攻撃を仕掛けてこないと誰も保証できないでいた。故に誰もが彼らに警戒していると彼らの頭上に影がかかった。頭上を見上げるとそこには先の戦いで大破し現在修復中であるはずのスペースノア級戦艦――ハガネが現れていた。

「ハガネだと!?バカな、何故アレがここに存在している!?」

クロガネの艦長であるテツヤ・オノデラは突然のハガネの登場に驚いているが、その間にもハガネの出撃ハッチから3機のゲシュペンストＭｋ―ＩＩが出撃しデビルガンダムの頭上につくとデビルガンダムに電磁ネットを被せそのままハガネへと運ぼうとしていた。

『いかんっ!!』

この中でデビルガンダムの危険性を理解しているギリアムはデビルガンダムを回収させてはいけないと考え、回収される前に完全に破壊しようとメガ・バスターキャノンを構えその銃口をデビルガンダムに向けビームを放とうとするが、チャージ中のメガ・バスターキャノンの銃口にグレイズリッターが投げたナイトブレードが突き刺さりゲシュペンストタイプＲＶは爆発寸前のナイトブレードが刺さったメガ・バスターキャノンを捨てざるを得なかった。その間にデビルガンダムはハガネに収納されてしまった。

『それでは皆さんごきげんよう』

『またシュウ!!』

シュウはマサキたちにそう告げるとグランゾンはグレイズリッターを抱えたスレードゲルミルと共にハガネに向かう。マサキはシュウを追いかけようとサイバスターを動かそうとしたが、その寸前にハガネを中心にグランゾンたちを黒い球体が包み込み、黒い球体が消えた時にはハガネとグランゾンたちの姿はなくなっていた。

「ぐ、グランゾンとスレードゲルミル、ハガネの反応ロストしまし

た・・・」
「転移したというのか・・・」
クロガネのオペレーターであるエイタ・ナガタはグランゾンたちの反応がこの周辺から消えたことを伝えたとおり、グランゾンたちの反応は完全に消えていた。
鋼龍戦隊とｗＺｅｒｏ部隊、そしてグリンダ騎士団。彼らはこの世界で何を成すのか・・・・・・

第二話　覇王の序章

◆◆◆

「思ったより状況が悪いわね・・・」

ＺＥＸＩＳの今後の方針を話し合うためにマクロス・クォーターのブリーフィングルームに一同は集まったが、誰しもその表情は険しいものであり、ソレスタルビーイングの戦術予報士であるスメラギ・李・ノリエガが思わずそう呟いてしまった。現在ＺＥＸＩＳを取り巻く状況はゼロことルルーシュがいなくなったことで最悪と言ってもいいほどだった。

ＺＥＸＩＳは一応は地球連邦軍の外部部隊という位置づけになっている。監察権などを持つ有力な戦力であり、当然地球連邦軍の、とくにアロウズなどの組織に対して対抗できる数少ない戦力だった。しかし同時に、その指揮権限はゼロが保有していたのであり、ゼロが居なくなってしまった現状では、実は指揮官が不在になるという問題を抱えていた。

つまりゼロの存在は、実質ＺＥＸＩＳの存亡そのものを左右するほどの人物であった。だからこそエルガン・ローディックがゼロにＺＥＸＩＳの指揮権を与えたのだ。そのゼロがいなくなれば当然ＺＥＸＩＳは観察権を行使することも出来なくなる。

そしてゼロの意見も聞かず一方的に追放した黒の騎士団とＺＥＸＩＳの間で悶着が起こり、黒の騎士団は紅月カレンや黎星刻など一部を除いたメンバーがＺＥＸＩＳから脱走同然に独立し、その後ルルーシュと敵対するということで利害が一致したシュナイゼル率いる旧ブリタニア皇帝軍に統合されＺＥＸＩＳとも敵対関係となった。

そしてルルーシュもまたブリタニア皇帝となりその勢力を拡大させており、その規模はかつてのゼロとして黒の騎士団を率いていた頃よりも軍としての戦力は量と質のどちらも強大なものとなっていた。今までの黒の騎士団は藤堂と星刻、ライがいたとはいえほぼゼロ１人によって支えられていた。しかし今のルルーシュにはライだけでなくトレーズやマリーベル、ジェレミア、そして『運命の騎士』といっ

た優秀な人材が多く揃っており例えルルーシュがいなくなったとしても十分に組織を回すことは可能だろう。
「だが一体ゼロは何を考えているんだ。ブリタニア・ユニオンと地球連邦軍を支配したがそれだけだ。今までのブリタニアのように他国に侵略を仕掛けるわけでも戦いを止めるような素振りもみせない」
星刻は眉間に皺を寄せながら言う。それはＺＥＸＩＳの誰もが思うことであるが今までゼロ――ルルーシュのことを完全に理解することが出来ないでいた。ルルーシュのことを知らない彼らにはルルーシュの考えが読めないでいた。
「――だから我々はこうして彼の元へ向かおうとしている。彼の真意を知るために」
ロジャー・スミスがそう言うとＺＥＸＩＳの面々はそれに同意するかのように頷いた。先日、ルルーシュ側からコンタクトがあった。それはＺＥＸＩＳとの会談を望むものであり３日後にエリア１１のアッシュフォード学園にて互いに代表者同士による話し合いの場を設けたいという申し出だった。
罠の可能性はあるが、それでもルルーシュの真意を知るためにもロジャーたちはルルーシュと話し合う必要がある。彼らはカレンを含めてルルーシュという人物のことを全く知らないのだから・・・
「しかし悠長にもしていられない。今もこうしてルルーシュだけでなくシュナイゼルやリボンズなどほかの勢力も動きを見せ始めている」
Ｓ．Ｍ．Ｓのマクロス・クォーターの艦長であるジェフリー・ワイルダーは顎に手を添えながらそう呟くとその言葉に同意するようにＺＥＸＩＳのメンバーは固唾を飲んだ。現在シュナイゼル率いる旧ブリタニア帝国軍とシュナイゼルと同盟を結んでいるディガルド武国とギャラルホルンはブリタニア・ユニオンの首都であるペンドラゴンへと進行を進めていた。
そして今までの悪事が明るみになったことで追い詰められたアロウズは一部を除いて宇宙へと逃げた。未だ本格的な動きを見せていないのはアンチスパイラルとインベーダーなどだがそれらもいつ動き出すかは分からないでいた。

「とにかくまずは目の前に迫っている問題から解決していこう。我々には成さねばならないことが多い」
　ドラゴンズハイヴの艦長であるＦ・Ｓがそう締めくくるとＺＥＸＩＳのメンバーはそれぞれどんな事が起こっても何時でも対応できるようにするのだった。その中で新しくＺＥＸＩＳに加入したばかりのメンバーの１人であるロン・マンガンは何か考え事をしているのか口元に指を当てていた。
「あのロン。なにか気になることでもあるんですか？」
「あ、いや大丈夫だよルージくん・・・大したことじゃないさ」
　ロンの様子がおかしい事に気がついたルージ・ファミロンがロンに声をかけるが、ロンは苦笑しながら問題ないと言うがその表情はどこか暗く何か思い悩んでるように見えた。
「でも・・・」
「本当になんでもないさ。それよりルージくんも早く格納庫に向かいな。ミィたちが待ってるんだからさ」
「は、はい・・・それじゃあ先に行ってますね」
　ロンを気にするルージだがロン本人からそう言われてしまってはそれ以上尋ねることは出来ず大人しく格納庫へと向かった。ルージが去ったのを確認するとロンは息を吐いて壁によりかかった。
（まさかあのヴォルフが生きてたなんてね・・・本来なら生きてたことを喜ぶべきなんだろうけど）
　ロンはポケットから取り出した写真を見ながらそう心の中で呟く。その写真にはロンとルルーシュの騎士となったヴォルフ、そして２人の女性が写っていた。
「ヴォルフ。君はまだ憎んでるのかな・・・」
　ロンはかつての親友にして仲間であるヴォルフが生きていたことを嬉しく思いつつも、恋人と妹の命を奪った原因でもあるジーンとフェルミたちソラシティの人間を今も怨み復讐しようとしているのではないかとロンは不安を隠せないでいた。
　そしてロンのその不安は当たってしまい、ヴォルフとの再会で彼の復讐に燃えろ炎が留まることを知らぬのだと思い知らされるのだっ

た。

◆◆◆◆◆

神聖ブリタニア帝国領・ヴァイロン空港。

午前１３時。

エリア１１のアッシュフォード学園へと向かうために新たに建造された皇帝専用旗艦『ウラヌス』に乗り込むためにやって来たルルーシュとその隣をＣ．Ｃ．とライ、後ろをモニカとミリアルドが歩いていた。ウラノスや護衛艦であるログレス級浮遊航空艦、カールレオン級浮遊航空艦が待機しているエアポートの各所を黒でカラーリングされたサザーランドやグロースターたちが武装した状態で待機している。

「ルルーシュ、本当に良かったのか？」

歩きながらＣ．Ｃ．がルルーシュに訊ねた。

「ＺＥＸＩＳと会談をすることもそうだけど彼らに護衛を任せても。確かに今は味方だけどそれもいつまで続く関係かは・・・」

「構わない。所詮は利害の一致で手を組んでいるだけに過ぎないんだ。それに・・・俺も少しばかり、奴らの力には興味がある。試してみるのに丁度いい機会と思わないか」

ライの言葉に最後のところで、ルルーシュが口許を楽しそうに歪めた。それを見て、今度はミリアルドが口を開いた。

「『パラメイル』と『カタクラフト』・・・か。どちらも我々の知らない技術で造られた機体だな」

「そうですね。大時空震の影響でまた別世界の人間と兵器がこの世界にやって来た。おかげでこちらの戦力は増えましたがそれ以上に敵が増えてしまいましたね」

ミリアルドの言葉にモニカがそう皮肉る。これまでにルルーシュたちはＺＥＸＩＳやＺＥＵＴＨなど様々な次元からやってきたという人間たちとその相棒である兵器たちと邂逅している。ある時には敵として、ある時には味方として戦い、またある時には目的や利害の一致などで手を組んだこともある。

共通点があるとするならば、彼らが持つ兵器はこの世界にはない技術や文明によって生み出されたもの、そしてその兵器を操る優秀な乗り手がいることだろう。
何れにしてもそれらの存在は戦力としては強力なカードになりうるが1歩間違えればその力が自らを滅ぼす牙となって襲いかかる可能性も十分にある。
「それに万が一のことを考えてゼハートとアレンを後方に待機させている。もしもの時の事は考えているさ」
ルルーシュは暗に裏切るようならばこの場で処分することをライに伝えるとライもそれ以上何も言わないでいるとライの耳につけているインカムに通信が入り、その報告内容にライは瞳に冷たい光を帯びさせるとルルーシュに報告した。
「――ルルーシュ。どうやら招かれざる客が来たようだよ」
ライが鋭い表情で後ろを振り返った。ルルーシュとC．C．、ミリアルド、モニカも振り返った、その時。
『させんぞ――――！　逆賊め!!』
外部スピーカーを通して、怒声が張り上げられる。
ギアナ級地上戦艦を中心にジンクスＩＩＩによるモビルスーツ部隊、サザーランドによるナイトメア部隊が基地の防衛施設を破壊しながら現れた。ジンクスＩＩＩはＧＮビームライフル、ＧＮサブマシンガン、ＧＮビームサーベル、ＧＮミサイルランチャー、ＧＮランスを、サザーランドはアサルトライフルやロケットランチャー、スタントンファなど全ての機体が完全武装している。
『シャルル皇帝暗殺しその地位を簒奪した逆賊ども。我々はヴェルフェルク公爵家』
『我らはオースティン公爵家』
『そして我々はガルド公爵家』
『同じくシャルル・ジ・ブリタニア皇帝陛下の御教にして祖国の伝統を守るために立ち上がった、我々はムシェル公爵家』
『そして私がアロウズのガウン・エイノック少佐だ』
さらにその中には、指揮官機として１０機前後のグロースターと５

機のアヘッドが混じっていた。豪奢で威厳ある巨大なマントを背中に羽織ったそれらは、標準装備である対ナイトメア戦闘用大型ランスはもちろん、サザーランドと同じようにアサルトライフルやロケットランチャーなどの銃器を片手に持ち、アヘッドもまたＧＮビームライフル、ＧＮサブマシンガン、ＧＮビームサーベル、ＧＮミサイルランチャーを装備し、文字通りの完全武装となっている。

「旧貴族とアロウズの残党たちか・・・過去の栄光に縋ることしか出来ない愚者たちが集まって来るとはな」

ルルーシュによって貴族としての地位と領地の全てを奪われたブリタニアの旧貴族と今までの悪事がバレ、地球連邦から追放されたアロウズによる連合軍は、ルルーシュの元へ攻め寄せてくる。それをルルーシュは呆れたように見ていた。

『この度、我々は互いの憎むべき朝敵を討たんがため、共に協力することと相成った――――』

連合軍の先頭を行くグロースターの1機が何も武装していない片手を空高く掲げた時、

公爵連合軍のナイトメアが、次々にルルーシュに向かって怒声を張り上げた。

『覚悟しろ――――僭帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア!!我らが祖国が腐敗と堕落に満ちているとは、なんと低劣な！　公爵家の名にかけて、シャルル陛下と祖国への侮辱は許さん!!』

『貴様らを消した後は皇族でありながら裏切ったマリーベル・メル・ブリタニアだ!!　「競い、奪い、獲得し、支配する」――――シャルル陛下のその御教にして、我らが祖国の伝統にして地球連邦の秩序が損なわれることはあってはならんのだ!!』

口々にスピーカーで叫んでくる公爵アロウズ連合軍のモビルスーツとナイトメア部隊。その士気は高く自分たちこそが正義だと言わんばかりだが、その叫びはルルーシュ、そしてライたちの心を動かすことはなかった。

「愚かな・・・」

「全く話になりませんね」

「だが、奴らは本気らしいぞ」
「ルルーシュ、こいつらは・・・」
上からミリアルド、モニカ、C・C・。最後にライがルルーシュに促すように言うと、ルルーシュは「ああ」と、大仰に溜め息をついて頷いた。
「古き体制を、形で表したような奴らだな・・・そうまでして支配と力にしがみつきたいのか。まったくもってご立派なことだ」
ルルーシュがそう言って、向かってくる公爵連合軍に目を向けた時。
『『『この、痴れ者どもがぁっ――――!!』』』
最前列のサザーランドが、一斉にターゲットマーカーをルルーシュに定め、ライフルやランチャーなどの銃器の一斉砲火を浴びせようとした、その時。
ドッ、ドッ、ドッ、ドンッ――――!! と、その最前列のサザーランドが数機、いきなり頭部や胴体を撃ち抜かれ、爆発炎上して崩れ落ちた。
『なにっ!?』
『何事だ、今のは――――!!』
驚きの叫びをスピーカーから次々と放ちながら、公爵アロウズ連合軍が一斉に進軍を止めた時。
『――――随分と無様な姿を晒すものだな』
厳格な男性の声が、スピーカーを通して聞こえてくる。しかしそのスピーカーは、ナイトメアやモビルスーツのものではない。
口々に驚きの声を出す公爵アロウズ連合軍のサザーランドとグロースター、フラッグ、イナクト、ジンクスＩＩＩそしてアヘッド。そう、彼らの行手を阻むようにして、空から舞い降りてきた４機の黒いカラーリングのジンクスＩＩＩと一機の巨大な機体である。それはこの世界とは別の次元から現れた数多ある機体の１つ――――その名も『カタクラフト』。黒くカラーリングされ全身が鋭利的な巨大な腕部と脚部を持つその機体の名は『ディオスクリアＩＩＩ』。その搭乗者で、スピーカーから声を発したのは、ザーツバルムだ。

『貴様らのような過去の栄光に縋るしか出来ない愚か者たちが、我らが偉大なる皇帝であるルルーシュ陛下に歯向かうなど烏滸がましい。命が惜しくば直ちに去るがいい』
　ディオスクリアＩＩＩのスピーカーを通して、ザーツバルムは伯爵たちを見下しながらそう告げる。
『愚か者だと!?ルルーシュという逆賊に尻尾をふる余所者風情が!!』
『邪魔をするというのなら貴様も!!』
　口々に驚愕と怒りの声を張り上げる公爵アロウズ連合軍に対し、上空から2人の女性がこう返した。
『よく言うわね。今まで貴族って地位の上で甘い汁を啜ってたあんたら寄生虫の方がよっぽど逆賊じゃない』
『ハッー!そんなんだからそんな惨めな姿を晒すんだよ!!』
　上空に待機しているカタクラフトとは異なる技術で造られた機体――『パラメイル』。白をベースカラーとし青と黒の翼を持つ『ヴィルキス』からアンジュの声が、赤いカラーリングのパラメイルの『アーキバス　ヒルダ・カスタム』からヒルダの声がきこえ、2人とも公爵アロウズ連合軍たちをバカにしており、公爵アロウズ連合軍は気色ばんだ。
『逆賊風情が偉そうにっ!!』
『たった7機でこの数を、そして我らが精鋭をどうにかできるとでも思っているのか、痴れ者どもが!!』
　口々に大勢から浴びせられる怒りの罵倒にも、ザーツバルムたちは全く動じない。
『愚かな・・・自らが強者と勘違いしているからそこまで付け上がることができるのだな。所詮は与えられた力を自らの力と思い込み他者を見下すことでしか優越感に浸れぬものたちか』
『別にどうでもいいわ。敵ならただ潰すだけなんだから』
　ザーツバルムとアンジュの見下すような挑発に、公爵アロウズ連合軍は今までの数々の侮辱も合わさって怒りの頂点に達した。
『余所者風情がっ!!どこまで我々を侮辱すれば気が済むっ!!』
『我らの邪魔をするというのならばまずは貴様らから排除するのみっ

!!』
『我らに刃向かったこと、あの世で後悔するがいいっ!!』
　地上では数十機のサザーランドとグロースターが、上空からはフラッグ、イナクト、ジンクスＩＩＩそしてアヘッドがそれぞれの武器を構え、ヴィルキス、アーキバス・ヒルダカスタム、ディオスクリアＩＩＩへと向ける。
『いいだろう。それほどまでに我らに牙を剥くと言うのならば相手をしてやろう。しかし』
『撃てぇ!!』
『――――これから始まるのは一方的な蹂躙だ』
　公爵の合図と同時に先頭に立っている数十機のサザーランドがアサルトライフルとロケットランチャーを一斉にディオスクリアＩＩＩに向けて放つ。エアポートを破壊しながら放たれる弾丸がディスクリアＩＩＩの装甲に当たるが、次元バリアによってまるで吸い込まれるように弾丸が消えていく。
『な!・銃弾がかき消されていくだと!?』
　銃弾が聞かないことに敵が動揺している隙にディオスクリアＩＩＩは先頭にいたサザーランドに接近すると右腕を振りかぶり近づいてきたことに気づいたサザーランドがアサルトライフルを構えて放とうとしたがそれより先にディオスクリアＩＩＩの右腕がサザーランドに当たり先頭に立っていた５機のサザーランドの上半身が削り取られ残った脚部が地面に転がる。
『ひっ!?』
『う、撃て!!撃ち続けろ!!』
　無惨な姿で転がったサザーランドの残骸に恐怖しながらもサザーランドたちはディオスクリアＩＩＩに向けて武器を構えるが、ディオスクリアＩＩＩは次元バリアで弾丸を防ぎながら虫を払うように腕を振る度に次々とサザーランドたちは削り取られていく。
『くそっ!・なんだあの機体は!?』
『怯むな!!数はこちらが圧倒的に有利なんだ。数で押せば――――』
　上空のフラッグとイナクトのコックピットの中で元アロウズの兵

士はサザーランドを蹂躙するディオスクリアＩＩＩに恐怖しながらリニアライフルを構えてディオスクリアＩＩＩに攻撃しようとした瞬間、フラッグの目の前にアーキバスが現れ、その右腕でフラッグの胴体を掴むと腕部に搭載された凍結バレットを撃ち込み、フラッグは一瞬にして氷漬けとなり落下する。

それに気づいたイナクトが慌ててリニアライフルをアーキバスに向けようとするがアーキバスは対ドラゴン用アサルトライフルの銃口をイナクトの胴体に向けるとそのまま銃弾を放ちイナクトを蜂の巣にする。

『オラオラ！死にたい奴からかかって来な!!』

ヒルダはアーキバスを縦横無尽に空を駆りながらアサルトライフルとアサルトソードでフラッグとイナクトを次々と撃墜する。

フラッグとイナクトはアーキバスにリニアライフルの照準を合わせようとするがアーキバスの速度に追いつけないでいた。

『舐めるな小娘が!!』

そう叫びながらジンクスＩＩＩがＧＮフィールドを展開してアーキバスのアサルトライフルの銃弾を防ぎながら接近するとアーキバスにＧＮサーベルを振り下ろしてくる。しかし、ＧＮサーベルがアーキバスに当たるより先に横から飛んできたヴィルキスの零式超硬度斬鱗刀ラッティーエルによってＧＮフィールドごと胴体を真っ二つにされた。

『へへっ。サンキューアンジュ』

『油断しないでよヒルダ。こんな連中とっとと倒すわよ』

アンジュはヒルダにそう言うとすぐにその場から離れるとラッティーエルで次々とジンクスＩＩＩを斬り裂いていく。

空はヴィルキスとアーキバスが、地上をディオスクリアＩＩＩが公爵アロウズ連合軍を蹂躙しており、数においては圧倒的優位に立っていたアロウズ公爵連合軍だったが、たった３機に圧倒されているという現実に恐怖を感じ、次第に旗色が悪くなり始めていた。

『ば、化け物・・・っ!?』

『ひ、怯むな!!敵はたった３機なんだぞ!!距離をとって数で押せばっ

!!』

怯える兵士たちを鼓舞するようにヴェルフェルク公爵が叫ぶ。それに答えるように兵士たちは距離をとってアサルトライフルとリニアライフル、ＧＮライフルでヴィルキスたちを攻撃する。

『愚かな。その程度で我々を倒せるなどと思うとは・・・』

ザーツバルムはそう呟くと次元バリアを解除すると両腕をサザーランドたちに向ける。その間も無数のアサルトライフルから放たれた弾丸の嵐をディオスクリアＩＩＩは受け止めているがゲッター合金でコーティングされた装甲に傷をつけることは叶わないでいた。

『飛べ！我が眷属よ！』

ザーツバルムの声と共にディオスクリアＩＩＩは構えていた両腕をロケットパンチにして飛ばした。放たれたロケットパンチはアサルトライフルを構えるサザーランドを次々と粉砕し、何機かは脱出機構を使って脱出を図ったが全ての脱出ポッドは握りつぶされた。

『そんな攻撃が当たるわけないでしょ!!』

そうコックピット中で叫びながらアンジュは指輪を輝かせると、ヴィルキスの全身が青くなり『アリエル・モード』を発動させた。アリエル・モードを発動させたヴィルキスは次元跳躍しながらラツィーエルで次々とジンクスＩＩＩを斬り裂いていく。

戦闘――――否、一方的な蹂躙が始まってから一時間も経たぬうちにエアポートにはアロウズ公爵連合軍が率いてきたナイトメア部隊とモビルスーツ部隊はほぼ壊滅状態となり、残っているのはガルド公爵のグロースター、親衛隊のサザーランド１６機、ガウンとその直属の部下のアヘッド５機だった。

『バ、馬鹿な・・・あれほどいた精鋭たちが・・・』

『バ、バケモノが・・・』

公爵の親衛隊たちはザーツバルムたちとの圧倒的な力の差に絶望していた。それでも尚武器を離さず構えているのは公爵たちへの忠義の成せることか、或いは自分たち誇りあるブリタニアの貴族が余所者風情に負けるなど有り得ない、というプライドによるものかもしれない。

『ま、まだだ!!まだ我々にはローゼンクロイツ伯爵たちの援軍がある!!』
『そ、そうだ！彼らが来れば貴様らなど――――』
『――――その援軍というのはこれのことか』
公爵たちは自分たちを鼓舞するようにそう叫ぶが上空から聞こえた声と落下してきた四肢を破壊されたグロースターを見て絶句する。ボロボロのグロースターのマントにはローゼンクロイツ伯爵の家紋が彫られており、落下の衝撃で壊れたコックピットから血塗れで絶命したローゼンクロイツ伯爵の死体が地面に落ちた。
『――――っあ』
誰かが小さい悲鳴をあげる。しかしその声が誰かに聞こえることなどなく上空から降り注ぐ無数の光の球体によって公爵たちのグロースターとサザーランド、アヘッドたちは機体を貫かれ地面に倒れ伏す。
そして上空からゆっくりと頭部がガンダムの意匠と酷似している赤いカラーリングのモビルスーツ――『ガンダムレギルス』が降りてくるとそのままルルーシュの前に跪いた。
『陛下、潜んでいた反逆者たちの処理を終えました』
「そうか。ならばそのまま周囲の警戒を続けろ」
『了解しました』
ガンダムレギルスのパイロットであるゼハートはコックピットの中でルルーシュに対してそう告げると、ルルーシュの命令に従いガンダムレギルスを立ち上がらせる。
『ふ、ふざけるな・・・』
1機の装甲がボロボロになったガルド公爵はグロースターが機体のあちこちから火花を散らしながらナイトメア戦闘用大型ランスを杖がわりにして立ち上がらせようとした。
『強者である我々貴族が、貴様らのような高貴な血筋を理解せぬ愚か者共に敗北するなど、認めてなるものかっ!!』
そう叫びながらグロースターは対ナイトメア戦闘用大型ランスを地面に突き刺し機体を支えながらアサルトライフルの照準をルルー

シュに放とうと銃身を向ける。しかしグロースターがアサルトライフルの引き金を引くよりも先にグロースターの胴体を巨大な鋼鉄の矢が貫きゆっくりと地面に倒れ伏す。
『――――申し訳ありません陛下。その男があまりにも愚かな戯言を吐くために殺してしまいました』
ケンタウロスを彷彿とさせる四本脚を持つ漆黒のモビルスーツ――『ガンダムバルバタウロスシュトルゥム』は構えていた弓『フェイルノート』を折りたたみ背中に仕舞うとガンダムレギルスの時のようにルルーシュに対して跪きガンダムバルバタウロスシュトルゥムのスピーカーからアレンが声を発した。
『隠れ潜んでいたローゼンクロイツ伯爵率いるナイトメア部隊は既に殲滅を終え、現在は第二機甲師団によって撤退するものたちを始末しております』
「そうか」
ルルーシュはアレンからの言葉を聞きながら戦いという名の一方的な蹂躙は、終焉を迎えた周りに目を向ける。
ヴァイロン空港の周辺の至る所には装甲を削り取られたサザーランドやグロースター、氷塊となったフラッグやイナクト、そして破壊され黒い煙と炎を噴き上げている残骸となったナイトメアとモビルスーツ、ギアナ級地上戦艦が転がっていた。
戦場に最後まで残り勝者となった機体はヴィルキスとアーキバス、ディオスクリアＩＩＩ、ガンダムレギルス、ガンダムバルバタウロスシュトルゥムの５機。そしてレオンの配下である第二機甲師団とルルーシュの護衛であるナイトメア部隊だった。
後日、公爵アロウズ連合軍とローゼンクロイツ伯爵軍の全滅はあっという間に広がりブリタニア本土に残っていた反ルルーシュ一派は次は自分たちが粛清されるのではないかと恐れあるものは持てる限りの資産を持って亡国し、あるものはシュナイゼル率いるルルーシュの即位に反対している帝国軍に合流し、あるものはルルーシュの目に入らないように隠れ潜むように暮らす。
その事実を知ったシュナイゼルたち帝国軍にＺＥＸＩＳ、神聖ミス

ルギ皇国、ディガルド武国、ギャラルホルン、ヴァース帝国など各勢力もまた動きを見せようとしていたのだった。

◆◆◆◆◆

第三話　動き出す覇王

ルルーシュがＺＥＸＩＳとの会談を行うためにブリタニア・ユニオンからエリア１１へと出港した翌日。帝都ペンドラゴンから離れた荒野には現在ルルーシュ皇帝軍が部隊を展開していた。地上では前線をエリア１１の浅間山で発生した次元震によって出現した別世界の早乙女研究所で発見された破棄されたゲッターロボたちの残骸を修復し量産型ゲッタードラゴンたちから取り出したゲッター炉心を詰め込んだ新たに作られた量産型ゲッターロボ『ゲッター？α？』、『ゲッターβ』、『ゲッターγ』が並び、その周囲をリーオーやビルゴＩＩ、グレイズ、グレイズリッター、レギンレイズ、ランドマン・ロディ、ゴメル、ウロッゾ、レガンナーなどのモビルスーツと『ゾイド』と呼ばれる地球から遠く離れた星『惑星Ｚｉ』の金属生命体。その中で小型と中型のゾイドであるハンターウルフ、トリケラドゴス、ファングタイガー、ギルラプター、ドライパンサー、ラプトリア、スティレイザー、アンキロックス、バキゲトス、ステゴゼーゲ、ディメパルサー、ガブリゲーター、ナックルコング、レッドホーン、ダークホーン、アイアンコング、ディバイソン、セイバータイガー、ブラストルタイガーが、そして特機と呼ばれる量産型グルンガスト弐式が並んでいた。

その後方には地上戦艦であるライノセラスやＧ－１ベース、ＡＥＵ軍超大型陸上戦艦リヴァイアサンなどの周囲をザッテルヴァッフェやロケットランチャーなど完全武装しているグロースターとサザーランド、雷光やカーペンタリーなどといった長距離砲撃型ナイトメアフレームに大型ゾイドであるウルトラザウルスにグラキオサウルス、さらに遠距離武装を搭載したトリケラドゴス、キャノンブル、ガノンタス、バズートルが並ぶ。

そして上空にはグレイストーク、ログレス級浮遊航空艦、カールレオン級浮遊航空艦の他に飛行ゾイドであるキングホエールやハンマーカイザー、さらに別次元の艦であるスペースノア級艦シロガネとハガネ、その周囲を護衛するようにエアリーズ、ジンクスＩＩＩ、ガフラン、バクト、ゼダス、ドラド、クロノス、ダナジンなどのモビル

スーツやヴィンセント指揮官機、ヴィンセント・ウォード、ガレス、サザーランド・イカロスなどのナイトメアフレーム、スナイプテラやソニックバード、ブラックレドラー、ストームソーダなど飛行ゾイド、そして別次元の機動兵器であるＰＴこと『パーソナルトルーパー』やＡＭこと『アーマードモジュール』といった量産型ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩ、量産型ヒュッケバインＭａｒｋ―ＩＩ、リオン、バレリオン、ガーリオン、アーマリオンが待機していた。

シュナイゼルが同盟相手であるギャラルホルンのアリアンロッド艦隊とディガルド武国と共に大軍を率いてペンドラゴンに進軍していると密偵から報告が上がってから３日経った。その進軍の速度は緩やかなものだが反ルルーシュ派の人間たちが次々と合流しているためその戦力は着々と増やしていた。さらには神聖ミスルギ皇国からも皇帝であるジュリオだけでなくビルゴＩＩＩやアヘッド、ジンクスＩＩＩなどのモビルドールや機械獣に類似する機体や見たことも無い機体やモビルスーツ、戦艦の姿が確認されていた。

現時点での互いの戦力は数と質ともに両者甲乙付け難いものであるため今のところどちらが優勢か判断出来ないでいた。

現在のルルーシュ皇帝軍には彼らの主であるルルーシュと彼に仕える最強の騎士である終焉の騎士のライ、隠者の騎士のミリアルド、女帝の騎士モニカの３人が不在であるため一部の兵士たちの間で動揺があったがほとんどの兵士たちには動揺がなかった。

この地にはその実力が知られているグラハム・エーカーやエスデス・フリューゲル、ルミナス・アルカディアそして彼らと同格の実力を持つ運命の騎士達だけでなく、ルルーシュ自らがスカウトした彼らと同等の実力を秘めた多くのものたちが揃っておりその実力をその目で見た兵士たちは誰が相手だとしても自分たちが負けることは無いと確信のようなものを抱かせていた。

やる気を滲らせている兵士たちはそれぞれが何時でも出撃できるように十分な休息を取りつつ、フォーメーションの確認、シュミレーションによる特訓など今の自分たちにできることをしていた。そしてそれはパイロットだけではなく機体の整備や開発を担っている研

究者たちも来るべき戦いに向けて機体の整備や新たな兵器の開発などを行っていた。その中でシュウ・シラカワを始めとした現在のブリタニアに所属する最高の頭脳を備えた科学者たちもまたそれぞれが担当する機体の最終チェックや新たな武装の開発、システムの調整などを行っていた。

そして現在、後方に待機しているライノセラスのブリッジで指揮をしているエスデスは部下からの報告を受けていた。

「フリューゲル卿。全部隊配置に着きました」

「そうか。ならそのまま周囲の警戒をしつつその場で待機するように伝えよ」

「はっ！」

部下はエスデスに対して敬礼をするとそのまま退室した。それを横目で流し見た後エスデスはふぅっとため息をつきながら手元の資料に目を通す。

「出来ればゲッターロボとグルンガストをもう少し揃えたかったがな」

エスデスとしては攻撃力と防御力のどちらも高い量産型ゲッターロボ？α？、β、γか量産型グルンガスト弐式の数をもっと増やし前線に出したかったが残念ながら時間とコストの問題で現在ブリタニア帝国軍の所有するゲッターロボは合計１８機、量産型グルンガスト弐式は８機だった。

「仕方あるまい。量産という点でほかのＭＳやＰＴ、ＡＭなどに比べてコストがかかりすぎる上にゲッターロボはパイロットを選ぶからのう」

エスデスの隣にいる敷島博士は残念そうにそう言うがその表情はどこか楽しげだった。別世界にて恐竜帝国による早乙女研究所襲撃の際に弟子とも呼べる存在のカムイ・ショウによって頭だけとなってしまったかと思えば気づいた時にはこの世界のエリア１１に出現した自分の知らない早乙女研究所にいた。そしてその後その知識を欲したルルーシュがスカウトし現在はシュウ・シラカワに並ぶ研究者としてゲッターロボの開発に関わっている。

「しっかし勿体ないのう。本来ならお主にあの早乙女研究所で見つけた新型ゲッターロボに乗ってもらいたかったんだがのう」
「悪いが私には皇帝陛下が用意してくれた機体がある。それにチームで操るゲッターロボは私には性にあわない」
「わはははっ!そりゃそうじゃ!!お前さんらは個として飛び抜けて優秀じゃが、ゲッターチームのように息ぴったりの連携を行えんしのう!!」
敷島博士はエスデスの言葉を聞いて愉快そうに大声で笑う。エスデスはそんな敷島博士を無視して出発する前にルルーシュから与えられた任務のことを考えていた。現在この防衛ラインにはルルーシュの護衛として同行したライとモニカ、ミリアルド、そして別任務として別行動をしているノクスとその直属の配下を除いた現在のルルーシュが所有する全戦力が集結していた。
シュナイゼルとフレイヤを警戒しているからこそこれ程の戦力を揃えているといえばそれまでかもしれないが、現在の戦力のほぼ全てを導入する程かと勘繰ってしまう。現在の拠点である帝都ペンドラゴンとルルーシュの護衛が最低限であることからさらに怪しんでしまう。
「(我々も敵から目をそらす為の囮、だとすれば本命はノクスたちになるか)」
強引な手で皇帝の地位を手に入れたルルーシュにはシュナイゼルたち旧ブリタニア帝国軍だけでなく、ジュリオ率いるミスルギ皇国やリボンズ・アルマーク率いるイノベイターとアロウズにアンチスパイラル、コーウェンとスティンガーたちインベーダー、そして別世界からやって来たインスペクターやノイエDC、シャドウミラーなど今上げたものたち以外にもルルーシュたちには警戒すべき敵が多くいる。故に今回エスデスたちは敵の目をそらす為の陽動と仮定するならばそんな多くの敵を欺き、別行動をしているルクスたちを動きやすくしていると考えるならばこれほどの軍勢を揃えるのも分かる。だが・・・
「(やはり我々はそこまで信頼されていないということか)」
ルルーシュ直属の騎士である『運命の騎士』であるエスデスたちだ

が、ルルーシュと出会ってまだ数ヶ月程度でしかない上に元から他者に対して警戒心が強いルルーシュに信用はされていてもまだ信頼されているとはいいきれないでいた。現在、ルルーシュが信頼していると思われる人物はライとジェレミア、C．C．の3人のみだった。
「(まぁいい。それなら今回の作戦で信頼を得ていけばいい。そしてゆくゆくは・・・)」
そこまで考えたエスデスは帽子を深く被り、何を想像したのか顔を赤らめていた。そのことを敷島博士とエスデスとあまり関わりのなかった兵士たちは不思議そうに首を傾げるが、エスデス直属の配下だったもの達は今までのエスデスが見せたことの様子を見せるため困惑を隠せないでいた。
「(ふふっ。正妻の座はC．C．が得るとしてもまだ第二、第三夫人の座は空いているはず。それを狙わせてもらおうか)」
エスデス・フリューゲル。皇帝となったルルーシュに恋してしまった彼女はルルーシュの目的を理解しつつもC．C．や他のルルーシュに恋するものたちと共に平和になった世界をルルーシュと一緒に過ごしたいと願うようになってしまった。
なお、後にエスデスはシャーリーとミレイ、マーヤという自分より前にルルーシュに恋しているライバルの存在を知るのだった。
◆◆◆◆◆◆
エスデスたちがシュナイゼルたちを警戒して部隊を展開しているのと同じ頃、エリア11のアッシュフォード学園に向けて太平洋上空を横断している皇帝専用旗艦タルタロス。その中でルルーシュ専用に与えられた自室のベッドの上でルルーシュは右目を抑えながら苦しそうに呻いていた。
「ぐっ!!がぁあ・・・っ!!」
ギアスの紋様が浮かぶ両目を赤く輝かせながら両目を中心に全身を鋭い痛みや燃えるような熱さなど言葉に尽くしがたいほどの苦痛に耐えるようにルルーシュは血を吐くような呻きを漏らしながら必死に耐えていた。
「ルルーシュ・・・」

その隣でC．C．がルルーシュの左手を握りながら苦痛に苦しむルルーシュをただ見守ることしか出来ない自分を歯痒く思いながら辛そうにルルーシュを見ていた。そしてしばらくしてようやく落ち着いたのかルルーシュは右腕で目元を覆いながら荒い深呼吸をして息を整える。
「大丈夫かルルーシュ」
「あぁ。問題、ない」
C．C．はルルーシュを心配そうに覗き込む。しかしルルーシュの方は問題ないとばかりに平静を装うが額からは玉のような汗が流れ出していた。
「やはり黒の英智に触れたのが原因か・・・」
「恐らくな。まさか俺のギアスにまで影響を及ぼすとはな・・・」
ルルーシュの両親であるシャルル・ジ・ブリタニアとマリアンヌ・ヴィ・ブリタニアとCの世界で決着をつけた時、一瞬だけ黒の英智に触れたルルーシュは様々な世界の技術を、そしてエルガン・ローディックが恐れていた災厄の一端を知ったが、その際に別世界で『絶対遵守』のギアスとは異なるギアスを手に入れた自らの姿を知ったことでCの世界から出てからルルーシュは苦痛に苛まれる日々が続いていた。
「だが俺たちに立ち止まってる暇などない。失ったものたちのためにも、俺に歩みを止める時間などない。そうだろう、C．C．」
ルルーシュは決意の籠った瞳をしながらC．C．にそう答えるがC．C．はそれに対して何も答えられず、ただ悲痛そうな顔でルルーシュを見ることしか出来なかった。
最初の頃はルルーシュのことを自らの願いを叶えるために利用しようと近づき、ギアスの力を与えた。しかし、ルルーシュの隣で妹であるナナリーの望む世界を叶えるために多くのものを犠牲にし自らの心を壊しながらも歩みを止めないルルーシュを見続けたC．C．は何時しかルルーシュに対して情がわくようになっていた。そして中華連邦でのギアス教団を壊滅し、黄昏の間でシャルル・ジ・ブリタニアと対峙したあの時にルルーシュが言ってくれた言葉がC．C．

のルルーシュへの思いを理解するきっかけとなった。

――――――『そんな顔で死ぬな！C．C．！最後くらい笑って死ね！必ず俺が笑わせてやる！だから・・・！』

不老不死という呪いによって永い時を生き続け魔女として忌み嫌われていたC．C．にとってそのようなことを言われたのは初めてだった。だからこそC．C．は無意識に死を願っていながら死を与えてくれるはずだったシャルル・ジ・ブリタニアの手を払い、ルルーシュに手を伸ばそうとした。

しかし、その時のC．C．にはまだその手を取るのに躊躇いがあったためにルルーシュの手を取らず自らの記憶を奥底に封じ、ギアスを得る前の奴隷だった頃に戻った。

そして深層意識の奥底からルルーシュを見守り、Cの世界でシャルルとマリアンヌの2人と決着をその目で見守ったC．C．は自らがルルーシュに対する想いを理解してしまった。

だが、その想いをC．C．はルルーシュに伝えることはできないと思っている。今のルルーシュは母の死の残酷な真相を知り、守りたかった最も大切な存在である妹のナナリーを失ってしまったことで生きる理由をなくしてしまった。今、ルルーシュが戦う理由はナナリーの願った否、ルルーシュが願う優しい世界を実現するためだからだ。その為ならば自らを犠牲にする覚悟を決めたルルーシュを止めることなどC．C．には出来ない、否そのような資格が自分にはないと思ってしまっていた。

「(全てを知っていながらそれを黙りルルーシュを利用していた私に想いを伝える資格など・・・)」

C．C．はルルーシュに気づかれないように悲しげな顔を下に向けながらルルーシュの手に被せるようにそっと手を乗せる。そうしてしばらくの間沈黙が続いていた時だった。

ピピピピッ、と、ベッドのすぐそばの壁にある通信回線のランプが、赤く輝いた。ルルーシュとC．C．が、ハッとそれに気づくと通信回

線のすぐ側の小型ディスプレイにモニカの姿が映った。
『――――陛下。お休みの所恐れ入りますが、ご報告があります』
「・・・なんだ？」
ルルーシュが通信回線に向かって言うと、モニカは一呼吸おいてこう言った。
『ギャラルホルンのマクギリス・ファリドが陛下に謁見を求めてきております』
「なに・・・」
ルルーシュとC．C．はモニカからの報告に思わず目を瞠った。
ギャラルホルンとは数ヶ月前の大時空震によってこの世界に飛ばされた治安維持組織。しかしその実態はその軍事力をもって反乱分子になりうる存在を裏工作を行って始末し、表向きには自分たちが正義であると民衆に知らしめ歯向かう存在にギャラルホルンに逆らうことの愚かしさを思い知らせていた。
そんな腐敗した組織を改革せんと立ち上がったのがマクギリス・ファリドという男だが、ギャラルホルントップであるセブンスターズの1人であるファリド家の当主であるマクギリスが何を目的としているのかは不明だった。
故にそのマクギリスからの突然の謁見を求めて来たことにルルーシュは驚き、何を企んでいるのかと探ってしまう。しかし、これはマクギリスの目的を知るための絶好の機会とも言えるだろう。ルルーシュは少し考えた後、モニカにこう言った。
「わかった、今そちらに向かう」
『よろしいのですか・・・？』
「問題ない。これを機にファリド公の思惑を読ませてもらおう」
「しかし罠の可能性もあるぞ」
「フッ、それならそれで構わないさ。あちらが俺たちを利用しようとするならばこちらも同じように利用するだけだ」
C．C．とモニカの心配する声に対してそう答えながらルルーシュは服を着替え、ブリッジへと足を運ぼうとする。
「――――それに利用するのもされるのも俺には慣れたものだ」

ルルーシュは苦笑しながらそう言うがそれはモニカとC．C．の顔を曇らせるしか無かったのだった。
それからしばらくした後、ルルーシュとC．C．はタルタロスのブリッジに足を運び、既に待機していたモニカ、ライ、ミリアルドの3人と共にマクギリスからの通信を受け取った。
『こうして時間を取っていただき感謝致しますルルーシュ皇帝陛下』
正面モニターに映る金髪の翡翠色の瞳をした青年『マクギリス・ファリド』はそう言いながら笑みを浮かべていた。ルルーシュに対して不敬な態度をとるマクギリスに対してモニカとライは眉を吊り上げるがルルーシュがそれを手で制しながら同じように笑みを浮かべて対応する。
「こちらこそあの伝説の機体『ガンダムバエル』を操るファリド家の当主と話せるとは光栄だな」
『ガンダムバエル』。それはギャラルホルンの創設者であるアグニカ・カイエルの乗機であり、ガンダムバエルにはアグニカの魂が宿り、ガンダムバエルを起動出来たものは、アグニカに認められた者として文字通りの主としてギャラルホルンを総べる事ができると伝えられる伝説の機体。
それを見事起動させたマクギリスは多くの若い将兵たちと共にギャラルホルン改革のためにクーデターを起こそうとしたが、次元震によってこの世界に飛ばされたことでクーデターは行われなかったが、現在もギャラルホルンの改革を目指し政敵である『ラスタル・エリオン』とは敵対しており戦力を集めているらしい。
「それでご要件は何かな？生憎こちらも無駄話をしているほど暇では無いのでね。手短にお願いしようか」
ルルーシュは不敵な笑みを浮かべながらマクギリスに視線を向ける。それに対してマクギリスもまたルルーシュと同じように笑みを浮かべながら答える。
『では単刀直入に言わせてもらおうか。ルルーシュ皇帝陛下。我々と同盟を結ぶ気はないかね？』
「ほぅ・・・」

マクギリスからの同盟の誘いにルルーシュは少し目を細める。
『そちらも既にご存知かと思われるが、現在シュナイゼル皇子旧皇帝軍がディガルド武国と神聖ミスルギ皇国、アリアンロッドと同盟を結び帝都ペンドラゴンへと進軍している』
「無論知っているとも。愚かにもこの私の首を取ろうと躍起になっているようだがそう簡単に私の首をやる気はないがな」
『流石はその若さで一国を支配するだけはありますね。しかしどの勢力も一筋縄ではいかぬ相手。そこで我々と同盟を結び迎え撃とうではありませんか』
「なるほど。確かに貴公としても厄介なエリオン公を確実に排除するにはまたとない機会となるからな」
ルルーシュはマクギリスに対して挑発的にそう言うが、マクギリスは表情を変えず笑みを浮かべていた。そんなマクギリスに対して何を思ったのかルルーシュは不敵な笑みを浮かべると返答を返した。
「いいだろうその同盟結ぼうじゃないか」
ルルーシュが同盟を受け入れると言ったためライたちは驚き思わずルルーシュに顔を向けそうになったがすんでのところで表情を変えずモニターのマクギリスに視線を向ける。
『おや、随分と簡単に同盟を受け入れてくださいますね』
「なに、こちらとしても勝率を上げられるのなら戦力を上げるに越したことは無いからな」
その後、互いに腹の内を隠しながら笑顔の仮面を貼り付けルルーシュとマクギリスは同盟を結ぶにあたっての条件を提示し合い交渉はエリア11の首都であるトウキョウ租界に到着するまで続いたのだった。

第四話　ナナリーの決意、会談の前夜

ルルーシュたちがエリア11のトウキョウ租界のブリタニア軍基地に到着する数時間前。

シンジュクゲットーの中心部にて18機のジンクスIII、3機のアヘッド、25機のサザーランド、4機のグロースター、2機のヴィンセント・ウォード、さらにはモビルドールを搭載した無人機十数体が展開していた。

彼らはアロウズのバレル・フォーレン少佐を中心として今まで貴族や騎士の名家という家柄の力を使って好き勝手過ごした当主やその息子たちが、ルルーシュによって権力を奪われ窮地に追いやられたその怨みを晴らすべく武器やKMF、食糧を奪ってバレルの元に集まり帝位を簒奪したルルーシュに制裁を与えるべく今まさに行動を起こそうとしていた。

『諸君！これより我々は偉大なる皇帝シャルル・ジ・ブリタニア皇帝陛下を卑劣な手でその命を奪い、その地位を簒奪した愚かな盗人であるルルーシュを倒し、再び我々は栄光を取り戻すのだ!!』

アヘッドのコックピットの中でバレルはオープンチャンネルで兵士たちを鼓舞するようにアヘッド近接戦闘型の右腕を高く上げながらそう宣言する。それに続くように兵士や貴族たちも声を上げる。今までその地位に胡座をかいて好き勝手やってきた彼らがこうなったのも自業自得でしかないことを彼らは気がつくことは無いだろう。

『そうだ！悪逆皇帝を許すな!!』

『皇族としての誇りを失ったものに皇帝の座は相応しくない!!』

『奴らに我らの誇りを見せつけるのだ!!』

兵士と貴族たちは機体の腕を高く上げながら呼応するように声を上げる。士気は最高潮に高まり後は進軍するのみの状況だった。

――その瞬間、地面を巨大な鋼鉄鋏が砕きながら飛び出すとそのままバレルのアヘッドの胴体を挟んだ。

『がっ!?な、何が――――』

バレルは突然の攻撃に動揺し巨大な鋏に挟まれた衝撃で破損したコックピットの部品が体の至る所に突き刺さりながらも確認しようとアヘッドの頭部を軋ませながら動かしたがその姿を捉えるより先にアヘッドの胴体を挟み潰された。爆発する機体の中でバレルが最後に目にしたのは巨大な鋼鉄の鋏を持った青い巨大な蠍のようなロボットだった。

突然この部隊のリーダーであったバレルがあっさりと死亡してしまったことに兵士たちは一瞬呆然としてしまったが、腐ってもアロウズとして多くの戦場で戦ってきた経験のある兵士たちはすぐに気持ちを入れ替えジンクスＩＩＩの武器であるＧＮランスの槍先を向けようとしたが、ソレの姿を見た瞬間、恐怖で体がすくみ上がってしまった。

地面を砕きながら現れたソレはＭＳであるジンクスＩＩＩが見上げる程巨大であり、アヘッドを両断せしめた両前脚の巨大な鋼鉄の鋏を振り上げながら巨大な銃口のついた蠍の尾を高く上げながら鋼鉄の蠍は姿を現した。

ソレはルルーシュ皇帝軍においてエスデスたちと並ぶ戦力にしてはるか昔、惑星Ｚｉにて大海の支配者と恐れられた規格外ゾイドが一体、ウミサソリ型ゾイド『デススティンガー』。

『――――っ!?散れっ!!』

ジンクスＩＩＩのパイロットの１人がそう叫ぶと同時にデススティンガーは赤いバイザーを輝かせると巨大な鋼鉄の鋏『ストライクレーザーバイトシザーズ』を目の前にいるジンクスＩＩＩに振り下ろすが、大人しく受け止める訳もなくジンクスＩＩＩたちはストライクレーザーバイトシザーズを避けながらＧＮランスを構えてビームをデススティンガーに向けて放つ。そしてデススティンガーに恐怖してすくみ上がっていたブリタニア貴族と騎士たちだが何とか気を取り直して散開するとデススティンガーを囲むように位置取り、アサルトライフやロケットランチャーを構えデススティンガーに向けて一斉に放つ。

『撃て撃て!!敵はたった1機のデカブツだ!!全員でかかれば恐るるに足らず!!』

バレルの副官であったレンツォ・ボーラはジンクスＩＩＩのＧＮバズーカで攻撃しながら全員に指示を出す。実際にこれ程の機体による一斉攻撃を浴びて倒れない存在などいるはずがないとレンツォはジンクスＩＩＩのコックピットの中でほくそ笑む。実際数十機に及ぶ機動兵器の一斉射撃をまともにくらって耐えられる機体などＺＥＸＩＳのマジンガーＺやゴッドマーズなどといったスーパーロボットと呼べる限られた特殊な機体ぐらいだろう。

しかしそんなレンツォの思惑を砕くかのようにデススティンガーは実弾とビームによる暴雨をくらっても意に介せずストライクレーザーバイトシザーズを振り回して周りにいるサザーランドをビルに叩き飛ばしながら射撃武器であるＡＺ９３０ｍｍ２連装ショックガン、ＡＺ３５ｍｍバルカン砲、ＡＺ１２０ｍｍハイパーレーザーガン、ＡＺ１２０ｍｍハイパービームガン、収納式ＡＺ１０５ｍｍリニアキャノンを展開すると一斉に乱射する。ビルや瓦礫を破壊しながらアサルトライフルやロケットランチャーを構えていたサザーランドとグロースターを容赦なくビームと実弾によって機体を蜂の巣にし、ストライクレーザーバイトシザーズに当たった機体はそのままビルや地面に叩き飛ばされ、運が悪かったものはコックピットごと潰されミンチになっていた。

『舐めるな化け物がぁ!!』

両脚を破壊されフロートユニットで浮かんでいる1機のヴィンセント・ウォードがＭＶＳを連結して両刃の槍にするとデススティンガーが放つ銃弾とビームによる乱射をかわしながらデススティンガーの頭上にたどり着くとその頭部にＭＶＳを突き刺そうとした瞬間、デススティンガーの尾がヴィンセント・ウォードの腹部に当たり、叩き落とされたヴィンセント・ウォードは地面を数回バウンドしフロートユニットと両腕を破壊され達磨状態になったヴィンセント・ウォードにデススティンガーの脚が振り下ろされようとしていた。

『ヒッ!?ま、待ってく――――』

ヴィンセント・ウォードのパイロットは迫り来る死の恐怖に思わず命乞いをしようとしたが、無慈悲にもデススティンガーは鋭い脚先を振り下ろし、ヴィンセント・ウォードのコックピットごと腹部を貫いた。ものの数分でデススティンガーによってルルーシュ討伐に集まっていた集団は半壊し、残っている機体も無事なのは殆どいなかった。それに対してジンクスＩＩＩやサザーランドたちのデススティンガーへの攻撃はろくに効かずデススティンガーの装甲は傷一つついていなかった。

その事実に離れた位置で離れた位置からアサルトライフルやロケットランチャーで攻撃を仕掛けていた貴族や騎士の息子たちは今になってようやく自分たちが狩られる立場になっていることに気づき、彼らは恐怖に駆られて持っている武装を投げ捨て無様に逃げ始めた。

『や、やってられるか!!あんな化け物相手に勝てるわけないだろ!!』

『逃げろ!!このままここにいたって殺されるだけだ!!』

『ま、待て!!逃げるな!!貴様らそれでも誇り高きブリタニア人か!!』

我先にと逃げ出す若いパイロットたちが乗るサザーランド達にレンツォは戦うように叫ぶが、その声を無視してサザーランドたちは必死に逃げ惑う。しかし、そんな彼らを嘲笑うかのようにデススティンガーは尾を高く上げ、ＡＺ１２０ｍｍハイパーレーザーガンとＡＺ１２０ｍｍハイパービームガンを展開すると中心部砲身である荷電粒子砲が伸縮し、エネルギーをチャージし始めた。

異変にいち早く気がついたレンツォはデススティンガーが何かヤバイものを放とうとしていると察し、全員にその場から散開するように逃げるよう叫ぼうとしたがそれよりも先に荷電粒子砲のエネルギーが溜まりデススティンガーの尾の砲身から荷電粒子砲が放たれ逃げようとしていたジンクスＩＩＩと既に逃走していたサザーランドたちを容赦なく飲み込み、脱出する暇もなく残っていた機体は跡形もなく消し炭となった。

デススティンガーが暴れたことによって元から半壊していたビルは幾つか完全に崩壊し、黒い煙と炎を噴き上げているアヘッドたちの

残骸が辺りに転がっている中、デススティンガーは一度空を見上げてから生き残りがいないことを確認すると飛び出した穴の中に戻りそのまま地面に潜っていった。その様子を遥か上空から1機の青い可変型ＭＳが伺っていた。

「――――全く恐ろしい化け物だぜ」

水生生物を思わせる外装に5基のモノアイを光らせる青い可変型ＭＳ『ハンブラビ』のコックピットの中で金髪のリーゼントに浅黒い肌をした男――『ヤザン・ゲーブル』はデススティンガーが暴れ回ったのを見て愉快そうに笑みを浮かべていた。

次元震によってＺＥＵＳの世界からこの世界に飛ばされたヤザンをライがスカウトし現在は第零騎士団の団員となったヤザンはライの命令でデススティンガーの戦闘データをとっていた。かつてティターンズとして多くの戦場で戦ってきたヤザンからしてもデススティンガーはサイコガンダムやデストロイガンダムといった強力な機体を上回る力を持っていると思わせられるほどであり、対抗できるのはＺＥＵＳやＺＥＸＩＳなどの強力な機体やエースパイロットと限られているだろう。

しかも脅威なのはデススティンガーだけでないというのだからルルーシュたちに敵対する組織にヤザンは思わず同情してしまうが、それ以上にこのデススティンガーを必要とするようなこれから始まるであろう強者たちとの戦いに心躍らせていた。

『ヤザンさん。そちらのほうは終わりましたか』

「あぁ奴さんは今頃元の場所に戻ってるはずだ。後で戦闘データをそっちに送信する」

『了解です。ではこれで失礼しますね』

ライからの通信が切れた後、ヤザンは愛機であるハンブラビのコックピットで一息つくとこれから起こる戦いに思いを馳せるのだった。

◆◆◆◆◆

同時刻

天空要塞ダモクレスの艦内庭園。

色とりどりの花が咲きほこるの最奥に、車椅子に座ったひとりの少

女――――ナナリー・ヴィ・ブリタニアがいる。その両側を固める４人の男女は、シュナイゼル、コーネリア、カノン、ディートハルト。そして５人の前に、騎士服と色とりどりのマントを纏った男女――――ブリタニア帝国最強と名高い、シャルル・ジ・ブリタニア直属の十三騎士《皇卓の騎士（ナイトオブラウンズ）》が揃っていた。

　といってもここにいるその人数は９人しか居ない。《第二席（ナイトオブツー）》ミケーレ・マンフレディと《第十席（ナイトオブテン）》ルキアーノ・ブラッドリーは既にその命を散らしており、《第九席（ナイトオブナイン）》ノネット・エニアグラムは現在グリンダ騎士団とともに行動しているためダモクレスにはいない。そして《第十二席（ナイトオブトゥエルブ）》モニカ・クルシェフスキーは離反し、ルルーシュの元へと下った。現在のメンバーは即ち、

《第一席（ナイトオブワン）》ビスマルク・ヴァルトシュタイン。

《皇卓の騎士（ナイトオブラウンズ）》の筆頭にして帝国最強の騎士の称号を持つ豪傑で、シャルル・ジ・ブリタニアの右腕として長く仕え最も信頼を置かれた人物でもある。大型ＫＭＦである第八世代ナイトメア『ギャラハッド』に搭乗し、シャルル自らが銘を授けられた身の丈以上ある大剣『エクスカリバー』を振るい、兵士たちの指揮を執る。

《第三席（ナイトオブスリー）》ジノ・ヴァインベルグ。

　名門貴族であるヴァインベルグ家の出であるが、その実力は第三席に相応しい技量を持っており、乗機である第八世代ナイトメア『トリスタン』と共にその力を振るってきた。イレブンであるスザクやハーフのライに対しても普通の態度で接してくる。

《第四席（ナイトオブフォー）》ドロテア・エルンスト。

　ビスマルクに並ぶ実力を持った褐色肌の女傑であり、その実力は『閃光のマリアンヌ』に匹敵するのではないかと言われている。乗機である第八世代ナイトメア『バロデミス』の火力はラウンズの中でも一、二を誇り、その実力は騎士としても武人としても優れている。

《第五席（ナイトオブファイブ）》エルドナ・フォーレス。

元第二席ミケーレ・マンフレディの同期でありマンフレディとは多くの戦場を共に戦ってきた。その功績からラウンズに選ばれた豪傑。乗機はミケーレ・マンフレディが使っていた『サグラモール』の同型機である『アレスタント』を操り、エルドナと同じ志を持った豪傑な騎士たちで構成された親衛隊を配下として数多の戦場を渡り歩いてきた。

《第六席（ナイトオブシックス）》 アーニャ・アームストレイム。

記録として写真をよく撮る少女だが、感情をあまり表に出すことが少なく、特に興味のないことには無関心である。しかし最年少でラウンズに選ばれたその実力は伊達や酔狂ではなく多くのものに認められた上でその地位についている。

《第七席（ナイトオブセブン）》 枢木スザク。

ラウンズの中で唯一のナンバーズ出身の騎士。かつては第三皇女ユーフェミア・リ・ブリタニアの専任騎士だったがユーフェミアの死とブラック・リベリオンでのゼロ捕縛の功を持ってラウンズの地位を得た。ブリタニアの白き死神として恐れられる反面、多くのものを裏切ってその地位についたことから多くのものに裏切り者として疎まれていた。第二次ブラック・リベリオンでの紅蓮聖天八極式との戦いで半壊したランスロット・コンクエスターの代わりに新たにキャメロットが製造した第九世代ナイトメア『ランスロット・アルビオン』を操り、今度こそ大切なものを守ると意気込んでいる。

《第八席（ナイトオブエイト）》 デシル・クォーバー

相手の命を奪うことに快感を得ているルキアーノ以上の下衆。その正体は別次元で死んだゼハート・ガレットの兄であるデシル・ガレットの生まれ変わりだった。元々幼稚だったのがブリタニア貴族による選民思想によってさらに悪化しておりラウンズの中でも枢木スザク以上に煙たがられているが、その実力だけは本物のためそこだけは認められている。乗機はラウンズの中で唯一のＭＳである『ゼイドラカスタム』。

《第十一席（ナイトオブイレブン）》 アーカード・ヴァレンタイン。

ジノと同じく名門貴族の出であるが、本人は貴族としての地位など全く興味がなく純粋に自分を倒せるだろう強者との戦いを求める。故に出自など気にせず強者である枢木スザクのことは気に入っている。乗機は第八世代ナイトメア『サフィール』。

《第十三席（ナイトオブサーティン）》 バレット・ギュスターヴ

かつてビスマルクやマリアンヌと共に血の紋章事件でシャルルに反旗を翻したもの達との戦いで両眼が潰れて盲目になってしまったがそれでもその実力は衰えるどころかさらに増しており、その実力はビスマルクが背中を預けるほど信頼出来るものだ。

第八世代ナイトメア『ボールス』を操り、シャルル自らが銘を授けられた長剣『カラドボルグ』を振るう。

1人が離反し、2人が死亡、そして1人が別行動をしているためその数は9人と減ってはいるがそれでも彼らは帝国最強の騎士として名を連ねるだけあり、その整列した佇まいからその覇気が失われていないことがわかる。

現在のシュナイゼル率いる旧皇帝軍最強戦力カードである彼らの他にこの庭園にはナナリーの騎士であるアリスとその同僚であるサンチア、ダルク、ルクレイティアとシュナイゼルたちの同盟相手であるディガルド武国からはフェルミ、アリアンロッドからはガエリオ・ボードウィンとジュリエッタ・ジュリスが立ち並んでいた。

「ナナリー。先にも伝えたように、ルルーシュが生きていたよ。しかし――――」

ナナリーのそばに跪く形で目線を合わせ、シュナイゼルが囁くように話しかける。

「お兄さまは・・・ルルーシュお兄さまは、いつも優しかった」

と、最初は悲しそうな表情をしていたナナリーになっていたが、次

第に失望と憤りが綯い交ぜになった表情になっていく。
「お母さまを亡くし、目と足の不自由な私が生きていけるようにと、いつも手を差し伸べてもらっていました。けれど、いつからか、お兄さまは変わってしまった・・・人々を騙し、傷つけ、世界を混乱させる・・・！」
　そして、一呼吸置いた後、大きく切実な声でこう言った。
「私は・・・ルルーシュお兄さまを止めたい――――!!」
「・・・ナナリー・・・」
　コーネリアが、そのナナリーの切実な声と表情に息を呑んだ。そしてシュナイゼルは、間を置いてからゆっくりと立ち上がり、《皇卓の騎士（ナイトオブラウンズ）》を振り返る。
「《皇卓の騎士（ナイトオブラウンズ）》の諸君。私はナナリーを補佐して偽帝ルルーシュを討つつもりだ。キミたち皇帝直属の騎士はどう動く？」
　シュナイゼルの問いに、９人の皇帝直属の騎士たちはこう斉唱した。
「「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは・・・皇帝にあらず!!!」」
　それから次に、ビスマルクが一歩前へ進み出て、シュナイゼルとナナリーに向けてこう言った。
「我々の為すべきことはただ一つ。――――シャルル皇帝陛下の御命を奪った偽帝ルルーシュを倒すことであります」
　ビスマルクの言葉に、シュナイゼルは言葉には出さなかったが、薄ら笑いを浮かべて頷いた。そしてシュナイゼルはフェルミとガエリオたちに顔を向けるとこう話しかけた。
「そういう訳で我々は偽帝ルルーシュを討ち取るために全力を尽くす。君たちにも頑張ってもらうよ」
「無論だ。そのためにエリオン公は貴公と手を結ぶことを選んだのだ」
「そうね。うちの王様もその事に異論はないみたいだし」
　ガエリオとフェルミはシュナイゼルに対してそう答えるがガエリオはどこかシュナイゼルを警戒するような目で見ており、フェルミはどうでもよさそうに答える。それでも納得したのかシュナイゼルは

ナナリーに振り返る。
「ナナリー・・・よく決断してくれたね。いくら血を分けた兄妹であったとしても、凶行は止めなければならない」
「わかっています、シュナイゼルお兄さま。だからわたしは――――」
「ナナリー・・・」
つい先日までの穏やかさとは打って変わって、毅然とした態度で振る舞うナナリーに、スザクは息を呑んだ。それはかつての優しいナナリーを知っているジノとアーニャ、アリスたちも同じだった。
そしてその様子を艦内庭園の木々の裏に隠れる形でエンブリオは愉快そうに笑みを浮かべながら見ているのだった――――。

◆◆◆◆◆

そして場面は再びエリア11のトウキョウ租界ブリタニア軍基地のエアポートライン。自分たちが乗っていたウラノスのそばに立ちながらルルーシュは、遠くに見える月明かりに照らされたフレイヤの影響を受けたアッシュフォード学園を、ルルーシュは一望する。
「――――お待たせ致しましたルルーシュ陛下」
ルルーシュの前から声をかけられたので声のした方を向くと、そこにはレオタードタイプの緑色のパイロットスーツに身にまとったマリーカ・ソレイシィと目元をバイザーで隠している兵士たちが並んで立っていた。
「ライ卿から与えられたデスティンガーのおかげでシンジュクゲットーに潜んでいた反乱軍の殲滅を先程終えました。これによりエリア11に潜む反抗勢力は全て掃討したと思われます」
「そうか、よくやってくれたなマリーカ」
「い、いえ・・・陛下のお役に立てたのなら良かったです」
ルルーシュはマリーカからの報告を受けて微笑みながらマリーカにそう言うとマリーカは顔を赤らめながら嬉しそうにはにかむ。
「そ、それから先程ＺＥＸＩＳ所属艦であるマクロス・クォーターとプトレマイオスＩＩ、ドラゴンズハイヴ、イサリビ、ホタルビが到着したとの連絡がありました。予定通り明日にはこちらにつくそうです」

「そうか」
ルルーシュかマリーカからの報告に対してそう頷いた。その時だった。
「おい、ルルーシュっ――――――!!」
遠くの方から、聞き覚えのある少年の叫び声が聞こえてくる。
ルルーシュがそちらを向くと、遠くの発着場のフェンスを、人懐っこそうな青髪の学生服の少年がよじ登ろうとしているところだった。
「教えてくれよ、ルルーシュ!!どうしてこんなことを・・・お前は、一体何をしようとして――――――おわっ!?」
「何者だ？　無礼な！」
「あちらにおわすのは皇帝陛下だぞ！」
どこかから拝借してきたのか、その少年は梯子を使って乗り越えてまでこちらに来ようとしていた。しかし、飛行場の警備を任されていたらしいトレーズに忠誠を誓うＯＺの兵士たちに見つかってしまい、無理やり引き戻されてしまった。
「ルルーシュっ・・・！ちくしょう、離せよ!!」
「貴様！　自分の身の程をわかっているのか！」
「これ以上許可なく近づこうとすれば拘束するぞ!!」
「だって・・・！だって、友達なんだよ!!　アイツは！　ルルーシュっ――――――!!」
青髪の学生服の少年は、ＯＺの兵士たちに取り押さえられながらもこちらに向かって手を伸ばし、必死に呼びかけようとしていた。
だがＯＺの兵士たちに何度も阻まれ、やがて本気で逮捕されそうになったところを、駆けつけてきた友人と思しき帽子と眼鏡の少女とオレンジ色の長髪の少女の２人に諭され、そのまま彼女に連れて行かれる形でどこかへ行ってしまった。
「・・・・・・」
ルルーシュにとって、その青髪の少年は大切な友人の一人だった。
少年の名はリヴァル・カルデモンド。同じアッシュフォード学園に通う生徒会メンバーのムードメーカーであり、悪戯好きな少年。趣味はバイクでよく自前のバイクを整備・改造しており、それに乗ってよ

く2人で一緒に賭けチェスなどをしに裏カジノに訪れていた。
「ルルーシュ・・・」
「・・・放っておけ。今はそれよりも明日のＺＥＸＩＳとの会談のことを考える方が優先だ」
　かつての友人であるリヴァルに声をかけなくていいのか思わずルルーシュに確認するライだが、それをルルーシュは首を横に振って断る。今のルルーシュにリヴァルたちに会う資格などないとルルーシュはそう思っていた。
「それよりマリーカ、デススティンガーの方は今のところ問題はないか？」
「はい。デススティンガーは現在専用の格納庫で待機しており、暴走の危険性などは今のところありません。念の為直ぐに鎮圧できるよう周囲にデスレックスを筆頭とした部隊を展開させております」
　ルルーシュはマリーカに現在最も注意すべき存在であるデススティンガーのことを確認し、マリーカは敬礼しながらそれに答える。ルルーシュも周囲を確認すると大型ゾイドであるデスレックスの他にディバイソン、セイバータイガー、ナックルコングなどのゾイドの他にサザーランドやグロースターといったＫＭＦ、グレイズやフラッグなどのＭＳが多数待機していた。もしデススティンガーが暴走したとしても足止めすることは可能な戦力か整っていた。
「モニカ、ミリアルド。お前たちもデススティンガーの警戒にあたれ、最悪の場合は破壊しても構わん」
「イエス・ユア・マジェスティ」」
　ルルーシュはモニカとミリアルドにそう指示を出すとＣ．Ｃ．とライ、マリーカたちを伴って歩き出す。
　その後、数度の暗殺者などの刺客の襲撃を退けながら新たにルルーシュに恭順の意志を見せたものを受け入れたりなどを行うのだった。
　そして現在、ルルーシュを持て成すために用意された部屋でルルーシュは各地で行動している配下たちからの報告を確認しながらＺＥＸＩＳやシュナイゼルたちに対するプランを数十通り練っていた。その様子をベッドの上で寝転がりながらチーズくんを抱えるＣ．Ｃ．

はじっ、と静かに見つめていた。
忙しなくコンソールを動かしていた指を突然ピタリと止めるとルルーシュは後ろを向いた。
「何かあったかノクス」
ルルーシュが名を呼ぶと闇の中からペストマスクで顔を隠した黒のロングコートで全身を隠したノクスが現れた。ノクスはペストマスクを外すとルルーシュの前に膝まづく。
「はっ。例のものたちとコンタクトが取れたことと南極の調査隊が破壊龍たちの眷属を発見したとの事です」
「そうか、やはり南極に眠っていたか・・・。彼女たちの方はどうだった」
「はっ、警戒はされていましたが向こう側としても戦力が欲しかったようなのでこちら側の提案を前向きに考えるそうです」
ノクスからの報告を聞きながらルルーシュは予想通りの結果に笑みを浮かべる。彼女たちのことを知ったのはシュウ・シラカワが偶然彼女たちの世界に転移したことで、神聖ミスルギ皇国の真実を知った。故にルルーシュはそれを自らの目的のために利用しようと彼女たちと接触することにした。それから何度かの交流を得て今回こうして交渉まで持ち込めるようになった。
「そのまま交渉を続けろ。彼女たちとしても今回の提案は喉から手が出る程欲するものだ。無碍にすることなど無いはずだ」
ルルーシュは椅子から立ち上がりノクスに近づくとその頬に手を伸ばしてそっと撫でる。ノクスは思わず顔を赤らめ慌てふためきそうになるのを必死に堪えてじっと耐える。
「お前たちは当初の予定通り、交渉が終わり次第ミスルギ皇国に潜入しろ」
「い、イエス・ユア・マジェスティ・・・」
ノクスは頬からルルーシュの手が離れたのを少し名残惜しげにしながらペストマスクを被ると再び闇の中へと消えていった。
「相変わらずの女誑しだなお前は・・・」
「？なんの事だ」

C．C．はルルーシュをジト目で睨むがルルーシュはC．C．の言っていることの意味が分からず首を傾げる。それにC．C．は思わず呆れてため息がこぼれる。
「それで？ノクスたちの方は問題ないとしても南極の方はどうする。目的のものがある可能性が高いがそれを回収するための戦力はあまり残っていないんじゃないか？」
「・・・・・・」
C．C．の言葉にルルーシュは思わず苦虫を噛み潰したような顔をする。C．C．の言う通り現在のルルーシュが所有する戦力の殆どはシュナイゼルたちを相手に想定して本国に待機しており、残りの戦力もノクスを含めそれぞれ別の任務につかせているため南極の調査隊に新たな増援を向かわせることは不可能だった。
「・・・正直お前の言う通り南極に回す戦力は無い。アレの存在は他の連中に知られる訳にはいかないからシュナイゼルたちとの戦いが終わるまで調査は中断した方がいいかもしれないな」
ルルーシュは舌打ちしながらコンソールを走らせると南極の調査隊にメールを送る。ルルーシュとしては南極に眠る破壊龍たちを回収しておきたかったが無理に作業を行えば厄介な敵に存在がバレる危険性が高まる。故に調査の中断を決定した。
「・・・いよいよ明日か」
「あぁ、明日のＺＥＸＩＳとの会談が終わった時、俺たちの戦いが始まる」
「今更だがいいのか。裏切ったあの連中と違ってＺＥＸＩＳならお前の話を聞いてくれるはずだ。お前の目的を話せば――――」
「それでは意味がない。これから先の戦い、俺たちを越えられなければ奴らにも地球にも未来は無い」
C．C．はルルーシュに対して思わずそう言ってしまうがその程度で揺らぐルルーシュではなく確固たる意志を持ってそう返す。
（そうだ、今更引き返す道などない。あの日ナナリーを失った時から俺自身の未来などもう不要だ）
ルルーシュは窓から見える満月を見上げながらそう内心で結論づ

ける。それをC・C・はルルーシュに顔を見られないようにチーズ君に顔を埋めながら悲しそうな目でルルーシュを見ることしか出来なかった。

第五話　ＺＥＸＩＳとの会談

　現在、アッシュフォード学園の周りを囲うように巨大なバリケードが設置されておりその周りを皇帝陛下であるルルーシュの姿を拝見しようと人だかりが出来ており、その様子を少し離れたところからアッシュフォード学園の元を含めた生徒会メンバーであるリヴァル・カルデモンド、ニーナ・アインシュタイン、ミレイ・アッシュフォード、シャーリー・フェネットが見ていた。
「・・・もうすぐ、この学園にルルーシュとライが来るんスね・・・」
「ここでＺＥＸＩＳと会談するそうよ」
「ＺＥＸＩＳ・・・。地球連邦軍の外部独立部隊・・・」
「確かソレスタルビーイングとか色んな組織が参加してるんだよね（ルル・・・。どうしてゼロだったルルが皇帝になったの？）」
　上からリヴァル、ミレイ、ニーナ、シャーリー。同じ生徒会メンバーであったルルーシュが皇帝になったことそしてライがその騎士の１人になったことに驚きを隠せないでいた。特にルルーシュが黒の騎士団総帥ゼロであったことを知っていたシャーリーにとってルルーシュがブリタニア皇帝となったことを知った時何がどうなっているのか分からず困惑した。
「ＺＥＸＩＳって確かこの間のムゲ・ゾルバトスとかいう異星人との戦いで一気に名を上げた部隊っすね」
「一般的にはね。でも、一部の報道関係者にはかなり名の知れた人達らしいわよ。噂では影で世界のピンチを何度も救ってるんだって」
「流石、会長・・・！新進気鋭のレポーターは伊達じゃないっスね」
「私はただの見習いよ。でも、就職したおかげで少しは世界が広がったけどね」
　リヴァルはミレイの博識ぶりに賞賛の目を向けるが、ミレイは困ったように苦笑いをうかべる。報道関係者になったことで多くのことを知ったミレイにとってほんの一端とはいえ世界の闇を知ったのだからあまり誇れることではなかった。

「そのＺＥＸＩＳに黒の騎士団もいる・・・」
「ニーナ・・・あんまり顔を上げちゃ駄目。誰かが見てるかもしれないから」
「ありがとう、ミレイちゃん・・・」
　ニーナは少し顔を強ばらせながら黒の騎士団が見えるかもしれないとアッシュフォード学園に目を向けるが、顔は割れていないだろうがフレイヤ開発者であるニーナが見つかるのは危険だと考えるミレイがそう注意するとニーナは感謝の言葉を伝えながら帽子を深く被る。
「でも、よかった・・・。ニーナが無事でいてくれて」
「本当なら私は・・・フレイヤを作った私はこんな風に生きていてはいけないのに・・・」
「ニーナ・・・」
「私・・・わかってなかった・・・。自分が作り上げたものが、どんな結果を生むことになるのか・・・私の作ったフレイヤでトウキョウは・・・」
　ミレイはニーナが無事に生きていたことに喜ぶが、ニーナにとってそれは苦痛でしかなかった。かつて自分を助けてくれたユーフェミア・リ・ブリタニアがゼロによって殺されてからその仇をとるために狂気に染まった憎悪の心でただゼロを殺すその一心で兵器を開発した。そして完成したのが先の第二次ブラックリベリオンにて放たれた大量破壊兵器《フレイヤ》。
　しかしニーナはデータ上による漠然とした破壊力しか把握しておらず、フレイヤによってどれほどの被害が生まれるかなど考えもしなかった。その結果、フレイヤが放たれたことでトウキョウ租界にいた非戦闘員を含め数十万もの命が消え去ってしまった。その惨劇を目の前にしてようやく自分がどれほど恐ろしい兵器を作ってしまったのか気づき、怖くなったニーナはシュナイゼルの元から逃げ、ミレイ、リヴァル、シャーリーと再会しその厚意で現在アッシュフォード学園で匿われていた。
「だから、どうしていいかがわからなくなって、こうして軍を抜けて、

身を隠しているんでしょ」
「うん・・・」
「だったら、気の済むまで考えようよ。・・・って、モラトリアムを卒業したばかりの私が言う台詞じゃないけどね」
　今のニーナには落ち着く時間が必要だと考えるミレイはそう言ってニーナを落ち着かせる。
「相変わらずですね、会長は」
「沙慈・・・！」
「沙慈くん・・・！」
「お前、また唐突に現れやがって！・・・ルルーシュとライを見に来たのか？」
「うん・・・」
　声をかけられたミレイたちが振り向くとそこには同じ生徒会メンバーであった沙慈・クロスロードの姿があり、ミレイとシャーリーは思わず声を上げリヴァルは久しぶりの再会に喜びながら肩を組みながら沙慈が来た理由を確認すると沙慈も苦笑しながら頷く。
「にしても考えてみれば、すごいよな俺たちの生徒会って・・・」
　リヴァルは周りの生徒会メンバーを見渡しながら思わずそう呟く。
「ルルーシュは皇帝陛下で、ライはその騎士《終焉の騎士（ナイトオブゼロ）・・・」
「スザク君は前皇帝陛下の第七席（ナイトオブセブン）・・・。リリーナさんは初代地球連邦代表のクイーンで、カレンとマーヤ、マリオ君は黒の騎士団の団員・・・」
「ニーナもすごい科学者になったし、ミレイ会長もテレビ局に就職して・・・」
「僕とリヴァルとシャーリーとルイスぐらいだね。平凡なのは」
　上からミレイ、シャーリー、リヴァル、沙慈がそう言う。振り返ってみてもここまで異彩なメンバーが揃った生徒会など他にないだろう。
「って沙慈、お前ルイスが何をやってるのか知ってるのか？」
「今日はここに来られなかったけど、いつか必ず僕が連れてくるよ。あの日と変わらないルイスを・・・」

「沙慈・・・」
　リヴァルは今まで音信不通だったルイスのことを沙慈が知っていることに驚くが、沙慈はそれに対して決意のこもった目をしながらそう告げる。この中で唯一ルイスがアロウズに所属していることを知っているニーナは何も言えなかった。
「彼女たちがルルーシュにとって大切な女どもか・・・。ふふっ、私の花嫁として迎え入れるのもいいかもしれんな」
　その時、沙慈たちが話しているのを少し離れた場所で見ていたエンブリオがシャーリーたちを舐めまわすように見ているのを誰も気づいていないのであった・・・。
◆◆◆◆◆◆
「・・・・・・・・・・」
「ルルーシュ・・・」
　アッシュフォード学園・校舎前。
　ライとモニカ、ミリアルドを含めた数人の護衛と少し離れた場所に小型ゾイドであるラプトール、スコーピア、スパイデスたちを待機させながらルルーシュはバリケードの向こう側に集まっている民衆に手を振りながらゆっくりと歩いていた。
　その様子を離れたところで久しぶりにルルーシュの顔を見たカレンは悲しそうに顔を歪めそうになるがそれを決して表に出さず対応する。
「初めまして。ＺＥＸＩＳ、黒の騎士団所属の紅月カレンさんですね」
「・・・はい、私以下３名が会談の会場へご案内させていただきます」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・」
　初対面であるかのような態度をとるルルーシュに吼えかかりそうになるのをぐっと堪えながらカレンは両隣にいるヒイロ・ユイと張五飛と共に案内をすることを伝える。ヒイロと五飛はゼロを警戒するように睨んでいるがルルーシュは特に気にせず笑みを浮かべる。
「久しぶりだなヒイロ、張五飛。まさか君たちがこうしてこの場に来るとはな」

「ゼクス、トレーズはこの会談に顔を出す気はないのか」
「生憎だが閣下はお忙しい身である。此度の会談には残念ながら参加なされない。何か伝えたいことがあるのならば私から伝えておこうか」
「不要だ。その男と手を組んだ時点で奴という男の器は知れた。やはり奴とは相容れぬようだ」
　五飛は吐き捨てるようにミリアルドにそう答えるとそれ以上語ることはないのか黙る。
「ゼクス、それがお前がエピオンで見た未来か」
「ヒイロ、お前がゼロシステムでどのような未来を見たのかは知らない。だが、私はこの選択を決して後悔することは無い」
「それがリリーナの願いと反するものであってもか」
「そうだ」
　ミリアルドとヒイロは多少言葉をかわすとそれ以上言うことは無いのか話を終わらせる。
「ライ、ミリアルド、モニカ。私は少し遠回りしていきたい。いささか緊張しているので少し1人で歩きたいんだ」
「了解しました。では、我々は先に会場で待機しています。案内を頼んでもいいかな、ヒイロ、五飛」
「俺の目的はもう済んだ。五飛、後は任せる」
「なるほど、ヒイロ。君も敵を見極めに来たというわけか」
　事前にルルーシュからその事を伝えられていたライたちはその命令に従いヒイロと五飛の案内の元会場へと向かう。しかしヒイロ自身は目的を果たしたのかその場を離れる。ライはそのことからヒイロの目的を察した。
「では、お願いします、カレンさん」
「はい」
　そのままルルーシュはカレンの案内に、ライとモニカ、ミリアルドは五飛の案内の元でそれぞれ会場へと歩いていく。
◆◆◆◆◆◆◆
アッシュフォード学園・図書館。

カレンに学園内を案内してもらいながら会談の会場へと向かうルルーシュ。そこで数々の思い出に浸る中、あと数分で会談が始まるというところに差し掛かった時、最後に行き着いたのが、この図書館である。
「・・・懐かしいな。学園が無事でよかったよ」
会談の会場として生徒など全ての学校関係者が退去したことで、完全に無人となったこの図書館を見回し、ルルーシュは言った。
「フレイヤの効果範囲から、ギリギリで学園は外れていたからね」
「そうか・・・」
素っ気ないが事実を告げるカレンのその言葉に、ルルーシュは胸の中で安心して、頷いた。
「・・・私、あなたには感謝してる・・・」
カレンはそう言って、ルルーシュを振り返った。
「あなたがいなければ、私達はシンジュクゲットーで死んでいた・・・黒の騎士団もＺＥＸＩＳもなかった。私は嬉しかった。ゼロに必要とされたことも光栄で、誇らしくて、誇らしくて・・・」
「・・・・・・」
「でも、ゼロがルルーシュだってわかって、訳が分からなくなって・・・。それでも、世界と戦うあなたを見て・・・。そんなあなたがライやトレーズと一緒に多くの人たちを巻き込んで世界中を混乱に叩き込んで、今度は何をやりたいの・・・？」
「・・・・・・・・・」
カレンの表情は、静かで、まっすぐとしたものだった。笑ってもいない。怒ってもいない。悲しんでもいない。真実（りゅう）を知りたい。ただそれだけのまっすぐさだった。
「力が欲しいだけ？地位がお望み？それとも、これもゲームなの・・・？ブラックリベリオンの時、扇さんはあなたを守れと言った！私のお兄ちゃんの夢を継ぐ者だって――――!!ルルーシュ・・・!!あなたは私の事、どう思ってるの!?　どうして斑鳩で私に・・・『君は生きろ』と言ったのよっ・・・!?」
とうとう耐えきれず悲痛な表情となったカレンは、ルルーシュの胸

ぐらに縋り付いた。
しかし、ルルーシュが答える様子はない。いや、答えることができない。結果として自分ととライが、全てを賭けてでも進めているあの計画のためにも、答えたくても、答えてやることができなかった。
「・・・・・・・・・・」
悲痛な表情で、互いをしばらく見つめあった後。
カレンが、ゆっくりとルルーシュの両頬をそっと手で包むようにして掴んで。
「――――」
カレンが、ゆっくりとルルーシュと唇を交わした。今までの感謝、誠意、そして、訣別を込めての口づけを。それを数秒行った後、唇を離して、また互いを見つめあった。もう二度と同じ道を行くことはない、わかりあうことはないからこそ、悲痛な表情で・・・。
「・・・失礼しました、代表。会談は体育館で行われる予定です」
敬語に口調を戻したカレンはそう言い残し、一足先に図書館を後にした。運命の会談が行われる体育館への案内に、戻るために。
「さようなら・・・カレン」
その後ろ姿に、自分にしか聞こえない程度の声で別れの言葉を投げかけた後、ルルーシュも静かに歩き出した。

アッシュフォード学園・生徒会室。
かつてルルーシュやライたちが生徒会メンバーと共に多くの思い出を作ったその場には現在ＺＥＸＩＳから代表してスメラギ・李・ノリエガ、ロジャー・スミス、ジェフリー・ワイルダー、Ｆ．Ｓ．、アムロ・レイ、クワトロ・バジーナ、星刻が揃っていた。それに対してルルーシュは後方にライたちを護衛に待機させていた。
「さてルルーシュ皇帝陛下、まずは我々に会談を申し込んだ理由を聞かせて頂きましょう」
「随分と他人行儀だなロジャー・スミス。それとも俺を追放したという事実を無かったことにする気かな」
ロジャー・スミスがまずルルーシュに会談を開いた理由を訪ねる

が、ルルーシュはそれに対して皮肉で返す。その言葉にゼロとして何度も助けられたのにロジャーたちは黒の騎士団がゼロを追放した時に何もしなかったことを悔やみ顔を歪める。
「辛辣だな」
「その口の利き方・・・皇帝陛下と言うよりもゼロと呼ばれる方が似合うわね」
「好きにするがいいさ。この会談は外部に漏れる事は無い」
「では、君の本音も聞けるわけだな」
「さて、それはどうかな・・・」
　ジェフリー・ワイルダーとスメラギ・李・ノリエガはかつて共に戦ったゼロらしい口ぶりの彼に思わずそう言ってしまう。Ｆ．Ｓ．はこの非公式の会談ならルルーシュの本音を聞けるのかと尋ねるがルルーシュは笑みを浮かべながら曖昧に答えるだけだった。
「変わらないな。その露悪的な物言いも」
「流石はＺＥＸＩＳですね。愚かな黒の騎士団とは違ってルルーシュの事を多少なりとも理解されてますね」
「ライ・・・君がルルーシュ共に行動しているとはな」
「当然です。僕はゼロの、ルルーシュの騎士です。ルルーシュに寄生することしかしなかった蛆虫共（彼ら）と違って彼のためにその全てを捧げることに躊躇いなどない」
　クワトロはゼロの頃と変わらない言葉遣いに彼らしさを感じるが、ＺＥＸＩＳとして共に戦ってきたころには見せなかった黒の騎士団を侮蔑するライの氷のように冷たい瞳に思わず息を飲みそうになった。
「薄々あなたがたも感づいているとは思われますが、既にイノベーターは地球連邦から手を引いております。彼らは人類の愚かさに絶望したそうですよ」
「リボンズ・アルマークのいいそうなことだ」
　モニカがリボンズ・アルマークたちイノベーターが既に地球連邦から手を引いていることを伝えるといかにもリボンズらしいとアムロは呟く。

「彼らはシャルル・ジ・ブリタニア皇帝陛下に世界の統治権をお返ししたそうだが、その皇帝陛下は消滅したと聞く。イノベーターもブリタニア皇帝も女王リリーナもいない世界のために、トレーズ閣下も起たざるを得なくなってしまったのだよ」
「シュナイゼルに世界を任せる気はないというわけか・・・」
　ミリアルドがトレーズが地球連邦総司令の座に着いた理由を語るのを聞いたクワトロはブリタニアの宰相であるシュナイゼルに託せないとトレーズが判断したのだと理解した。
「これから先、世界を動かすのは俺かシュナイゼルのどちらかになるだろう。その上で聞こう」
「――――貴様らは俺の敵になるか」
　ルルーシュは一度目を閉じてからゆっくりと目を開くとスメラギたちをその力強い瞳で睨みつける。魔眼（ギアス）によるものではなく、王としての圧倒的なカリスマによって放たれる重圧は今までＺＥＸＩＳとして戦ってきたズール皇帝やムゲ・ゾルバトスなどの強敵に匹敵するものでありスメラギたちは思わず息が詰まった。屈しそうになってしまうのを必死に耐えながらスメラギはルルーシュに対して返答を返す。
「・・・私たちはＺＥＸＩＳとしてこれからも世界の敵と戦い続けるわ。例えそれがシュナイゼルやあなたたちだとしても」
　スメラギは力の籠った瞳でルルーシュを睨みながらそう宣言する。ロジャーたちも同じようにルルーシュを睨んでおりそれはここにはいないＺＥＸＩＳのメンバーを含めた全員の総意であることを察したルルーシュはスメラギたちに気づかれない程度の小さな笑みを浮かべる。
「そうでなくてはＺＥＸＩＳではないな。ではそんな君たちに私から２つのプレゼントをあげようじゃないか」
「プレゼントだと？」
　ルルーシュの言葉に反応した星刻が怪訝な顔をする。
「１つ目は前地球連邦軍総司令の行方に関する情報だ」
「エルガン・ローディックの・・・」

ルルーシュからの1つ目のプレゼントはＺＥＸＩＳを結成した地球連邦軍総司令エルガン・ローディックの行方に関する情報だった。破界事変以降姿をくらましたエルガンの事を知れるのにＦ．Ｓ．は驚きの表情を浮かべた。
「エルガン・ローディックは現在イノベーターの所にいる」
「やはり、そうか・・・」
「でも、一体何のために?連邦軍の指揮権を自由に使うための傀儡にする以上の意味があるというの」
「残念だがそこまでは俺も知らない」
(リボンズは人類を代表する神を気取っている。それに必要な何かをエルガン代表が持っているというのか・・・)
スメラギとルルーシュはエルガンがイノベーターにいる理由が分からないでいるが、この中で唯一アムロはリボンズに監禁された時にある程度彼らの目的を知ったためにエルガンがその目的を果たすために必要な何かを知っているか、あるいは所持しているのではないかと考える。
「そして2つ目は――――」
「こ、皇帝陛下・・・!緊急のお知らせがあります!!」
「どうした、マリーカ」
ルルーシュがもう1つの内容を語ろうとした時だった。顔を青くさせたマリーカが慌てた様子で生徒会室に入ってきた。
「て、帝都ペンドラゴンがフレイヤらしき攻撃で消滅したとの事です!?」
「何っ!?」
マリーカからの報告にルルーシュだけでなくスメラギたちも驚きのあまり目を見開いてしまった。するとプトレマイオスＩＩのオペレーターであるフェルト・グレイスから通信が入ってきた。
『スメラギさん、シュナイゼル殿下から我々とルルーシュ皇帝に通信が入っています』
「シュナイゼル殿下から・・・」
「フェルト君、回線をこちらに」

『了解です』
（シュナイゼルめ・・・先手を打ってきたか・・・！）
　このタイミングでのシュナイゼルからの通信にスメラギは確信めいたものを感じながらジェフリーはフェルトに回線を繋げるように指示を出す。その中でルルーシュはシュナイゼルに対して内心舌打ちをしながら顔を顰めていた。

　同じ頃、帝都ペンドラゴンへ移動中だったグランベリーでも。
「エニアグラム卿!!　き、緊急入電ですっ!!」
「え・・・ウソ!?　ペンドラゴンが!!」
　艦橋のオペレーター席で、エリシア・マルコーアとエリス・クシェシスカヤが、ひどく取り乱した様子で叫んでくる。
「今度は何だい!?　報告は正確にしな！」
　モニターに目を向けながら、ノネットが尖った声を出すと、エリシアが悲鳴じみた声でこう叫んだ。
「ふ・・・『フレイヤ』投下により、帝都ペンドラゴンが消失しました!!!」
「「――――!!?」」
　ノネット、そしてオルドリンたちが驚いて振り返る。
　そしてノネットがエリシアとエリスにすぐさまモニターを切り替えさせると、そのモニターに新たに映し出されたものを見て、環境にいる誰もが言葉を失った。
「ッ――――!!」
「こ、これは・・・!?」
　モニターの中に映し出されたのは、神聖ブリタニア帝国の首都・ペンドラゴン――――が、あった場所だった。
　そこはまるで、いつかのトウキョウ租界のように巨大な空洞と化しており、あの壮大かつ荘厳で華やかなブリタニアの帝都の姿は、もう見る影もない。
　そしてこの帝都にいた人間すべても、トウキョウと同じくそっくりそのまま消え去っただろう。オルドリンたちが戦々恐々とこの有様

を見つめる中、ノネットは怒りの形相でギリッと唇を噛み締めた。
　こんな馬鹿げた芸当をやる人間は、たったひとりしかいない。それもあの弾頭（フレイヤ）はもちろん、悪魔の兵器としてギアス以上に恐れられるアレを決戦兵器として多数積み込んだあの要塞を作った、男――――。
「おのれ・・・シュナイゼル・・・っ!!」
　今はここにはいない第2皇子の名前を自分にしか聞こえない程度に呟き、ノネットはさらに唇を噛み締めた。
「そんな・・・!?」
「これは、なんとも・・・」
　そしてグランベリーと同行しているヒリュウ改のモニターで、フレイヤによる帝都ペンドラゴンの消滅した映像を見て、ヒリュウ改の艦長であるレフィーナ・エンフィールドと副長であるショーン・ウェブリーはあまりの光景に言葉を詰まらせていた。それはクロガネの艦長であるテツヤやデューカリオンの艦長であるダルザナ・マクバレッジも同じであり、それぞれの艦のブリーフィングルームで同じようにその光景を見ていたキョウスケ・ナンブ、リュウセイ・ダテ、界塚伊奈帆ら戦士（パイロット）たちも、ある者はその威力に恐怖し、ある者は息を飲み、ある者は表情を曇らせ、またある者は顔を険しくさせていた。
　北欧神話にて豊穣や死者を迎える存在として語られる女神の名を与えられた恐ろしき兵器が再びこの世界で放たれた。
　そして場所は戻ってアッシュフォード学園生徒会室。通信パネルを挟んでシュナイゼルとルルーシュ、兄と弟が向かい合っていた。
　やがて、先に口を開いたのは兄――――シュナイゼルのほうだった。
『他人を従えるのは楽しいかい？　ルルーシュ』
「シュナイゼル・・・っ!」
　いつもと変わらない笑みを浮かべるシュナイゼルに対してルルーシュは顔を険しくさせる。ルルーシュの周りには護衛であるライ、ミリアルド、モニカ、マリーカ。そしてＺＥＸＩＳのスメラギ、ジェフリー、Ｆ．Ｓ．、アムロ、星刻、クワトロたちがシュナイゼルを睨むように見ていた。それに対してシュナイゼルは穏やかに告げた。

『《終焉の騎士(ナイトオブゼロ)》、《運命の騎士(ナイトオブフォーチュン)》、そしてマリー率いる大グリンダ騎士団たち・・・。いずれも確かに強力な精鋭(エース)>だが、今、フレイヤ弾頭の全ては私の手にある。同盟国であるディガルド武国と神聖ミスルギ皇国を含めた私についてきてくれる者たちと合わせれば、君の持ってる切り札(ジョーカー)>たちに対抗できるのに相当の戦力となるだろう』

「・・・・・・」

ルルーシュは険しい顔をしたまま何も答えず、黙ってシュナイゼルの言葉を聞いていた。そして少し間を置いてからミリアルドが口を挟んできた。

「随分と大胆不敵な手を打ってきましたなシュナイゼル殿下。使えるべき主君である皇帝陛下に弓を弾くとは、乱心なされたか」

『生憎だが私やコーネリア、《皇卓の騎士(ナイトオブラウンズ)》を含め我々は君を皇帝と認めていない。確かに父上は皇帝に相応しくない人物だが、ルルーシュはそれ以上に相応しくないということを自分で証明したんだよ』

「なるほど・・・。皇帝にふさわしいのは自分だと?」

ルルーシュはシュナイゼルの言葉に対してそう呟きながら鼻を鳴らした。

「違うな。間違っているよ、ルルーシュ」

シュナイゼルはルルーシュの言葉に対してそう否定すると、画面が変わり別の人物が画面に映る。

「皇帝に相応しいのは私でも君でもない――――彼女だ」

途端に、ルルーシュの顔が引きつった。いや、ルルーシュだけではない。横にいたライやモニカ、ミリアルド、そしてスメラギたちですら、愕然としたように表情を強張らせた。

「なっ――――!?」

「ナ・・・ナナリー!?」

ライに名を呼ばれた途端、それまでやや下を向いていたナナリーはすいと顔を上げる。

そうして低い声で、こう言い放った。

『お兄さま、ライさん。私は、お2人の敵です』

そこにはかつてアッシュフォード学園にて蝶よ花よと大切に育て

られた争いとは無縁だった優しい少女の姿はなく、1人の皇女としてルルーシュとライにその盲目の瞳の奥に戦う決意決めたルルーシュにとって命よりも大切な存在だった妹のナナリーが映っていた。
「ナ、ナナリー・・・生きて、いたのか・・・」
ルルーシュは顔面を蒼白させ、額に汗を流しながらも何とかナナリーにそう言うと、ナナリーはそれに対して静かに頷いた。
『はい。シュナイゼル兄様のおかげで』
「シュナイゼル殿下の!?」
モニカが驚きの声を上げる一方、ルルーシュの唇は、動かなくなってしまった。先ほどまでの冷静さも余裕もない。ただ、ナナリーは死んでいなかった――――その事実の前に、立ち尽くすことしかできないでいる。
茫然自失とし、精神的に無防備になりかけていたルルーシュのそばにミリアルドが駆け寄って後ろへ引き戻し、代わりにその前にライが進み出る。この状況はまずい。おそらくそう思って、ルルーシュの代わりに矢面に立つつもりなのだろう。
「ナナリー、君はシュナイゼルが何をしたのか、わかっているのか?」
そのライに問いかけられ、ナナリーはやはり淡々と答えた。
『はい・・・帝都ペンドラゴンに、フレイヤ弾頭を撃ち込んだ』
「それがわかっていて、何故っ――――!?」
ライが声を荒げる。だが、ナナリーは露ほども動じなかった。むしろ冷たくこう言い返した。
『――――ではギアスの方が正しいと言うのですか?』
「っ!」
冷気すら含んだナナリーの言葉。言外にギアスという人の尊厳を踏みにじり操り人形のように操る力を肯定するライにそのようなことを言われる筋合いはありません、引っ込んでいてください、という意味が込められている。それを悟って、さしものライも絶句した。
『フレイヤを否定しますが、多くの人たちを狂わせたギアスの方が正しいと?ユフィ姉様を滅茶苦茶にしたた力のほうが正しいと?そうおっしゃるのですか?ライさん』

「・・・・・・」
ライは、ナナリーの問に対して何も答えない。そして、ナナリーはもうライを相手にしようとはしなかった。
『お兄さまも、ライさんも、ずっと私に嘘をついていたのですね。本当のことを、ずっと黙って。でも、私は知りました』
硬直していたルルーシュの頬がびくりと震えた。
『お兄さまが、ゼロだったのですね……!』
ナナリーは、膝の上に置いた手を握りしめた。
『どうして・・・?それは、私のためですか・・・?もし、そうなら・・・私は――――!』
続く言葉は、喉の奥に消えてしまう。鉛のように重い静寂が通信空間に満ちる。
「フ・・・フフ・・・」
不意に笑い声が上がった。
ルルーシュであった。端正な顔が不敵に笑っている。顔は蒼白いまま。
「お前のため・・・?お前のため、だと?我が妹ながら図々しいことだ。その程度の生半可な覚悟で、啖呵を切ったとでもいうのか」
「え・・・」
さすがにナナリーが戸惑ったように唇を開けた。その姿を、ルルーシュは嘲りの目で見た。そして、ナナリーには見えない。いや、そもそも通信機の画面に「それ」は映っていない。
「ゼロ・・・?」
実の妹であるナナリーに対してそのような態度をとったルルーシュに対してスメラギたちは戸惑ったような声を零す。そして気づかれないように傲岸不遜な態度をとるルルーシュだが、その手が間断なく小刻みに震えているのに気づいたモニカは、そんなルルーシュの姿からほんの少し苦しげに顔を背けていた。
「お前はまさか、人からお恵みをいただくことが当たり前だと考えているのか?それで今度は、ギアスを持つ俺を絶対悪だと断じ、自分を絶対正義だと信じながら、シュナイゼルに寄り添り、フレイヤを解き

放つという我が物顔の凶行に手を貸したというのか。自らは手を汚さず、他人の行動だけを責める・・・お前は俺が否定した古い権力そのものだな。そんな奴らもいたからこそ
、俺たちがあんなことになった
のを忘れたとでもいうのか。どうなんだ、ナナリー・・・言ってみろ!!」
『そ、それは・・・』
ルルーシュのその言葉に、今度はナナリーの顔が引きつった。互いの会話は、もはや傷の抉り合いに等しかった。
「誰のためでもない。俺は俺自身のために、世界を手に入れる。もうこれ以上、シャルルやシュナイゼルのような奴らに我が物顔の好き勝手にはさせない為にもだ。お前がシュナイゼルと手を組み、我が覇道の前に立ちはだかると言うのなら、もう俺はお前を妹だとは思わない。俺やライを絶対悪だと断じ、自分を絶対正義だと言った時点で、もう容赦はしない・・・叩き潰すだけだ。次に会う時までに、覚悟を決めておけ」
『お兄さま――――!』
「ゼロ・・・」
「君は・・・」
ナナリーが呼びかけた時、カメラの位置がまた変わった。その様子をスメラギとロジャーは驚いた様子でルルーシュをみていた。
そして映像がシュナイゼル側に戻った時、シュナイゼルは相変わらず悠然とした態度で、ライに呼びかけた。
『ライくんと言ったかな。我々は偽皇帝ルルーシュを討つために戦力を集結させている。そこに君も参加してくれることを願う』
呼びかけられたライの眉が、ピクリと動いた。
『君のことは父上やラウンズの諸君からも色々と聞いている。そして今まで君の実績から父上たちの言うように君には見るべき点が大いにあると評価させてもらった。私と共に来るのならば、ナナリー同様君も迎え入れてあげよう。それに、君はルルーシュとナナリーの盟友(ともだち)だろう?これ以上ルルーシュが自分の手を罪と血と涙で汚していく

のは見るに堪えないと思うが、どうかな？』
「・・・・・・」
険しい表情で腕を組み、黙ってシュナイゼルの言葉に聞き入っていたライ。シュナイゼルの勧誘の言葉が終わった後、彼はゆっくりと口を開いた。
「話にならないな」
『ほう？』
シュナイゼルが聞き返そうとすると、ライは先ほどのナナリーに負けないくらいの冷たさと鋭さをもって、拒否の理由を述べた。
「宣戦布告もなしに大量殺戮兵器を使うようなやり方は、あなた方が悪逆の偽皇帝だと糾弾している陛下と大して何ら変わりはないと思わないのか。それに、あなたは表向きは偽皇帝を討つという大義名分を掲げているが、その表情とその口ぶりはどう見ても大義のために立ち上がった人間のものじゃない。ナナリーという駒と、フレイヤという武器を担ぎ出した時点で、あなたは自分でそれを証明したようなものだ。・・・そもそもシャルル・ジ・ブリタニアにギアスをかけられ、駒として好きに扱われた時点で貴様らブリタニア皇族の腐った性根は僕にとってたかが知れている」
『・・・・・・・！』
そのライの言葉に、シュナイゼルは一瞬驚きに目を剥いた。そしてナナリーも、驚きに唇を再び開けた。
「ライの言う通りだな。貴様らのやり方は恐怖で人々を支配するものだ。そのような連中を俺たちは決して認めない」
そしてライに同意するようにＺＥＸＩＳから代表してアムロがシュナイゼルに対してそう告げる。ライとＺＥＸＩＳたちをあわよくばこちら側の戦力に取り込もうとしたがそう返されてしまったため、シュナイゼルはこれは一本取られたとばかりに少し苦笑した後、元の穏やかで不敵な表情に戻った。
『・・なるほど。まあ、君たちのその言い分も概ね間違ってはいない。だからこそ残念だよ。君たちは友のため、平和のために戦ってくれると思っていたのだがね』

「残念な思いは私も同じです、シュナイゼル殿下」
　そこで今度は、ライと入れ替わるようにモニカが会話に割って入った。ライと同じように腕を組んだモニカは、シュナイゼルを鋭い目付きで睨んでいた。
「思想は違えどあなたも所詮はシャルル前皇帝陛下の子供。あなたもほかの貴族や皇族たちと同じように堕落と腐敗に満ちた今までの帝国を失うことはもちろん、敗者となることを認められていない。罪もない民たちをフレイヤによって滅ぼしたあなた方は、もう既に私が騎士として仕え、身を置く資格も価値も無くなってしまったようですね」
『そのようだね』
　モニカの皇族に対して不敬としか言いようがない不敵な弾劾をシュナイゼルはいつもと変わらぬ笑みを浮かべながら受け流す。モニカは後ろのルルーシュを一度振り返ってから、一呼吸おいてこう言った。
「――――僭越ながら陛下と筆頭騎士に代わって私が宣告させていただきます。1週間後と致しましょう」
　モニカはそれだけしか言わなかったが、シュナイゼルは彼女の言葉の意味が出来たようだった。
『それが、決戦の時かな』
「ええ。それで雌雄を決しましょう。かつて初代ブリタニア皇帝が繁栄を築いた土地である古都コンスタンティンにて、あなた達をお待ちしております。よろしいですね、陛下」
「・・・・・・」
　モニカに振り返られたルルーシュは、答えなかった。ただただ、黙って項垂れるだけだった。
　しかし、そんなルルーシュの答えも待たずに、シュナイゼルは不敵に笑って頷いた。
『いいだろう。ではルルーシュ・・・一週間後に会おう。無論、ナナリーも連れていくよ』
『お兄さ――――!』

ナナリーが呼びかけた時、通信は唐突に切れた。シュナイゼルの返事を受け取った後、モニカによってルルーシュの側から一方的に切られたのであった。
本心を言えば、これ以上の会話と『演技』の続行はいくらなんでも厳しいものだとモニカによって判断されたということだろう。
ナナリーの手が通信画面に向かって差し出されていた。だが、その手に応えてくれるものは、先ほどのルルーシュの訣別の言葉と、無慈悲な雑音を奏でる灰色の画面だけ。
「・・・・・・・・・・」
「ルルーシュ・・・」
「帰るぞ、ライ、モニカ、ミリアルド」
通信を切ってしばらくの間、内心が様々な感情でごちゃ混ぜになりながらも必死に耐えながら険しい目付きになっているルルーシュを心配するようにライは声をかけるが、ルルーシュは何とかその言葉を絞り出すとライたちを伴ってシュナイゼル達との戦いに備えるため生徒会室から退出しようとする。
「ゼロ・・・!」
「ミス・スメラギ・・・世界を総べる資格はなんだと思う?」
退出しようとするルルーシュに思わずスメラギが声をかけてしまった。それに対してルルーシュは踵を返すとスメラギに対して1つ問いかけるとスメラギは一呼吸置いてからこう答える。
「私はそれに答える資格はないわ」
「なるほど。ソレスタルビーイングらしい返しだ」
「あなたの答えは?」
スメラギの答えを肯定するルルーシュにスメラギは驚くが、スメラギはルルーシュに対して自らはどのような答えを持っているのか尋ねると、ルルーシュは一度目を閉じてからゆっくりと瞳を開けて答える。
「壊す覚悟・・・世界を!自分自身すら!」
ルルーシュはその瞳にゼロとしてＺＥＸＩＳにいた頃は決して見せることのなかった世界に対する激しく燃え盛るような煉獄の炎の

ような怒りやどこまでも冷徹な魔王としての絶対零度の如し冷たさを宿しながらそう答えた。
「世界と自分自身を壊す覚悟・・・」
「君の決意・・・聞かせてもらった」
　ルルーシュの決意を聞いたスメラギとロジャーは今のルルーシュを言葉だけで止めることなどできないと理解してしまった。
「さらばだＺＥＸＩＳ。またいつか会おう」
　ルルーシュはスメラギ達に短くそう告げると、ライ達を伴って生徒会室を退出していくのをスメラギたちは黙って見ることしか出来ないのだった。
「・・・・・・」
「決戦は１週間後か・・・」
「それで世界の覇者が決まるのか・・・」
　ジェフリーとＦ．Ｓ．は眉をしかめながらルルーシュとシュナイゼルの決戦に対してＺＥＸＩＳとしてどう動くべきかをかんがえるのだった。
「ですが、それを静観する訳にはいきません」
「ミス・スメラギ・・・」
　スメラギはこの場にいるＺＥＸＩＳのメンバーに対して聞こえるようにそう言う。彼女の表情は静かで力強い決意に満ち溢れており、それはジェフリーたちも同じであり全員がこの会談によって確かな決意を固めたのだった。
「――――私はソレスタルビーイングです。ならば、それに相応しいやり方をするだけです」

第六話　潜む悪意

　ダモクレスの空中庭園にて。ルルーシュから一方的に通信を切られたナナリーはゆっくりとその手を下に降りていき、再びそれは膝の上で強く握られた。
「・・・大丈夫か？ナナリー」
　そう心配げに声をかけたのは、周囲から人払いをし、その場に残っていた義姉のコーネリアであった。コーネリアと同じくナナリーのそばにいたシュナイゼルも同調した。
「辛い思いをさせてしまったね。フレイヤの威力を見せつければ降伏してくれると思っていたんだけど」
　周囲には色とりどりの花々が咲き誇っていた。ここは先ほど、海中に待機していたところを空中へと舞い上がった天空要塞ダモクレスの頂上部に位置する艦内庭園。上級将校以上の者が入ることを許可された庭園だ。
？空調機が吐き出す風にあおられ、ナナリーの車椅子の横で黄色い可憐な花が微かに揺れている。その名を「オンシジウム」――――以前、C．C．がナナリーに相応しいと言っていた花に囲まれ、ナナリーは下を向いている。
　やがて、すいとナナリーの顔が上がり、それは隣にいたシュナイゼルの方向に向けられた。
「シュナイゼルお兄さま・・・帝（ペンドラゴン）都の人たちは、本当に大丈夫なのですか？」
　その問いに、シュナイゼルはにこやかに微笑んだ。
「心配いらないよ。あらかじめ避難誘導を済ませたからね」
　その言葉を聞いて、はっとしたような表情を浮かべたのはコーネリアであった。シュナイゼルが、さらに言った。
「もちろん、被害が皆無とはいかないけど、最小限に留めたつもりだよ」
？「・・・っ」

コーネリアが刺すような眼差しでシュナイゼルを見ている。？そして、ナナリーは――――ごく平然としていた。わずかに首をかしげてから、シュナイゼルにまた声をかける。
「・・・シュナイゼルお兄さま。私にフレイヤの発射スイッチをいただけませんか？」
？「ん？」
シュナイゼルがやや意外そうな顔になった。一方のコーネリアは黙り込んだままだった。？ナナリーは、続けた。
「私には、戦うことも守ることもできません。だからせめて、罪だけは背負いたいんです」
その言葉に反応を見せたのは、言われたシュナイゼルではなかった。？シュナイゼルから逆側からコーネリアがすいとナナリーに近づき、やはり険しい瞳でシュナイゼルを見据え、剣幕をきかせた低い声でこう言った。
？「・・・兄上。少し、よろしいでしょうか」

エリア11、消失したトウキョウ上空。？そこには、ログレス級浮遊航空艦、カールレオン級浮遊航空艦といった大量の航空艦による艦隊が浮かんでいた。その艦隊の中心に、ログレス9浮遊航空艦の数倍の大きさを誇る剣のような鋭さのあるスペースノア級戦艦ハガネをモチーフに開発されたルルーシュ皇帝御用艦ウラヌス。その艦内、固く扉が閉ざされた一室で、怒声が響き渡っていた。
？「――――C・C・!! なぜナナリーのことがわからなかった!?」
？ルルーシュであった。先ほど、通信でナナリーやシュナイゼルと会話していた時の演技などかなぐり捨てている。？毛足の長い絨毯の上をいらいらと歩き回り、ルルーシュはやり場のない怒りと焦燥感をすぐそばにいたC・C・にぶつけた。ちなみにこの室内には、C・C・の他にも、ライ、モニカ、ミリアルドそしてジェレミアがいる。
？「・・・私は神ではない。ギアスによるつながりがない人間のことまでは把握できん。ナナリーの動向は、彼女に聞け」
？C・C・がそう言って、何？と、ルルーシュが言おうとしたその時。

同じく室内にいたライが、部屋の扉を振り返った。
「入ってくれ」
　ライがそう言うと、部屋の扉がシャッと開いた。するとそこから、マリオ・ディゼルとマーヤ・ディゼルのディゼル兄妹が運ぶ形で、介助式の車椅子に乗せられた咲世子が入ってきた。
「ルルーシュ様」
？「咲世子・・・!?君も生きていたのか！」
　咲世子の姿を見て、ルルーシュは驚きに大きく目を見開いた。
「何とかフレイヤの爆発から逃れる事が出来たのですが、身体が動かず、ご連絡が遅れたことをお詫びいたします」
？「それで、ナナリーは・・・！」
　縋るようにして聞いてくるルルーシュ。咲世子に代わり、ライがこう答える。
「・・・フレイヤに巻き込まれたのは、シュナイゼルが用意した囮だったそうだ。そして本物のナナリーは、グリンダ騎士団とノネット・エニアグラムによって保護されたが、シュナイゼルの手の者に連れ去られてしまい、あのようなことになったらしい」
？「グリンダ騎士団・・・マリーベル殿下の筆頭騎士であるオルドリン・ジヴォンのいる部隊ですか。まさか、そのようなことになっていたとは」
　かつて数度だけ戦場を共にしたことのある騎士団の名前が出たことに、モニカが神妙な表情になる。そして彼女の横にいたジェレミアが、思い出したようにこう聞いた。
「しかし、咲世子・・・君の直属の上官であるディートハルトは、シュナイゼルの下にいる。何故君は、危険を冒してまで陛下のところに？」
？「・・・言われてみれば、そうですね」
　咲世子はそれだけしか答えず、車椅子の上で少し考えるような仕草を見せただけだが、ジェレミアは咲世子の考えと理由がわかったらしく、
「フム・・・騎士道に殉じる、と言ったところかな。君も」

？「・・・ふふ」
　ジェレミアの言葉に、咲世子は頷いた。？ジェレミアがルルーシュを主として認めているのと同じように、咲世子もナナリーを主として認めている。だからこそ、どんな危険な目に遭ったとしても、ナナリーと、彼女に捧げる信義のためならば、命は惜しくない。そういうことなのだろう。
「シュナイゼルめ・・・！この事実を今まで隠しておいたのか!?カードとして効果的に使うために!!」
　さらに湧き上がってきた苛立ちをぶつけるかのように、ルルーシュはテーブルの上に置かれていたチェス盤と駒をひっくり返した。
「ならば、貴様のカードの切り方は絶妙だったぞ!!こんなにも・・・！こんなにもっ!!」
？「陛下、落ち着いてください・・・！」
　ジェレミアとモニカが慌てて宥めようと近寄った時、ルルーシュは呻きながら自分の胸を押さえ、椅子に座った。
？その頃、ルルーシュがひっくり返したチェスの駒のひとつが、マリオの爪先まで転がっていき、そこで当たって、止まった。
？そこで荒く息をついた後、マリオは俯いたルルーシュの前まで歩いていった。それにルルーシュが顔を見上げた途端、
？「――――しっかりしろ、ルルーシュ!!!戦略目的は変わらないっ!!!」
？マリオは力任せにルルーシュの胸倉を掴み、容赦なく立たせた。
「マリオっ!?」
　驚きを隠せないルルーシュに、鼻先がつくほど顔を寄せて、マリオは容赦ない叱咤を浴びせる。
「確かにナナリーが生きていたことには僕達も驚いた。だけど、それは立ち止まる理由にはならないだろう!!」
「――――!!」
　マリオの言葉にルルーシュが再び驚きに大きく目を見開いた瞬間、マリオはルルーシュを突き飛ばした。椅子が倒れ、ルルーシュは床に尻餅をついてしまう。
？呆然とルルーシュが見上げた先で、マリオは突き放すようにさらに

こう言い放った。
「顔を洗ってこい。そんな腑抜けた目をした男が、皇帝を名乗ることは許されない」
？「・・・わかっている」
　騎士が主君に向ける言葉としてはあまりに無礼な一言だったが、ルルーシュは反駁せず頷いてゆっくりと立ち上がり、出口へと向かう。そして去り際に咲世子とすれ違った時、
「・・・咲世子。君には今後、マリオとマーヤ同様ライの指揮下についてもらう。ライならばディートハルトよりも期待はできるだろう。・・・委細はライに任せておくから、わからないことがあるならば彼に聞くといい」
？「承知いたしました。ではライ様、今後ともよろしくお願いいたします」
？
「・・・はい」
　車椅子の上から咲世子がそう会釈すると、ライは大きくゆっくりと頷いた。
？それを見届けてから、ルルーシュは肩を落としたまま出ていった。少し遅れて、ジェレミアとモニカが、無言でルルーシュの後を追うようにして出ていった。
　そして、二人が出ていった後、C．C．とマーヤ、ライがマリオに目を向ける。
「マリオ」
「兄さん・・・」
？「マリオ、君は・・・」
　ライはともかく、C．C．の人形めいた美貌とマーヤの可憐な乙女らしい可愛さのある顔にも多少、非難の色があった。少し口が過ぎるのではないか――――と、表情がそう言っていた。？マリオはそれに対して、淡々と言葉を返した。
「忘れたのか、ライ。僕は――――いいや、僕たちは彼の『剣』だ。彼の敵も弱さも、僕たちで排除しなければならない」

？「っ・・・」
マリオのその言葉に、ライがグッとなる。
「そしてマーヤ。僕たちは既にルルーシュと契約を交わしたはずだろ。その契約を果たすためにも、こんな所で立ち止まっている暇はない」
「・・・そう、ね」
マリオの言葉にマーヤはハッとなり、顔を下に向けながらその言葉に同意する。
「だから、C・C・・・君は、『盾』になってくれ」
？「・・・盾？」
そして、C・C・の眉がぴくりと動いた。
「――――守るのは、君の役目だ」
さらに淡々とそう言ったマリオの顔を、C・C・はじっと見つめ、それから軽く吐息した。
「・・・勝手な言い分だな」
？「ルルーシュは君の共犯者なんだろう？」
？「共犯者、か・・・」
C・C・がその言葉を繰り返した時、《終焉の騎士（ナイトオブゼロ）》として気持ちを入れ替えたライはマリオとマーヤに指示を出し始める。
「マリオ、マーヤ。本国に待機している《運命の騎士》全員に今回のこと全てを連絡しろ。各地に散った機甲師団すべて・・・そして、マリーベル皇女殿下にも連絡を入れておいてくれ。《運命の騎士》全員と全ての戦力が揃い、ルルーシュが落ち着き次第、一週間後の決戦に向けて軍議と準備を始める」
？「イエス・マイ・ロード」
マリオは頷き、マーヤと咲世子と共に、部屋を出ていった。ライもその後に続くように、部屋を出ていく。？ただひとり残されたC・C・は、彼らの後を追おうとしなかった――――。

◆◆◆◆◆◆◆

消失半径１００キロメートル。？爆発時の原子分解レベルは臨界

値。死者多数。？これがナナリーが許可を出し、シュナイゼルが撃ったフレイヤのもたらした結果である。
？「では、ペンドラゴンの住民は――――!!」
？薄暗い小部屋で、青ざめた顔をして尋ねるコーネリアの前で、シュナイゼルは微笑んでいた。周囲に他の人影はない。
？「――――消えてもらったよ。そのほうが幸せじゃないのかな？ライや《運命の騎士》、マリーも含めた一部の者たちとは違って、ルルーシュに強制的に忠誠を誓わされる人生より」
？穏やかに、残酷なまでの真実を告げるシュナイゼルに、コーネリアは頭が真っ白になりそうになった。
「し、しかし・・・ナナリーは!!」
？「嘘も方便だよ。ナナリーがルルーシュに立ち向かう決意を鈍らせないためにも、余計な情報は入れないほうがいいだろう？」
　憤りをついに禁じ得なくなったのか、コーネリアがきっと眉間に力を込めた。
「兄上は・・・そうやって人を操るのですか・・・！」
　常に自ら最前線に立ち戦場を駆け巡る烈女であり、他国からは「魔女」と呼ばれて恐れられていた妹に見据えられても、シュナイゼルは全く動じなかった。？むしろ、やれやれとでも言いたげに首を左右に振った。
「コーネリア・・・どうも君は個人の感情に縛られすぎているね。我々が今目指すべき山頂(いただき)
　は、犠牲無くしては到達できない場所だよ。人々の命も、そして・・・情も」
？「だからといって、戦闘要員でもない民間人を――――!!」
？「人々の願いはなんだい、コーネリア？　飢餓や貧困、差別、腐敗、戦争にテロリズム・・・世界に溢れる問題を無くしたいと願いつつも、人は絶望的なまでに分かり合えない」
　そう。今まさに戦いを止めようとしない自分たちやルルーシュのように。
「最も愚かな外交手段、戦争・・・せめて、これだけでも無くしたいじゃ

ないか。しかし、それに必要なのは、慈悲でもない。理解でもない。まして、真実などではありえない。――――力を持った、幻想さ」
　シュナイゼルは、手元にあったコンソールパネルに手を置いた。途端に、ぱっと室内に光が灯る。？シュナイゼルとコーネリアが向き合った横にある液晶モニター。浮かんだのは、立体型になった世界地図と、その上空を飛行する天空要塞ダモクレスの軌道。全長３キロにも亘る、巨大な空中要塞――――。？それらを見て、コーネリアが我が目を疑うと。
「このダモクレスは、１０日後には人革連の領空に入り、第二次加速に移行する」
？ハッとしたコーネリアに対し、シュナイゼルは優しげに、恐るべき目的（たくらみ）を告げた。
？「その後、地上３０００キロメートルの衛星軌道上まで到達する予定だ。そして――――その位置から、―戦争をやめない全ての国々《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》に対してフレイヤを撃ち込む」
？コーネリアは、再び頭が真っ白になりそうになった。
「ま――――待ってください!!　まさか、天から戦争をする国にフレイヤを落とすと!?ルルーシュを討つためではなかったのですか!?これでは世界中が・・・恐怖で人を従えようというのですか!!」
？「もともと、我らが父上もこうおっしゃって、ブリタニアにやらせていたじゃないか。平和というのは所詮、幻想だと。戦うことが人の歴史、本性。その父上も唾棄していた幻想を現実にするためには、躾が必要だとは思わないかい？」
？「人類を教育するおつもりだと!?そんなことは神でもなければ許されない――――!!!」
　ついに本格的な感情を露わにしたコーネリアのその言葉を一蹴するかのように、シュナイゼルはついに声をあげて笑った。
？「――――では、神になろう」
？「なっ!?」
　まるで朝の献立でも口にするかのように、あっさりとシュナイゼル

はそう宣言した。
「人々が、平和を私に望むのであれば・・・ね。立場や性格なんて、所詮は何かを表現するための手段のひとつだよ。『自分』などという代物ほど曖昧なものは、この世には存在しない。それ自体には何の意味もないんだ」
？「あ・・・あなたはっ・・・・!!!」
　背筋を震わせ、吐き気を催す邪悪が口にするものといっても過言ではないシュナイゼルのその御託に、コーネリアがギリッと奥歯を噛んだ。？と、その時、不意に二人のものではない、場違いな拍手が辺りに響き渡った。
？「――――素晴らしいっ!!!」
？コーネリアとシュナイゼルが、同時に振り返る。？開いた小部屋の扉。そこにふたつの人影が立っていた。ひとりはシュナイゼルの副官であるカノン・マルディーニだが、もうひとり、その金髪でやや顎の張った長身の男がいた。ちなみに、拍手しているのはこの金髪の男だ。
？金髪の男の名は、ディートハルト・リート。生粋のブリタニア人でありながら、ライと共にあの黒の騎士団でゼロの参謀役を務めていた男だが、例のゼロ追放以降、いつの間にかシュナイゼルのところに身を寄せていた。一応、名目上は黒の騎士団から派遣された外交使節という立場を取っているが、それは単なるお題目に過ぎず、要するに黒の騎士団に居辛くなったというのが変節の真相だ。ちなみに元々、この男のことを認めていたのはゼロ＝ルルーシュとライくらいのものであり、他のメンバーからは招かれざる客として多かれ少なかれ白眼視されていたのだ。
「やはり、あなたについてきて正解でした・・・!!ゼロのカオスをも凌駕する完璧なる虚無!!!多様なる変幻――――!!!」
　拍手を続け、感激し切ったように叫び続けるディートハルトの横から、すいとカノンが進み出た。
「シュナイゼル殿下。シャドウミラー及びノイエＤＣと連絡がつきました。フレイヤについては否定的でしたが、ルルーシュを討つためな

らば我々と手を組むと」
？「ありがとう」
　シュナイゼルは歓喜に叫び続けるディートハルトを無視して、カノンにそう答えた。
「これでこちらのカードは全て出揃った。ルルーシュの暴虐を経験した民衆は、よりマシなアイデアに縋ることだろうね」
　その言葉に、コーネリアはギクリと身を強張らせた。愕然として、再びシュナイゼルに向き直り、震える声でこう問い質す。
「あ、兄上・・・まさか、そのために今まで動かず、ルルーシュの行動を放置していたと――――!?」
　シュナイゼルは否定しなかった。どこか冷たい笑みを浮かべて、こう言い放った。
「これが最も被害の少ない方法だよ。たとえ１０億２０億の命がなくなったとしても、恒久的な平和が――――」
　全くもって悪びれもしないシュナイゼルのその言葉が、コーネリアの理性をついに焼き切った。
？「違います!!　ただ強制されるだけの平和など、それは――――!!!」
？その叫びと共に、コーネリアのマントが自らの手で跳ね上げられる。？腰から引き抜かれたのは、剣と一体型になった銃。叫びと共に、コーネリアはシュナイゼルに向けようとしたが、
？「やれやれ・・・所詮、君はこの程度の器だったか。哀しいね」
？そこで、シュナイゼルが指を鳴らした。瞬間、銃声が響いた。？しかし、それはコーネリアの銃が発したものではなかった。
「・・・な・・・っ・・・」
　四方に置かれていた、女神を象った石像。その内側から素早く銃身が伸び、一斉に火線を放ったのだ。？前後左右からコーネリアを無慈悲に、無残に灼熱の衝撃が貫いた。
「君の役目は終わった、コーネリア。ゆっくりと休むといい」
　倒れ込むコーネリアを見下ろしながら、シュナイゼルは冷然とつぶやいた。？床に伏した皇女は、もはやぴくりとも動かない。それをディートハルトは嬉々とした目で眺め、カノンは複雑そうな眼差しで

見ている。?そこに、シュナイゼルの声がかけられた。
「後のことは任せるよ、カノン」
?「は・・・はい」
　それでようやくカノンも我に返った。ややぎこちなく頷いてから、シュナイゼルに問いかけた。
「Bラインで処置いたします。ファランクス卿が消えたとはいえ、このダモクレス内にもまだコーネリア殿下に心を寄せている者はいますから・・・許可いただけますでしょうか?」
?「ああ。それで構わない」
　すでにシュナイゼルは、目の前で倒れている用済みの妹のことなど眼中にない様子だった。足の向けきを変え、入り口のところにいるカノンの元へと歩み寄ってくると、
「それで、ナナリーはどうしている?」
?「艦内庭園に留まられたままです。戦いのときも、あちらにいたいと。・・・ところで、本当によろしいのですか?　フレイヤの発射スイッチの件は」
?「ふむ・・・。まだナナリーに利用価値があるのは確かだが――――」
　そこで初めて、シュナイゼルも真剣な顔になって小首を傾げた。
「ゼロ・・・いえ、ルルーシュの一手を遅らせられる可能性はありそうですな」
　ディートハルトが割って入ってきたが、シュナイゼルはその言葉も無視して、カノンに話し続ける。
「少し先走りし過ぎているあの態度は気になるが・・・いいや、だからこそ、退路を焼き払っておくことにも意味はあるだろう。自分でフレイヤを撃ってしまえば、もうナナリーも後戻りはできはしないよ。後は勝手にルルーシュたちを撃ってくれるようになるさ」
?「しかし・・・」
?「それにどの道、ナナリーにできることなど何もないからね。もし、いざという時に躊躇うようなら、改めてこちらで対応すればいい。そうだろう、カノン?」

？「・・・・・・」
カノンが納得できない顔で沈黙する。ただ、それ以上はカノンは何も言わなかった。
◆◆◆◆◆◆
エンブリオの支配する領域である次元の狭間にて、エンブリヲはバルコニーで優雅に紅茶を堪能しながら通信モニター越しにディガルド武国の新皇帝であるジーンと対話していた。
『――――――それで？約束通りペンドラゴンの住人たちは確保出来たのだな？』
「えぇ勿論。ですが数が数だけに一度に送り届けることは出来ないので分けて送らせて頂く」
『構わん。機械兵の補充が出来ればこちらの戦力は充分揃う。貴様が提供したモビルドールのシステムのおかげで我がバイオゾイドたちの強化は既に完了している。あとは部品（パーツ）である機械兵を搭載するだけだ』
エンブリヲとジーンは互いに腹の中を見せず内心見下し合いながら話し合う。
――――シュナイゼルやルルーシュたちは知らなかった。ペンドラゴンにフレイヤが放たれる数時間ほど前には既にペンドラゴンの住人はエンブリヲの手によって別の場所へと意識を奪った状態で別の場所に連れていかれておりペンドラゴンに残っていたのはルルーシュのギアスによって支配されたペンドラゴンに警備として残されたギアス兵数十人ほどで、シュナイゼルたちが想定している以上に人的被害はなかった。
しかし、フレイヤによって苦痛もなく消えた方が彼らにとって幸せだったかもしれない。ジーンの語る機械兵とはディガルド武国の主力兵器である人工ゾイドであるバイオゾイドを操作するためのアンドロイドの一種として兵士たちに知らされていた。だが、その正体はバイオゾイドに適合させるために身体から魂を抜き取り機械に魂を埋め込んだ、人の魂を動力に動く兵士であった。
これによって性別・年齢を問わずにさらには病人すら関係なく機械

兵にし、本来ならば適正の必要なバイオゾイドたちを大量に運用することが可能となった。
　この事実を知ったディガルド四天王が1人、ザイリン・ド・ザルツはジーンに反逆することを決意し、ディガルドの反抗勢力であるルージ・ファミロンたちディガルド討伐軍と協力しディガルド軍に機械兵の真実を伝え、彼らを新たに仲間に迎えジーン討伐軍となった。これによって現在のディガルド武国の人間はジーンとフェルミを含めて僅かな人員しか残っていなかった。
「それではこれで失礼させてもらおう。私としてもまだ色々とやることが残っているのでね」
『あぁ。では次は1週間後の決戦でな』
　そうして通信モニターが切れると笑顔の仮面を剥がしたエンブリヲは忌々しげに顔を歪めながら舌打ちを零す。
「たかが人間風情が神を語るとは・・・全く度しがたいものだよ」
　自称・絶対神を名乗るジーンに対して怒りを隠さずそう言うエンブリヲだが、他者からすればエンブリヲもまたジーンと同じ穴の狢でしかなくソレは同族嫌悪としか見えなかった。
「――――おやおや。珍しい空間を見つけたかと思えば先客がいたとはね」
「――――っ!?」
　突然聞こえてきた声にエンブリヲは思わず椅子から立ち上がり周囲を見渡す。自分か自分が認めたものしか入れないこの空間に他者が入り込むなど有り得ない。しかし確かに声は聞こえたためエンブリヲは周囲を警戒しているとソレは現れた。
「おっと失礼。こちらとしては君に敵対する気は無いのでね。素直に姿を現すとしよう」
　その声が聞こえるとエンブリヲの目の前の空間が歪み、そこから現れた存在たちを目にしてエンブリヲは初めて目を見開き顔を青ざめた。
　歪んだ空間から先ず現れたのは全身を真っ黒な外装で纏い、頭や肩から何本持つのを生やしており悪魔や魔王のような恐ろしい姿だっ

た。サングラスを思わせる赤い目に電飾モニターのような歯そして後頭部からは青い炎のようなオーラを発生させていた。
次に現れたのはウェーブのかかった銀髪の美男子。その目はエンブリヲを移しておらずここにはいない彼の獲物のことしか考えていなかった。
そして最後に現れたのは長髪の生体サイボーグのような姿をした存在であり、この中で最も強烈なプレッシャーを放っていた。
「む、ムゲ・ゾルバトス・・・」
エンブリヲは顔を青ざめながら思わず後ろに後ずさりをすると、ムゲはその腕を伸ばしエンブリヲの首を掴み持ち上げた。
「がっ・・・!はっ・・・!?」
「久しいなエンブリヲ。貴様があの戦いから逃げて以来だな」
ムゲは淡々と事実を述べるかのように無機質な声でエンブリヲに問いかけるよう話しかけるが、首を絞められているエンブリヲは呼吸に必死で答えることは出来ないでいた。
「今までよく見つからずに済んだものだな。あの戦いで生きのびたものの中には貴様に憎悪を抱いているらしいが、まぁ私にとってどうでもいいことだな」
ムゲはそう言うとエンブリヲの首から手を離した。ムゲの手が首から離れたことでエンブリヲは咳き込みながら深呼吸を繰り返す。
「おや?てっきりここで始末するのかと思ったんだがね」
「コレにはまだ利用価値がある。せいぜいあの小僧共とＺＥＸＩＳの戦力、そして貴様の言うドライクロイツとやらの戦力を図るのに使ってやろう」
「ふむ。まぁ君がそう決めたのなら私から言うことは特にないかな」
ムゲは真っ黒な外装を纏った人物――アレクシス・ケリヴに対してそう返すとアレクシス自身もエンブリヲに微塵も興味もないのか彼に視線を向けることなくムゲと話を続ける。
「ではなエンブリヲ、貴様がＺＥＸＩＳたちを相手にどこまで足掻けるのか見てやろう」
ムゲはそうエンブリヲに告げるとアレクシスとジアートと共に空

間を歪ませたかと思えばその場から完全に消え去った。
ムゲがいなくなった後、エンブリヲは怒りで顔を赤くしテーブルに置いてあったティーセット薙ぎ払った。
「クソがァっ!!死に損ない風情が私を見下しやがって!!」
しばらくの間、時空の狭間にエンブリヲの怒声が虚しく響き渡った。しかしこれはエンブリヲの因果応報(自業自得)でしかなく、これはエンブリヲの転落の始まりに過ぎないことをエンブリヲ本人はこの時まだ気づかないのだった・・・。

◆◆◆◆

本土にてルルーシュ皇帝軍が部隊を展開している帝都からかなり離れた荒野の周りは先日、帝都ペンドラゴンにフレイヤ弾頭が落とされたことによって厳戒警戒態勢が敷かれていた。元々ルルーシュが会談に向かう前から強力な兵器たちが地上と空、湖を埋め尽くさんばかりに並んでいたが、シュナイゼルと彼の元に集まった宿敵たちと戦うために新たな戦士たちが集っていた。
ウォーダン率いる第一独立師団にノイエ　Ｄ(ディバイン・クルセイダーズ)　Ｃの旗頭であるバン・バ・チュン大佐を中心としたノイエＤＣ部隊。
アレンの第二機甲師団に大ゾギリア帝国のアルフリード隊からアルフリード・ガラント中佐を中心としたヴァリアンサー部隊。
ルナの第四機甲師団に北米同盟のブラッド・ワッド大尉率いるブラッド隊を中心としたＡＭＡＩＭ部隊。
アリサの第三混成師団に東の星と呼ばれる別次元の世界にてオワリ国のオダ家当主のオダ・ノブナガと彼に付き従うイクサヨロイ部隊。
その他にもシュナイゼルが放ったフレイヤ弾頭に恐れを生したもの達が細々とながらも集結しておりその規模はさらに巨大なものへと変化していた。
「随分とこの部隊も大所帯になってきたな」
後方で待機しているライノセラスの格納庫でヴォルフは周囲の警

戒を行った際のついでに狩った鹿の肉にかぶりつきながらそう呟く。
「まぁ本心からルルーシュ陛下に従っている人間ばかりではないがな。殆どの人間がフレイヤを恐れているか何か別の思惑を持っているものばかりだ」
　ヴォルフの隣で同じように狩りで狩った猪のステーキを切り分けて食しているエスデスはヴォルフに対してそう返す。フレイヤ弾頭による恐怖に屈したものたちはわかりやすいが他の理由で加わったものたちは内心それぞれの思惑を持っており決して油断のできるものではなかった。
「関係ないでしょ、利用できるなら利用する。逆に私たちの敵になるんだったら潰せばいいだけじゃない」
「そうね、そのために私たちがいるんだから」
　手摺りに寄りかかりながらそれぞれサンドイッチとホットドッグを片手にルミナスとアリサはどこまでも冷徹にそう語るが全員が同じ気持ちであるためか同じように氷のように冷えきった鋭い瞳をしていた。
「ところでヴォルフ。ルルーシュ陛下が私に与えてくださったあの破壊龍。問題なく次の戦闘で扱えるのだろうな？」
　食事を終えたエスデスはヴォルフに対して確認するように尋ねながら下で現在整備中のエスデスに与えられた超大型ゾイド《オメガレックス》を見下ろす。
「主力武装の荷電粒子砲を含めた武装の復元はほぼ完了している。ただ、破壊されていたバリア発生装置をEシールドに変更しているから少し時間がかかる。恐らく決戦ギリギリになるかもしれないが・・・」
「十分だ。決戦に間に合うというのならば問題ない」
　ヴォルフが頭をかきながらそう答えるとエスデスは獰猛な笑みを浮かべてオメガレックスを見下ろす。
「なら1週間後の決戦じゃ私たち全員の機体がそろうってわけね」
「あぁ。今までは俺たち用にカスタムした機体で戦ってきたたが次の決戦は違う。《運命の騎士》としてその力を世界に示す」
　ヴォルフたちは互いに笑みを浮かべあいながら決戦の時を待ち望

むのであった。彼らの下ではオメガレックスともう一体の破壊龍、２機のＫＭＦが鎮座しており機体たちもまた決戦の舞台を待ち望んでいるのであった。

それはヴォルフたちだけでなく他の場所で待機しているウォーダン、ゼハート、アレングラハムも同じ気持ちであり着々とシュナイゼルたちとの決戦の時が迫ろうとしていた。

しかし、この決戦はこれから始まる巨悪たちとの決戦の序章に過ぎす地球と宇宙、全ての人類にとって生存を勝ち取るための戦いの始まりなのであった。

第七話　眠れぬ夜の始まり

――――――エリア１１・ヨコハマ租界。

占領後の日本ことエリア１１内でブリタニアの国民が住む街《租界》のひとつであるここも、他の租界と同じように全域が人工地盤で覆われ、階層的な構造となっていて、あちこちから太陽光発電のパネルが空へと伸びており、贅沢なエネルギー供給が行われている。

その贅沢なエネルギー供給により、陽光と慈雨と新鮮な空気と潮風を生むスクリーン・ドームに覆われたこの租界は、「地上と海の楽園」と称され、[[ｒｂ・日本人＞イレブン]]の困窮と犠牲による平和と繁栄を誇っていた。

しかしルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが第９９代ブリタニア皇帝、そして第３代地球連邦代表として即位し、トレーズ・クシュリナーダが新地球連邦総司令として就任した今、新生ブリタニア・地球連邦の大部隊により、このヨコハマ租界も楽園――ブリタニア貴族やその他シャルル時代の地球連邦の支持者・関係者にとって――から戦場（地獄）へと化そうとしていた。

現在、シュナイゼルの配下であるアーヴェント・ヴォルヘイム伯爵を筆頭にした旧ブリタニア軍はヨコハマ基地の製造プラントで開発したデストロイガンダムなどの既存機体だけでなく新型など決戦に向けて大量のモビルドールたちを製造しダモクレスへと運び込もうとしていた。

しかしそれを察知したライは自らの配下である第零騎士団をヨコハマ租界へと進軍させ、現在は第零騎士団とヨコハマ基地を防衛している旧ブリタニア軍及び黒の騎士団と戦闘が始まろうとしていた。

ヨコハマ租界のスクリーン・ドームの支柱であり、またヨコハマ租界の象徴でもあることから《海楼塔（オケアノス・タワー）》と呼ばれるヨコハマ租界総督府を中心にヨコハマ租界の各所にはサザーランド、グロースター、ヴィンセント、ジンクスＩＩＩ、ティエレン、アヘッドが合計２００機は下らない数で配備され、さらには切り札としてかザムザザーやゲルズゲーなど、地球連邦が所有するモビルアーマー数十体が展開され

ていた。さらにそこに黒の騎士団から母艦である斑鳩と藤堂鏡志朗の斬月、千葉凪沙と朝比奈省吾の暁直参式仕様、機の暁量産型及び無頼、無頼改そしてブリタニア軍から鹵獲したフラッグやサザーランド、ジンクス、イナクトなど１００機近くが部隊を展開していた。

『聞こえるか諸君!!我々は何としてでもあの悪逆皇帝を討ち取るためにシュナイゼル殿下の元へこれらの機体を届けなくてはならない!!そのためにも愚帝であるルルーシュの騎士であるライとその配下の騎士団如きに遅れを取るなどあってはならん!!』

ヴォルヘイム伯爵は自らの乗機である指揮官用ヴィンセントの槍型ＭＶＳを掲げながら戦場にいる戦士たちを鼓舞するように大きな声を上げる。

『恐れることは無い!!我ら勇敢なるブリタニア兵士が、奴らのような忠義も礼節も知らぬ愚者に負けるどおりなどあるはずがない!!』

『『『イエス・マイ・ロード!!』』』

ヴォルヘイム伯爵の言葉にヴォルヘイム伯爵の長男であるビトゥル、長女のリース、次男のホマー、三男のアカスタがそれぞれの乗機である銀色の指揮官用ヴィンセントで、そして伯爵家の親衛隊やヨコハマのブリタニア貴族・騎士たちがＫＭＦやＭＳ、ＭＡのコックピットの中から一斉に声を上げる。

『そうだ！　ルルーシュとトレーズら国賊どもを許すな!!』

『皇族としての誇りを失ったただの若造に、皇帝の座は相応しくない!!』

『シャルル皇帝陛下は間違っていない！　競争と支配こそが祖国（ブリタニア）に栄華をもたらした!!』

『帝位を簒奪した不逞の輩どもに我らの誇りを見せつけるのだ!!』

海楼塔はもちろん、ヨコハマ租界各所で兵士と騎士、貴族たちは機体の腕を高く上げながら呼応するように声を上げる。最高潮に高まった士気は凄まじく大地を揺るがしかねないほどだった。

そして今、第零騎士団はその猛威を振るおうとしていた。

『ヴォルヘイム卿!!《終焉の騎士》の親衛隊がこちらへ部隊を侵攻して来てます!!』

『そうか、なら奴らに我らの威光を見せつけてやれ!!』
部下からの報告にヴォルヘイム伯爵は愉快そうに笑みを浮かべながら配下たちに指示を出すと固定砲台やモビルスーツやモビルアーマー、ナイトメアたちに攻撃を指示した。
銃弾とビームが飛び交う中、五体のティラノサウルス種の大型ゾイド《デスレックス》はその強固な装甲で放たれる銃弾とビームを跳ね返しながらヨコハマ基地へと突撃を仕掛けていた。
『チッ!随分と頑丈な獣だな。だが何時まで持つかな?全機、敵を撃ち落と――――』
隊長機のグロースターのパイロットがザッテルヴァッフェとロケットランチャーを構えながら部下たちを鼓舞するように声を上げた瞬間、上空から落下してきた重装甲の漆黒のサザーランド《サザーランド・アビス》の対ナイトメア専用大型ランスによってコックピット部分を貫かれ絶命した。
『上空からだと!?索敵は何をしていた!!』
『ダメです!!この租界を中心に妨害電波が展開されているため索敵機能が上手く作動しません!!』
『クソっ!反逆者共がっ!!』
その間にも上空から第零騎士団のナイトメアである10機のサザーランド・アビスと8機の《グロースター・アビス》がヨコハマ基地に着地するとそのままランドスピナーを駆り、縦横無尽に戦場を動き回りながら大型ランスやMVS、ロケットランチャー、ヴァリスで次々と敵機と基地の防衛装置を破壊していく。
『えぇい何をしている!!たかが十数機のナイトメア、物量で推し潰せ!!』
ヴォルヘイム伯爵は不甲斐ない部下たちを叱責しながらも迫ってくるグロースター・アビスのMVSを槍型MVSで受け流す。
その間にも防衛部隊を突破したデスレックスたちは蹂躙を開始する。
『畜生如きがいつまでも調子に乗るな!!』
一機のグロースター・エアが大型ランスを構えて上空から落下する

ように加速してデスレックスの頭部に大型ランスを突き刺そうとしたが、デスレックスの頭部に当たった大型ランスの槍先は砕け、想定外の出来事に呆然としているグロースター・エアのパイロットの隙を着いた隣にいたデスレックスはグロースター・エアの胴体に噛みつき、そのまま噛み砕いた。その口端からはオイルとグロースター・エアの残骸が零れ落ちており、その姿はまさに凶悪な肉食獣そのものでありその恐ろしい姿に兵士たちは背筋が凍るようなものを感じた。

しかし兵士たちが躊躇っている間にも第零騎士団は１２機のジンクスＩＩＩ、１０機のビルゴＩＩＩ、８機のゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩ。そして第零騎士団の部隊長機である５機のカスタム機が暴れていた。

『ハッハァ!!クソ雑魚共が!!とっととぶっ潰れちまいなぁ!!』

アルトアイゼン・リーゼに酷似した漆黒の機体《アルトアイゼン・クリンゲ》を駆るルシア・スカーレットは獰猛な笑みを浮かべながら身の丈ほどあるリボルバーガンハルバードで薙ぎ払いながら敵を斬り捨て、

『殲滅、開始』

ライン・ヴァイスリッターに酷似した紺碧の機体《アズールリッター》を駆るリルカ・スカーレットは無表情に淡々と背部のライフルビットを展開しオクスタンランチャーと同時に敵を撃ち抜き、

『皇帝陛下に逆らう愚か者共がっ!!その命で贖え!!』

ヴァングネクスに酷似した白銀の機体《コキュートス》を駆る銀城阿含は両腕に装備した巨大な陽電子砲《アブソリュートバスター》で次々と敵を消し炭にし、

『未熟者が』

ランスロットをより鎧武者に近付けた頭部に赤い三本角を生やした漆黒のナイトメア《餓者髑髏》を駆る獅子王刃矢は日本刀型のＭＶＳ《鬼切》と《虎徹》で敵を斬り伏せ、

『潰れろ』

グルンガスト参式に酷似した漆黒の機体《グルンガスト帝式》を駆るユキナ・グランベルムは敵機を踏み潰しながらその背に背負う巨大

な戦斧で叩き潰すように切り裂く。
　それに続くように《第零騎士団》のメンバーが次々とヴォルヘイム伯爵の部下たちと黒の騎士団に襲いかかる。
　そしてひとり、またひとりと成すすべもなく一方的に蹂躙されていきヨコスカ基地に破壊された機体が転がる。斑鳩もスラッシュハーケン、単装砲、ハドロン重砲で抵抗するが、容赦ない集中砲火を浴びせられる。輻射波動障壁で防御しても圧倒的な火力によってスラッシュハーケンと単装砲を破壊され大破し今にも沈みそうになっていた。
『くっ！これがライの親衛隊の実力かっ!?』
　斬月を駆る藤堂は迫ってくるグロースター・アビスのＭＶＳを制動刃呐喊衝角刀で受け流しながら顔を顰める。
　数ではこちらが上回っているというのに一方的に蹂躙されているのはこちらの方だった。何とか戦況を巻き返そうとするが状況は一向に悪くなるばかりだった。
『藤堂さん!!これ以上はっ・・・!!』
『このままじゃ全滅しますよ!?』
　暁直参式仕様を駆る千葉と朝比奈はハンドガンで牽制しながら斬月に近寄る。シュナイゼルの元へ運び込まれる予定のモビルドールたちはまだ三割程度しか基地から運び込まれていないがこれ以上ここに残って戦闘を続けたところで全滅するのは目に見えており決戦の時のためにも少しでも多くの部下を逃がすことを考えているが、その隙が全くないため思うように動けないでいた。
『焦るな!!数はまだこちらが上回っている。今は残存戦力をまとめこの窮地を脱出することを考えるんだ!!』
　そう口で言う藤堂だがそれも難しい事だと理解している。何とかまだ士気は保っているがそれも何時まで保てるかわからない。何か起死回生の一手でもあれば・・・そう藤堂が考えていた時、ヨコハマ基地の一角の倉庫が爆発しそこから４機のデストロイガンダムと新型のモビルドールである別世界のモビルアーマーであるハシュマルとシャンブロ、そしてモビルスーツである５機のグレイズアインが現

れた。
『あれはシュナイゼルが用意した新型のモビルドールたちかっ!?だがこちらにとって好都合だ』
藤堂は予想外の戦力の出現に驚いたが、突然のモビルアーマーたちの出現に僅かばかり動揺している《第零騎士団》を見て藤堂はチャンスと考え千葉と朝比奈に残存部隊を斑鳩に集結させこの戦域から離脱する準備を始める。
一方、シャンブロたちを起動させたヴォルヘイム伯爵は狂気的な笑みを浮かべながら高笑いを上げる。
『本来ならばシュナイゼル殿下に届けるべき機体達だが、これ以上奴らの好きにさせてたまるか!!』
武装を破壊され満身創痍だった指揮官用ヴィンセントからサザーランド・イカロスに乗り換えたヴォルヘイム伯爵はシャンブロたちに攻撃を開始させた。
まず先頭を駆けるのはモビルアーマー・ハシュマル。この世界とは別の次元であるマクギリス・ファリドたちの世界で３００年ほど前に人類の八割を殲滅した禁断の無人兵器。鉄華団との戦闘で破壊されたハシュマルのデータを元にモビルドールとして新たに製造されたこの機体は殺戮の天使としてこの地に現れた。
ハシュマルは十数機の無人攻撃オプション《プルーマ》を随伴させながら頭部に搭載された高出力ビーム砲を薙ぎ払うように放つとそれだけでヨコハマ基地を破壊しながら味方ごと巻き添えにして第零騎士団に攻撃する。サザーランド・アビスとグロースター・アビスたちは両腕のブレイズルミナスを展開して防御したが、その威力までは抑えきれず何機かが、関節部が破壊したり、コックピット部分が壁や地面にぶつかり潰れたりなどした。
『グォォォォォォ!!』
ハシュマルの存在に気づいたデスレックスたちは地響きを鳴らしながら迫ってくるプルーマを踏み潰しハシュマルに接近するとそれぞれがハシュマルの首元や両羽、両足に噛み付くとミシミシと噛まれている部分から軋む音を上げる。ハシュマルは抵抗するように暴れ

背部の超硬ワイヤーブレードを首元に噛み付いているデスレックスを引き剥がそうと首元に超硬ワイヤーブレードを突き刺す。デスレックスは苦しげな声を上げるが目の前の獲物を逃がす気はないのかより一層力を込めて噛み付く。他の場所に噛みついているデスレックスたちもプルーマたちに組みつかれながらも噛みつく力は一切緩めずより一層力を込めている。

しかしそれはハシュマルも同じであり、ハシュマルも超硬ワイヤーブレードによる攻撃を続けながらプルーマに指示を出してデスレックスの装甲を抉るように攻撃させる。５匹の恐暴龍と殺戮の天使は互いにその命を奪いつくさんとしていた。

そして少し離れた場所ではモビルアーマー形態となった４機のデストロイガンダムによる背部フライトユニットに装備されている連装２基、計４門装備されている大出力ビーム砲の高エネルギー砲《アウフブラール・ドライツェーン》とフライトユニット円周上に計２０門内蔵されるビーム砲の熱プラズマ複合砲《ネフェルテム５０３》。そしてシャンブロによる頭部口腔内に内蔵された大型のメガ粒子砲《大口径メガ粒子砲》と両肩の《肩部拡散メガ粒子砲》によるビームの嵐が敵味方の区別なくヨコハマ基地に降り注ぐ。

逃げ遅れた黒の騎士団と貴族たちの機体は次々とビームによってかき消される中、第零騎士団は１０機のビルゴＩＩＩが展開した《プラネイトディフェンサー》による防御シールドでビームの嵐を防ぎながら一般兵士たちが撤退する中、隊長機であるアルトアイゼン・クリンゲたちはビームの嵐などお構い無しにデストロイガンダムたちに接近する。それを防ぐかのように１つ目の巨大な黒いモビルスーツ《グレイズアイン》５機が立ち塞がった。

『『『『我　ら　が　ギ　ャ　ラ　ル　ホ　ル　ン　の　正　義　の　た　め　にいいいいいいいいいいいいいい!!』』』』

『邪魔だ』

オープンチャンネル越しにグレイズアインのコックピットから狂ったような男たちの声が響き渡る。グレイズアインたちはその手に握る専用大型アックスを振り下ろす。しかしその専用大型アック

スの斧先か先頭を進んでいたアルトアイゼン・クリンゲに当たるより先にグルンガスト帝式が横凪に振りかぶった戦斧によって5機のグレイズアインは胴体をフレームごと切り裂かれ、宙を舞ったグレイズアインたちの上半身たちはそのまま力なく地面に落ちた。

『ぶち抜け!!』

シャンブロの頭上に上がったアルトアイゼン・クリンゲは背部の大型ブースターを噴かせて加速すると右腕のリボルビング・バンカーを頭に突き刺しそのままパイルバンカーを射出し頭部を破壊し機能を停止させた。

『失せろ、デカブツが』

『ライフルビット、撃ち抜きなさい』

『消え失せろ!!』

デストロイガンダムたちの頭上に飛んだ餓者髑髏はアウフブラール・ドライツェーンとネフェルテム５０３によるビーム砲の攻撃を交わしながら接近すると鬼切と虎徹でアウフブラール・ドライツェーンを斬り捨て、アズールリッターが展開した２０機のライフルビットから放たれるビームと実弾の混ざった弾幕の嵐とコキュートスのバックパックと両肩から放たれるホーミングミサイルと両腕に装備した小型レールガン《ジークヴルム》によって４機のデストロイガンダムはあっという間に装甲が蜂の巣のように穴だらけになり爆発を繰り返しながら地面に沈む。

そしてハシュマルもまたデスレックスによって完全に噛み砕かれ、プルーマの残骸とともに地に沈んでいた。

『馬鹿な・・・』

あっという間に鎮圧されたハシュマルたちの姿にヴォルヘイム伯爵は信じたくないと言わんばかりに顔を青白くさせながら目を見開いていた。

『有り得ん!!たかが１０機程度であのデストロイガンダムたちを倒すだと!?これではシュナイゼル殿下に申し訳が――――』

ヴォルヘイム伯爵がその言葉を告げ終わる前にサザーランド・イカロスの機体ごと真っ二つに切り裂かれ断末魔をあげる暇もなく爆発

に飲まれその命を散らした。
『――――これでヨコハマ基地の殲滅は完了したな』
『黒の騎士団は逃げたけど決戦の時に始末すれば問題ないわ』
爆煙が晴れた時にはサザーランド・イカロスがいた場所には黒紫の死神を思わせるような十二枚羽の紫色のエナジーウイングを展開させたマリオ・ディゼル専用機の第九世代ナイトメア《ペルセウス》と赤褐色の剣闘士を思わせるような十二枚羽の灰色のエナジーウイングを展開させたマーヤ・ディゼル専用機の第九世代ナイトメア《アキレウス》が滞空していた。既に黒の騎士団の残存戦力（死に損ない）はヨコハマ基地から逃げ、ヴォルヘイム伯爵たち貴族や騎士たちは全滅しヨコハマ基地は壊滅状態となっていた。

――――ヨコハマ基地の出来事は瞬く間にシュナイゼルやＺＥＸＩＳたちの耳にも届き、ライの親衛隊たちの恐ろしさを知ることになったのだった。

◆◆◆◆◆◆

ヨコハマ基地が襲撃を受ける数時間ほど前、グランベリーの艦橋ネットとグリンダ騎士団の元に、１本の通信が入った。
「・・・あたしたちを孤立させておいて、頼みとは上等だね」
指揮官席で腕を組みながら、ノネットがモニターに映る通信の相手に話しかける。その彼女の周りから立ち昇る剣呑な雰囲気に、オルドリン、ソキア、レオンハルト、ティンク、オペレーター席のエリシアとエリスも緊張した面持ちになっている。
「それで？　今度はなにかい。あたしらの粛清の手順でも決まったのかい？」
ノネットに剣呑とした言葉をモニター越しで投げつけられるその通信相手――――カノンは、弱々しい表情でこう言った。
『コーネリア皇女殿下が……撃たれたわ』
その言葉に、ノネット、そしてオルドリンたちは一斉に大きく目を

見開いた。
「え――――」
「「な・・・・・・」」
「コ・・・今、なんて・・・？」
　ソキアが呆然とした表情でそう呟いた時、ノネットは目を見開いたままカノンに問うた。その眉と頬が、驚愕と怒りにピクピクと微かに震えている。
「何だって・・・？カノン、お前今・・・なんて言った？」
『言葉通りの意味よ・・・皇女殿下が、撃たれた』
「「っ――――」」
　オルドリンたちが、絶句させられる。ノネットは大きく俯いて、怒りを懸命に抑えているかのような低く重い声でさらに問うた。
「・・・撃ったのは、どいつだ。どこのバカがやった？」
『聞いて、ノネット。あなたたちには・・・』
「どこのバカがやったって聞いてるんだ。答えろ!!」
　ノネットは吼えて、肘掛けを思い切り殴った。それにオルドリンたちがびくりとなり、カノンもモニターの向こうで目を伏せたが、
『・・・あなたたちグリンダ騎士団には、コーネリア皇女を安全な場所までお連れして、手当てをしてほしいの。ここでは応急処置程度しか、できないから・・・』
　まるではぐらかすように、カノンはそれだけしか答えなかった。しかしノネットはそのカノンの態度で、コーネリアを撃った犯人に、見当がついてしまった。
「カノン・・・お前は・・・」
　さらなる怒りと愕然に声を震わせるノネット。オルドリンたちは、事実への愕然とノネットの怒りへの畏怖に震え、絶句しながら、この様子を見守っていることしかできない。
『お願いよ、ノネッ――――』
　カノンが言い終わらないうちに、ノネットは通信パネルに手を伸ばすや否や、彼との通信を一方的に切った。
「え、エニアグラム卿・・・」

エリシアが恐る恐る呼びかけると、ノネットは自分の胸元をギリギリと握りしめ、深く俯いていた。
「あの・・・男は・・・。一度ならず、二度までも・・・どこまで我々を、バカにすれば、気がすむってんだ・・・」
ダモクレスによるペンドラゴンの消滅といい、ナナリーを駒として担ぎ出したことといい、シュナイゼルの我が物顔の振る舞いには、ノネットは我慢の限界を感じてならなかった。
そして今、親友にして後輩であるコーネリアの銃撃という事態に発展した今、そのシュナイゼルへの怒りが一気に湧き上がり、ノネットの理性を吹き飛ばした。
「おのれ――――シュナイゼルゥウウウウッ!!」
指揮官席から勢いよく立ち上がり、ノネットは魂の底から咆哮した。
オルドリンたちも、魂の底からびくりと大きく震え上がった。そして二、三息を荒くした後、ノネットはオルドリンたちに向かって叫んだ。
「おらぁ!!なにボーッとしてんだ!!さっさと準備を整えろお前たちっ!!!」
「えっ――――!?」
「じゅ、準備って・・・何をですか!?」
ティンクとレオンハルトが戸惑いながら聞き返すと、ノネットはラウンズの称号である紫のマントを大きく翻して、再び魂の底から吼える形で命令を下した。
「テツヤ艦長たちに連絡し次第、グランベリー緊急発進――――コーネリア皇女の保護に、あたしらも今すぐ古都コンスタンティンへと向かうよ!!これ以上、シュナイゼルの好き勝手にさせてたまるかぁっ!!!」
◆◆◆◆◆◆
決戦の舞台である古都コンスタンティンへと向かうＺＥＸＩＳは太平洋を横断中、次元獣の襲撃を受けていた次元震によってこの世界へと飛ばされたばかりのもの達と出会い、その救助を行ったあと彼ら

はルルーシュ皇帝軍とシュナイゼル旧皇帝軍に彼らにとって共通の敵である存在がいることを知り、彼らに協力することを選択した。
　そして現在、可変攻撃宇宙空母《マクロス・クォーター》のブリーフィングルームにて。ブリーフィングルームの奥にあるモニターで次々と映し出されるルルーシュ皇帝の手腕と彼に付き従う騎士たちの戦いに、集まったＺＥＸＩＳメンバーと新たな協力者たちは息を呑んでいた。
「分かっていたことだがやはり彼の手腕は凄まじいな。あれからたった数日しか経っていないというのにさらに戦力を強化するとは・・・」
　クワトロはアッシュフォード学園での会談からたった３日しか経っていないというのに新たに様々な部隊がルルーシュの元に集い、現在のルルーシュ皇帝軍の総数は十数万を超えるほどでありそのカリスマ性にかつてシャア・アズナブルとしてジオン軍の将として部隊を率いていた経験があるだけにその凄まじさをよく理解できていた。
「キャピタル・アーミィにジット団。他にも色々な勢力がルルーシュの元へ集っている」
「随分と慕われているみたいだな。黒の騎士団の連中とは大違い・・・っと、悪いなカレン」
「いえ、事実ですから・・・」
　眉をしかめながら星刻がルルーシュの元に集ったものたちの名を上げるのを聞いたヒュッケバイン３０ｔｈのパイロットであるエッジ・セインクラウスは思わずそう呟いてしまい隣にいたカレンに謝罪するがカレンもまたそう言われても仕方がないと思っているのか悲しそうに顔を背けるしか出来なかった。
「彼らが何故ルルーシュの元へと集まったかは分からないが、その勢力は間違いなく現在の地球で質も量もトップクラスと言っても過言ではないだろうな」
　モニターに映るモビルスーツやナイトメア、ラグナメイル、カタクラフト、ゾイドなど多種多様な兵器たちが敵を蹂躙する姿を見てラー・カイラムの艦長であるブライト・ノアは冷や汗を流しながら思わずそう呟いてしまう。

「その中で特に脅威なのはルルーシュの筆頭騎士である《終焉の騎士（ナイトオブゼロ）》のライと《運命の騎士（ナイトオブフォーチュン）》だろうな」
インフィニットジャスティスガンダムのパイロットであるアスラン・ザラが腕を組みながらモニターに映るライたちルルーシュの筆頭騎士たちを見据えた。
「その筆頭騎士たちについてだが、万丈たちが集めてくれた情報のおかげで彼らについて幾つかわかったことがある」
ロジャーは皆が集まるブリーフィング・ルームの中央のテーブルにあるプロジェクターの電源を起動させ、さらにリモコンで何かの操作をした。？すると、モニターの前に投影用のスクリーンの布が降りてきて、ロジャーがプロジェクターに向けてリモコンでさらに操作を行うと、ルルーシュの皇位継承の日にライと共に姿を現したあの１２人の新たな皇帝騎士たちの写真がひとりずつ投影されていく。
「『女帝の騎士（ナイトオブエンプレス）』――――――モニカ・クルシェフスキー。元ナイトオブラウンズの第十二席（ナイトオブトゥエルブ）にしてビスマルク・ヴァルトシュタインとバレット・ギュスターヴに並ぶラウンズの中でもシャルル・ジ・ブリタニアに対する忠誠心が高いことで知られていた彼女が、何故ルルーシュに従っているのかは不明だ」
ロジャーの説明とモニカの写真、そしてシュナイゼル側についたアーチボルド・グリムズ率いるノイエＤＣのバレリオンたちを斬り裂くフローレンスの姿を見て、かつてモニカと戦ったことのあるテロリスト派遣組織《ピースマーク》に所属する業火白炎のパイロットであるオルフェウス・ジヴォンと月下紫電のパイロットであるズィー・ディエンは思わず眉をしかめた。
「あの女の皇帝に対する忠誠心は本物だった。だが今はそルルーシュに対しても同じ、いや、それ以上の忠誠心を見せている。それもギアスなどによる洗脳ではない」
「ってことは本人の意思なのかよ」

『塔の騎士（ナイトオブタワー）』――――――ゼハート・ガレット。この場にいるフリット・アスノ氏らの世界でヴェイガンと呼ばれる火星国家所属の火星人であり、かつてはヴェイガンの総司令の地位についていた」

ゼハートの写真とロジャーの説明、そして皇帝陵墓でのガンダムレギルスによる一方的な蹂躙を行う姿を見て、ゼハートの親友であるガンダムＡＧＥ―２ダークハウンドのパイロットであるアセム・アスノは食い入るようにゼハートの写真を睨み、それをアセムの父のガンダムＡＧＥ―１フルグランサのパイロットであるフリットとアセムの息子のガンダムＡＧＥ―ＦＸのパイロットであるキオ・アスノ、そして宇宙戦艦《ディーヴァ》と《バロノーク》のクルーとモビルスーツのパイロットたちは心配そうに見ていた。

「アセム・・・」

「父さん・・・」

「・・・っ。（ゼハート。コレが本当にお前の目指した世界に繋がるって言うのか？）」

『戦車の騎士（ナイトオブチャリオット）』――――――ヴォルフ。惑星Ｚｉのソラシティにてゾイド研究者として地上に派遣されていた。しかし恋人と妹を現ディガルド武国皇帝ジーンによるバイオゾイド実験に使われ意識不明の重体となり、その復讐のため単身攻め込んだが失敗し、その後はソラシティの地下牢で言われのない罪もつけ加えられ大罪人として地下牢に幽閉されていた」

ヴォルフの写真とロジャーの説明、そしてディガルド武国の主力兵器であるバイオゾイドであるバイオラプトルや量産型バイオメガラプトルたちの残骸の上に立つディノニクス種のゾイド《ギルラプター》の姿を見て、ゲッターチームの真ゲッターのパイロットである流竜馬と神隼人を含めた何人かが表情を顰めた。

「気に食わねぇな・・・」

「あぁ全くだ」

「『審判の騎士（ナイトオブジャッジメント）』――――アレン・フォルネウス。第二席（ナイトオブツー）候補として最も有力な人物として上がっていたが、第十四皇子チャルロス・ベン・ブリタニアとその配下の貴族たちによって婚約者であるメアリー・クロイツを陵辱し女性としての尊厳を奪い尽くした上でゴミのように捨てられ、その報復として一族郎党皆殺しにした事で皇族殺しの大罪人として終身刑の身となっていた」

アレンの写真とロジャーの説明、そしてサザーランドやグロースター、ジンクスなどのナイトメアやモビルスーツたちのコックピット部分を徹底的に潰しながら暴れ回るガンダムバルバタウロスシュトルゥムの姿を見て、ガンダムフラウロスのパイロットであるノルバ・シノとガンダムグシオンリベイクフルシティのパイロットである昭弘・アルトランドを含めたメンバーの何人かが表情を翳らせた。

「ＣＧＳの連中より腐った連中じゃねぇかよ・・・」

「家族の仇をとっただけで、こんな仕打ちされるってのかよ・・・」

「『星の騎士（ナイトオブスター）』――――アリサ・ヴィエルジュ。かつてはブリタニア貴族の生まれだが、より爵位の高い貴族の汚職の罪を擦り付けられたことをきっかけに両親を失い、ルルーシュと出会うまではストリートチルドレンとなって過酷な生活を強いられていた。そのため、シャルル・ジ・ブリタニアら皇族や貴族、ナイトオブラウンズも含めたそれに与する者たちへの憎しみは十二騎士の中でも後に語る『月の騎士（ナイトオブムーン）』と並ぶほど深いことで知られている」

アリサの写真とロジャーの説明、そしてモビルドールであるユーグリットやバイアランたちを破壊する紺碧の指揮官機ヴィンセントの姿を見て、ＶＦ―２５メサイアのパイロットである早乙女アルトとグレンラガンのパイロットであるシモン、スペースキングキタンのパイロットであるキタンを含めた数人がさらに顔を翳らせた。

「無実の罪で両親を失ったってことかよ・・・」

「・・・ひでえことしやがる」
「これが同じ人間のやることかよ・・・」

『愚者の騎士（ナイトオブフール）』――――ミスター・ブシドーことグラハム・エーカー。彼がルルーシュの騎士になったのは、この後で取り上げる『終焉の騎士（ナイトオブゼロ）』の口利きが関係しているらしい」

グラハムの写真とロジャーの説明、そしてマスラオによってアロウズのアヘッドとジンクスＩＩＩを撃墜する姿を見て、グラハムと因縁深いガンダムダブルオーライザーのパイロットである刹那・Ｆ・セイエイはもちろん、同じソレスタルビーイングのガンダムマイスターであるセラフィムガンダムのパイロットであるティエリア・アーデとケルディムガンダムのパイロットであるロックオン・ストラトスことニール・ディランディ、アリオスガンダムのパイロットであるアレルヤ・ハプティズム。そしてグラハムと共に何度も戦った経験のあるＧＮアーチャーのパイロットであるソーマ・ピーリスたちが表情を険しくする。
「ミスター・ブシドー・・・奴もまた戦いを求めるのか」
「これは厄介な奴が来たもんだな・・・」

『隠者の騎士（ナイトオブハーミット）』――――ゼクス・マーキスことミリアルド・ピースクラフト。グラハム・エーカーと同じように、ルルーシュの騎士となったのはトレーズ閣下の口説きが関係しているらしい」

ミリアルドの写真とロジャーの説明、そしてガンダムエピオンによって元デルマイユ・カタロニアの私兵であったＯＺの兵士たちが操るキャンサーやトラゴス、リーオーを破壊する姿を見て、かつてゼクス・マーキスの右腕として戦ってきたトーラスのパイロットであるルクレティア・ノインとコロニーのガンダムのパイロットであるウインググガンダムゼロのパイロットであるヒイロ・ユイ、ガンダムデスサイズヘルのパイロットであるデュオ・マクスウェル、ガンダムヘビー

アームズ改のパイロットであるトロワ・バートン、ガンダムサンドロック改のパイロットであるカトル・ラバーバ・ウィナー、アルトロンガンダムのパイロットである張五飛は表情を険しくさせる。
「ゼクス・・・あなたは一体何を考えているのですか・・・」
「(ゼクスとトレーズ。奴らもまたゼロシステムで未来を見てゼロに賛同したということか・・・)」

『悪魔の騎士(ナイトオブデビル)』――――エスデス・フリューゲル。元はとある傭兵団の一員として活動していたが傭兵団が壊滅してからは自らの実力でブリタニアでの地位を勝ち取った女傑だが、ルルーシュに従っている理由は不明だ」
　エスデスの写真とロジャーの説明、そしてティラノサウルス種の大型ゾイド《デスレックス》がヴェロキラプトル種のゾイド《ラプトール》と《ラプトリア》の軍団を引き連れてブリタニア軍基地を壊滅させている姿を見て、元レッドショルダーにしてスコープドッグ・ターボカスタム　ザ・ラスト・レッドショルダーＴＣ・Ｌ　Ｒ　Ｓのパイロットであるグレゴルー・ガロッシュやラビドリードッグのパイロットであるキリコ・キュービィーを含めたエスデスの傭兵時代を知っている何人かは顔を顰める。
「まさかあの女が他人に従うとはな・・一体どんな風の吹き回しだ?」
「・・・・・・」

『死神の騎士(ナイトオブデス)』――――ノクス・フリーデン。元はブリタニア貴族たちが自分たちの不都合な相手を消すための使い捨て前提の暗殺部隊の一員の一人だったが、所属していた組織が切り捨てられ殺されそうになったところをルルーシュに助けられそのまま彼に従ったようだ」
　ノクスの写真とロジャーの説明、そして暗殺仕様にカスタマイズされたサザーランドがシュナイゼルの元へと逃げている貴族たちを強襲する姿を見て、鋼鉄ジーグのパイロットである珠城つばきを含めた何人かは顔を険

しくさせる。
「自分たちが都合悪くなったら人でも捨てるって言うのかよ・・・」
「酷い・・・」

「『月の騎士(ナイトオブムーン)』――――――ティア・エリザベート。とあるブリタニア貴族が平民との間で孕ませた彼女はそのブリタニア貴族の間に跡継ぎが生まれないことを理由に母親を目の前で殺した上で無理やり自らの家系に入れ、貴族の血を絶やさないという理由で貴族としての知識を教えこませていたが、平民の血が流れているという理由から家族や使用人、通っていた学園の人間の全てから筆舌に尽くし難い程の嫌がらせを受け世界に絶望していたところをルルーシュに拾われたそうだ」
　ティアの写真とロジャーの説明、そして量産型ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩが執拗にサザーランドやグロースター、フラッグなどの機体を破壊する姿を見て、ストライクフリーダムガンダムのパイロットであるキラ・ヤマトやディスティニーガンダムのパイロットであるシン・アスカ、インパルスガンダムのパイロットであるルナマリア・ホークを含めた何人かは辛そうに顔を歪める。
「母親を目の前で殺されるだなんて・・・」
「こんなの、許せるわけないじゃないか・・・」
「酷い・・・」

「『正義の騎士(ナイトオブジャスティス)』――――――ルミナス・アルカディア。かつて反ブリタニア勢力のレジスタンスのリーダーとして活動していたが、彼女が率いるレジスタンスグループが壊滅しそうになった時残っていた仲間たちによってその身柄を売り渡され、本国の監獄の中で幽閉されていたのをルルーシュが解放した」
　ルミナスの写真とロジャーの説明、そして燃え盛る町の中を重武装のグロースターがロケットランチャーやザッテルヴァッフェなどを

放ち町を破壊する姿を見て、神虎のパイロットである黎星刻とヒュッケバイン３０のパイロットであるアズ・セインクラウス、レッドファイブのパイロットであるヒタチ・イズルを含めた何人かは顔を顰める。
「仲間に裏切られ敵にその身を売られるとは・・・」
「ゼロ――――ルルーシュと同じね、彼女も」

「『皇帝の騎士（ナイトオブエンペラー）』――――ウォーダン・ユミル。彼に関しては我々のように多次元からこの世界に飛ばされた人間であることとライ自らがスカウトしていることぐらいしか分かっていないが、その実力はほかの騎士たちと遜色ない」
　ウォーダンの写真とロジャーの説明、そしてインベーダーや次元獣たちに対してスレードゲルミルが斬艦刀で斬り伏せる姿を見て、リ・ブラスタのパイロットであるクロウ・ブルースト、ブラスタＥｓのパイロットであるエスター・エルハス、パールネイルのパイロットであるマルグリット・ピステールを含めた何人かはウォーダンの未知数の実力に顔を強ばらせる。
「ここに来てまた未知数の敵か、全く厄介だぜ・・・」
「でもライが選んだ騎士ってことはかなりの実力者ってことだよね・・・」

◆◆◆◆◆◆

「――――――――以上の『運命の騎士（ナイトオブフォーチュン）』十二騎士とその指揮官である『終焉の騎士（ナイトオブゼロ）』ライを従え、さらにマリーベル・メル・ブリタニア皇女やマリオ・ディゼル、マーヤ・ディゼル、トレーズ・クシュリナーダなどをはじめとした有能な協力者や同盟者を得るだけでなく、弱小貴族や元ナンバーズなどといった今まで虐げられてきた者たちの一部はルルーシュに希望を見いだして彼に付き従うことを選び彼の軍門に下っている」
　ロジャーはモニターにルルーシュの協力者であるマリーベルやマ

リオ、マーヤ、トレーズ。そしてこの場にいるゴッドガンダムのパイロットであるドモン・カッシュの師匠と兄である東方不敗とキョウジ・カッシュ、渡瀬青葉にとって大切な存在であるヒナ・リャザンなど新たにＺＥＸＩＳに加わったもの達の関係があるものたちがルルーシュに従っているという事実に驚きを隠せないでいた。
「師匠・・・兄さん・・・どうしてなんだ・・・」
「ヒナ・・・」
　動揺が拡がっていく中、ロジャーはむしろここからが本題だと言わんばかりに話を続ける。
「現在分かっているだけでルルーシュ率いる皇帝軍とシュナイゼル率いる旧貴族連合軍はモビルドールなどの無人機を数えても互いにその数は数十万を超えていると言っていい」
　ロジャーのその一言にこの場にいるメンバーに緊張が走る。この場にいる誰もが何度も死線を潜り抜けてきた強者達ばかりだが全員がこれほどの大規模な戦闘を経験したわけでないため、中にはその凄まじい数に顔を強ばらせているものたちもいた。
「だけど恐れて立ち止まる暇なんて私たちにはないわ」
「その通りだ。ルルーシュの真意は分からないが少なくともシュナイゼルをこのままにしておけばフレイヤによってさらなる犠牲者が増えてしまうだろう」
　スメラギとジェフリーが言う通り、躊躇いなく自国民に対してフレイヤを使用したシュナイゼルをそのままにしておけば間違いなく他の国家に対してもフレイヤを使い、それによって大勢の人間が犠牲になる可能性を考えれば止めない選択などありえないし、かといって何を目的として戦力を集めているか不明のルルーシュたちを止めるためにも古都コンスタンティンでの決戦に割り込むことを宣言する。それはここにいる全員の共通認識であり、怯みかけていた者たちも気を取り直すことが出来た。
「それにミスルギ皇国のあのクソ王子をぶちのめしてウェンディたちを助け出さなきゃならねぇしな」
「あぁ、ついでにユリカたちにいやらしい視線を送っていたエンブリ

ヲにもしっかりと仕置気をしなくてはな」
　そう言うのはダン・オブ・サーズデイのパイロットであるヴァンとブラックサレナのパイロットであるテンカワ・アキトを筆頭とした多元世界にてＺＥＸＩＳのように様々な部隊が集まって人類のために戦ってきたドライクロイツと地球艦隊・天駆のパイロットやその関係者たちはミスルギ皇国のジュリオとエンブリヲに対して怒りや殺意を隠さないものもチラホラいた。
　彼らがジュリオたちに対してそんな態度をとっているのも理由がある。
　次元震によってこの多元世界に飛ばされた際に突然の事態に動揺していたドライクロイツと地球艦隊・天駆をまるでそこに現れるのが分かっていたかのように待ち伏せしていたミスルギ皇国とその同盟戦力の襲撃にあい、強敵との戦いで疲労していたため反撃することが難しかったために部隊を分けて戦線離脱を図ったがそれによってドライクロイツと地球艦隊・天駆の代表であるミツバ・グレイヴァレーと沖田十三を含めた多くのメンバーがミスルギ皇国に捕まってしまったため彼らを助け出すために彼らの気合いは十分だった。特にアキトやガンダムＦ９１のパイロットであるキンケドゥ・ナウやフルアーマーユニコーンガンダムのパイロットであるバナージ・リンクスなどの一部のパイロットや艦長たちは自分たちにとって大切な女性たちを卑猥な目で見ていたジュリオやエンブリヲに対して情け容赦なくぶちのめす気満々だった。
「決戦まであと数日。それまでに我々もできる限りの準備を済ませておく必要があるな」
「ええそうですね。我々の戦うべき相手はルルーシュたちだけではない」
「ルルーシュとシュナイゼルを倒してもまだまだ人類の脅威は尽きませんものね」
　宇宙艦ガランシェールの艦長であるスベロア・ジンネマン、航空艦シグナスの艦長である倉光源吾、ＭＳ運用専用母艦エターナルの艦長であるラクス・クラインがそう語るのを聞いて誰もが固唾を飲む。事

実ラクスたちが言うように敵はルルーシュやシュナイゼルだけでないしそのどれもが強敵であり決して油断出来ない存在たちだ。むしろこれを好機として攻めてくる勢力が現れる可能性は充分有り得る。

「長い戦いが始まるな・・・」

アムロは　ニュータイプの勘なのか思わずそう呟いてしまう。そしてアムロの予想通りルルーシュやシュナイゼルたちとの戦いはこれから始まる永き戦いの序章に過ぎないことを、後に彼らは知ることになるのだった。

◆◆◆

第八話　開戦

旧神聖ブリタニア帝国首都・コンスタンティン。初代ブリタニア皇帝が納めていた頃は緑豊かな自然溢れる土地として繁栄を築いた都市だったが、第二代ブリタニア皇帝の息子たちによる次代の皇帝を巡っての争いと他国からの侵略戦争によって豊かな自然は見る見るうちに消えていき、そして第五代ブリタニア皇帝が誕生した時に彼の力が暴走したことをきっかけにコンスタンティンは滅びを迎え、生き残っていた者たちは恐れるようにコンスタンティンから遠く離れた地にある新天地を目指し新たに作りあげた首都こそが現在のペンドラゴン。

草木も枯れ果て枯渇した大地にかつて栄えていた名残であるかのように崩壊した都市と港には今、現代のブリタニア皇族であるルルーシュとシュナイゼルが向かい合い、それぞれ率いる軍によって陸海空の全てを多種多様な機体たちが埋め尽くさんばかりに並んでいた。

ライは自らの新しい愛機（剣）である機体のコックピットの中でモニターに映るシュナイゼルたちが用意した部隊を見据える。

大量のフレイヤを搭載しているだろう天空要塞ダモクレスを中心にしてログレス級浮遊航空艦、カールレオン級浮遊航空艦、ハーフビーク級戦艦、斑鳩、スキップジャック級戦艦などが半円形の陣形を取っているシュナイゼル軍は完全な混成部隊であった。

（敵はシュナイゼル率いる旧皇帝派のブリタニア軍、そしてディガルド武国軍と神聖ミスルギ皇国軍に・・・やはり、黒の騎士団が来たか）

ババロス島に潜伏し、ダモクレスの完成に力の大半を注いでいたシュナイゼル一党はビスマルクら《皇卓の騎士（ナイトオブラウンズ）》を除いて通常戦力に乏しく、あとは各地で生き残って抵抗を続けていた旧皇帝派のブリタニア軍のナイトメア部隊やその他艦船などの兵器をかき集めるだけかき集めてきたもの。一応、そのシュナイゼル一党の中にもエース級の騎士はいるにはいるが、コーネリアやナイトオブラウンズには遠く及ばないもの揃いで、せいぜい皇帝陵やヨコハマ租界などかつてルルーシュに愚かにも刃向かった旧公爵連合軍クラスのもの。あとは

寄せ集めの頭数に頼っただけの、どんぐりの背比べというに相応しい、お粗末な現状だった。
？これを補っているのがディガルド武国の大量のバイオゾイドとラスタル・エリオン率いるアリアンロッド艦隊、ジュリオがエンブリヲから新たに与えられた力である新型モビルドールたちと非戦闘員たちを人質に無理やり従えているドライクロイツと地球艦隊・天駆を含めた別世界の戦士たちだった。そしてゼロ追放の一件から一般団員たちからの支持が離れていく中何とか首の皮一枚を繋いだシュナイゼルとの共闘を約束した黒の騎士団の部隊もいる。さらにその後方にはＤｒ．ヘルの機械獣であるガラダＫ７やダブラスＭ２、キングダンＸ１０に酷似した機体たちが大量に待機していた。戦力として確かにかなり大きく立派なものであるが、中核となるダモクレスのシュナイゼルと、黒の騎士団現総司令の扇、ディガルド武国のジーン、アリアンロッドのラスタル、そしてミスルギ皇国のジュリオとの間で権限が分散しているのは、あまり好ましいことではないというのは、ライにも理解できた。果たして一個の軍隊として、どこまで統一された動きができるのか・・・。
（そして一方で、僕たちのブリタニア軍は・・・）
　これに対し、ブリタニア皇帝のルルーシュ軍は純正部隊である。ライも含めた《運命の騎士（ナイトオブフォーチュン）》十二騎士が率いる各個師団と、マリーベル・メル・ブリタニア率いる大グリンダ騎士団こそ損失は免れたが、帝都ペンドラゴンの消失によって内政機能が麻痺した本国との連携が難しくなったのは明らかな痛手だった。さらに、各植民エリアの常駐軍は、ライたち１２人の麾下にあたる各個師団の半数と共に他の超合集国連合軍も含めた残存する反乱勢力との対峙によって動きを封じられている。
　ここに揃ったのは、ゼハート・ガレット率いるガフランやバクトなどのヴェイガンのモビルスーツを中心に編成された第一機甲師団、アレン・フォルネウス率いるグレイズやランドマン・ロディなどエイハブリアクター搭載モビルスーツを中心に編成された第二機甲師団とそれに加わったヒナ・リャザン、ビゾン・ジェラフィル、アルフリー

ド・ガラント、タルジム・ヴァシリー、ラーシャ・ハッカライネンを中心としたゾギリア軍のヴァリアンサー部隊。モニカ・クルシェフスキー率いるギアス兵と化したロイヤルガードや皇族の私兵たち、ルルーシュに忠誠を誓った純血派や弱小貴族たちを中心としたサザーランドやヴィンセント・ウォードなどのナイトメアで編成された第三機甲師団。ルミナス・アルカディア率いる元ナンバーズや脱走した黒の騎士団によるモビルスーツやナイトメアを中心に編成された第四機甲師団とそれに加わったブラッド・ワッド大尉を中心とした北米同盟のＡＭＡＩＭ部隊。

ヴォルフ率いるデスレックスやスティレイザー、ストームソーダなど多種多様なゾイドと獣人たちのガンメンたちによって編成された第一機獣師団。エスデス・フリューゲル率いるギルラプターやダークホーン、スナイプテラなど多種多様なゾイドとザーツバルム伯爵とその傘下である火星騎士たちのカタクラフト部隊によって編成された第二機獣師団。

ミリアルド・ピースクラフト率いるかつてゼクス・マーキスとして付き従ってくれたＯＺの兵士たちとキア・ムベッキ、クン・スーンら率いるジット団、マスク、バララ・ベオール、マニィ・アンバサダを中心としたキャピタル・アーミィなどを加え、モビルスーツやモビルアーマーを中心に編成された第一混成師団。ティア・エリザベート率いるヒュッケバインＭａｒｋ―ＩＩやゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩ、多元世界の機体とアンジュやヒルダ、タスクたちアルゼナルのパラメイル部隊を中心に編成された第二混成師団。アリサ・ヴィエルジェ率いる量産型ゲッターロボ？α？や量産型グルンガスト弐式などのスーパーロボットやオダ・ノブナガ率いるイクサヨロイ部隊を加えてスーパーロボットたちを中心に編成された第三混成師団。

ウォーダン・ユミル率いるビルゴＩＩＩやトーラス、ジンクスＩＩＩなどのモビルドールとバン・バ・チュン大佐率いるノイエＤＣのリオンやバレリオン、ガーリオンなどのアーマードモジュール部隊を中心とした第一独立師団。グラハム・エーカー率いる元アロウズの兵士たちによるモビルスーツとモビルアーマー部隊。更にルキナ・ヘファ

イストスが開発した新型モビルスーツなどを加えた機体たちを中心に編成された第三独立師団。
　そしてモビルスーツやモビルアーマー、ナイトメア、パーソナルトルーパー、特機、ゾイドなどの中で特に優れた機体とパイロットたちによって結成されたルルーシュの親衛隊でもある第零騎士団。マクギリス・ファリド率いるギャラルホルンの改革のために立ち上がった若い将校たちで結成された革命軍。マリーベル・メル・ブリタニア率いる大グリンダ騎士団とルルーシュから貸し与えられたジェレミア・ゴッドバルトやロロ・ランペルージなどの優れた兵士たちだ。
　そして部隊の中心にルルーシュの旗艦にして戦略級巨大戦艦ウラヌスとそれを護衛するようにログレス級浮遊航空艦、カールレオン級浮遊航空艦、ホエールキング、ハンマーカイザーたちが並んでいた。
　しかしいずれも統制は取れたもので、一部はギアスで絶対の忠誠を誓わされた連中だが、ほとんどの兵士はルルーシュに付き従うことを自らの意思で決めたものたちだ。
　ルルーシュの命ならばその命を捨てることに躊躇いなど無いものばかりだ。しかしこちら側の問題点としては兵のほとんどが指揮官としての経験のない下級貴族であり上級貴族のほとんどがギアス兵となっているため個々人の精神の柔軟さを失った猪武者となっており戦闘指揮官として失格だった。それに対してシュナイゼルナイゼル軍本隊を構成する寄せ集めのブリタニア軍騎士や軍人、アロウズも含めたシャルル派の地球連邦の残党兵たちにも含まれている精鋭も頭数だけであとはどんぐりの背比べ程度だが、彼らも決して無能（おかざり）の戦力ではなく、さらに向こうには藤堂、ナイトオブラウンズ、エンブリヲ、ガエリオ、ゲオルグといった一線級、そして超一線級の指揮官がいて、侮れない相手であることに変わりはなかった。
　そしてもうひとつ懸念すべきなのは、ＺＥＸＩＳだ。先日、ナイトオブラウンズを離反したノネットらグリンダ騎士団が多元世界から来たクロガネやヒリュウ改、デューカリオンと共にＺＥＸＩＳに参加し、その精強さに磨きがかかったと聞いている。
（さて・・・勝利の女神は、どちらに微笑むことやら）

胸の中でそう呟いたライは、ゆっくりと指を噛んで、窓の向こうのダモクレスとシュナイゼル連合軍を見据える。決戦の趨勢はどう転び、そしてどちらに軍配があがるのか、この段階ではライはもちろん、誰にも全く予想がつかなかった。

？「ほう・・・これはこれは」

？ダモクレスの中枢司令室で状況を見守っていたシュナイゼルのところに通信が入ったのは、じりじりと互いに接近を続けていた両軍が戦闘可能領域に突入する直前のことだった。

「オープンチャンネルか。・・・フフ、我が弟ながら大胆なことだ」

受信の表示が流れた通信画面を見て、シュナイゼルは不敵に微笑み、カノンに指示を出した。カノンの操作でパッと画面が切り替わる。？映ったのは、白い皇帝衣装に身を包んだ黒髪の少年――――。

？『ごきげんよう――――シュナイゼル・エル・ブリタニア』

？ルルーシュ軍の中央後方に陣取る、新たに皇帝専用旗艦として創りあげられた戦艦《ウラヌス》の艦内なのであろうか。豪奢な椅子に座り、なぜか背後に1匹の黒猫を従えた神聖ブリタニア第９９代皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが優雅に、皮肉たっぷりに挨拶してみせた。

？ダモクレスを守るようにして、超級の護衛艦2隻と共にその前方に陣取っているダモクレスの正面に展開している旧皇帝派の精鋭ナイトメアフレーム部隊。？その中には、《皇卓の騎士（ナイトオブラウンズ）》専用機――――《第一席（ナイトオブワン）》ビスマルク・ヴァルトシュタインのギャラハッド、《第三席（ナイトオブスリー）》ジノ・ヴァインベルグのトリスタン、《第四席（ナイトオブフォー）》ドロテア・エルンストのパロミデス、《第五席（ナイトオブファイブ）》エルドナ・フォーレスのアレスタント、《第六席（ナイトオブシックス）》アーニャ・アールストレイムのモルドレッド、《第七席（ナイトオブセブン）》枢木スザクのランスロット・アルビオン、《第八席（ナイトオブエイト）》デシル・クォーバーのギラーガ・カスタム、《第十一席（ナイトオブイレブン）》アーカード・ヴァレンタインのサフィール、《第十三席（ナイトオブサーティン）》バレット・ギュスターヴのボールスの8機があった。？王位簒奪をした偽帝の討伐という大義のために、その先陣を切ろうとしていたシャルル・ジ・ブリタニア直

属の騎士団の目には、ルルーシュ軍の中央を守るようにして佇んでいる８機の多種多様な機体が映っている。
『フン、来たかシャルル・ジ・ブリタニアの飼い犬共が』
　超大型メイスを右手に構えるガンダムバルバタウロスシュトルゥムの外部スピーカーから聞こえるアレン・フォルネウスの声に、ナイトオブラウンズは表情を変えた。さらに
『あなた方が現れることは予想できた事だわ』
『その声は・・・！』
『モニカか!?』
　同じくその８機のうち、翡翠色を基彩としたカラーリングの２振りの赤黒い剣を構えたナイトメア《フローレンス・フィオーレ》の外部スピーカーから聞こえてきた女性、元《第十二席（ナイトオブトゥエルブ）》モニカ・クルシェフスキーの声に、ドロテアとジノが表情を変えた。
『流石は《皇卓の騎士（ナイトオブラウンズ）》とその直属部隊。大したものね』
『貴様っ・・・!!』
　さらにその８機のうち、ランスロットと似て非なる二本角を頭部に生やした重武装・重装甲の禍々しい右腕をした白銀のナイトメア《ベディヴィエール・ディアマンテ》の外部スピーカーから聞こえるアリサ・ヴィエルジェの小馬鹿にするような物言いにエルドナは操縦桿を握る手を強める。
『まさかこんなところで貴様に出会うとはなデシル』
『ゼハートっ・・・!!』
　そしてさらにその８機のうち、ガンダムレギルスのコックピットの中でギラーガ・カスタムに乗っている死に損ないの元兄であるデシルを見下すようにそう言うと、デシルは歯噛みしながらゼハートを睨みつけていた。
　そしてまた８機のうち、先頭に立つガンダムエピオンの外部スピーカーからミリアルド・ピースクラフトの声が聞こえてきた。
『お待ちしておりましたよ皇卓の騎士（ナイトオブラウンズ）の皆様。新帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアへの供物としてその命を捧げたまえ』
『ミリアルドさんっ・・・!!』

不敵な笑みを浮かべながらのミリアルドの歓迎呼び掛けにスザクは顔を歪める。
ガンダムエピオン、ガンダムレギルス、ガンダムバルバタウロスシュトルゥム、フローレンス・フィオーレ、ベディヴィエール・ディアマンテ。ルミナス・アルカディアが騎乗する深紅の大型ナイトメア《モルガン》をコアユニットとして稼働するナイトギガフォートレス《モルガン・アヴァリス》。ティア・エリザベートが騎乗する青紫色の準特機クラスの巨大ロボット《ゲシュペンスト・シヴァ》。グラハムが騎乗する赤と黒を基調としたカラーリングのソレスタルビーイングの《ガンダムエクシア》に酷似したモビルスーツ《ガンダムルシファー》が並び立つ。《運命の騎士（ナイトオブフォーチュン）》12騎士の8人が駆る8機の機体の威容さに、アーニャは息を飲んだ。
『どの機体も凄い力を感じる・・・』
『それにそこの黒いモビルスーツ・・・！乗っているのはアレン、お前なのか!?』
モルドレッドの外部スピーカーから漏れたアーニャのつぶやき、ジノの叫びに対してティアとアレンはそれぞれ答えた。
『ふふっ、あんな愚帝に仕えていた節穴の騎士たちかと思えば、ルルーシュ陛下が我々に与えてくださった機体の素晴らしさを理解する程度の頭は持っているようですね』
？『久しぶりだな、ジノ・・・。お前とはできればこういう形で再会はしたくなかったよ』
続けてミリアルドはガンダムエピオンのビームソードを構えながら告げる。
『本来ならばあなた方の御相手は我々が務めるのだが、君たちの相手は彼が務める』
ミリアルドがそう告げたのと同時にビスマルクたちとミリアルドたちの間の空間が斬り裂かれその隙間から現れたのは体の周りを12本の大型ソードビット兵器《クラウ・ソラス》が装備された背中に背負う巨大な白銀の十字架状のもので覆われた紺碧のカラーリングの騎士王を思わせる80m級の巨大な機体《アーサー・イルジオン》が

姿を現した。アーサー・イルジオンから放たれる圧倒的な威圧感に歴戦の戦士であるビスマルクたち皇卓の騎士（ナイトオブラウンズ）やその直属部隊ですら圧倒されていた。

『――――あなた方の相手は《終焉の騎士（ナイトオブゼロ）》であるこの僕とこのルルーシュから与えられた新たな剣――――アーサー・イルジオンが相手をしましょう』

アーサー・イルジオンの外部スピーカーから聞こえるライの声を聞いて、愕然となりかけていたところで、我に返ったスザクが再び大声で呼びかける。

『目を覚ませ、ライ!!クルシェフスキー卿とミリアルドさんたちも!!今なら、まだ戻れます!!』

『無能なる暗君（シャルル・ジ・ブリタニア）の騎士らしい傲慢で愚かな事だな枢木スザク』

グラハムが、冷たく吐き捨てるようにしてそう答えた。かつてブリタニア・ユニオンやアロウズで肩を並べて共に戦ってきたころには感じられなかったその冷たさと鋭さに、スザク、ジノそしてアーニャとドロテアは思わず息を呑んだ。

『シャルルとシュナイゼル、そしてナナリーとコーネリアのように愚かなる皇族と貴族が創り上げたブリタニアのせいで、かつてのルルーシュ陛下も含めた無国之民たちが血と涙をこの世界に流し続けた。「競い、奪い、獲得し、支配せよ。その先に未来がある」――――生殺与奪を体現したそのブリタニアの文化には虫唾が走り、その文化を広めてきたシャルル・ジ・ブリタニアにこの身とこの剣を迷うことなく捧げてきたかつての私自身には、羞恥と怒りしか覚えるものがない』？『その通りだ。シャルル・ジ・ブリタニアによって毒された帝国と地球連邦は、今日ここで終わりを迎えなければならない。あるべき世界、あるべき秩序へと戻る為にも、ルルーシュ陛下が新たなる皇帝と地球連邦の代表に立たなければならないのど。それは先のペンドラゴンにおけるシュナイゼルとナナリーの暴挙はもちろん、シャルル・ジ・ブリタニアの歴史を見ても一目瞭然・・・！旧悪なるブリタニアの時代は、我々とルルーシュ陛下によって終焉を迎える運命にある!!』

？『っ・・・・！』
　モニカとミリアルドに勢いよく論破され、スザクは言葉を失った。
『それらを踏まえれば、目を覚ますのは君たちの方だよ・・・スザク』
　そこへライが、冷然とした声でスザクに追い打ちをかける。
『君たちがブリタニアに忠誠を誓うのであれば、モニカやあへゆさゆたちと同じく僕の仲間になるべきだ。敵同士に戻った関係とはいえ、僕もできることなら、君たちを撃つという真似はしたくはない。そしてそれを踏まえて最初に一度だけ言っておくが・・・君たちでは、僕とは勝負にはならない。これまでの戦いを知っているのならば』
　さらに冷然とした声で告げてきたライに、スザクもランスロット・アルビオンのコクピットの中で気圧されそうになった。？ジノ、アーニャ、ドロテア、デシル、アーカード、バレットもともに気圧されかけた、その時だった。

◆◇◆◇◆

『――――そこまでだ、ライ!!』
？スザクたちの怯懦と困惑を断ち切るかのように、ビスマルクが一喝を飛ばす。
『我等はシャルル陛下に忠誠を誓った存在・・・！シャルル陛下の帝国が腐敗と堕落に満ちているという侮辱（きめつけ）は断じて見過ごせん！　そしてその［侮辱＞きめつけ］で旧恩を忘れてシャルル陛下を捨て、帝国を破壊する貴様らと簒奪者ルルーシュは討つ!!』
？『・・・ヴァルトシュタイン卿か』
　さらに鋭く重い一喝を飛ばすビスマルクに応えるように、ライがアーサー・イルジオンを進める。？それに対して、ビスマルクもギャラハッドをアーサー・イルジオンの前へ進めた。
『ライ！シャルル陛下の恩情で拾われた身でありながらその主君を裏切ったその罪!!その命で贖って貰うぞ!!』
　ビスマルクはそう叫びながらギャラハッドの背中に背負うシャルル・ジ・ブリタニアが命名した、旧帝国を守護する聖剣として伝わり

し紫紺の剛剣《エクスカリバー》の剣先をライが騎乗するアーサー・イルジオンに向ける。それに対してライはギャラハッドを冷酷な瞳で見下しながら異次元から取り出した紅と蒼の2振りの大剣を両手に構える。

『生憎だけど、僕が心から忠誠を誓っているのはルルーシュただ1人だけだ。あんな老害に心から忠誠を誓ったことなど一度たりとてない』

『貴様っ!!』

主君であるシャルルを愚弄されたことにビスマルクは今すぐにでも斬りかかりそうになるのをグッと堪え、操縦桿を握る手を強めた。

『短い間とはいえあなた方とは共に戦場を戦ってきたよしみとして、貴様らが忠誠を誓った無能なる暗君（シャルル・ジ・ブリタニア）の言葉（おしえ）に従い、勝利を持って示そう――――正義は我々にあると!!』

『簒奪者の騎士如きがほざくか・・・!!いいだろう、シャルル陛下に背きし背徳者ども。貴様らに世を生きる道理はもはや皆無なり!!』

それ以上の言葉は要らないとばかりに二人の間にしばしの静寂の時が流れた。そしてゴトッと廃城から崩れ落ちた瓦礫の音をきっかけにギャラハッドはフローユニットを、アーサー・イルジオンは水色の12枚羽のエナジーウイングを稼働させ互いに突進させた。

最初に動いたのは、アーサー・イルジオンだった。背部のエナジーウイングから、ギャラハッド目掛けて蒼玉の光弾と両肩部の大型多目的キャノン砲《ブリューナク》から放たれるハドロンガトリングによる連射が放たれる。

しかし、ギャラハッドはエクスカリバーでそれを薙ぎ払って受け流した後、お返しに右手のスラッシュハーケンを放つ。これを見たアーサー・イルジオンは回避しようとしたが、そのスラッシュハーケンに右腕を捕らえられた。すぐに、しかも的確に。

『っ――――!!』

驚きを隠せないライは、なんとかそのスラッシュハーケンを振り解き、距離をとる。

『アーサーの軌道を読まれた・・・!』

そう叫びながら、ライがアーサー・イルジオンを再度ギャラハッドに向かわせた時。？・ギャラハッドのコクピット内で、ビスマルクの片目が赤く輝いていた。

『我がギアスは、未来を読む・・・！』

　そう唸ったビスマルクには、ライ――――アーサー・イルジオンが次にどう攻撃してくるかが、スローモーションではっきりと目に見えていた。？《未来視》のギアスの通り、真っ向から突っ込んできたアーサー・イルジオンの紅の大剣《バルムンク》による斬撃を、エクスカリバーでがっちりと受け止め、弾き飛ばした。

『この力、マリアンヌ様以外に使うことがあろうとはな!?』

　不敵に笑いながら、ビスマルクは引き続き未来視での先読みを繰り返しながら、アーサー・イルジオンと壮絶な空中戦を繰り広げ、僅かだが着実に追い詰めにかかった。皇卓の騎士(ナイトオブラウンズ)たちとその直属部隊、そして後方のダモクレスでモニター越しに戦闘を見ていたシュナイゼルもビスマルクの勝利は揺るが無いものと思い始めていた。

『――――未来を読むギアス。確かに強力な力だ。ヴァルトシュタイン卿の技量も合わさってかなり厄介だな』

　アーサー・イルジオンのコックピットの中でギャラハッドによる猛攻を捌きながらライそう呟く。その表情には焦っている様子はなくどこまでも冷静だった。

『もし初めて相手をするなら苦戦をしただろうな。だけど』

　――――未来を読む程度の相手なら、既に殺したことのある相手だ《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》。

『っ!?』

　アーサー・イルジオンの纏う空気が変わったのを感じたビスマルクは距離をとるように後方に下がった。しかし、それを許さないとばかりにアーサー・イルジオンは一気に加速するとギャラハッドにエナジーウイングから蒼玉の光弾を放ちながら接近するのを未来視(ギアス)でそれを読んでいたビスマルクはエクスカリバーで切り払いながら防御

する。そしてギャラハッドに接近したアーサー・イルジオンが横薙ぎに振るった蒼の大剣《デュランダル》をエクスカリバーで受け流す。
『無駄だ!!何度やろうとわがギアスの前では貴様の攻撃など――』
ビスマルクがそう吠えたのと同時にギャラハッドの両足が突如斬り落とされた。一瞬、何が起こったのか分からないビスマルクは目を見開いてしまうとその隙を見逃す訳もなくアーサー・イルジオンはギャラハッドの胴体を殴り飛ばした。
『ぬぅぅぅぅぅっ!?』
殴られた衝撃のあまりの強さに口端から血を流しながら何とか堪えたビスマルクはギャラハッドにエクスカリバーを構えさせながらアーサー・イルジオンを睨む。
『――――確かに《未来視》のギアスは強力なギアスだ。それだけで大抵の敵なら倒せてしまう。だが』
アーサー・イルジオンの周囲を舞うように浮かぶ12の大型ソードビット《クラウ・ソラス》を操りながらライは淡々と告げる。
『それはあくまでも自らの視界に映る未来を読む程度でしかなく、今のように視界外からの攻撃は読めない』
『くっ!?』
『そして』
クラウ・ソラスを周囲に展開させながらアーサー・イルジオンはギャラハッドに接近するとバルムンクとデュランダル、そして12本のクラウ・ソラスによる同時の剣戟の嵐がギャラハッドに放たれる。ビスマルクはこれを未来視(ギアス)で未来を読みながらエクスカリバーで捌こうとするが、
『ぐおぉぉぉぉぉっ!!』
『圧倒的な手数の前じゃ、例え未来を読んだところで防ぎきれるわけもない』
ライの言う通り、未来を読んでいるビスマルクは致命傷となる攻撃は何とか防いでいるが、圧倒的な物量による攻撃にギャラハッドの装甲は抉れ、斬り裂かれていき段々と見るも無惨な姿へと変わっていった。

『はぁ・・・!はぁ・・・!』
『これで終わりか？第一席（ナイトオブワン）』
　幾度かの衝突を繰り返し再び互いに距離とった両機だが、戦闘前に比べてその様子は異なっていた。ギャラハッドは両足を失い、一部の装甲は剥がれ落ち、装甲にヒビが入り機体のあちこちからスパークと火花が走っていた。それに対してアーサー・イルジオンの装甲には傷一つなく、戦闘開始前と何ら変わらない健在の姿を見せつけていた。それはまるで《第一席（ナイトオブワン）》と《終焉の騎士（ナイトオブゼロ）》の圧倒的な力量差を見せつけられているようでシュナイゼルたちの間に動揺と恐怖が広がっていた。
『さて、何か言い残すことでもありますか？』
　ライは外部スピーカーからビスマルクにそう尋ねながらバルムンクの剣先をギャラハッドに向ける。
『舐めるなっ!!まだ、勝負はついていない!!』
　ビスマルクはそう叫びながらギャラハッドが握るエクスカリバーを大きく構えるとアーサー・イルジオンに斬りかかる。それをライは冷めた目で見下ろすとバルムンクを振り下ろし、エクスカリバーを真っ二つに両断した。
『うお・・・っ・・・』
　ビスマルクの目が、顔が、心からの驚愕に引き攣った。
『聖剣（エクスカリバー）が、砕けた・・・だと？バカな・・・。シャルル陛下が、銘付けられた・・・帝国最強（ナイトオブワン）の剣が・・・!?』
　目の前でエクスカリバーを真っ二つに両断されたビスマルクはその現実に驚愕し動きを止めてしまう。その隙を見逃すライではなくデュランダルを構えるとギャラハッドに向ける。
『シャルルやマリアンヌのように過去に縋る愚か者よ、過去の栄光と共にここで滅びろ、ビスマルク・ヴァルトシュタイン』
　ライの声が、冷徹にそう告げるのと同時にギャラハッドの頭上からデュランダルを振り下ろしたその刹那。
『――――させない!!』

正面からエナジーウイングで全身を覆ったランスロット・アルビオンがアーサー・イルジオンの胴体に衝突し、攻撃の瞬間だったライはその攻撃を避けることも出来ず衝動した衝撃で数メートル後方に下がらされてしまった。
『ライ!!これ以上君の好きにはさせない!!』
スザクはそう叫びながらランスロット・アルビオンは2本のMVSを引き抜き、アーサー・イルジオンに斬りかかる。ライはその攻撃をデュランダルで受け止めながらスザクを冷たく見下ろす。
『スザクか。ハイエナ風情が僕の相手が務まるとでも思ってるのか？』
『なら、私たちの相手もしてもらおうじゃないか!!』
ジノがそう叫びながらアーサー・イルジオンに向けてハドロンスピアーを放つ。それとほぼ同時に別の場所からアーニャのモルドレッドのシュタルクハドロン砲とドロテアのパロミデスのフィンガーハドロン砲が放たれる。三方向からによる圧倒的火力の砲撃は蜃気楼の絶対守護領域すら破壊しうる威力であり、まともに喰らえばアーサー・イルジオンといえどタダでは済まないだろう。しかし
『その程度の攻撃が、通用すると思っているのか!!』
迫り来る3つのハドロン砲をライはクラウ・ソラス3本を動かし、真っ二つに斬り裂いた。斬り裂かれたエネルギーは霧散し、ライはランスロット・アルビオンを弾き飛ばすと一旦距離を取ろうと上空に上がる。
『おっと、そうはさせねぇよ』
しかしいつの間にか上空に待機していたギャラハッドの兄弟機である細身の長剣《カラドボルグ》と盾を構えた灰色のナイトメア《ボールス》とパーシヴァルの兄弟機であるより鋭利的な装甲をしている対ナイトメア専用大型ランスを構えた白亜色のナイトメア《サフィール》、サグラモールの同型機である対ナイトメア専用大型ハルバードを構えた銀色のナイトメア《アレスタント》の3機が各々の機体の武器を上空に上がってくるアーサー・イルジオンに対して武器を振り下ろしにかかる。

『舐めるなっ!!』
　それに対してライはアーサー・イルジオンのバルムンクを横薙ぎに振るい、ゲッター線を帯びた翡翠色の斬撃の衝撃波をボールスたちに向けて飛ばしながら横に避ける。迫り来る斬撃に対してバレットはボールスの握るカラドボルグから同じように斬撃の衝撃波を飛ばすことで軌道を逸らし何とか攻撃をかわす。攻撃をかわした隙をつこうとアーサー・イルジオンの背後に回ったのは、かつてゼハートの指揮官機として使われたモビルスーツである《ギラーガ》を、デシル専用に改良された黒く染め上げられた《ギラーガ・カスタム》が《ギラーガスピア》を構えて突き出して来たが、その程度の攻撃に遅れをとることもなくライは機体を反転させギラーガ・カスタムのギラーガスピアの槍先が届くよりも先にその胴体を蹴りあげるとギラーガ・カスタムの胴体の装甲を歪ませながら後ろに蹴り飛ばされた。そしてライが体勢を立て直した時には半壊しているギャラハッドを支えるスザクの親衛隊であるコノエナイツのメンバーであるレド・オフェンのヴィンセント・ブレイズとシュネー・ヘクセンのヴィンセント・スナイプの前にアーサー・イルジオンに立ち向かうようにスザクのランスロット・アルビオン、ジノのトリスタン、アーニャのモルドレッド、ドロテアのパロミデス、バレットのボールス、アーカードのサフィール、デシルのギラーガ・カスタムが並び立っていた。
『シュネー、レド。２人はヴァルトシュタイン卿を連れてダモクレスに帰還しろ』
『っ。イエス・マイ・ロード』
『枢木卿もお気をつけて』
　スザクはシュネーとレドに対してそう命令すると、一瞬シュネーは何か言いかけそうになったがここに残っても何の役にも立てないことを先程の短い戦(蹂躙)いを見せつけられたシュネーは理解してしまっていた。レドはスザクたちの武運を祈りながらそのままシュネーと共にギャラハッドを連れてダモクレスへと後退する。
『愚かな。折れた剣を守って何になる』
　ライは既にビスマルクを敵として見なしていないのか撤退してい

くギャラハッドには目も向けずスザクたちに向き直る。
『まぁいい。残りの剣も今ここで叩きおってやろう』
ライはそう一方的に告げるとバルムンクとデュランダルを収納し、両手の《ディメンションブレイクハンド》を青白い冷たい光をたぎらせながらランスロット・アルビオンたちに向かって突撃させる。
『調子に乗ってんじゃねえぞ!!Xラウンダーでもない雑魚がっ!!』
それに真っ先に反応したデシルはライを見下すように叫びながらギラーガ・カスタムを駆り出しギラーガビットを展開しながらギラーガ・スピアで構える。その際にデシルの配下である首輪に爆弾をつけられた奴隷部隊のゼダスMとガフランをクロノスに搭載していた機体操作能力を引き継いだギラーガ・カスタムがゼダスMたちを操り、自らの前に展開させながらアーサー・イルジオンにビームを乱射させる。それをアーサー・イルジオンは右手の輻射波動を障壁のように展開して防御しながら左のディメンションブレイクハンドに3つの輪っか状のワームスフィア《ワームリング》を展開させるとそのまま投げ飛ばし、ゼダスMやガフランたちの装甲を紙のように切り裂き次々と爆散していく。
『デシルの奴!!勝手に動きやがって!!』
『仕方がない。我々も続くぞ!!』
ジノとドロテアは勝手に先行したデシルに対して悪態を告げながらも機体をアーサー・イルジオンに向けて飛ばし、それに続くようにスザクたちラウンズメンバーとその直属部隊のサザーランド・エア、グロースター・エア、ヴィンセント・ウォード、ガレス、サザーランド・イカロス、ジンクスIII、アヘッド、ビルゴIII、トーラス、ウィンダム、ダガーLなど多種多様な機体がアーサー・イルジオンに一斉攻撃をしかけながら迫ってきていた。
しかしその程度の攻撃で落とせるほどライは甘くなく迫ってくる敵機をディメンションブレイクハンドやブリューナク、クラウ・ソラスで撃破していく。しかし、流石に数が多すぎるのか鬱陶しいと感じたライはアーサー・イルジオンの［［ｒｂ：第２炉心＞・・・・］］を稼働させた。

『全てを飲み干せ!!ゲッター・ストーム!!』
アーサー・イルジオンが翡翠色のツインカメラアイを輝かせるとアーサー・イルジオンを中心にゲッター線による翡翠色の巨大な嵐《ゲッター・ストーム》を発生させ、その嵐はスザクたちラウンズメンバーの機体と直属部隊たちを飲み込み、飲み込まれた機体は次々と切り裂かれ、爆散し、或いは味方同士の衝突などによって次々と撃沈していき、嵐が解除された時には直属部隊の半数以上が破壊され、スザクのランスロット・アルビオンを除いたジノたちラウンズメンバーや残りの直属部隊の機体はフロートユニットや四肢を破壊された状態で地面に転がっていた。
『流石はロイド・アスプルンドの最高傑作とでも言おうか。だがその状態で僕の相手が務まるとでも思っているのか?』
ライが言うように、今のランスロット・アルビオンの装甲は傷だらけになり、MVSが1本折れスーパーヴァリスも破壊され、右のエナジーウイングの一部が破壊されていた。
『それでも!!』
スザクは両目に赤いギアスの輝きを放つと、ランスロット・アルビオンは縦横無尽に動き回りながらアーサー・イルジオンをすり抜ける度にMVSで斬りかかりその装甲に傷をつけていく。ライもそれに対抗するようにクラウ・ソラスとブリューナク、ワームリングで反撃をするが先ほど以上のスピードと軌道に攻撃は尽くかわされていた。
『まさかスザク、ルルーシュのギアスを逆手にとっているのか!?』
スザクはルルーシュの絶対遵守のギアスによって『生きろ』というギアス(呪い)をかけられ、それによって死にたがりだったスザクは自らの意思で死を選ぶことも出来なくなっていた。だが今のスザクはその力を逆に利用して自らの潜在能力を極限まで引き起こす力として、圧倒的な力を発揮させていた。
『ライ!僕は君を倒して、ルルーシュを止める!!』
スザクはそう叫びながらランスロット・アルビオンのエナジーウイングから翡玉の光弾を乱れ打ちながら撹乱するように動かし、アーサー・イルジオンを攻撃する。一方的にスザクがライを責めているよ

うに見えるが、ランスロット・アルビオンの攻撃はアーサー・イルジオンの装甲を浅く傷つける程度でしかなく、決定的な打撃を与えられていない上に先程のゲッター・ストームを全身を覆うブレイズ・ルミナスで防御したことでエナジーの残量は４割も削られこのまま持久戦に持ち込まれればスザクが圧倒的不利な状況だった。起死回生の一手を狙うスザクは機体を動かしながらもアーサー・イルジオンの挙動を見過ごさず、決定的な一撃を与える瞬間を狙っていた。

『驚いたよスザク・・・まさかギアスを逆手にとってこんな闘い方をしてくるなんて。だけど』

ライはコンソールを入力するとクラウ・ソラスの刀身部分をパージさせ、刃の部分のみとなったソードビットと鍔から発生させたビームソードビットに分断させビットの数を倍に増やした。

『それだけで勝てるほど《一終焉の騎士一ナイトオブゼロ》は甘くない』

『――――っ!?』

ライの絶対零度の如く冷たい声色に、背筋が凍るようなゾッとするような感覚を感じたスザクは頭で考えるより先に操縦桿を動かしランスロット・アルビオンをその場から離脱させた。その瞬間、先程までランスロット・アルビオンがいた場所を風切り音を奏でながらソードビットによる１２の刃が通り過ぎた。さらにランスロット・アルビオンを追いかけるようにビームソードビットがビームを放ちながら接近してくるためスザクは必死にエナジーウイングの翡玉の光弾で相殺させながら相殺しきれなかったビームをかわすが、視認できないほどの速さで迫るソードビットが容赦なくランスロット・アルビオンの装甲を切り裂き、防御に使用したスラッシュハーケンも全て砕かれ右翼のエナジーウイングも斬り落とされたボロボロの状態になっていた。それでも尚スザクはまだ諦めていないのかその瞳に闘志を宿しながらＭＶＳの剣先をアーサー・イルジオンに向ける。

『まだ抗うんだね。実力の差をその身をもって分からされているというのに・・・』

『まだ終わっていない!!ナナリーのためにも君を倒し、ルルーシュを

止めてこの戦いを止めてみせる!!』
　スザクは決死の思いを込めてそう叫ぶがそれを聞いてもライの心に何も響くものは無いし寧ろスザクに対して失望したのかその目は冷たいものとなっていた。
『ナナリーのため、か・・・相変わらず他者を言い訳に戦っているねスザク』
『違う!!これは僕自身の意思で――』
『違うよ。君は自分の意思で戦ったことなんて一度たりともてない。今までだって上官の、ユーフェミアの、シャルルの、シュナイゼルの、ナナリーのと他者からの命令を何の疑問もなくただ傀儡のようにそれを実行してきただけでそこに自分の意思なんて欠片もないだろう』
『違う!!』
　スザクはライの言葉を振り払うように叫びながらランスロット・アルビオンのMVSを振るわせるが、ライは元の状態に戻したクラウ・ソラスでそれを弾きながら続ける。
『その方が君にとって都合がいいからね。何も考えず、ただ言われたことだけを実行する。他者を言い訳に戦う理由を探す君にとってこれ程ありがたいものはないだろう?』
『違う!!』
　ライの蔑みを必死に否定しながらスザクは得意技である脚撃を放つが右足がアーサー・イルジオンの頭部に当たるよりも先にクラウ・ソラスが右足を切り落とす。そしてライは決定的な一言をスザクに告げる。
『まぁそれも仕方がないか。―自らの手で父を殺した君にとって生きていくのは地獄のようなものだったのだからね
《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》』
『――――!?』
　ライから告げられた真実(死刑宣告)にスザクは顔を青ざめさせ、操縦桿を握る手が震えていた。そしてその事実はスザクだけでなくルルーシュやC.C.、《運命の騎士(ナイトオブフォーチュン)》やトレーズなど一部の人間たちを除いたこの戦場にいる全ての人間を驚愕させる程のものだった。

『枢木スザクの父親にして日本最後の内閣総理大臣であった枢木ゲンブ。最後まで徹底抗戦を唱えながら真っ先に自決されたと言われているが、真実はそうじゃない』

ライは大袈裟にアーサー・イルジオンの両腕を広げながら戦場にいる全ての者たちに聞こえるように語り始める。

『枢木ゲンブは自らの権力を広げるためにブリタニアに日本を売り渡し、ルルーシュの命を条件にブリタニアでの地位を得ようとした薄汚い売国奴であり、その事実を知った枢木スザクの手によってその命を落とした』

ライは嫌悪を隠さずそう告げた瞬間、黒の騎士団などの日本人たちはその真実に驚愕し目を見開かせてしまった。そんな黒の騎士団を無視してライは話を続ける。

『当時のキョウト六家の中で枢木家のそこまで高いものではなかった。故に枢木ゲンブはその地位を高めるために当時日本に人身御供として送られたルルーシュとナナリーの２人の存在を疎ましく思っていた連中と手を組み、ルルーシュの命とナナリーを自らの玩具にすることを条件に敗北することがわかった上で占領された日本での地位を得ることを確約されていた』

ライが淡々と事実を語る度にスザクはランスロット・アルビオンのコックピットの中で顔を青ざめ、父親を自らの手で殺した事実を語られ、恐怖し体が震えＭＶＳを構えていた腕も下がっていた。

『その事実を知った君は一度は父を止めようとした。しかしその程度で止まる訳もなく、君はルルーシュとナナリーを助けるためにその命を奪った』

真実を言われ、まともに思考も出来なくなっているスザクにゆっくりとアーサー・イルジオンを近づける。その際にマシンセルによってランスロット・アルビオンによって傷つけられた装甲は復元していき、ランスロット・アルビオンの前まで来た時には完全な姿へと復元していた。

『父を自らの手で殺した罪、そしてそれによって多くの日本人が死んでいったことで君は過程を求めるようになった。だけど』

ライは冷たくスザクを見下ろしながらアーサー・イルジオンのディメンションブレイクハンドを掲げると青白い閃光を放つ。
『過程に拘った結果、君は何も得ることが出来なかった。日本人を裏切り、故郷を取り戻そうとするものたちを殺し、大切なものすら何一つ守れなかった。それが君の今まで選択してきた結果だ』
『――――――っあ』
ライは冷酷な宣言を告げながらディメンションブレイクハンドをランスロット・アルビオンに振り下ろしてくるのを虚ろな目をしたスザクはかわす気力すらわかないのかアーサー・イルジオンの右腕が迫ってくるのをただ眺めていた。だが
『――――スザクっ!!』
死を受け入れようとした瞬間、後方から聞こえてきた叫び越えにハッとしたスザクにアーサー・イルジオンのディメンションブレイクハンドが当たる寸前、ランスロット・アルビオンの胴体をトリスタンのメギドハーケンが絡まり後ろへと引っ張られたことでその攻撃をかわすことが出来た。
『ジノか。だが無駄だ』
ライは右角が折れ、両脚部を失ったトリスタンを見ながらそう呟くがそのままメギドハーケンに絡まっているランスロット・アルビオンとトリスタンに向けて輻射波動を放ち、紫電を纏った青白い巨大な閃光がランスロット・アルビオンとトリスタンを飲み込まんとばかりに迫った。
『させないっ!!』
ランスロット・アルビオンとトリスタンの前に割り込むように右肩を失ったモルドレッドを飛ばしたアーニャは3機を覆うようにブレイズルミナスを展開して防御する。一瞬の拮抗を見せたかと思えばそれも無駄足掻きとでも言うかのようにライは輻射波動の出力を少し上げるとそれだけでモルドレッドのブレイズルミナスにヒビが入り始め、機体の関節部が悲鳴を上げ始めた。
『えっ・・・ブレイズルミナスが・・・!?このパワーは!?』
そしてとうとう耐えきれなくなったモルドレッドのブレイズルミ

ナスが砕け散ると同時にモルドレッドとランスロット・アルビオンを支えていたトリスタンのフロートユニットが損傷による過負荷に耐えきれず爆発し、３機はそのまま地面へと衝突するように落下していった。
「ラウンズが・・・全滅・・・!?」
「これが、ルルーシュの筆頭騎士ライの実力・・・!?」
ダモクレスの司令室のモニターから、《皇卓の騎士(ナイトオブラウンズ)》とその直属部隊がたった一機によって壊滅させられたのを見てディートハルトとカノンは驚愕に目を見開いていた。その中でシュナイゼルは冷静に戦局を立てていく。
「枢木卿はともかくヴァルトシュタイン卿たち他のラウンズたちは機体の予備パーツがあるからまだ問題はないとして、流石はルルーシュが選んだ騎士なだけはあるね」
慌てた様子もなく微笑みを浮かべる冷静な主君を見て落ち着いたのか、カノンはシュナイゼルに振り返る。
「いかがなさいますか、陛下」
「ああ」
シュナイゼルは、落ち着き払っていた。まるで、この状況も想定の範囲内であると言いたげに。
?「・・・なかなかに強力なエースを集めてきたものだね、ルルーシュ。だが、ラウンズはあくまでただの前座(挨拶)程度。本番は、ここからだ」
「予定通りとはいえこうも呆気なく敗れるとはな。これは《皇卓の騎士(ナイトオブラウンズ)》が情けないのか、それともそれ程までにライが強すぎたということかな?」
ウラヌスの艦橋の最上部にある玉座からライが皇卓の騎士たちを圧倒する姿をモニター越しに見ていたルルーシュは笑みを浮かべながらそう呟く。その後ろで同じようにライの戦う姿を見ていたルルーシュの護衛として待機していたマリーカたちルルーシュ親衛隊はライの圧倒的なまでの力に息を飲んでいた。
「陛下・・・!・このエリアにシュナイゼル殿下とは別の部隊が来ます!!」

同じく艦橋にいて、オペレーター席のひとつに座っていたノエル・フリュンドがモニターを見て慌てたような大声で報告した。
それを聞いて、ルルーシュは表情を一気に険しくした。
「来たか――――ＺＥＸＩＳ!!」
「ほほう・・・。まさに真打ち登場、といったところですな」
天空要塞ダモクレスの司令室で、モニター越しについにその姿を現した第三の勢力を見て、ディートハルト・リートが目を細めた。
指揮官席に座っているシュナイゼルも、軽く笑った。
「さて、彼らは私につくのか?それともルルーシュに・・・」

◆◆◆◆◆◆

古都コンスタンティンの旧城にダモクレス、ハーフビーク級戦艦、ディグを中心にして部隊を布陣する北のシュナイゼル軍。草木も生えぬ荒野にウラヌスを中心にして部隊を布陣する南のルルーシュ軍とは、東南方向の山間部からＺＥＸＩＳが姿を現した。
プトレマイオス2、マクロス・クォーター、ドラゴンズハイヴ、真ゲッタードラゴン、エターナル、ネェル・アーガマ、ラー・カイラム、イサリビ、ホタルビ、シグナス、メガファウナ、ゴディニオン、ガランシェール、アークエンジェル。そして先日新たに加わったグランベリー、クロガネ、ヒリュウ改、デューカリオンといった１８隻の戦艦を中心に１００機を超える機動兵器たちとＺＥＸＩＳの協力者となったジーン討伐軍のゾイド部隊と鉄華団及びオーブ、ザフトのモビルスーツ部隊などが半円形の陣形を組んでいる。
「――――各機へ！　我々はＺＥＸＩＳとして、この戦闘に介入します!!」
?プトレマイオスの艦橋の指揮官席から、スメラギ・李・ノリエガがマイクを片手に周囲の友軍、そして東西のふたつのブリタニア軍に向かって、こう宣言した。

？「攻撃対象は――――ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア率いるブリタニア軍、そしてシュナイゼル・エル・ブリタニア率いる旧皇帝派連合軍の両軍です!!」

「やはりこうなりましたか」

「驚くことではあるまい。奴らの中にはあの《自由条約連合》の他にも、スメラギ・李・ノリエガが身を置くソレスタルビーイングもいるのだからな」

　ウラヌスの格納庫にてルルーシュの最終兵器のチェックを行っていたシュウ・シラカワとゾギリアの科学者であるヴィルヘルム・ハーンはスメラギの宣言を聞いても大した驚きを見せずその手を動かしていた。

「しかしＺＥＸＩＳも相手をするとなるとこちらの戦力はかなり削られてしまうね」

「うむ。数でいえば最も少ないがそれ以上に質の高い連中ばかりじゃからのう・・・」

「心配ないよ」

　元アロウズのモビルスーツ開発主任であるビリー・カタギリと敷島博士はＺＥＸＩＳの登場に僅かばかり顔を顰めるが、それをブカブカの白衣を着た茶髪のショートカットの少女――ルキナ・ヘファイストスが口角を上げて笑みを浮かべながら告げる。

「陛下を守る１３の剣とこの守護神が存在する限り、我々に敗北などありはしないよ」

　ルキナはその瞳に狂気を宿しながら彼女らの前に佇む禍々しき邪神を彷彿させる機体を見上げるのだった。

　同じ頃、シュナイゼル軍の右翼にいた黒の騎士団にも、動揺が広がっていた。

「ＺＥＸＩＳ！　お前らまで、ゼロ（ルルーシュ）と同じ俺たちの敵になるっていうのかよ!?」

？「やめろ、玉城。これは俺たちが選んだ道なんだ・・・！」

スメラギの宣言を聞き、モニターに映ったＺＥＸＩＳの艦隊を見てやるせ無い表情で大声を張り上げる玉城を、扇が同じくやるせ無い表情で言葉で押し留める。

黒の騎士団の後方に配置された舞台の中心に布陣するドライストレイガーの艦橋でスメラギの宣言を聞いていたミツバ・クレイヴァレーはＺＥＸＩＳの中にドライクロイツのメンバーであるエッジやアズたちの姿を見て胸元で両手を握りしめながらその顔を悲痛そうに歪めていた。

「エッジ・・・アズ・・・みんな・・・っ!!」

『二手に分かれて、武力介入を開始します！　プトレマイオス２、シグナス、メガファウナ、グランベリー、真ゲッタードラゴン、ドラゴンズハイヴ、イサリビ、ホタルビ、クロガネは北のシュナイゼル軍の本隊！　ラー・カイラム、ネェル・アーガマ、ゴディニオン、ガランシェール、エターナル、アークエンジェル、マクロス・クォーター、ヒリュウ改、デューカリオンは南のルルーシュ軍の本隊へ向けて進撃!!』

？『両軍と戦いつつ、最終攻撃目標はフレイヤを擁する天空要塞ダモクレスとする！　なんとしてでも、フレイヤによる悲劇は絶対に食い止める――――!!』

スメラギとブライトが、プトレマイオス２とラー・カイラムの艦橋からそれぞれ指示を飛ばす。？そしてスメラギとブライトをそれぞれ指揮官とする形でＺＥＸＩＳは二手に分かれ、北と南のブリタニア軍へと進軍を開始した。

「・・・もう少し考える頭があるかと思ったが、所詮君たちも感情に流されるだけの存在。つまりはコーネリアと同じく、その程度の器でしかなかったということか」

ダモクレスのシュナイゼルは、大仰に溜め息をついた。

「モニカ。手筈通り、前線及び作戦の指揮は任せたぞ」

？『イエス・ユア・マジェスティ』

ウラヌスの艦橋から、ルルーシュがモニカに指示を送り。
『僕は本隊に一度戻ります。ゼハート、モニカ、グラハム、ティア、ルミナス、ミリアルド、レイン。奴らに皇帝陛下に逆らったことの愚かしさをその命をもって思い知らせてやれ』
『『イエス・マイロード!!』』
後方で待機しているウラヌスの同型艦である第零騎士団専用戦略級巨大戦艦《アトラス》へ後退しながらライが通信を送ると、ガンダムバルバタウロスシュトルゥム、ゲシュペンスト・シヴァ、ガンダムルシファー、ガンダムレギルスが先行し、それに続くようにフローレンス・フィオーレ、ガンダムエピオン、モルガン・アヴァリスが進撃を開始する。

『ライ・・・本気でやる気かよ』
『新型に加えて十二騎士たちの最新専用機・・・。これまで以上の強敵だな』
デスティニーガンダム、リ・ブラスタBのそれぞれのモニター越しに引き揚げていくアーサー・イルジオンと、入れ替わりに進撃を開始した6機の十二騎士の専用機を見て、シンが息を呑み、クロウが顔を顰める。
『それに敵はライ達だけではない、バン大佐率いるノイエDCにゾギリア、キャピタル・アーミィなど強力な精鋭たちが揃っている』
『無論、承知の上だ。その上で眼前の敵は全て叩き伏せるのみ!!』
アウセンザイターの外部スピーカーを通して全員に聞こえるようにレーツェル・ファインシュメッカーがそう告げると、全員を代表してダイゼンガーの中でゼンガー・ゾンボルトは力強くそう宣言するのだった。

『こちらの戦力だって奴らに決して引けを取らない・・・!俺たちの力を合わせればルルーシュ達なんかに負けるわけが無い!!』
『各機へ!先ずは右翼に展開しているナイトメア部隊を突破し、ゼロ・・・いや、ルルーシュを目指すぞ!!』

斑鳩の艦橋から扇が、その前衛である斬月から藤堂がそれぞれ檄を飛ばすと、黒の騎士団の部隊が一斉に鬨の声をあげて進軍を開始する。藤堂の斬月、千葉と朝比奈の暁直参仕様、玉城と杉山の暁を中心に暁や無頼、無頼改といった黒の騎士団のナイトメア部隊、サザーランド、フラッグ、リーオー、イナクト、ティエレン、トーラス、ジンクスなどの鹵獲機部隊、シュナイゼルから与えられたジンクスＩＩＩ、アヘッド、ビルゴＩＩＩ、ジガンスパーダ、エルアインスなどによるモビルドール部隊が進撃を開始する。

『エスデス、黒の騎士団たちが進軍を始めたそうだ』

地上部隊の中心で待機しているスピノサウルス種の超大型ゾイド《ジェノスピノ》のコックピットに乗り込んだヴォルフは隣で同じように待機しているデスレックスの突然変異種であるティラノサウルス種の超大型ゾイド《オメガレックス》のコックピットで待機しているエスデスに通信を入れる。エスデスはこれから始まるであろう血湧き肉躍る闘争に期待して思わず笑みを浮かべながらオープンチャンネルで同じように待機しているウォーダンとヴォルフと話し合う。

『ここまでは、陛下とライの読み通り』

『あとは奴らを指定の位置まで誘き寄せてやりゃあ、そこからが本番だな』

二人の会話を聞きながらエスデスはゼハートたちが進撃してくる黒の騎士団の前陣と激突するまであと少しの瞬間、ルルーシュがオープンチャンネルで兵士たちを鼓舞するかのように大声で宣言する。

『この戦いこそが、世界を懸けた決戦・・・いや、聖戦となる!!　シュナイゼルとＺＥＸＩＳを倒せば、我らが覇道を阻む者は一掃される!!』

？ウラヌスの外部スピーカーの中から、ルルーシュの号令がライ、《運命の騎士（ナイトオブフォーチュン）》十二騎士、マリーベルが率いる新生ブリタニア軍、同盟相手であるゾギリア共和国、ザーツバルム伯爵軍、北米同盟、ノブナガ軍、ギャラルホルン革命軍、ノイエＤＣ、ジット団、キャピタル・アーミィの軍勢へと下される。

？『世界はブリタニア唯一皇帝ルルーシュによって破壊され、然る後

にあるべき姿へと創造されるだろう！　誇り高き新たなるブリタニアの英傑たちよ、死力を尽くして打ち砕くのだ！　敵を！　シュナイゼルを!!　天空要塞ダモクレスを!!　そしてＺＥＸＩＳを!!　恐れることはない――――未来は、我が名と共にあり!!!』

？『『オール・ハイル・ルルーシュ!!!』』

？『ルルーシュは世界の全てに悪意を振り撒く存在だ。世界の敵はこの地で討たねばならない。世界中の人々が待っている・・・私たちの凱歌を。そして願わくば、これが人類にとって最後の戦争であることを祈りたい・・・！』

？一方のダモクレスから、シュナイゼルも通信用マイクを手に取って旧皇帝派ブリタニア軍、黒の騎士団、ギャラルホルン、神聖ミスルギ皇国、ディガルド武国の軍勢に号令をかけた。

『全軍!!』

？『攻撃、開始――――!!』

？ルルーシュとシュナイゼルが同時にそれぞれ号令を下した瞬間、ルルーシュ率いる西軍とシュナイゼル率いる東軍、ＺＥＸＩＳの距離が一気に縮まった。

◆◆◆◆◆◆

『では予定通り、先陣は切らせてもらおうかっ!!』

アレンはそう言うと同時にガンダムバルバタウロスシュトルゥムのツインカメラアイを赤く輝かせ、超大型メイスを構えるとブースターを噴かせ一気に先陣をきっていた暁の前に躍り出ると超大型メイスを振り下ろし、コックピットブロックごと叩き潰し暁を爆散させる。

『ま、松本ぉーーーっ!?』

『このクソ野郎がーー!!』

仲間を殺られ激怒した暁のパイロットたちはガンダムバルバタウ

ロスシュトルゥムに向けて3機の暁が廻転刃刀で斬りかかりそれを援護するように2暁がハンドガンやロケットランチャーで援護射撃を行う。ガンダムバルバタウロスシュトルゥムは超大型メイスて迫ってくる砲撃を防御し、廻転刃刀で斬りかかってくる暁の頭部を掴むと鈍器のように振り回して2機の暁に投げ飛ばす。そして動きが止まった3機の暁を腕部２００ｍｍ砲で撃ち抜き、背部から伸びたテイルブレードがロケットランチャーを構えていた2機の暁の胴体を貫いた。

『っ!?田波・・・　本田、間中、相澤っ!?』

『この、クソったれがぁぁっ!!』

コックピットブロックを完全に破壊され、生存が絶望的なのを見せられた黒の騎士団たちは冷静さを失いガンダムバルバタウロスシュトルゥムに攻撃を開始する。しかし、相手はレインだけでないのを彼らはその事が頭から抜け落ちてしまっていた。

『アレンばかりじゃなくて、私たちがいるのも忘れないでくれるかしら!!』

ルミナスは狂気的な笑みを浮かべながらモルガン・アヴァリスの背部に装備されているハドロンビットを展開すると同時にミサイルコンテナからＧＮミサイルが放たれ、ミサイルの弾幕によって無頼、無頼改たちが爆散していき、ミサイルをかわした機体をハドロンビットによる小型ハドロンスピアーが次々と貫いていく。

『大恩を忘れ、陛下に仇なす愚か者共がっ!!今こそ、懺悔の時だ!!』

ゼハートは黒の騎士団に対して怒りを隠さずにそう叫ぶとガンダムレギルスを駆り、目の前のフラッグをビームサーベルで袈裟斬りし、そのままレギルスビームライフルで迫ってくるティエレンやイナクト、ジンクスを撃ち抜く。

『切り裂け!バーンスラッシュリッパー!!』

ティアはゲシュペンスト・シヴァの背部に装備されている8機の3基の刃の部分をプラズマ化させたことで焼き溶かし斬ることに特化した《バーンスラッシュリッパー》を展開させるとそのままエルアインスとトーラスを切り裂く。

『燃え上がれ!!ルシファーよ!!』

グラハムはガンダムルシファーのトランザムブースターを噴かせてジガンスパーダに接近すると《プロミネンスブレイド》と《ブライクニルブレイド》を構え、ジガンスパーダを???の字に切り裂く。

レイン、ルミナス、ゼハート、ティア、グラハムの5人によって出鼻を挫かれた黒の騎士団はレインたちに攻撃を集中させるがそれを援護するように第一機甲師団のガフラン、バクト、ゼダス、ドラド、クロノス、ダナジン、レガンナー、ウロッゾ、ゴメルなどのヴェイガン製のモビルスーツ部隊と第四機甲師団の暁、サザーランド、グロースター、ザクⅡ、グフカスタム、ドム・ノーミーデスなどのナイトメアとジオンのモビルスーツ部隊が進軍を開始する。

そして中央ではディガルド武国のバイオラプター、バイオメガラプトル、バイオトリケラ、バイオケントロ、バイオスピノなどのバイオゾイドたちが地上を埋めつくせほど大量な軍勢がギャラルホルン・アリアンロッド艦隊のグレイズ、グレイズリッター、グレイズシルト、レギンレイズなどのモビルスーツ部隊が続く。それに対してルルーシュ軍は迫り来るバイオゾイドたちに向けて第一、第二機獣機師団のガノンタス、バズートル、キャノンブル、トリケラドゴス、スティレイザー、ステゴゼーゲ、グラキオサウルス、レッドホーン、ディバイソン、ダークホーン、ゴルドスなどのゾイド部隊とリーオー、トラゴス、ティエレン長距離射撃型、ザメルなどのモビルスーツ部隊、そしてカーペンタリー、雷光、バレリオンやステイギスなど多種多様な機体が絶え間なく砲撃を行う。嵐のような凄まじい砲撃が地面を抉りながらバイオラプターたちを撃破していく。しかし数が多いだけに倒したところですぐにその穴を埋めるようにバイオラプターたちが進軍する。そして第一、第二機獣師団の前衛にまで迫ってきたことでファングタイガー、ラプトリア、ハンターウルフ、ドライパンサー、ギルラプター、アンキロックス、バキゲドス、ナックルコング、アイアンコング、セイバータイガーたちゾイド部隊、マクギリス・ファリドのガンダムバエルと石動・カミーチェのヘルムヴィーゲ・リンカーを先頭にグレイズ、グレイズリッター、フレックグレイズたちギャラル

ホルン革命軍のモビルスーツ部隊が向かう打つ。
『これほどの戦場、この戦いに勝利し勝ち残れば私もまたアグニカ・カイエルのような英雄になれるっ!!』
ガンダムバエルを駆るマクギリスは迫り来るバイオメガラプトルの首をバエルソードで切り落しながらハルバードを振り下ろすグレイズシルトの手首を掴み、胴体を貫いた。その後方では石動のヘルムヴィーゲ・リンカーと数機のグレイズリッターが援護するようにガンダムバエルに接近してくるバイオラプターやグレイズたちを迎撃する。
『があっはっはぁ!!ディガルドのバイオゾイドめ。貴様ら程度、我が相棒で踏み潰してくれるわ!!』
第一機甲師団の部隊長であるゴルバはそう高笑いを上げながらグラキオサウルスの亜種であるグラキオサウルス・ボルケノで迫り来るバイオケントロやバイオトリケラを踏み潰しながらその巨体を活かしてグラキオサウルス、トリケラドゴス、スティレイザーたちと共に味方の盾になるように前陣で行動していた。
『進め!エスデス将軍とルルーシュ陛下の敵をその牙で蹂躙せよ!!』
第二機獣師団のエスデスの腹心の1人であるリヴァはギルラプターLCのコックピットの中で部下たちに対して叫びながら目の前にいるレギンレイズの首元に噛みつき押し倒すとコックピットブロックを足の爪で貫く。シリュウの宣言に続くようにギルラプター、ラプトリア、ファングタイガー、ドライパンサー、セイバータイガー、シールドライガーたちが素早い動きで翻弄しながらその牙や爪で敵を切り裂いていく。
ここまではルルーシュ軍の方が有利に進んでいるように見えるが、左翼に展開しているシュナイゼルとルルーシュの部隊はZEXISの部隊と衝突しているため左翼は混戦状態となっており、それによってほかの戦線も歪みが生じ次第にルルーシュ軍、シュナイゼル軍、ZEXISによる三つ巴の戦いは苛烈になっていく。
――――――勝利の女神が微笑むのは、死神の鎌が振り下ろされるの

は、悪魔が嘲笑うのは誰なのか、それは神ですら知りえぬことであり、この盤面を揃えた魔王ですら全てを把握出来ないでいたのだった。

第九話　進撃

ルルーシュ軍とシュナイゼル軍、ＺＥＸＩＳの戦況に変化が訪れたのはナイトオブラウンズが全滅し、ＺＥＸＩＳが東南でルルーシュ軍、シュナイゼル軍の双方と交戦を開始してから３時間ほど経過した時のことだった。

『左翼の第四機甲師団のガレス隊、包囲されつつありますっ！』

？『左翼の第三サザーランド・グリンダ隊も、敵の包囲と攻撃を受けている模様！』

？『ピースクラフト卿のガンダムエピオンとマスク卿のカバカーリーとその直属部隊、フォルネウス卿のガンダムバルバタウロスシュトルゥムと第二機甲師団の部隊も発進し、救援と迎撃に向かいましたが、それまでは持ちこたえられそうにありませんっ――――!!』

ネッサローズの艦橋で相次ぐオペレーターからの緊迫した報告に、マリーベルは大きく舌打ちした。

？「太陽を背にされてしまったわね・・・怯まないで、反撃なさい!!

ウィザードのアグラヴェイン、ジェレミアのサザーランド・ジークも前面に向かわせて！　後詰めのグロースター・グリンダ隊とスナイプテラ部隊も続きなさい!!」

？「――――変わらないね、ルルーシュ。やはり君は防御よりも攻撃が好きだ。だからこそ、ライくんやマリーたちにも、わずかな隙が・・・」

？マリーベル、そして同じ頃にルルーシュやライも声を荒げて指揮を飛ばしている一方、シュナイゼルは余裕たっぷりな軽い笑いを浮かべた。総司令官のポジションに立つルルーシュとシュナイゼルの戦闘指揮能力は、おそらくほぼ互角である。しかし、だからこそ、純粋な戦術においてはルルーシュのほうが不利であった。？というのも、ルルーシュ側の中級指揮官は互いの戦術の連携を取れていなく、むしろここまで連携を必要とする大規模な戦いはこれが初めてだ。しかしシュナイゼルの側には藤堂、ラスタル、ゲオルグ、エンブリヲをはじ

めとした連携の取り方も熟知している一線級の指揮官、その次に彼らほどではないものの同じ組織に所属する中級指揮官が数十人もいる。だからこそ、シュナイゼルはその藤堂、ラスタル、ゲオルグ、そしてエンブリヲにある程度任せて、ＺＥＸＩＳへの対処も合わせて五の力を振るえばいいだけのことで、ルルーシュはラスタルや藤堂に一歩、いや数歩劣るマリーベルやモニカたちに七～九の力を使わせ、自身も全ての指示を部下たちに出して連携の欠如などの穴埋めをしていかなければならない。結果、《終焉の騎士（ナイトオブゼロ）》、《運命の騎士（ナイトオブフォーチュン）》十二騎士といった最強のエースがあったとしても、対応がどうしても半歩遅れるのが、ルルーシュ皇帝軍を劣勢に追いやる大きな原因となっていた。？ボクサーとしては互角であっても、ラウンドごとにサポートに入るセコンドの能力に差があるとでも言うべきか。能力が五分であればあるほど、このほんのわずかな差が大きく物を言ってくる。

「これは、フレイヤの出番もないかもしれないね。・・・ヴィンデル・マウザー」

秘匿通信を通じて、呟きの後にシュナイゼルが呼びかけたのは、すでにシャドウミラーの援軍を向かわせていたヴィンデル・マウザーだった。

『フン・・・我らの技量まで織り込み済み、か』

軽く鼻を鳴らした後に通信回線の向こうでヴィンデルが呟いた時、彼が援軍として差し向けたアクセル・アルマーを先頭にした精鋭部隊はすでにそれまでの静かから一転、怒涛の勢いで戦場に向かって急行していた。

『敵主力、前進してきます――――!!』

アトラスからのオペレーターの報告に、アーサー・イルジオンの中でライがくっと眉を動かした。

「このタイミングで、仕掛けてくるとは・・・！」

ライが呻いた通り、まさしく絶妙のタイミングであった。ＺＥＸＩＳ・シュナイゼル軍双方からの攻撃によって危機に陥りかけた左翼を一度救援すべく、自分のアトラスと、後詰めとして待機させている第零騎士団の一部をそちらに廻そうとした。？しかしそこで、逆に陣容

が薄くなった左翼側が切り裂かれるのを、ライはモニターで目撃した。
「しまっ――――!!」
鮮やかまでの突破にライが目を大きく見開いた瞬間、ルルーシュ皇帝軍が二つに分断させられる。？そして、この瞬間から、一気に戦局が傾いた。

本隊から引き離されたミリアルド、レイン率いる第一混成師団と第二機甲師団、その救援に廻ったゼハート率いる第一機甲師団が、ＺＥＸＩＳの東側部隊とシュナイゼル連合軍の主力部隊に半包囲され、袋叩きに遭い始める。
『チッ・・・!・やってくれるな!!』
？『怯むな!!陛下のご期待に応えるのだっ!!』
救援に向かった先の、袋叩きに遭い始めた第一混成師団をジャイオーン、アグラヴェインのコクピットからそれぞれ目撃したキア・ムベッキとウィザード。周囲の部下たちに向かって檄を飛ばした後、ジャイオーンとアグラヴェインをそれぞれ飛ばして自らも加勢に向かう。
ルルーシュ側としてはこちらの主力であるライ、そして南北にそれぞれ伏せているマーヤとマリオたち第零騎士団、アルフリード・ガラント率いるゾギリア軍、オダ・ノブナガ率いるオワリ軍、ブラッド・ワッド率いるＡＭＡＩＭ部隊を救援に廻したい。しかし、廻せない。
何故ならばマリオとマーヤたちはそれぞれ来たるべき作戦のために部隊を伏せており、ここで動かせばせっかくの作戦が水の泡になり、さらにＺＥＸＩＳとの攻撃も合わさって戦線が一気に押し下げられてしまう。さらにウォーダンの第一独立師団、バン大佐のノイエＤＣも本隊の防衛から外すことはできない。？なんとか左翼にはミリアルド・アレン・ゼハート部隊の奮起で耐えてもらって、ルミナス・モニカ・アリサ部隊が右翼側の圧力を跳ね返すのを待ってから、戦線を再度組み直したいところだが、それは無理な注文と言うべきだった。すでに左翼は削られ続け、ミリアルドとアレン、ゼハートのいる

本隊の眼と鼻の先にある第二防衛ラインすら突破されつつある。
『ルルーシュ軍の布陣が乱れつつある・・・！まずはここを突破して、ルルーシュの元へ向かう!!』
？『シュナイゼル軍とダモクレスの対応も怠るな！　引き続き、二手に分かれて両軍を叩くぞ!!』
　宇宙の英傑たちのひとりであるアムロ・レイ、クワトロ・バジーナの声が戦場に響き渡る。？νガンダム、百式改とそれぞれのハイレベルのモビルスーツを駆って、ルルーシュ軍とシュナイゼル軍の双方のサザーランドとグロースター、ヴィンセント部隊を粉砕していくアムロとクワトロに勇気付けられた団員たちも、雄叫びを挙げて続いた。
『まずはルルーシュだ！主力部隊（前座の連中）を倒して、ヤツを引き摺り出す！』
？『おう！そうすればヒナやゾギリアの連中も出てくるだろうからな！』
　ブラディオンネクストを駆るディオ、ルクシオンネクストを駆る青葉が、正面に立ち塞がるルルーシュ軍のザクウォーリア４機、ジンクスＩＩＩ２機、その後のシュナイゼル軍のユークリッド、グロースター２機、ウィンダム５機にそれぞれ連続でコンビネーション攻撃を叩き込んで粉砕し、
『ここを破って――――混戦に持ち込めばっ!!!』
？『ルルーシュとシュナイゼルを倒せばこの戦いも止まる・・・っ!!』
『これ以上、悲劇を広げてたまるかよ!!』
　ベルリのＧ―セルフ、ヒタチ・イズルのレッドファイブ、ジュドー・アーシタのＺＺガンダムが、周囲に展開してきたルルーシュ軍のトーラスとアヘッド、シュナイゼル軍のビルゴとバイアラン部隊に全火力の射撃を叩き込んで粉砕した。
『まずい、このままでは突破される・・・！』
？『くっ・・・！陛下が!!』
　そんなＺＥＸＩＳのエースパイロットたちの獅子奮迅の活躍ぶりを見て、それぞれの愛機を背中合わせとさせて応戦していたミリアルドが奥歯を噛み、ゼハートが激しく舌打ちする。

「・・・引きちぎられるか・・・・！」
その一方、ウラヌスの艦橋にてルルーシュも、戦況をモニターで見て表情を険しくしていた。？同じくモニターで戦況を見たノエルが、焦った声でルルーシュを振り返り、叫んでくる。
「前線のミリアルド卿たちを呼び戻しますか⁉」
？「いや、それがシュナイゼルの狙いだろう。・・・それに、状況はまだ完成していない」
ルルーシュはきっぱりと断り、手をかざして号令をこう下す。
「ライとマリーベルにも伝えろ！一時戦線を下げ、陣形を立て直す・・・！」

そして、ルルーシュ皇帝軍が後退を始めたのと同じ頃、西側部隊と共に追撃を続けていたエスターとマルグリッドが、レーダーに突出する味方のナイトメアを目撃した。
『何をしているの、カレン！先行しすぎだよ⁉』
エスターはマルグリッドと共に、それぞれブラスタＥｓとパールネイルを飛ばして後を追いながら、その突出を続ける味方のナイトメア――紅蓮聖天八極式を駆るカレンに向かって、通信回線で大声で呼びかけた。
『今すぐに紅蓮を戻せ！足並みを揃えて包囲しなければ意味は無い⁉』
？『わかってるわ――でもっ⁉』
カレンはそう答えながら、エスターとマルグリットの警告を無視するかのように、また前に立ち塞がってきた黒の騎士団の暁編隊をスラッシュハーケンで粉砕し、割り込んできたシュナイゼル軍のデストロイガンダムを輻射波動で粉砕する。
『焦るな・・・！前衛部隊を砕けばルルーシュは孤立する⁉』
さらにそう警告しながら、マルグリッドはパールネイルの左右両背部に繋がれたフレキシブル・アームに接続された誘導兵器《アーチャー》でウラヌスの前衛についていたルルーシュ軍の戦艦の一隻多

方向から同時に攻撃する。？穴だらけに撃ち抜かれた戦艦は、轟音と共に大爆発し、粉砕された。
『ドレッドノート撃沈・・・!!中央が突破されるわよ!!』
アーサー・イルジオンの通信パネルから、アンジュの焦りの叫びが送られてくる。？そしてライも、さらに表情を険しくしてこうぼやいた。
「ＺＥＸＩＳ・・・シュナイゼルとアリアンロッド艦隊もそうだが、敵に回すと、これほど厄介な相手だったとはね。だけど、これでもうすぐ状況は・・・！」

ギアスの呪いをかけられたルルーシュ皇帝軍の一部の兵士たちは、逃げるということは知らなかった。戦線が崩壊の憂き目にあっても、それでもギアスの輝きを宿した両目をさらに赤く輝かせ、なお狂気じみた反撃を敢行している。？しかし、いかに士気が高いとはいえ、現実の敗勢を覆せるわけもなかった。シュナイゼル軍とＺＥＸＩＳの双方によって、次々と地上に見えるコンスタンティンの廃城に叩き落とされ、一機、また一機と姿を消していく。
『『皇帝陛下のためにいいぃ――――!!!』』
両腕を失った２機のガレスに乗った皇帝軍の兵士が、目をギアスに赤く輝かせて雄叫びを挙げながら、ミサイルポッドを乱射する。その狙いの先にいたのは、藤堂の斬月、朝比奈の暁直参仕様だった。？制動刃呐喊衝角と廻転刃刀をそれぞれ大きく振るってそのミサイルの乱れ撃ちを一気に捌いた後、藤堂と朝比奈は一気に突っ込んでその２機のガレスの胴体を串刺しにし、一刀両断にして爆砕させる。
『哀れなものですね』
？『ああ・・・ギアスによって操られている兵士というのは・・・！』
またふたり、ギアスの傀儡となった兵士の最期を目の当たりにした朝比奈に促され、藤堂はそう吐き捨てた。？その後ろで、同じく目をギアスに赤く輝かせながら突っ込んできたサザーランド・エア、グロースター・エア、ヴィンセント・ウォードの編隊を、千葉の暁直参仕様と黒の騎士団の新たな協力者であるガイウス・ユリウス・カエサ

ルのクオ・ヴァディス、トヨトミ・ヒデヨシのゴ・クウがそれぞれ鮮やかな戦技で一掃していた。

◆◆◆◆◆◆

『クルシェフスキー卿っ・・・!!』

通信を通じて、左翼をロイヤルガードや純血派、弱小貴族たち第三機甲師団と共に支えているサザーランド・イカロスのキューエル・ソレイシィがモニカに進言をする。モニカはフローレンス・フィオーレのコックピットの中で難しい顔のままで頷いた。

「ええ。シュナイゼル殿下、そしてＺＥＸＩＳ・・・流石ね。陛下から授かったこの策をこんなに早く使うことになるだなんて――――」

この策を使うのは本来ならばもう少し後の予定だったのだが、予想以上にＺＥＸＩＳとシュナイゼル軍の攻勢が激しく予定より早く奴らが指定位置に辿り着きそうになっていた。今こそＺＥＸＩＳとシュナイゼル軍に対して大打撃を与える絶好のタイミングであり、これを逃せばこちら側にまで被害が及んでしまう。

「フローレンス・フィオーレよりジェノスピノへ。コードＧ、伝達。第一機獣師団に合図を送ります!!」

『『『イエス・マイ・ロード!!』』』

フローレンス・フィオーレが上空に向けて発射した閃光弾を、湖の中でジェノスピノのコックピット越しに確認したヴォルフは獰猛な笑みを浮かべると湖から這い上がった。

『ハッ!ようやく俺たちの時間か!!グランド小隊、作戦開始だ!!』

『『『『『『『了解!!』』』』』』』』

ヴォルフの言葉にその言葉を待ってましたと言わんばかりに嬉々とした声を上げると前線で戦っていた８体の灰色のカラーリングのグラキオサウルスが護衛のゾイドを引き連れて移動を開始した。

最初に気づいたのは、シモンのグレンラガン、ヨーコのスペース

ヨーコWタンク、キタンのスペースキングキタンを援護していたグラパールにそれぞれ乗っているギミーとダリーだった。
『あれ・・・？』
『何かしら・・・？』
　ギミーとダリーが見たのはシュナイゼル軍と戦っている中、８体の灰色のグラキオサウルスが数体のゾイドを引き連れながら動きそれぞれが少し離れた場所に移動し追えるとその場で立ち止まっていた。その行動の意味が分からないギミーとダリーは顔をしかめる中、シモンはグラキオサウルスが立っている場所がなんの意味を持つのか分かり驚愕した。
『マズイ!!アイツらの狙いは――――』
　グラキオサウルスが何をしようとしているのか察したシモンはグレンラガンを飛ばしてグラキオサウルスたちを止めようとするが、護衛のディバイソン、ダークホーン、キャノンブルたちの砲撃によって行く手を阻まれてしまう。その間にグラキオサウルスたちは行動を開始する。
『『『『『『『グラキオサウルス！本能解放！ワイルドブラスト!!』』』』』』』
　その瞬間、グラキオサウルスたちの左目が青白い炎のようなオーラに包まれ、脚部の《アウトリガー》で身体を地面に固定し、胴体側面に折り畳まれていた巨大な《ハンマーボーン》を頭部と一体化させた。
『振り下ろせ！グランドハンマー!!』
　グランド小隊のリーダーであるハルクが叫び、グラキオサウルスたちが巨大なハンマーとなった首を勢いよく地面に振り下ろした。それによって他の場所に比べて地盤が緩かったために崩壊し、バイオゾイドやアリアンロッド艦隊のモビルスーツ、シュナイゼル軍の地上ナイトメア部隊は地割れに飲み込まれていった。シモンがいち早く地上にいたＺＥＸＩＳたちに対して警告をしたおかげでＺＥＸＩＳは何とか巻き込まれずにすんだが、それによってシュナイゼル陣営の地上部隊は３割近くが壊滅状態へと陥ることに成功した。
『嘘・・・あんな一瞬であの大軍を壊滅させちゃうだなんて・・・』

『これがルルーシュ皇帝軍の力・・・』
　初めてルルーシュの力の一端を見せつけられてしまったランスタッグブレイクを駆るレ・ミィとムラサメライガーを駆るルージ・ファミロンは思わず顔を青ざめてしまう。しかし、そんな彼らを嘲笑うかのようにルルーシュはさらなる一手を撃った。
『クフフフフ♪ようやく陛下が私に与えてくださった力を振るう時が来たな』
　オメガレックスのコックピットの中で狂気的な笑みを浮かべるエスデスはようやくその力が振るえることに歓喜しながら操縦桿をグッと強く握る。
『さぁ、オメガレックスよ。その力を存分に振るうがいい!!オメガレックス!進化解放!エヴォブラスト!!』
　エスデスがそう叫んだ瞬間、オメガレックスはＺ―Ｏバイザーで覆われた瞳を赤く輝かせ咆哮を上げるとそれに続くようにデススティンガーやティラノサウルス型ゾイドであるジェノザウラーとジェノブレイカーたちが咆哮を上げると荷電粒子砲発射体勢をとった。エヴォブラストを発動したオメガレックスは発射時の衝撃に耐えるために両足のフットロックが固定し、エネルギーを分散させず一点に集中するため、デスレックスの顎のデスジョーズに当たる収束シールドを前方に展開、同時に大きく開口した口内から砲身がせり出し、背部の荷電粒子供給ファンが展開して回転、空気中の荷電粒子を取り込み、収束シールドを展開しながら同時にチャージを開始した。
『くっ!奴らに攻撃の隙をこれ以上与えるな!!撃て、撃て～!』
　オメガレックスたちが何かしらの攻撃を仕掛けてくると判断したアヘッドを駆るアロウズのエルク・ランブランド大尉は上空から周囲にいる部隊全員にそう指示を出しながら自らもＮＧＮバズーカでオメガレックスを攻撃する。そしてそれに続くようにバイオラプターとバイオメガラプトル、グレイズ、ジンクスＩＩＩ、ユーグリッド、ザムザザー、ゲルズゲー、サザーランド、グロースターなど地割れに巻き込まれなかった機体たちが一斉に砲撃するも、オメガレックスたちの頑強な装甲に傷をつけることも出来ずその間にオメガレックスた

ちは荷電粒子砲を放つためのチャージを完了させていき、その照準を敵に向ける。
『消し飛ばせ！荷電粒子砲、発射!!』
オメガレックスが荷電粒子砲を放つと同時にデススティンガーとジェノブレイカーは空に向けて、ジェノザウラーはオメガレックスと同じように地上に荷電粒子砲を放った。
デススティンガーとジェノブレイカーが放った荷電粒子砲はＧＮフィールドを展開して防御しようとしていたエルクのアヘッドだが、その防御はいとも容易く貫き上空から攻撃をしていたジンクスＩＩＩ、アヘッド、フラッグ、イナクト、エアリーズ、トーラス、ビルゴＩＩＩ、ユーグリッド、ウィンダム、ダガーＬ、バイアラン、ヴィンセント・ウォード、ガレスなど多くの機体や斑鳩やスキップジャック級戦艦の護衛艦たちすら飲み込み粉砕させた。そしてオメガレックスとジェノザウラーが放った荷電粒子砲は地面を抉りながら地割れから這い上がろうとしてきたバイオゾイドたちごと飲み込みながら後方で待機していたＧ－１ベース、ギアナ級地上戦艦、アドラステア級戦艦。そしてその護衛であったジムＩＩＩ、ジェガン、ヘビーガン、ジャベリン、ゾロアット、コンティオ、ゲドラフたちを後方の山ごと跡形もなく粉砕した。
『敵は突然の攻撃に動揺している。この隙を逃すな!!』
『全機、蹂躙なさい!!』
マリオとマーヤはルルーシュの策が成功したことでシュナイゼル軍に大打撃を与えることに成功し動揺している隙をつくように待機していた全部隊に進軍を開始させる。北からマリオのペルセウスを先頭にアルフリード・ガラント率いるゾギリア軍のヴァリアンサー部隊、ブラッド・ワッド大尉のブレイディファントムと部下のレイモンド・ハーディとソフィア・ルイスの有人機仕様のブレイディフォックスとＡＩ搭載型無人機仕様のブレイディフォックスたちＡＭＡＩＭ部隊と第零騎士団のルシア・スカーレットとリルカ・スカーレットの部隊、南からマーヤのアキレウスを先頭にアンジュたちアルゼナルのパラメイル部隊、オダ・ノブナガの大型イクサヨロイ《ザ・フール》と

ジャンヌ・カグヤ・ダルクの大型イクサヨロイ《オルレアン》を先頭に小型イクサヨロイたちと第零騎士団の獅子王刃矢と銀城阿含の部隊が進軍を開始した。
　それによって地上部隊の半数近くが壊滅させられたことで指揮系統が崩れ兵士たちが混乱しているところからの襲撃を受けたことで事態は急変するのだった。

◆◆◆◆◆

「くっ！これじゃあルルーシュに近づけないっ!!」
　ルルーシュの乗るウラヌスに向けて突撃していた紅蓮聖天八極式を駆るカレンは目の前に立ふさがるドライセンに輻射波動を叩き込みながら思わずそう悪態をついてしまう。ルルーシュの策略によってシュナイゼル軍が混乱している隙をついて、一気にルルーシュを倒そうとこの混戦を利用してウラヌスを落とすために紅蓮聖天八極式を飛ばすが大将であるルルーシュの周囲は精鋭揃いの兵士たちが陣取っているため突破できないでいた。
『クソっ！サイフラッシュさえ使えりゃっ!!』
『攻撃が激しすぎて撃つ余裕がないよ!!』
　迫り来るバレリオンやスナイプテラ、ガレス、ビルゴＩＩＩたちからの銃撃の嵐を交わす風の魔装機神《サイバスター》を駆るマサキ・アンドーと美少女の姿をした特機《ヴァルシオーネ》を駆るリューネ・ゾルダークは敵味方識別型ＭＡＰＷ（Ｍａｓｓ　Ａｍｐｌｉｔｕｄｅ　Ｐｒｅｅｍｐｔｉｖｅ－ｓｔｒｉｋｅ　Ｗｅａｐｏｎ）である《サイフラッシュ》と《サイコブラスター》を放とうとするもその隙を与えられずに避けるか接近してくる敵を倒すので精一杯だった。
『ちぃっ！鬱陶しいな！ぶちかましてやれタスク!!』
『了解!!ギガ・ワイドブラスター!!』
《量産型ゲシュペンストＭａｒｋ－ＩＩ》のＭ１３ショットガンで迫り来る銃弾と砲撃を撃ち落としながらカチーナ・タラスクは部下であるタスク・シングウジに指示を出すとタスクは《ジガンスクード・ドゥ

ロ》の胸部が展開しそこから放たれる青いビーム《ギガ・ワイドブラスター》を地上にいるランドリオンやバレリオンたちを薙ぎ払うように放つが、当たる寸前にランドリオンたちの前に立ち塞がった機体たちが発生させたバリアによって防御されてしまった。その機体たちを見て《ズィーガリオン》を駆るレオナ・ガーンシュタインは思わず目を見張ってしまった。

『ジガンスクード!?まさかあの機体まで量産されていたなんてっ!!』

ランドリオンたちの前に立ち塞がっているのはジガンスクード・ドゥロの元となった機体である15機のダークブルーの《ジガンスクード》。ジガンスクードたちは一斉にギガ・ワイドブラスターを放ってきた。カチーナたちはそれぞれかわしたりバリアを張って防御したりなどして防いだ。

『ったく、どんだけ戦力を持ってやがるんだよあの皇帝様は!?』

『こ、このままじゃこっちが先に潰れちゃいますよ!?』

《グルンガスト改》の計都羅喉剣でトラゴスを斬り捨てながらイルムガルド・カザハラはそう呟き、それに《虎龍王》に殴りかかってくるナックルコングをランダムスパイクで弾き飛ばしながらブルックリン・ラックフィールドことブリットは思わず弱音を吐いてしまう。

『キョウスケさん!!今からアスランたちと一緒にミーティアで一斉に攻撃を開始します!!』

『了解した』

ミーティアを装備した《ストライクフリーダムガンダム》で敵機を牽制しながらキラ・ヤマトはジンクスIIIの胴体にリボルビングステークをぶち込む《アルトアイゼン・リーゼ》を駆るキョウスケ・ナンブにそう声をかけると、ストライクフリーダムガンダムと同じようにミーティアを装備した《インフィニットジャスティスガンダム》を駆るアスラン・ザラ、《ゴールドフォー》のスルガ・アタル、《ブラックシックス》のクロキ・アンジュ、《VB—6　ケーニッヒモンスター》のカナリア・ベルシュタイン、《スレイプニール》の界塚伊奈帆と界塚ユキや網文韻子たちデューカリオンの《アレイオン》部隊が武装を構えると一斉に砲撃を開始する。それによって防衛ラインの一部に穴

が空いた。
『よっしゃあ!!このまま突き進んでやるぜ!!』
防衛ラインに穴が空いた隙を見逃さないと言わんばかりにジーン討伐軍のメンバーであるゾウ型ゾイドの《エレファンダー》を操るハックは部下のゾイド部隊と元ディガルドのバイオゾイド部隊を引き連れて突き進まんとばかりにエレファンダーは雄叫びを上げると地響きを立てながら突き進む。しかし、それを容易く許すほどルルーシュの軍は甘くない。

『――――斬艦刀、裂破斬』

瞬間、防衛ラインの空いた穴を進もうとしていたエレファンダーたちに無数の刃の衝撃波が襲いかかり、足や胴体などを切り落とされたり身体中に切り傷をつけられて倒れ伏していく。
『ハック!大丈夫か!?』
先頭にいたために最も深く切り傷が刻まれ倒れ伏したハックのエレファンダーを心配するように《デッドリーコング》の中からガラガが声をかけるがハックから反応はかえってこなかった。そしてエレファンダーたちが倒れたことで巻き起こった砂塵の中から斬撃を放った機体が姿を現し、その姿を見てキョウスケたちは驚愕して目を見開いてしまった。
『そんな、あの機体は・・・!?』
『ちょ～っと、冗談きついわよコレ・・・』
《量産型ゲシュペンストＭａｒｋ―Ｉ改》のラッセル・バーグマンはその機体を見て顔を驚愕で歪ませ、《ライン・ヴァイスリッター》のエクセレン・ブロウニングは冷や汗をかきながら顔を引き攣らせる。ＺＥＸＩＳの前に現れたのは純白と紺碧の装甲を持つ武士を思わせるようなシルエットをした巨大な特機――――クロガネ・ヒリュウ改のメンバーの1人であるゼンガー・ゾンボルトの駆る《ダイゼンガー》と似ているその機体――《シュヴェルトクリーガー》は身の丈以上ある巨大なバスターブレード《斬艦刀》を構えていた。

『――――久しいなゼンガー・ゾンボルト。そしてヒリュウ改よ』
目の前の機体からオープンチャンネルで聞こえてきた声にダイゼンガーの中でゼンガーは一瞬、驚きに息を飲みかけたがすぐに気を取り直すと同じように斬艦刀を構えながら目の前のシュヴェルトクリーガーを鋭く睨みつける。
『やはり貴様か、ウォーダン・ユミル。』
『然り。そしてこれこそが陛下が俺に与えた新たな剣《シュヴェルトクリーガー》だ』
ウォーダンは斬艦刀を振るって土煙をかき消すとシュヴェルトクリーガーの両隣をそれぞれ４機の量産型グルンガスト弐式が並び立ち、その背後にはかつてユーロ・ブリタニアが使用していたグロースターの改修機であり、第一独立師団の所属機として青と黒と銀に塗装されたカラーリングと背中に剣が彫られたマントを背負った《グロースター・ソードマン》２０機と黒のカラーリングで統一された量産型ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩと量産型ヒュッケバインＭａｒｋ―ＩＩがそれぞれ８機ずつが現れた。
『全機、突貫せよ!!』
ウォーダンがそう叫びながらダイゼンガーに向けて背中のドリルブースターを噴かせながら斬艦刀を構えたシュヴェルトクリーガーは一気に加速するとそれに続くように量産型グルンガスト弐式はバスターソードを、グロースター・ソードマンはシュロッター鋼ソードを、量産型ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩはネオ・プラズマカッターを、量産型ヒュッケバインＭａｒｋ―ＩＩはシシオウブレードをそれぞれ構えてアルトアイゼン・リーゼたちに接近する。
『来るか、ウォーダン!!』
接近してくるシュヴェルトクリーガーに対してゼンガーもまた斬艦刀を構えブースターを噴かせて接近する。そしてシュヴェルトクリーガーとダイゼンガーが互いに目と鼻の先まで近づいた時には既に互いの斬艦刀が振りかぶられていた。
『チェストォオオオオッ!!』
『ぬおおおおーーっ!!』

互いにどっしりと構え斬艦刀による剣撃の応酬を始め、その衝撃は凄まじく大地を揺らし２機の周囲を暴風が荒れ狂い誰も近づくことは出来ず目の前に迫る敵を相手取るのだった。
『くっ！これが第一独立師団の力かっ!?』
『ビビってんじゃねぇぞ!!とっととこのデカブツどもぶっ倒してルルーシュんとこに行くんだよ!!』
量産型グルンガスト弐式のバスターブレードを回避しながら《ブルーワン》のビーム銃とハルバートの機能を持つ遠近両対応の複合装備《８８式可変斧槍ガンハルバード》で斬りかかるが、その斬撃は量産型グルンガスト弐式の頑強な装甲を浅く傷つける程度でしかなく、反撃とばかりに量産型グルンガスト弐式は両目から黄色いレーザー《アイソリッド・レーザー》を放つが、ブルーワンのパイロットであるアサギ・トシカズは焦りながらもブルーワンはそれを軽々とかわし、ブラックシックスが量産型グルンガスト弐式の周囲を飛び交いながらアサギにそう叫ぶアンジュは両手に装備する銃剣《９２式複合銃剣アパッシュガン》で量産型グルンガスト弐式を乱れ撃つもバスターブレードによってその攻撃を防がれる。イズルたちチームラビッツのアッシュたちがアサギたちの援護をするが量産型グルンガスト弐式の前に苦戦を強いられていた。
それはほかの量産型グルンガスト弐式やグロースター・ソードマン、量産型ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩ、量産型ヒュッケバインＭａｒｋ―ＩＩと戦っているオルドリンたちも同じであり苦戦を強いられていた。そしてそれはほかの戦場でも同じであった。

◆◆◆◆◆

『ちっ！思ったよりもやるじゃねぇか!!』
シュナイゼル軍のデストロイガンダムをゲッターサイトで真っ二つに切り裂きながら《真ゲッター》の《真イーグル号》のコックピットの中で流竜馬は舌打ちしながら迫り来るゲッタービームをかわす。竜馬の視線の先にはゲッタートマホークを構えながら真ゲッターに

接近してくる初代ゲッター1に酷似している鬼を思わせるような2本の角を生やした赤い巨大ロボット《ゲッター？α？》は片手斧状のゲッタートマホークを真ゲッターに振り下ろしてくるのをゲッターサイトの柄で防ぎ、その胴体を蹴り飛ばして距離をとる。

『まさかゲッターロボまで量産しやがるとはなっ!!』

『しかもその性能はドラゴン以上と厄介極まりないっ!!』

《真ベアー号》の車弁慶と《真ジャガー号》の神隼人はゲッター？α？の性能の高さに舌を巻いていた。ゲッター？α？の性能はかつて早乙女博士がインベーダーに寄生された時に使われた量産型ゲッタードラゴンを上回っており、しかもゲッター2と酷似している《ゲッターβ》、ゲッター3と酷似している《ゲッターγ》が揃っておりその数は全て合わせて24機。さらにその援護部隊としてグレイズやランドマン・ロディ、サザーランド、グロースター、ステルバー、ステルボンバーなどがZEXISとシュナイゼル軍に対して攻撃を仕掛ける。

『少なくともあっちのガラクタとは比べ物にならねぇな』

《ゲッターアーク》の《アーク号》のパイロットである流拓馬はステルバーをダブルトマホークで斬り捨てながらその視線を別に向ける。その視線の先にはゲッターβのゲッタードリルで胴体を貫かれ爆散する量産型ゲッタードラゴンの姿があった。ミスルギ皇国が出撃させた量産型ゲッタードラゴン・ライガー・ポセイドンたちはかなりの数を揃えていたがゲッター炉心を搭載していないガワだけしっかりしているそれはゲッターロボとしては出来損ないもいいところだった。

『どうやらルルーシュの奴と違ってミスルギのバカ王子はゲッター炉心を手に入れられなかったみたいだな』

《ケルディムガンダム》のコックピットの中で二代目ロックオン・ストラトスことライル・ディランディはシールドビットでジンクスIIIのビームを防ぎつつ《GNビームピストルII》でトーラスを撃ち抜きながらそう言う。実際ルルーシュ軍のゲッター？α？たちはゲッター炉心を搭載されているためにかなりの脅威だが、ミスルギ皇国の

量産型ゲッタードラゴンたちはゲッター炉心を搭載しておらず無理やり複数のジェネレーターを搭載することで高出力を得ているがゲッターロボとしての強みがないそれは何度も量産型ゲッタードラゴンと戦ってきたＺＥＸＩＳにとって驚異でも何でもなかった。
『ならとっととこの連中ぶっ飛ばしてあのダモクレスに向かおうぜ!!』
『あぁ。フレイヤのこともある以上あまり時間をかける訳にはいかない』
髑髏の魔神《マジンカイザーＳＫＬ》の海動剣、海動剣は牙斬刀でＧＲＫ―７やＤＢＭ―２たちの胴体を横薙ぎに切り裂きながら先を急ぐように声をかける。
ＺＥＸＩＳとルルーシュ軍との戦闘で敵の層も薄くなり始めあと少しでダモクレスまでの道が確保できると思われたその時だった。
『髑髏野郎ォオオオオ!!』
空から雄叫びを上げながら鋼鉄の魔神《アイアンカイザー》がマジンカイザーＳＫＬに飛び蹴りしてきた。マジンカイザーＳＫＬは牙斬刀で防ぐが落下による重力も加わった一撃に仰け反ってしまう。
『この声、キバか!!』
『あの野郎生きてやがったのか!?』
海動と真上はかつてその手でトドメを刺したはずの存在であるアイアンカイザーとそのパイロットであるキバが目の前にいることに驚くがその間にもアイアンカイザーは手首を折って腕部装甲をずらすと両腕に内蔵されていた《カイザーガトリング》の砲身を展開するとマジンカイザーＳＫＬに向けてガトリングを放つ。それをマジンカイザーＳＫＬは胸部パーツを分離させて二丁拳銃《ブレストリガー》を構えるとパルスビームビームで撃ち落としていく。
『髑髏野郎!!テメェを倒すためだけにあのクソ野郎の下についてまで地獄から蘇ってやったぜ!!』
キバは獰猛な笑みを浮かべながらカイザーガトリングを収納すると双刃の槍を構えマジンカイザーＳＫＬに突き出す。それをマジンカイザーＳＫＬは牙斬刀で弾き飛ばしながらアイアンカイザーとマ

ジンカイザーＳＫＬはそのまま槍と牙斬刀で斬り合い始めた。
『ハッ！あの世から蘇ったってんならもう一度叩き返してやんよ!!』
『ほざけぇっ!!』
　アイアンカイザーとマジンカイザーＳＫＬ。２体の魔神の戦いは周囲の機体を巻き込みながらより激しくなるのだった。そして少し離れた場所でもう一体の魔神も苦戦を強いられていた。
『髑髏の魔神ではないが、中々歯ごたえのあるものだな』
『くっ!?』
　黒銀の城の異名を持つ魔神《マジンガーＺ》をその手に握る巨大な竜の頭部の形をした槍で弾き飛ばす白亜の鬼《ガイストテレス》のコックピットの中でガランは関心するのに対してマジンガーＺのパイロットである兜甲児はその衝撃に思わず顔を歪ませるがすぐに体勢を立て直しガイストテレスに殴りかかるもその拳は槍によっていとも容易く防がれその腕を捕まれ投げ飛ばされてしまう。
『がはぁっ!?』
『甲児くん!?』
『大丈夫か、兜!?』
『へっ、問題ないぜっ!!』
　地面に叩きつけられるように投げ飛ばされて一瞬意識が飛びかけた甲児を心配するように《ビューナスＡ》の弓さやかと《ボスボロット》のボスが倒れたマジンガーＺの傍に移動すると甲児は口端の血を手の甲で拭い取りながらマジンガーＺを立ち上がらせる。
『いくぜさやか、ボス!!』
『ええ!!』
『おうよ!!』
　甲児はさやかとボスに声をかけ気合いを入れ直すようにマジンガーＺの両拳をぶつけ合わせるとビューナスＡとボスボロットと共にガイストテレスに向き直る。
　戦場の到る場所でＺＥＸＩＳとルルーシュ軍、シュナイゼル軍の一部は一進一退の攻防を繰り返している中、北と南に部隊を展開しルルーシュ軍に進軍を開始していたアリアンロッド艦隊のセブンス

タ―ズが一家紋、クジャン家の御曹司であるイオク・クジャン率いるモビルスーツ部隊と黒の騎士団は追い詰められていた。
『えぇい、何をしている!?相手は正面から戦うことも出来ない臆病者だぞ!?何を手間取っている!!』
指揮官機レギンレイズのコックピットの中でイオクは護衛のレギンレイズたちに囲まれながら忌々しそうに友軍のグレイズ・シルトを盾ごとその手に握る鎌型ＭＶＳ《ハルパー》で斬り裂くマリオのペルセウスを睨みつけていた。ルルーシュの策によって部隊の４分の１近くを失ってしまったアリアンロッド艦隊の地上部隊は隠れていたマリオたちによる襲撃によってさらにその数を減らし今も味方を次々と落とされていた。
『落ち着いてくださいイオク様！』
『下手に前に出てしまえば敵の思うつぼです!!』
今にも前に出て敵を倒さんとするイオクを落ち着かせるように親衛隊のメンバーはイオクのレギンレイズを抑える。しかし戦場で一箇所に固まっていれば敵からすれば狙ってくださいと言わんばかりのものであった。
『指揮官機!!コイツの首を取ってライ様に褒めてもらいましょう!!』
レギンレイズの胴体をリボルビングバンカーで貫いたアルトアイゼン・クリンゲのコックピットの中でルシアはイオクの指揮官機レギンレイズを見つけるとブースターを噴かせて接近する。
『っ!?敵機接近!!迎撃します!!』
アルトアイゼン・クリンゲが接近してくるのにいち早く気づいた先頭の親衛隊のレギンレイズ２機がソードを構えて迎え撃ちにかかる。
『邪魔よ!!三下風情がっ!!』
ルシアはそう叫びながらリボルバーガンハルバードを振りかぶりリボルバーヘッド部分をレギンレイズの胴体に叩きつけるとゼロ距離射撃で徹甲榴弾を叩き込みコックピット部分を破壊すると左腕の５連装チェーンガンでもう一機のレギンレイズの足を止めてからハルバードの刃で胴体を斬り捨てて速度を落とさずにイオクたちに接近する。

『おのれっ！よくも私の部下たちをっ!!』
　目の前で部下を殺されたことに激怒したイオクは部下たちの静止を無視して長距離レールガンを構えるとアルトアイゼン・クリンゲに向けて放つがどれも見当違いの方向に放たれるそれはかわした方が逆に当たりそうなほど下手な射撃だった。
『はっ！大した実力もないくせに粋がるんじゃないわよ!!』
　ルシアはそのまま長距離レールガンを構えている指揮官機レギンレイズの前に立つとリボルバーガンハルバードを振り下ろし長距離レールガンにハルバードの刃を叩きつけると長距離レールガンは半分に叩き折られ火花を散らしながら爆発した。
『おのれっ!!』
『イオク様お下がりをっ!!』
『コイツは我らがっ!!』
『邪魔だって言ってるのが、分からないの!!』
　壊れた長距離レールガンを捨てナイトブレードを構えようとするイオクの前に親衛隊たちの５機のレギンレイズと１３機のグレイズ・シルトが前に出てアルトアイゼン・クリンゲを迎え撃とうとするが、それよりも先にアルトアイゼン・クリンゲの両肩の《レーゲンクス・クレイモア》から放たれる無数のゲッター合金製ベアリング弾が豪雨の如く一斉発射され、先頭で盾を構えていた８機のグレイズ・シルトの盾ごと装甲をベアリング弾によって蜂の巣にされた。そのままブースターを噴かせてイオク機の指揮官機レギンレイズに接近してその首を取ろうとリボルバーガンハルバードを振りかぶるが、突如現れた《レギンレイズ・ジュリア》のジュリアンソードによってその攻撃を防がれてしまった。
『ジュリエッタ!?』
『イオク様は下がっててください。邪魔です』
『なんだ――――』
　ジュリエッタ・ジュリスはイオクに対してそう一方的に告げると通信を切って目の前の相手であるアルトアイゼン・クリンゲに向き直り、リボルバーガンハルバードをジュリアンソードで弾き飛ばすとフ

ライトユニットの機関砲で牽制を仕掛けるが、アルトアイゼン・クリンゲはバルカンに当たりながらレギンレイズ・ジュリアに近寄るとリボルビングバンカーを突き出す。それを専用大型シールドで受け流しながらレギンレイズ・ジュリアは後方に下がる

『ジュリエッタ・ジュリス。ラスタル・エリオンの飼い犬程度が私の相手を務まるとでも!!』

『舐めるなぁっ!!』

レギンレイズ・ジュリアとアルトアイゼン・クリンゲは互いにジュリアンソードとリボルバーガンハルバードをぶつけ合う。ジュリエッタやガエリオ・ボードウィンなど一部のエースパイロットたちは何とか食いとどまっているがそれ以外のアリアンロッドのモビルスーツ部隊はヴァリアンサー部隊とＡＭＡＩＭ部隊、そしてルシアとリルカの配下である赤く塗装された量産型ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩ、シュッツバルト、ガーリオン、バレリオン、ランドリオンなどによって次々と撃墜されていた。そしてそれ以上に黒の騎士団は劣勢に追い込まれていた。

『クソッタレ!!照準が追いつかねぇ!?』

黒の騎士団の暁と無頼改の部隊がハンドガンとアサルトライフル、ロケットランチャーを乱射するがその砲撃はマーヤのアキレウスを捕えることも出来ず虚しく空中で爆発を繰り返すだけだった。

『そんな遅い攻撃が、当たると思うな!!』

突撃用多重装甲を全身を覆うように纏い先端にルルーシュ自らが命名した黒金の四角錐状の巨大な剛槍《グングニル》を接続させ、さらに灰色のエナジーウイングをその上から覆うように纏わせることで巨大な弾丸となったアキレウスはエナジーウイングと突撃用多重装甲の増設ブースターによる加速によって灰色の魔弾となり戦場を縦横無尽に駆け、敵機を貫いていく。

『喰らいやがれ!!裏切りもんがぁ!!』

鹵獲機のジンクスＩＩＩのＮＧＮバズーカから赤黒いエネルギーがアキレウスに向けて放たれたが、アキレウスはビームに自ら突撃しビームを四散させながらそのままジンクスＩＩＩの胴体を貫き爆散

させた。アキレウスの殺人的な加速による突進は掠っただけでも機体の装甲を抉り、たった一機で黒の騎士団の戦力を2割近くも撃墜しており、地面には風穴の空いた機体や、胴体や頭部などが抉られた機体が転がっていた。

『マーヤ!!このルルーシュに従う狂犬がっ!!』

仲間を次々と殺されるのを我慢できなくなった千葉はマーヤに対して怒りを隠さずにそう叫ぶと暁直参仕様をアキレウスに向けて飛ばす。しかしそれを阻むように獅子王刃矢の餓者髑髏が立ち塞がり鬼切で暁直参仕様の廻転刃刀を防ぐ。

『藤堂の腰巾着風情が、調子に乗るな』

『獅子王、貴様ぁっ!!』

かつて日本解放戦線で共にブリタニア軍と戦った同士でありながら藤堂を裏切りルルーシュの元に下った刃矢に対して殺気を隠さず千葉は暁直参仕様を飛ばし廻転刃刀で斬り掛かる。それを餓者髑髏は鬼切で弾き飛ばすと反対の手に握る鬼徹で暁直参仕様の左腕と左の飛翔滑走翼を切り落とす。追撃を仕掛けようと鬼切を振りおろそうとしたが、下から暁と無頼改たちによるハンドガンとアサルトライフルの射撃が放たれたために攻撃を中断し暁直参仕様から距離をとる。

『大丈夫ですか千葉隊長!?』

『ここは我らに任せて千葉隊長は一度下がってください!!』

『すまないっ・・・!!』

千葉の暁直参仕様の前に5機の暁と12機の無頼改が廻転刃刀やハンドガン、アサルトライフルをそれぞれ構えて餓者髑髏に向け、千葉に後退を促す。千葉も今の自分では刃矢を相手するには厳しいと考え一度後方に下がることを選択した。それを刃矢は特に興味もなさげに千葉が去っていくのを一瞬見てから目の前の敵から殲滅することを選択した。

そして離れた場所でも藤堂と朝比奈、カエサル、ヒデヨシが戦線を維持しようと必死に戦っているが、トップであるゼロがいなくなったことで全体の指揮を取るものがおらず全体の連携が杜撰なものと

なっており、副司令である扇要やほかの幹部たちも今までゼロの指示に従っていただけの存在であったためＺＥＸＩＳとルルーシュ軍の苛烈な攻撃に対応がかなり遅れを取っていた。その上黒の騎士団のエースパイロットにして切り札的存在でもあったライとカレンが敵に回っていることがより黒の騎士団を苦しめる原因でありそう時間もかからないうちに黒の騎士団は壊滅しそうになっていた。
　そしてＺＥＸＩＳたちもまた彼らと因縁のあるもの達と衝突するのだった。

◆◆◆◆

『ルルーシュ軍の攻勢によってダモクレスの防衛ラインが薄くなった今が好機!!』
『ダモクレスを制圧し、シュナイゼルを抑えるっ!!』
《アウセンザイター》のレーツェル・ファインシュメッカーことエルザム・Ｖ・ブランシュタインと《ゲシュペンストタイプＲ》のギリアム・イェーガーを先頭にクロガネ、プトレマイオス２、真ゲッタードラゴン、シグナス、グランベリーの旗艦とそれぞれの所属部隊が薄くなった防衛ラインを突破しダモクレスへと接近していた。
『この調子ならあと少しでダモクレスに到達するが・・・』
『あの強固なブレイズルミナスをどう突破するかっ・・・』
《ガンダムヘビーアームズ改》のトロワ・バートンと《アリオスガンダム》のアレルヤ・ハプティズムは接近してくるシュナイゼル軍のグロースター・エアとジンクスＩＩＩを腕部ガトリング砲とＧＮビームライフルで撃ち落としながらダモクレスを睨む。先行してダモクレスに接近していたベルリ・ゼナムのＧ―セルフ、ノレドとラライヤのＧ―ルシファー、アイーダのＧ―アルケイン、ヒイロのウイングガンダムゼロ、クリムのダハック、カトルのガンダムサンドロック改、フリット・アスノのガンダムＡＧＥ―１フルグランサ、セリック・アビスのクランシェ・カスタム、そしてミック・ジャックのトリニティ、デュオ・マックスウェルのガンダムデスサイズヘルたちモビルスー

ツ、波乱万丈のダイターン3、神勝平たちのザンボット3、竹尾ワッ太のトライダーG7、旋風寺舞人のグレートマイトガイン、ブレイブポリスのファイヤージェイデッカー、響裕太のグリッドマン、ガウマたちダイナゼノンたちスーパーロボットがダモクレスにそれぞれの武装で攻撃を仕掛けているが、ナイトメアフレームの装備されているものとは桁違いの強固を誇るダモクレスのブレイズルミナス・シールドによって完璧に防がれてしまっていた。その強固な盾を破壊すべくスメラギたちも合流しようとした時にそれは現れた。

『おやおや、懐かしい顔ぶれが揃っていますねぇ』

『っ!?散開!!』

その声が聞こえたのと同時に全方位に放たれたミサイルがプトレマイオス2たちに迫ってきた。それを機動力のある機体はかわし戦艦や機動力の劣る機体は当たりそうなミサイルを撃ち落とすか防御して防いだ。そしてミサイルが放たれた方向を見るとそこにはノイエDC所属の別世界でテロリストとして悪名を轟かせたアーチボルト・グリムズの《グラビリオン》とアギラ・セドメの《ソルグラビリオン》、5機の《ヴァルシオン改》を中心にリオン、バレリオン、ガーリオン、ランドリオンなどノイエDCのアーマードモジュール部隊が立ち塞がっていた。

『アーチボルドっ!!生きていたのかっ!?』

『えぇ。どうやら僕はまだ運に見放されてなかったようでしてね』

《SRX》のパイロットの1人であるライディース・F・ブランシュタインは憎悪と怒りを隠さずにグラビリオンに乗るアーチボルトを睨みつけるのに対してアーチボルドは飄々とした態度で笑みを浮かべていた。

――アーチボルド・グリムズ。クロガネ・ヒリュウ改の世界にてスペースコロニー《エルピス》で起きたエルピス事件にて毒ガスを用いてコロニー内の多くの住民を虐殺した実行犯であり、戦いの快楽を追い求め非人道手段を用いた殺戮を平然と行い、逃げ惑う人々をアリの如く殺害することを好む外道を体現したかのような人物。エルピス事件でエルザムが自らの妻であるカトライア・F・ブランシュタイ

ンを殺害せざるを得ない原因を作り、その凶行によってブランシュタイン家の結束に亀裂を走らせた張本人。アースクレイドル内で確実に息の根を止めたと思ったがどうやらしぶとく生き残っていたようだ。
『さぁ！存分に潰し合いましょうか!!』
アーチボルドがそう叫ぶのと同時にグラビリオンの肩、胸、脚に内蔵されている計４８門からホーミングミサイルが放たれ、それに続くようにバレリオンたちもまた砲撃を仕掛けてくる。その中で１機のヴァルシオン改がディバイン・アームを構えながらＳＲＸに接近するとそのまま斬り掛かるがＳＲＸは既のところでかわし、そのまま拳に念動フィールドを集束させるとヴァルシオン改に殴り掛かる。
『くらえ！ザインナッコォ!!』
ＳＲＸのザインナックルがヴァルシオン改の側頭部に当たりヴァルシオン改の頭部の装甲を砕くが、逆再生のように破壊された頭部の装甲は元通りになった。
『マシンセル!?まさかこのヴァルシオン改たちにも施されているというの!?』
ヴァルシオン改が再生されるのを見たアヤ・コバヤシは驚愕に目を見張らせ動揺してしまった。そしてその動揺の隙を突いたヴァルシオン改がＳＲＸの頭部を掴み地面に叩きつける。そして身動きをとれなくさせたＳＲＸに対してヴァルシオン改は反対の手に握るディバイン・アームをＳＲＸに突き刺そうとする。
『させるか!!ガイストナックル!!』
ヴァルシオン改の横腹を《エクスバインボクサー》が腕を念動フィールドで覆った《ガイストナックル》で殴り飛ばし、その衝撃に耐えられなかったヴァルシオン改はＳＲＸから手を離し地面に倒れる。
『大丈夫、リュウセイくん』
『す、すまねぇリョウト。助かったぜ』
ＳＲＸのパイロットの１人であるリュウセイ・ダテはエクスバインボクサーのパイロットであるリョウト・ヒカワに礼を言いながらＳＲ

Ｘを立ち上がらせる。そして彼らの前でヴァルシオン改はガイストナックルで凹んだ装甲を修復させながら立ち上がらせるとそのツインカメラアイを輝かせる。
『ホッ！調子に乗ってんじゃねえぞモブ共が!!』
『その声、テンザンかっ!?』
ヴァルシオン改から響き渡る声を聞いたリュウセイは驚きの声を上げながらヴァルシオン改の手首の砲身から放たれる赤と青の二色のエネルギーを螺旋状に絡ませたビーム《クロスマッシャー》をＳＲＸとエクスバインボクサーはかわす。
――テンザン・ナカジマ。元［［ｒｂ：ＤＣ］ディバイン・クルセイダーズ］に所属するパイロットの１人で、戦争をゲーム感覚で楽しみ敵を撃ち落とすことに快楽を覚える享楽主義者であり、ＤＣの総帥であったビアン・ゾルダークが死亡しＤＣが崩壊してからはアードラー・コッホの元につきヴァルシオン改で出撃し、とあるシステムに取り込まれ暴走しリュウセイにトドメを刺されたはずだった。
『ホ！リュウセイ、名前付き中ボスキャラ程度のお前らはここでプチッと俺が潰してやるよ!!』
『テンザンっ!!お前って奴は!!』
バレリオンとランドリオンのたちと共に攻撃を仕掛けてくるテンザンのヴァルシオン改に対してＳＲＸ、エクスバインボクサー、リオ・メイロンの《ＡＭガンナー》、マイ・コバヤシの《Ｒ―ＧＵＮパワード》、ヴィレッタ・バディムの《ガーバインＭａｒｋ―ＩＩＩ》、アイビス・ダグラスの《アルテリオン》、スレイ・プレスティの《ベガリオン》、草薙剣児の《鋼鉄ジーグ》、司馬宙の《鋼鉄ジーグ》、柳生充子たち《ビルドエンジュエル》が相手取る。
そして離れた場所ではアギラのソルグラビオンと２機のヴァルシオン改とエルアインス、アシュセイヴァーたちをアラド・バランガの《ビルトビルガー》、ゼオラ・シュバイツァーの《ビルトファルケン》、シャイン・ハウゼンの《フェアリオン・タイプＧ》、ラトゥーニ・スゥポータの《フェアリオン・タイプＳ》、リルカーラ・ボーグナインの《ラングリーズ・レイヴン》、ユウキ・ジェグナンの《ラーズアングリフ・

レイヴン》、アルゴ・ガルスキーの《ボルトガンダム》、サイ・サイシーの《ドラゴンガンダム》が相手取り、アーチボルドのグラビリオンと2機のヴァルシオン改、ジガンスパーダ、アースゲイン、ランドグリーズ、ラーズアングリフたちをレーツェルのアウセンザイター、ギリアムのゲシュペンストタイプR、カイ・キタムラの《量産型ゲシュペンストMark―II》、張五飛の《アルトロンガンダム》、ヴァンの《ダン・オブ・サーズデイ》、レイ・ラングレンの《ヴォルケイン改》、テンカワ・アキトの《ブラックサレナ》が相手取っていた。

『クッ！やはりそう簡単に進ませてはくれないかっ!?』

『だが、レーツェルたちが彼らの相手をしてくれているおかげでダモクレスの守備はより薄くなった!!』

アーチボルドたちの襲撃で部隊がさらに分断されてしまっていたが、それでもダモクレスを止めるためにアムロたちは先に進むべく立ち塞がるシュナイゼル軍の3機のデストロイガンダムも5機のユーグリットから放たれるビームを交わしながらアムロとレイ・ザ・バレル、ジョルジュ・ド・サンドはνガンダムのフィンファンネルとレジェンドガンダムのドラグーン・システム、ガンダムローズのローゼスビットでデストロイガンダムとユーグリットたちの武装を破壊し、シン・アスカとルナマリア・ホーク、昭弘・アルトランドはデスティニーガンダムのアロンダイト、ソードインパルスガンダムのレーザー対艦刀《エクスカリバー》、ガンダムグシオンリベイクフルシティのハルバートがデストロイガンダムとユーグリットたちの胴体を切り裂いた。

ダモクレスまであと少しという距離までプトレマイオス2たちが接近したその瞬間だった。

『――――待っていたぞ！少年!!』

上空からその声が響き渡ると同時に刹那・F・セイエイのガンダムダブルオーライザーにガンダムルシファーがその両手に握るブライクニルブレイドとプロミネンスブレイドでガンダムダブルオーライザーに斬り掛かってきたのをGNソードIIIで受け止めるが、機体

の重量と落下による衝撃を抑えきれずガンダムダブルオーライザーは仰け反りそうになるのをブースターを噴かせてＧＮソードＩＩＩとブライクニルブレイド、プロミネンスブレイドが火花を散らせながら鍔迫り合いをする。
『ガンダムルシファー!?《愚者の騎士(ナイトオブフール)》、グラハム・エーカーか!?』
　刹那はガンダムルシファーを睨みつけながら思わず叫ぶ。かつての愛機である《ガンダムエクシア》に酷似している機体からソレスタルビーイングとして活動を始め、ＺＥＸＩＳに所属してから何度も刃を交えた目の前の男、グラハムは宿敵である刹那に対して外部スピーカーを通してこう投げかける。
『皇帝陛下から既に許可(おゆるし)は出ている。故に少年・・・！私と立ち会ってもらうぞ。真剣なる勝負を!!』
『何っ!?』
　刹那が驚きに目を瞠ると、グラハムはさらに威勢よく言い放った。
『この私、《愚者の騎士(ナイトオブフール)》グラハム・エーカーは、君との果し合いを所望する!!』
　そのグラハムの宣言に、∀ガンダムのロラン・セアック、アズ、エッジが驚きのあまりそれぞれ大声をこう出した。
『なんですって!?』
『あいつ！いくらまだ戦いが続いてるからって、この状況をわかって言ってるの!?』
『構うな、刹那！　あんな奴らは無視しろ！　オレたちがあの男の相手を――――』
　エッジの言葉を、刹那が遮った。
『・・・そうまでして決着をつけたいのか？』
『刹那さん・・・！』
　まるで決闘(果たし合い)を肯定するかのような刹那のその言葉に、イカルガのパイロットであるエルネスティ・エチェバルリアが息を呑んだ。
　一方でグラハムも頷き、こう続けた。
『無論だ・・・！私の空を汚し、同胞や恩師を奪い、フラッグファイターとしての矜持すら打ち砕いたのは他でもない、君とガンダムだ!!　あ

あ、そうだとも・・・！最早愛を超え、憎しみをも超越し・・・宿命となったのだ!!』
『宿命・・・？』
『一方的と笑うか？ヴォルフやレイン・フォルネウスのように私怨に囚われていると言うか？そして、悪逆皇帝ルルーシュの［［ｒｂ・騎士＞走狗］］と成り下がったこの私を誹るか・・・？しかし、君たちがどう言い繕おうが事実は変わらんぞ。―最初に武力介入を行ったのは君たちガンダム《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》だという事実はな!!』
『っ・・・！』
赫怒（怒り）すら感じられるグラハムの叫びに、刹那は言葉に詰まった。
　かつてグラハムは、新ヨーロッパ共同体における新型モビルスーツ完成披露演習に乱入した、刹那のかつての乗機であるガンダムエクシアの性能に興味を持ちその謎に迫った。強力な性能を持つガンダムと戦うことを楽しみつつも軍人としての職務を果たしていたが、度重なる敗戦による屈辱と恩師レイフ・エイフマン、部下のハワード・メイスンら戦友を奪われたことで徐々に狂気に囚われていったのだ。
（この男もまた、俺たちによって歪められた存在・・・。ならば・・・！）
　そんな、自分たちがソレスタルビーイングとして武力介入を行ったことで人生を、自分を歪められ、ライやミリアルドたちと同じく悪逆皇帝ルルーシュの騎士となってまでも、自分にただひとつ残された［［ｒｂ・矜恃＞生き甲斐］］を貫こうとするグラハムを前にして、刹那はひとつの決意を固めた。
『――――わかった。果し合いを受けよう』
　これに対し、僅かな間を置いてグラハムが言った。
『その言葉を待っていた。全力を望む・・・!!』
　グラハムの言葉の後、オーライザーのコックピットにいる沙慈・クロスロードが刹那に縋る。
『刹那っ！』
『冷静になれ！そして優先順位を違えるな、沙慈！』

そんなことをしている場合じゃない、と叫ぼうとした沙慈の言葉を、刹那は一蹴した。
『あの男もまたシュナイゼルたち同様俺たちの敵だ！ここで倒しておかなければ多くの仲間たちが犠牲になる!!それに奴を突破した所で他の皇帝騎士たちとマリーベルの軍団がいるし、何よりシュナイゼルのダモクレスとフレイヤが残っている・・・！フレイヤによる凶行を防ぐためにも後顧の憂いとなる奴はここで倒す!!』
『っ!!』
沙慈は返す言葉がなく、押し黙ってしまう。
そうして沙慈が黙ってから僅かな間の後、グラハムのガンダムルシファーが、ブライクニルブレイドとプロミネンスブレイドを収納し腰の二本の刀に手をかけた。
『どの世界にあったとしても、これが私の望む道・・・。修羅の道だ!!』
ガンダムルシファーが、主武装にしてルルーシュ自らが名付けた二本の漆黒の日本刀《ムラクモ》と《サミダレ》を鞘から抜き放った。
『ミススメラギ。ここは俺たちに任せて皆は先に行ってダモクレスを』
『分かったわ刹那も気をつけて』
刹那はスメラギたちに先にダモクレスへ向かうよう告げるとスメラギもそれを了承してプトレマイオス2たちをダモクレスに向かう中、刹那は沙慈と共にダブルオーライザーを、グラハムのペリノアと対峙させた。
『ダブルオーライザー!!』
『我が剣、ルシファー!!』

刹那とグラハムがそれぞれ叫んだと同時に、ダブルオーライザーは両手にGNビームサーベルを取り出して大きく構え、ガンダムルシファーがムラクモとサミダレを勢いよく構える。
『目標を駆逐するっ――――!!!』
『いざ、尋常に――――勝負っ!!!』
そして両機は勢いよく突撃し、互いの剣を激しくぶつけ合った。

「――――やはりＺＥＸＩＳが邪魔になるな」
　ウラヌスの艦橋の玉座に座るルルーシュは忌々しそうにモニターに映るＺＥＸＩＳを睨む。フレイヤがまだ使われていないためシュナイゼル軍に対してこちらは優勢に立ち回っているが、第３勢力であるＺＥＸＩＳの攻撃によりこちら側の戦力も大きく削られウォーダンたち第一独立師団のおかげでまだ本陣まで攻め切られていないがそれも時間の問題に感じられていた。
「ではそろそろ我々も出撃致しますか？」
「シュウか」
　ルルーシュにそう問いかけたのはシュウ・シラカワだった。相も変わらず不遜な態度を取っているように見えるが、真に実力を認めているルルーシュに対して敬意を示していた。
「例の機体は完成したのか」
「えぇ既に出撃準備も完了しております。後は陛下とＣ．Ｃ．様に合わせるだけです」
　シュウはルルーシュに対してそう告げるとルルーシュは少し思案をしてからシュウとマリーカに告げる。
「マリーカ。シュウと親衛隊と共に出撃しＺＥＸＩＳを潰せ」
「おやよろしいのですか？黒の騎士団と違いＺＥＸＩＳはこの先も必要なのでは？」
「ここで潰れるならその程度の連中だったということだ。これから先の戦いはこの戦場よりさらに過酷なものが続く」
「その上で生き延びれたのなら我らの、いえ、この惑星（ほし）の剣として迎え入れるという訳ですね」
　シュウはルルーシュの言葉の真意を理解するとそれ以上何も言わず笑みを浮かべながら下がる。
「マリーカ」
「はっ」
「ＺＥＸＩＳにはかつての君の同僚であるグリンダ騎士団もいる。それでも戦えるか」

ルルーシュはマリーカに確認するようにＺＥＸＩＳと否、グリンダ騎士団と戦えるのかと問いかけるとマリーカは目を閉じてからゆっくりとその瞳を開くとその瞳には覚悟と決意が込められていた。
「私の心とこの身は全て陛下のモノです。例え、かつての仲間たちだとしても陛下の敵として立ち塞がるのであれば容赦はしません」
マリーカはルルーシュにそう宣言しそれに同意するように彼女のそばにいる５人の騎士たちも覚悟を決めた表情でルルーシュを魅入る。ルルーシュはその答えに満足したのか笑みを浮かべる。
「ならその忠義をこの戦場で示してみよ」
「「「「「イエス・ユア・マジェスティ!!」」」」」
こうして戦場に重力の魔神と戦乙女たちが新たに躍り出て、その猛威を敵に対して振るうのだった。
多くの命が儚く散る戦場はより激しくなり、地上をナイトメアやモビルスーツ、ゾイド、モビルアーマーなど様々な破壊された機体や戦艦の残骸が埋め尽くさんばかりに転がっている中でも戦闘は収まる気配を微塵も見せない。そんな中、醜い悪意とそれを利用しようとする巨大な悪意たちが蠢いていることをこの時はまだ誰もが気づいておらず、その醜い悪意によって起こされる悲劇が獣たちの枷を外し、それによって地獄が広がってしまうのだった。

第十話　思いを剣に乗せて

紅き彗星と蒼き流星となったガンダムルシファーとガンダムダブルオーライザーは銃弾や砲撃などが飛び交う戦場の中を斬り結びながら何度もぶつかるように飛び交っていた。

『そうだ！この戦いだ!!私はこの戦いをずっと待ちわびていたのだ!!』

グラハムのガンダムルシファーが、ムラクモとサミダレを振るい進路の妨げになっているガレスを斬り捨てると刹那と沙慈のガンダムダブルオーライザー目掛けて真っ直ぐ突っ込んでくる。

『生きてきた・・・！私は、この為に生きてきたっ!!』

グラハムは狂気をその身に宿し、刹那との待ち望んでいた戦いが出来ることに感謝しながらムラクモをガンダムダブルオーライザーの右肩に向けて振り下ろすのをガンダムダブルオーライザーは右手のＧＮソードＩＩＩで受け流しながら距離をとる。

『たとえ悪逆皇帝の傀儡と成り果てようとも、この武士道だけはっ!!』

グラハムは叫びながら腰に装備されている八本の投擲ナイフ《ＧＮウルズナイフ》をそれぞれ両指の間に挟み、ガンダムダブルオーライザーに向けて投擲する。それをダブルオーライザーはＧＮビームマシンガンとＧＮマイクロミサイルの同時射撃で打ち落としながらガンダムルシファーを攻撃する。それをガンダムルシファーはムラクモとサミダレを鞘に戻しブライクニルブレイドとプロミネンスブレイドを構え、ブライクニルブレイドで迫り来るビームを凍結させて撃ち落とし、プロミネンスブレイドを振るって炎を纏った斬撃を飛ばしてＧＮマイクロミサイルを爆散させる。

『そうまでして・・・！』

『そうまでしてなのだ!!』

刹那の叫びを、グラハムは更なる叫びで一蹴した。ガンダムルシファーは爆煙の中を突き進みガンダムダブルオーライザーに近づくとブライクニルブレイドを振り下ろすのをＧＮソードＩＩで受け流そうと受け止めるが、ブライクニルブレイドの刀身から発せられる冷

気によってＧＮソードＩＩが凍っていくために刹那はＧＮソードＩＩを捨て、反対の手に握るＧＮソードＩＩでブライクニルブレイドを切り上げてガンダムルシファーの手から叩き落とすとそのままＧＮビームマシンガンをガンダムルシファーの頭部に放つ寸前に、ガンダムルシファーがガンダムダブルオーライザーの腹部を蹴りつけてその反動で距離を取ることで防いだ。
『勝利だけが望みか!?』
『他に何があるっ!!』
　ガンダムダブルオーライザーはＧＮソードＩＩＩをライフルモードに変更してガンダムルシファーにＧＮビームを連射しながら接近を仕掛けてくるのをガンダムルシファーはプロミネンスブレイドで迫るＧＮビームを切り払いながらガンダムダブルオーライザーにこちらも近づき、２機のガンダムは互いに頭突きをするかのように頭部をぶつけ合い、プロミネンスブレイドとソードモードに変形させたＧＮソードＩＩＩがぶつかり合い火花を散らす。
『決まっている・・・！未来へと繋がる、明日だっ!!』
『この戦いに勝たずして明日などない!!』
　ガンダムルシファーとガンダムダブルオーライザーは一度互いに距離をとると、ガンダムルシファーはプロミネンスブレイドを収納し背部のルシファーブースターの翼の一部を分離・変形させた《ダークネスブレード》を両腕に装備させるとカメラアイを輝かせる。
『さあ！純粋なる戦いを、共に楽しもうじゃないか!!』
　闘志に激ったグラハムの雄叫びと共に、ダークネスブレードを構えたガンダムルシファーがガンダムダブルオーライザー目掛けて突撃してきた。

『雛っ!!聞こえるんだろ雛!!』
『渡瀬・・・青葉・・・。ゾギリアの・・・敵』
　青と白のヴァリアンサー《ルクシオンネクスト》の外部スピーカーから渡瀬青葉が《ネクターライフル》でクーゲルを撃ち抜きながら、目の前にいる乗るピンクのヴァリアンサー《カルラ》の中にいるヒナ・

リャザンに必死に声をかけるが、コックピットのヒナは暗く濁った、光の無い瞳は敵である青葉を見つめながらカルラの大鎌付きネクターライフル《ネクターバレットライフル》でルクシオンネクストに斬りかかってくるのをルクシオンネクストは二本の《ネクターブレード》で防ぐ。

『青葉！』

『貴様の相手は俺だっ!!』

『くっ!?邪魔をするな!!』

赤と白のヴァリアンサー《ブラディオンネクスト》の隼鷹・ディオ・ヴェインバーグが青葉を援護しようとブラディオンネクストを飛ばそうとするも紫の重武装ヴァリアンサー《ネルガル》が両腕に装備した《ネクターバレットバズーカ》による苛烈な砲撃に晒され、ブラディオンネクストも迫るネクター弾と榴弾を《ネクターライフル》で撃ち落とすので精一杯になっているため青葉の援護に向かえないでいた。

それはディオだけでなく飛鷹葵たちチームＤの《ダンクーガノヴァマックスゴッド》、藤原忍たち獣戦機隊の《ファイナルダンクーガ》、ゲイナー・サンガの《キンググゲイナー》、明神タケルの《ゴッドマーズ》たちＺＥＸＩＳもアルフリード・ガラントの黒のヴァリアンサー《アルシエル》、タルジム・ヴァシリーの緑のヴァリアンサー《オーガ》、ラーシャ・ハッカライネンの水色のヴァリアンサー《クリシュナ》、さらに新たにルルーシュの配下に加わった６０ｍ級の巨大ロボット《メガトン級ローグ》である蒼き鋼鉄のサムライ《ムサシ》、白き白馬の騎士《アーサー》、赤と黒の重武装の巨兵《マキシマスブレイズ》たちメガトン級ローグたちと３０ｍ級のローグ部隊を相手取っているため青葉のフォローに回れないでいた。

『聞こえる青葉!?あなたとディオが戦っている２機のヴァリアンサーは強制的にカップリングが行われているわ!!』

『なんだって!?』

シグナスの艦橋のサブモニターでカルラとネルガルを見ていた自由条約連合の特務士官にしてヴァリアンサーの研究者エルヴィラ・ヒルが、険しい表情で叫んだ内容に青葉は迫り来るカルラのネクターバ

レットライフルをかわしながら思わず大きな声を上げてしまう。
『エンファティアレベルを上げるための薬物投与・・・。場合によっては、意識を一方向へ向けるための精神制御・・・。ヴィルヘルム・ハーンならば、ルルーシュ皇帝のギアスとは似て非なるそれらの被人道的な方法で、無理矢理カップラーを養成することも有り得るわ！』
エルヴィラのその言葉に、青葉たちに動揺が走った。
『つまり、雛が敵に操られているってことかよ!?』
『そしてそのバディはビゾン・ジェラフィルか・・・！』
青葉が叫び、《ゴッドガンダム》のドモン・カッシュが唸った直後、彼らの目の前でアサルトライフルを構えていた5機の無頼改が上から降ってきた紫色のビームに包まれた巨大な光弾が無頼改たちを破壊し地面に降り立った。紫色の光弾が弾けると同時に姿を現したのはドモンにとっての師匠であると同時に強敵として何度も立ち塞がりドモンの腕の中でその命を終えた存在である東方不敗・マスターアジアの愛機である翼の生えた黒きガンダム《マスターガンダム》だった。
『マスターガンダムっ!?その機体に乗っているのはまさか・・・!!』
《ライジングガンダム》のレイン・ミカムラがマスターガンダムを見てそのパイロットの名を叫ぶよりも先にマスターガンダムの周りに3機のガンダムが降り立った。
巨大な翼を持つ鳥を彷彿とさせる白いガンダム《ガンダムヘブンズソード》、堅牢な装甲で覆われた2本の巨大な牙と四つの砲塔を携えるガンダム《グランドガンダム》、三本足の紫色のボールに胴体と頭部が収納されているガンダム《ウォルターガンダム》。かつて《デビルガンダム四天王》と呼ばれドモンたち《シャッフル同盟》を苦しめた4機のガンダムが並び立つその光景はドモン達だけでなくＺＥＸＩＳ一同にも強いプレッシャーを与えるものだった。
『久しいな、ドモンよ』
『その声はやはり師匠っ!?何故生きているんだ!?あなたはあの時確かに――――』
動揺しながらもドモンはマスターガンダムに乗る東方不敗に対し

て声を上げた瞬間、一瞬にしてゴッドガンダムの前に移動したマスターガンダムはその手にビーム状のムチ《マスタークロス》を布状のムチにしてゴッドガンダムに斬りかかるのを既のところでゴッドガンダムのビームサーベルが防ぐ。
『この愚か者がっ!!戦いの最中で動揺するなとあれほど教えたであろうがっ!!』
『ぐうっ!?』
マスターガンダムはマスタークロスを解除するとそのまま残像が残るほどの激しい拳と蹴りによるラッシュを繰り出しそれに対してゴッドガンダムもまたラッシュで応戦し、それによって2機の間には竜巻のように荒れ狂い始め、誰も近づけることができないでいた。その間にもガンダムヘブンズソードたちはデビルガンダムの生み出したデスアーミー、デスビースト、デスバーディを引き連れ《ガンダムマックスター》のチボデー・クロケットや《ノーベルガンダム》のアレンビー・ビアズリー、《ガンダムローズ》のジョルジュ・ド・サンド、ライジングガンダムのレインたちシャッフル同盟とその関係者を中心にＺＥＸＩＳに攻撃を仕掛けてきたために青葉とディオの援護に迎えないでいた。
『くそっ！雛ぁ!!』
『落ち着け青葉!!』
雛が洗脳されて無理やり戦わされていると聞いて頭に血が上ってしまった青葉はルクシオンネクストを飛ばし、カルラに向けてネクターブレードで斬りかかろうとするのをディオは止めようとするがそれを妨害するようにネルガルのネクターバレットバズーカのネクター弾が放たれ、それに既の所で気づいた青葉はルクシオンネクストのシールドで防ぐが一部溶解してしまった。
『渡瀬青葉っ!!貴様という存在をこれ以上許しておけない!!今日こそは俺とヒナが、貴様を殺す!!』
『ふざけんなっ!!ヒナの意思を無理やり捻じ曲げて操ってる奴が何言ってやがる!!』
両手に一丁ずつ持ったネクターバレットバズーカによるネクター

弾と榴弾をショットガンのように広範囲に乱射するネルガルに対してルクシオンネクストはネクターバレットライフルとネクターブレードで撃ち落とし捌きながらネルガルに接近するとネルガルにネクターブレードを袈裟懸けに斬りかかるが、ビゾンはネルガルの《ネクターランス》で防ぎ2機の間に激しい火花が散る鍔迫り合いを繰り広げる。

『ヒナを守るのは俺だ!!貴様如き蛆虫がヒナに近寄るなど許されないんだよっ!!貴様も他の連中のようにこのコンスタンティンの大地に沈めっ!!』

『冗談じゃないぞ!!こんな所で死んでたまるかよ!!』

狂気と憎悪に満ちた顔でビゾンはネルガルのコックピットの中から青葉とルクシオンネクストを睨み、両腕のネクターバレットバズーカをゼロ距離で砲撃しようとするがその寸前にルクシオンネクストはネクターブレードを振り下ろして砲身の位置をずらすことに成功し直撃は避けられたがその余波で体勢を崩したルクシオンネクストに対してネルガルはルクシオンネクストの胴体を蹴り飛ばしてシュナイゼル軍のカールレオン級に叩きつける。そしてその隙をつくかのように急降下してきたカルラがその手に握るネクターバレットライフルの大鎌を振り下ろしルクシオンネクストを切り裂こうとするもカルラの接近に気づいた青葉はすぐに距離をとって斬撃をかわし、カルラの大鎌はカールレオン級の動力部を斬り裂いたことでカールレオン級は墜落していくがカルラはそれを無視してルクシオンネクストに対してネクター弾を連射する。

『ゾギリアの敵・・・排除・・・』

『やめてくれ雛!!』

感情の籠っていない呟きを零しながらルクシオンネクストに対してネクターバレットライフルの大鎌を振るって来るカルラに対してネクターブレードで防ぎながら青葉はヒナを止めるために必死に声を上げるが、ヒナは容赦なく機械的に青葉の命を狩るためにネクターバレットライフルの大鎌はルクシオンネクストの装甲を削り、カルラの攻撃に合わせてネルガルも襲ってくるため青葉は徐々に追い詰め

られていた。
『死ねぇっ!!渡瀬青葉ァ!!』
『させるかっ!!』
　ビゾンの叫びと共にネルガルのネクターランスがルクシオンネクストの胴体に向けて突き出されるが、その槍先が刺さる寸前にブラディオンネクストが割って入りネクターランスをネクターブレードで弾き、その胴体を蹴り飛ばしながらルクシオンネクストと共にカルラとネルガルから距離を取った。
『すまねぇディオ・・・』
『礼はいい。それよりも青葉、分かっているな』
　ディオは青葉に確認するように訪ねながらもその視線はカルラとネルガルから逸らさないでいた。
『手を貸してくれるのか、ディオ?』
『そのつもりだ』
『でも、相手はカップリング機で、他にもルルーシュとシュナイゼルたちの機体が入り乱れてて・・・』
『なんだ?　今更尻込みするのか?自信がなくなったのなら引っ込んでろ!!』
『何っ!?』
　ディオの冷たい一喝に青葉は気色ばんだが、ディオはそんな暇も与えないかのように冷たく厳しい声で言った。
『頭を冷やしてよく考えてみろ。あんな無理矢理のカップリングに俺たちが負けると思うか?』
『っ!・・・負けねえ!!』
　青葉は、ルクシオンネクストの操縦桿をグッと握りしめた。
『だったら決まりだ。そしてこの機を逃がしたら、もう雛を取り戻せるチャンスはないと思え。お前の持ち前の意地と根性を使ってでも必ず成功させてみせろ。いいな?』
『ああ・・・!よっしゃっ!!』
　ディオの檄を受けて、青葉は気合を入れ直すように自分の両の頬をパンッと勢いよく自分の手で張った。

「・・・彼らの覚悟も決まったようだね。まさにここが正念場というものだ」
シグナスの艦橋にて倉光源吾が、ディオと青葉の覚悟に安堵したように言ってから、エルヴィラがディオと青葉たちにこう呼びかけた。
「わかってると思うけど敵はカルラとネルガルだけじゃないわ！他の敵機に注意しながら、カルラとネルガルを連携させないように心がけて!!」
大切な存在を助け出すために、青葉はバディであるディオと協力してカルラとネルガルに戦いを挑むのだった。

『ラ・カァァァン!!』
『ゲオルグかっ!!』
バイオゾイドとゾイドたちの残骸が至る所に転がっている中、通常のバイオトリケラより一回り以上巨大な《バイオギガトリケラ》を操るディガルド四天王が1人、ゲオルグは因縁の相手である《ソードウルフクラッシャー》とラ・カンに対して怨嗟の声を上げるとその巨体を揺らしながらソードウルフクラッシャーに向けて突進し二本の巨大な角《ヘルツインホーン》で貫きにかかるのをソードウルフクラッシャーは軽々とバイオギガトリケラを飛び越えその背中に腹部の《２０８ｍｍ２連装ショックカノン》からメタルＺｉの弾が放たれるが、バイオギガトリケラの頭部の盾である《フレアシールド》の側面の角から周囲を覆うように《電磁バリア》を発生したことで、メタルＺｉの弾はバリアに弾かれる。
『まったく、本当に厄介な相手だよっ!!』
『同意だな』
ロン・マンガンの《バンブリアングランド》とセイジュウロウの《ソウルタイガーブースト》もまたそれぞれの部隊のゾイドたちと協力してバイオギガトリケラに攻撃を仕掛けるが電磁バリアの前に尽く防がれていた。
『神の威光を理解せぬ愚者共がっ!!我が前にひれ伏せぇ!!』

ゲオルグは狂信者のように狂った叫び声を上げながらバイオギガトリケラは大地を揺らしながらメタルＺｉの弾を放つ目の前のセイバータイガーとコマンドウルフの胴体をヘルツインホーンで貫き、背後から襲いかかって来るバイオメガラプトルに対してヘルアーマーで覆われた尻尾で薙ぎ払う。ルルーシュの策によってその数を大きく減らしたはずのディガルド軍のバイオゾイドたちだが、ディグから無尽蔵に出撃するバイオゾイドたちは最初の戦闘で失った数以上のバイオゾイドたちがラ・カンたちジーン討伐軍のゾイドたちを中心に巨大な津波が如く勢いで大地を埋め尽くさんばかりに襲いかかり、その勢いによってジーン討伐軍のゾイドとバイオゾイドたちは次々と破壊され大地にその骸を転がしていた。

『くっ！どうすればあのバリアを突破できるんだっ!?』

《ムラサメライガー》がエヴォルトし《ムゲンライガー》となったコックピットの中でルージ・ファミロンはバイオギガトリケラの強固すぎる電磁バリアを突破できないことに歯噛みしていた。それは同じようにバイオギガトリケラに攻撃を仕掛けているガラガの《デッドリーコング》、レ・ミィの《ランスタッグブレイク》、ソウタの《ランスタッグ》コトナ・エレガンスの《レインボージャークウインド》、ザイリン・ド・ザルツの《バイオヴォルケーノ》を中心に攻撃を仕掛けるがバイオギガトリケラの電磁バリアの前に誰もが為す術がないと思ったその時だった。

『――――ようやく見つけたぞ。ゲオルグっ!!』

怨嗟の籠った憤怒の声が響くのと同時に空気を揺らすほど凄まじい轟音が聞こえ、バイオギガトリケラの電磁バリアに砲撃が当たりその威力によってバイオギガトリケラは数メートルほど地面を削りながら後退させられてしまった。ルージたちが砲撃の放たれた方角を見るとそこにはバイオギガトリケラの数倍はあろう巨大なスピノサウルス種のゾイド《ジェノスピノ》が両脚部の側面に装備している巨大なロングキャノン砲《Ａ―Ｚロングキャノン》の砲身の先から煙を上げていた。

『貴様はヴォルフ!!生きていたかっ!?』

『あぁ生きていたさ。貴様らディガルドを滅ぼすために俺はここにいる!!』
ヴォルフの声に答えるようにジェノスピノはＺ―Ｏバイザーで覆われた瞳を赤く輝かせ咆哮を上げた。その咆哮を聞いたゾイドとバイオゾイドたちの半数近くがジェノスピノを恐れ後ずさる。そしてジェノスピノは一直線にバイオギガトリケラに駆け出した。無論、それを黙って見すごすなど有り得ずバイオラプター、バイオメガラプトル、サザーランド、グロースター、暁、無頼改、ビルゴＩＩＩ、ザムザザーなどディガルド軍やシュナゼル軍の機体がジェノスピノに対して襲いかかるが、その攻撃はジェノスピノの装甲を傷つけることも出来ずジェノスピノの巨体にぶつかり弾き飛ばされるかあるいは踏み潰されていく。
『ゲオルグゥゥゥ!!』
『ヴォルフゥゥゥ!!』
ゲオルグとヴォルフは互いに憎悪を籠った声を叫びながらバイオギガトリケラとジェノスピノは互いにその巨体をぶつけ合わせる。一瞬拮抗したかと思えたがジェノスピノはバイオギガトリケラのヘルツインホーンを噛み、顎の力だけで持ち上げるとそのまま勢いよく地面に叩きつける。その衝撃によってバイオギガトリケラの装甲の一部がヒビ割れ、ヘルツインホーンの右角も歪んで横に倒された。追撃を仕掛けるようにジェノスピノはバイオギガトリケラを踏みつけようとした瞬間、バイオギガトリケラは電磁バリアを張ることに成功しその攻撃を防ぐ。
『無駄だ!!神が私に与えて下さったこの力の前では、貴様ら蛆虫の攻撃など恐るるに足らず!!』
ゲオルグはジーンから与えられた電磁バリアに対して絶対的な自信を持ちながらヴォルフにそう吠えるが、ヴォルフはそれに対して猛獣のように目を鋭く細め、口角を上げその鋭い犬歯を覗かせるとジェノスピノの力を解放させた。
『ジェノスピノ、進化解放!!エヴォブラストー!!』
エヴォブラストを発動したジェノスピノの半円を描く背鰭として

背中に収まっていた《ジェノソーザー》が展開し、回転ノコギリ状に形状を変化した。唸りを上げて回転を始めるジェノソーザーは勢いよく電磁バリアが張られたバイオギガトリケラに向けて振り下ろされた。

『殲滅破壊（ジェノサイドクラッシャー）ァァァ!!』

ヴォルフの雄叫びに合わせるようにジェノスピノもまた咆哮を上げながらジェノソーザーの勢いを強める。それは電磁バリアをまるで熱したナイフでバターを切るかのようにジェノソーザーは電磁バリアを容易く切り裂き、そのままバイオギガトリケラのヘルアーマーに深々とめり込み、金属の削るような音を響かせながら胴体を真っ二つに切り裂かんとしていた。

『ば、馬鹿な!?神が与えてくださった力が!?我がバイオギガトリケラが!?』

ゲオルグはまるで悪夢を見せられているかのような気持ちで現実を認められないとばかりに動揺していた。コックピットの中でアラートなどが鳴り響き破損した計器の破片が飛び散ったり蒸気が噴く中でもヴォルフから告げられた最後の言葉はしっかりと聞こえた。

『じゃあなゲオルグ。後で貴様の所の神気取りのクズもそっちに送っといてやるからゆっくりと待っていな』

『ヴォルフ!!貴様ァァァ!!』

ゲオルグはヴォルフに対して怨嗟の声をあげながらもヴォルフを討とうとバイオギガトリケラを動かそうとしたが、ゲオルグがバイオギガトリケラを動かそうとしたのと同時にその胴体を真っ二つに切り裂かれ、ゲオルグは爆散したバイオギガトリケラの炎の中に飲み込まれた。

『そ、そんな・・・あのゲオルグをああも簡単に・・・』

ルージは何度も自分たちを苦しめた相手であるゲオルグがまるで赤子の手をひねるかのように容易く倒してしまったヴォルフに対して恐れを感じるのと同時に［［ｒｂ：運命の騎士＞ナイトオブフォーチュン］］の力の一端を見て驚愕した。

しかしそんなことを思うのも束の間、バイオギガトリケラの頭部を

踏み砕きながらジェノスピノは次のターゲットを見つけたと言わんばかりに唸り声をあげるとＡ―Ｚロングキャノンの砲身を動かす。

――――――その砲身の先にはバイオヴォルケーノとランスタッグがいた。

『――――っ!?危ない!!』

いち早く気がついたルージはムゲンライガーから《ハヤテライガー》へとエヴォルトさせて一気に加速してその勢いとハヤテライガーの全体重を乗せた体当たりをジェノスピノの右足にぶつける。それによって砲身の向きを僅かにずらす事は出来、放たれた砲弾をルージの声で気づいたザイリンとソウタはギリギリ避けられたが彼らの周りにいたジーン討伐軍のゾイドは避けられずバイオメガラプトルとランスタッグたちの胴体を抉り、さらに着弾した場所はクレーターのように地面が抉れ、その周囲には装甲を砕かれたか足や頭部などを失ったゾイドたちの骸が転がっていた。

『ちっ！邪魔をするな!!』

ヴォルフは苛立ちを隠さず舌打ちをしながら足元にいるハヤテライガーを右足で蹴り飛ばすとハヤテライガーはサッカーボールのように勢いよく地面を数回バウンドしながら破壊されたギアナ級地上戦艦に叩きつけられる。

『『ルージ!!』』

『てめぇ、やりやがったな!!』

コトナとミィがルージを心配するように悲痛な声を上げながら倒れたハヤテライガーに向けてレインボージャークウインドとランスタッグブレイクを飛ばす中、仲間をやられて頭に血が上ったガラガはジェノスピノに向けてデッドリーコングを走らせると背中に背負っている棺桶のような箱《ヘルズボックス》からメタルＺｉ製の武器である大鎌とメイスを取り出しさらにヘルズボックスから２本のメタルＺｉ製のサブアームを展開させ飛びかかる。さらにそれに続くようにセイジュロウのソウルタイガーブーストも残像を残すほどの速度でジグザグに動きながら背後からジェノスピノに飛びかかる。どちらの攻撃も当たれば並大抵の敵ならば倒せる攻撃だ。しかし彼ら

の前に立ち塞がるのは数多に存在するゾイドたちの中でも最上位に君臨する力を持ったジェノスピノ。
『その程度の力で、ジェノスピノが止めらるかっ!!』
ジェノスピノは背後から飛びかかってきたソウルタイガーブーストをその巨大な尻尾で薙ぎ払い、デッドリーコングに対しては大鎌とメイスをその頑強な装甲で受け止めそのままデッドリーコングの胴体に頭部をぶつけ空に向けて弾き飛ばした。エースであるゾイド乗りの3人が瞬く間に倒される姿を見てジーン討伐軍のゾイド乗りはその事実に動揺を隠しきれないでいた。しかし機械兵が操作するディガルド軍のバイオゾイドたちに恐れなどという感情を持たず、群がる蟻のようにジェノスピノに襲いかかる。
『邪魔だ、雑魚共がっ!!』
ジェノスピノは迫り来るバイオラプターやバイオメガラプトルたちに対して口腔内の《A—Z高熱火炎放射器》から5000℃の火炎を薙ぎ払うように首を横に振って放ち、、火炎に包まれたバイオラプターやバイオメガラプトルたちのヘルアーマーごとその体を飴のように溶かし、炎をかわしたバイオスピノとバイオケントロたちをジェノソーザーで両断あるいはA—Zロングキャノンやジェノソーザーに備え付けられた《ソーザーバルカン》、頭部のキャノン砲で撃ち抜く。
ヴォルフの怒りに応えるようにその［［rb：暴力＞ちから］］を存分に振るう灼熱の破壊龍は殺戮を楽しむかのように咆哮を上げるのだった。
ディガルド軍とジーン討伐軍のゾイドたちは互いの敵に攻撃をしつつも、この中で最も脅威な存在であるジェノスピノに攻撃を集中させているのだった。

◆◆◆

『どうした、その程度で終わりか藤堂鏡志朗!!』
『くっ!?』

ペルセウスが振るう鎌型ＭＶＳ《ハルパー》を斬月の制動刃吶喊衝角刀で受け止めるが、一瞬拮抗したかと思えばペルセウスは腰部に搭載されている《コアルミナスソード》を展開し斬月の胴体に突き刺そうとするが、既のところで輻射波動障壁を展開し防御すると斬月はペルセウスから距離をとる。

無傷のペルセウスに対して斬月は左腕と左翼の飛翔滑走翼を斬り落とされ、機体の装甲の至る所に罅が入っており関節部からは火花が散っていた。

藤堂はもちろん、斬月は強かった。ブラックリベリオン後、ラクシャータが新たに彼の専用機として開発した高性能のワンオフ機体であり、主武装である対ナイトメア戦闘用大型刀《制動刃吶喊衝角刀》による剣技はもちろん、その機体の特徴のひとつとなっている赤い鬣のようになっている防御兵装《衝撃拡散自在繊維》と輻射障壁を用いた、藤堂本人の技倆を活かした格闘戦は、《第七席（ナイトオブセブン）》の枢木スザクのかつての愛機である《ランスロット・コンクエスター》も含めたラウンズ専用機とも互角に渡り合えるほど申し分のないものだった。

しかし対するマリオのペルセウスは、ロイド・アスプルンドとセシル・クルーミーというブリタニアのトップクラスのナイトメア技術者2人が『人間が乗る』という機動兵器の大前提を完全に無視して趣味で高度のハイスペックを追求し、あらゆる最新技術を詰め込んで造り上げた第九世代ＫＭＦ《紅蓮聖天八極式》と《ランスロット・アルビオン》といった超高性能機（ハイエンドクラスモデル）のデータを元にフリーでありながらロイドやセシル、ラクシャータ・チャウラーと同等の技術を持つナイトメア技術者であるルキナ・ヘファイストスが様々な機動兵器たちのデータを合わせた結果、紅蓮聖天八極式とランスロット・アルビオンに並ぶ第九世代ＫＭＦとして完成させられたのがマリオとマーヤの乗るペルセウスとアキレウスだ。

ペルセウスはランスロット・アルビオンを上回る機動力と運動性能を発揮した上で、攻撃と防御にも使えるエナジーウイングと、ギャラハッドのエクスカリバーと同等の力を持つハルパーと腰部と両肩部に搭載されたコアルミナスソードによる近接戦闘、実弾とハドロン砲

を使い分けるライフル《レーヴァテイン》による遠距離戦闘など、スーパーロボットを相手にしても十分な火力を保持していると言っても過言では無いほどの火力を見せつけてきた。
　そんなナイトメアの最高峰の一機に入るペルセウスの前に、藤堂の斬月は部下たちと連携をしながら奮戦するもその圧倒的な力の前に旗色が悪くなり始め、それを援護しようとマーヤたちによって機体を損傷し新たな機体に乗り換えた朝比奈と千葉、彼らに足止めを食らわされているアキトたちＷ―Ｚｅｒｏ部隊のアレクサンダたちも中々近づけず、その他黒の騎士団団員、無人機であるブレイディフォックス部隊、ヴァリアンサー部隊も次々と倒されていく。
『ＺＥＸＩＳやゼロ（ルルーシュ）がいなくても・・・俺たち黒の騎士団は負けねぇんだよ!!』
『ついこの間までゼロを旗にしていた癖に随分と都合のいいことだな!!』
　ペルセウスの黒紫のエナジーウイングから放たれる紫水晶の光弾による激しい豪雨を避けながら玉城真一郎はフル装備の暁による腕のハンドガン、バズーカ、グレネードランチャーをペルセウスに向けて一斉掃射しながら叫ぶのをマリオはハルパーで迫り来る実弾を切り裂きながら玉城の暁に近づくとその頭部を掴み、近くにいた杉山賢人の暁に向かって投げ飛ばしながら吠える。
『ルルーシュがいなければ何も出来ない役立たず共が！その命、ここで散らせ!!』
　マリオはレーヴァテインによるハドロンショットと実弾による斉射で黒の騎士団団員たちの無頼、無頼改、暁たちを撃ち落としながらハルパーで鹵獲機であるジンクスの胴体を斬り裂く。
『マリオ!!』
『この野郎!!』
　仲間がやられたことに怒りを隠さず肆番隊隊長黒森愛華と拾番隊隊長荒井正和の暁の発展機である《鳴月》がペルセウスに対して廻転刃刀を握りながら襲いかかってくるが、その刃が届くよりも先にハルパーから放たれた斬撃波によって為す術なくコックピットごと両断

され、爆散してしまった。
『黒森隊長―っ!?』
『このクソッタレがぁ!!』
『うわぁぁぁ!!隊長たちの仇だぁぁぁ!!』
　仲間が次々とマリオによって殺されていくのを見て錯乱した団員たちが怒りで我を失いながらもマリオに突撃を仕掛けるも冷静さを失った連中に遅れをとる訳もなく無慈悲にその命を奪っていく。
『チィっ!?このままじゃ黒の騎士団の連中が全滅しちまうぜ!!』
『分かっています!!ですがっ・・・!!』
　舌打ちをしながらアシュレイ・アシュレイが《アレクサンダ・レッドオーガ》のヒートソードでシュナイゼル軍のユーグリットの胴体を突き刺しながら《アレクサンダ・ドローン》を操るレイラ・マルカルに対して声をかけるが、レイラも接近してくるブレイディフォックスに対して《アレクサンダ・Ｔｙｐｅ―０２》リニアアサルトライフル《ジャッジメント》で迎撃しながら必死に頭を悩ませていた。
『って言っても向こうの心配なんてしてる余裕なんかないけどねっ・・・!!』
『コイツら、ユーロ・ブリタニアの連中より強い・・・っ!!』
　成瀬ユキヤと香坂アヤノの《アレクサンダ・ヴァリアント》が向かってくるグロースター・グリンダとサザーランド・グリンダたちに対して折り畳み機構を備える大型電磁加速砲《リニアレールカノン》と対ナイトメア戦闘用可変ソード《オーガス・ロングレイ》で迎撃をするが、敵の強さの前に苦戦を強いられていた。そしてレイラたちが黒の騎士団の援護に迎えないのは日向アキトと佐山リョウが相手をしている存在もあるためでもあった。
『どうした?もっと本気でかかってきたらどうだ』
『野郎っ・・・!!』
『この男、強いっ・・・!!』
　オダ・ノブナガの操る白のカラーリングの鎧武者の姿をした大型イクサヨロイ《ザ・フール》が大太刀を振るう度にリョウの《アレクサンダ・ヴァリアント》とアキトの《アレクサンダ・リベルテ》に落雷

が振り下ろされるのをアキトたちはインセクトモードに変形してかわしながらジャッジメントでザ・フールに攻撃を仕掛けるが、ジャンヌ・カグヤ・ダルクの水色の大型イクサヨロイ《オルレアン》が展開する旗を思わせる《聖なる光のベール》によって防がれる。

『ノブナガの邪魔はさせないわよ!!』

ジャンヌはオルレアンの槍をリョウのアレクサンダ・ヴァリアントに向けて突き出すが、リョウはアレクサンダ・ヴァリアントをインセクトモードからナイトメアモードに変更させ、その手に両刃の斧《対ナイトメア戦闘用可変アックス》を装備し槍を弾くとそのままオルレアンに可変アックスを振り下ろすがオルレアンも槍で防ぎながらアレクサンダ・ヴァリアントにたいして反撃を仕掛ける。そしてアキトのアレクサンダ・リベルテもまたザ・フールに対して折り畳み式格闘兵装である刀で斬りかかるのをザ・フールは大太刀で受け止め、互いにそのまま機体が傷つくのもお構い無しに刀と大太刀による斬り合いを始める。

『くっ!?』

『いいぞ、もっと見せてみろ!!貴様の力を!!』

ザ・フールの大太刀を刀と左腕のブレイズルミナスで受け流しつつジャッジメントで反撃を仕掛けるがザ・フールは大太刀で迫る弾丸を切り伏せながら雷をアレクサンダ・リベルテに向けて降り注ぐ。藤堂たちがマリオたちによって追い詰められている同時刻。扇たちは藤堂たち以上に追い詰められていた。

『死ね!・死ね!・死ねぇぇぇ!!』

マーヤは狂ったように増加装甲をパージさせたアキレウスのグングニルで斑鳩の護衛艦であるカールレオン級戦艦の動力部を貫き撃墜させると、そのまま護衛部隊の暁、無頼改たちに襲いかかる。アキレウスの通った場所は破壊された黒の騎士団の戦艦や機体たちの残骸が蔓延り、仲間を次々と無慈悲に殺していくマーヤとペルセウスの姿を見て団員たちの間に恐怖が伝染し動きが鈍り中には逃走を図ろうとした者もいたが、背を向けた瞬間ペルセウスの凶槍に貫かれ絶命していくため団員たちは助かるためにマーヤを殺そうと一心不乱に

攻撃を仕掛けるもそれは命を刈り取られるのを少しでも伸ばすだけの延命行為でしか無かった。
『マーヤさん・・・っ!!』
『躊躇うなっ!!一瞬でも気を抜けば死ぬのは俺たちだぞ!!』
『だけどこのままじゃ・・・っ!!』
　絶え間なく襲い来るブレイディフォックスの攻撃をかわしつつ迎撃をしているのはパラメイルやカタクラフトなどと同じく別世界の技術で造り上げられた機動兵器《ＡＭＡＩＭ》。その中でも特殊な機体である自律思考型ＡＩ《Ｉ―ＬｅＳ》を搭載した３機の《ＭＡＩＬｅｓ》。白と赤のカラーリングに剣戟特化の高機動機《ケンブ斬》、青のカラーリングに銃撃特化の重武装機《ジョウガン改》、黄色のカラーリングに大型の《リアスカートウイングユニット》を装備した滑空能力を持った《レイキ改》にはそれぞれ専用のＩ―ＬｅＳである赤い狛犬型のアバター《ガイ》、白い狐型のアバター《ケイ》、青い鹿型のアバター《ナユタ》がケンブ斬たちのパイロットである椎葉アモウ、鉄塚ガシン、紫々部シオンたちのサポートを行いつつ無人型ＡＭＡＩＭの戦車砲塔のような胴体に四肢をもつ無骨な外観で、頭部ユニットは胴体最前部に突き出た《ソボーテジアマン》、人型に近いスマートな形状が特徴的な真紅の《ニュウレン》、人型から離れた二足歩行で逆関節の独特な脚部形状とサブアームが特徴的な《バンイップ・ブーメラン》たちを操り善戦するも無人型ＡＭＡＩＭの性能差によってソボーテジアマンたちの損耗は激しかった。
『ちくしょう!!このままじゃこっちの機体が先に尽きちまう!?』
『やはりゴーストを元にしたＡＩを搭載しているだけにこちらの機体が数歩劣るっ!!』
　ガイとケイは無人型ＡＭＡＩＭを操作しながらブレイディフォックスを破壊するもそれ以上の数を破壊されるためその差は一向に広がるばかりだった。それが分かるだけにアモウたちの間にも動揺と焦りが強くなっていた。
　そしてそんな彼らを嘲笑うかのようにアモウたちの前に恐るべき亡霊はその姿を晒すのだった。

『――――見つけたぞ椎葉アモウ!!』
『なっ!?』
声が聞こえたのと同時にケンブ斬に斬りかかってくる黒いＡＭＡＩＭ――――《ブレイディファントム》の両腕のクロー状のヒートブレードが付いた《マルチガントレット》をケンブ斬の主武装であるケンブ斬の全高程ある大型の剣《超熱振式戦闘長刀》で受け止めるが、機体とのパワーに差があるのかケンブ斬は弾き飛ばされ地面を転がる。
『アモウっ!?』
『アモウくん!!』
『大尉の邪魔はさせんっ!!』
ガシンとシオンはアモウを襲った黒いＡＭＡＩＭに攻撃を仕掛けようとジョウガン改は二丁のマシンガン《４０ｍｍ携行短機関砲》を、レイキ改は薙刀《超熱振式薙刀改》を構えるが２機の前にシールドを構えた有人仕様のブレイディフォックス２機に阻まれケンブ斬の援護に迎えず足止めをくらう。
『今の声・・・その機体に乗っているのはブラッド・ワット大尉ですか!!』
『そうだ』
ケンブ斬の体勢を立て直しながら目の前のブレイディファントムの外部モニターから聞こえた声に聞き覚えのあったアモウはパイロットの名前を叫ぶとブラッドはアモウの言葉に応えながらマルチガントレットのクローを折り畳み、その両手にソードを構えてケンブ斬に斬り掛かる。ブレイディフォックスの想定以上のスピードで繰り出される斬撃に機体の装甲に絶え間ない傷を作りながらアモウはケンブ斬の超熱振式戦闘長刀で受けとめる。
『野郎っ、安全装置の類を極限まで削ってその分のリソースを全部出力のリソースに注いでやがるっ!?』
『それじゃあ中の人はっ!?』
『命知らずか、ただの戦闘狂か・・・兎に角タダじゃすまねぇ』
ガイからブレイディファントムの出力の異常さの原因を伝えられたアモウはパイロットの安全を無視してまで力を求めるブラッドに

対して戦慄していた。
『グハッ!?ハァ・・・ハァ・・・少し動かしただけでこの体たらくか・・・だがっ!!』
ブレイディファントムの殺人的な加速によって軽く血を吐いたブラッドは手の甲で口端の血を拭うと息を荒らげなら操縦桿を握る手を強め、モニター越しにケンブ斬を睨みつけながらブレイディファントムを動かす。
『それでも私はこの機体に乗る!!この機体で戦う!!これこそが私の求めていた力っ!!私はこの瞬間を待っていたのだ!!まさに命懸けだっ!!』
ブラッドは手に入れた力に陶酔するかのように思いの丈を叫びながらケンブ斬に斬り掛かる。アモウの援護をしようとレジスタンス組織《八咫烏》のメンバーである熊井ゴウケンと馬崎エイジの《ジョーハウンド》、協力者の1人であるアレクセイ・ゼレノイ少尉の《ルイツァリジアマン》、八咫烏の同盟メンバーである《アジア自由貿易協商》のニュウレン、《オセアニア連合》のバンイップ・ブーメラン、《大ユーラシア連邦》のソボーテジアマンたち無人機ＡＭＡＩＭを引連れて援護をしようとしたがルルーシュ軍とシュナゼル軍のモビルドール部隊たちの猛攻によって足止めをくらい援護に迎えないでいた。
それによって斑鳩の防衛戦力はさらに削られ、斑鳩の防衛戦力は黒の騎士団のナイトメア部隊と鹵獲機部隊、シュナイゼルから与えられたデストロイガンダム、グレイズアイン、アプサラスＩＩＩ、バウンド・ドッグなどのモビルドールのみとなっており、その数は着実に減っていき黒の騎士団の運命は風前の灯となっていた・・・
『見えた!・ウラノスとネッサローズ!!』
黒の騎士団が追い詰められていたのと同時刻。ウォーダンたち第一独立師団とノイエＤＣの防衛ラインを仲間たちの協力を得て突破したオルドリン・ジヴォンはランスロット・ハイグレイルのモニターにルルーシュの旗艦であるウラノスとマリーベルたち大グリンダ騎士団の母艦であるネッサローズを捉えた。ウォーダンたちの防衛ラ

インを突破できたのはオルドリンたちグリンダ騎士団のレオンハルト・シュタイナーのブラッドフォード・ブレイブ、ティンク・ロックハートのゼットランド・ハート、ソキア・シェルパのシェフィールド・アイ。マサキ・アンドーのサイバスター、リューネ・ゾルダークのヴァルシオーネ、ピースマークのオルフェウス・ジヴォンの烈火白炎、ズィー・ズィーベンの月下紫電、紅月カレンの紅蓮聖天八極式、デューカリオンのカタクラフト部隊である界塚伊奈帆のスレイプニールマスタング小隊の界塚ユキと網文韻子、ライエ・アリアーシュ、鞠戸孝一郎たちのアレイオン部隊、マクロス・クォーターのＳ．Ｍ．Ｓ小隊の早乙女アルトのＶＦ―２５メサイア、ミハエル・ブランのＶＦ―２５Ｇ、ルカ・アンジェロ―二のＲＶＦ―２５、オズマ・リーのＶＦ―２５Ｓ、カナリア・ベルシュタインのＶＢ―６　ケーニッヒモンスター、ピクシー小隊のクラン・クランのクァドラン・レア。

『流石にルルーシュ皇帝が乗る母艦の近くだけあって守りが硬いにゃあっ!!』

『だけどここさえ突破すればルルーシュたちは目と鼻の先!!』

迫り来るサザーランド・グリンダ、ザクＩＩＩ、量産型ゲシュペンストＭａｒｋ―ＩＩたちをシェフィールド・アイのＡＣＯハーケン、紅蓮聖天八極式の飛燕爪牙と呂号乙型特斬刀で迎撃しながらソキアとカレンは突き進む。戦力の殆どが前線に出ているため数は全体の戦力の中でかなり絞られているが、優秀なパイロットと最新鋭の機体たちの前にカレンたちは中々ルルーシュたちの旗艦に近づけないでいるがそれでも確実にその数を減らしていた。そして半ば辺りまで突き進んだところでそれらは現れた。

『――――止まりなさい愚かな反乱分子たち』

その声が聞こえると同時に紅蓮聖天八極式たちの前に独特な翼型のフロートユニットを持った頭部に一本角が生えた銀のカラーリングの騎士風の機体《ブリュンヒルデ》が身の丈ほどある巨大な槍を構え、その背後に先端に鋭い刃の生えた４枚羽根のフロートユニットを持った双刃の槍を構えし重装甲の青いカラーリングの機体《ロスヴァイセ》と鋭利な装甲をしている巨大な大剣を構えし頭部に２本の角を

生やした紫のカラーリングの機体《オルトリンデ》、騎士の甲冑を思わせる装甲に弓矢を構えし赤いカラーリングの機体《シグルドリーヴァ》、両腕にガトリングシールドを装備しリアスカートアーマーと背部にブースターを追加した《グフ・デスペラード》、漆黒のカラーリングの両腕にブレイズルミナスを装備した2振りのＭＶＳを構えた《ヴィンセント・アビス》、アマネセールに酷似したマリンブルーのカラーリングをした蛇腹剣を装備したナイトメア《エストレージャ》が立ち並んでいた。

『その声はマリーカさん!?』

『まさかルルーシュ皇帝の下にいたとはっ・・・』

ブリュンヒルデの外部スピーカーから聞こえたマリーカ・ソレイシィの声を聞いてレオンハルトとティンクは思わず驚いて声を上げてしまう。

マリーカ・ソレイシィ。かつて一時的にグリンダ騎士団に所属しオルドリンたちと何度も共に戦場で戦ったことのある元第十席（ナイトオブテン）ルキアーノ・ブラッドリーの親衛隊グラウサム・ヴァルキュリエ隊の一員であった。彼女がオルドリンたちの敵として立ち塞がるという現実に動揺を隠せないでいた。

『マリーカさん!!どうしてあなたがルルーシュ皇帝の配下になっているんですか!?』

オルドリンはマリーカに対して思わずそう声を上げてしまう。それに対してマリーカは一瞬悲しそうに顔を歪ませたが直ぐにその表情を冷徹なものに戻すと語り始める。

『ルルーシュ陛下は永き戦乱によって混沌と化したこの世界を平定する力を持ったお方。腐敗しきった三大国家を、他者に判断を委ね自ら責任を取らず都合のいい結果だけを求める愚者となった民を、都合のいい言葉で自らの行いを正当化する腐った軍人を、それらを含めた愚かな者たちにルルーシュ陛下の偉大なる力を知らしめ、その力を持って世界を平和にするんです』

マリーカはルルーシュの力とルルーシュの目指す未来を思い出し、頬を赤らめ光悦とした表情となる。そんなマリーカの見たことの無

い表情を見てオルドリンたちは息を飲む。
『ごちゃごちゃと五月蝿いのよ』
　そんな中、カレンはマリーカの話しなどどうでもいいと言わんばかりに吐き捨て、紅蓮聖天八極式の呂号乙型特斬刀を構えるとブリュンヒルデに向かって飛ばし、呂号乙型特斬刀で斬り掛かる。それをブリュンヒルデは身の丈ほどある巨大な槍《アラドヴァル》で受け止めると互いに火花を散らしながら鍔迫り合いをする。
『私はルルーシュを止めるためにここに来ている!!その邪魔をするってんならぶっ飛ばしてやるよ!!』
『やれるものならやってみなさい!!陛下を裏切った薄汚い雌犬がっ!!』
　そのままカレンとマリーカは互いに汚い言葉で罵りあいながら紅蓮聖天八極式とブリュンヒルデを動かし呂号乙型特斬刀とアラドヴァルを何度も衝突させながら戦闘を始める。そしてカレンが飛び出したのを合図にロスヴァイセたちルルーシュのもう1つの親衛隊深淵騎士団（アビスパラディン）の機体たちがオルドリンたちに襲撃を開始する。
『さぁ、お姉さんと踊りましょうか!!』
『くっ!?』
　双刃の槍《ゲイボルグ》を回しながらロスヴァイセを操る更識刀奈はシェフィールド・アイとドッキングしたランスロット・グレイル・ワルキューレとブラッドフォード・ブレイヴに斬り掛かりながら背中の《エスパーダユニット》の刃から斬撃波を飛ばす。
『皇帝陛下こそがこの世界唯一の希望。それを邪魔するというのならここで朽ちなさい!!』
『悪いがこっちもそう簡単にやられてやれねぇんだよ!!』
　エウルア・ゼフィロスの操るオルトリンデの黒き大剣《サンダルフォン》がサイバスターのディスカッターと切り結びながらオルトリンデは胸部の《ハイメガキャノン砲》から拡散させるようにメガ粒子砲を放つが、サイバスターはその機動力でかわす。
『落ちなさい!!』
『そう簡単にくらってたまるかよ!!』

シノン・ヘカーティアが操るシグルドリーヴァの握る強弓《アルテミス》から放たれるビームとガンダニュウム合金製の矢がＶＦ―２５メサイアたちに降り注ぐがアルトたちはそれを持ち前の機動力で回避しながら反撃する。

さらにはシャルロット・デュノアのグフ・デスペラード、スノウ・フェアウルフのヴィンセント・アビスが深淵騎士団所属のサザーランド・アビス、グロースター・アビス、ジンクスＩＩＩ、ギラ・ズール、ジルスペイン、ヴァルシオーブ、量産型νガンダム、シールドライガー、ジェノザウラーなど多種多様の機体を引き連れティンクやミシェルたちに襲いかかる。

ルルーシュたちの喉元まで迫ったかと思えば麗しき深淵の戦乙女たちに阻まれその刃は未だ届くことは無かった。

『ふふっ、さて彼らは次にどのような手を打ってくるのでしょうね？』

その様子を上空から蒼き重力の魔神《グランゾン》の中でシュウ・シラカワはカレンたちの抵抗を見ながらそう呟くのであった。彼の周囲にはザーツバルムのディオスクリアと彼に付き従う元火星騎士のクーロン卿の紅のカタクラフト《ヴォルケーノ》とヒルデガルド卿の深紺のカタクラフト《ジルコニア》が同じようにその様子を伺っていた。

そしてあらゆる勢力が殺し、潰し合いをしている中で黒の騎士団以上に追い詰められ今にも沈みそうになっているのはミスルギ皇国の勢力であった。

既にエンブリヲがジュリオに与えた劣化量産型ゲッタードラゴンやジガンスパーダ、シャンブロたちモビルドールやミスルギ皇国の無人飛行兵器《ピレスロイド》、志願兵たちのナイトメア・モビルスーツ部隊たちは全滅し、ジュリオが乗る皇族専用の母艦《エンペラージュリオＩ世》の護衛は僅かばかりの《ムラサメ》、《ダガーＬ》、デストロイガンダムなどの護衛機が数十機程度しか残っておらず、ルルーシュ軍の水中用ゾイドのサルコスクス種のゾイド《ガブリゲーター》やシュモクザメ型ゾイド《ハンマーヘッド》、ウロッゾ、ゼー・ズール、

ゾノ、キャンサー、パイシーズ、ポートマン、ポートマンⅡ、トリロバイト、ゲッソー、シーリオンたちの水中部隊による猛攻を受けて今にも沈没しそうになっていた。
「右舷第４ブロック破損！海水が浸水し始めたためシャッターを下ろします!!」
「第６・第８護衛部隊からの通信途絶!!」
「ピレスロイド残り１８機!!」
　エンペラージュリオⅠ世の艦橋にいるオペレーターたちからの残酷な報告が次々と上がる度にジュリオは開戦当時の余裕のあった表情は崩れ、敵をろくに倒せない無能な味方たちに対して顔を真っ赤に染め罵るように叫ぶのもやめ、今にも自分の乗るこのエンペラージュリオⅠ世が落とされ殺されてしまうのではないかと顔を青ざめ体を恐怖で震わせていた。
（あ、有り得ない・・・我々選ばれし民であるミスルギ皇国の人間が、マナも使えないノーマと同じ劣等種族に追い詰められるなどあっていいはずがない!!）
　自分たちを優れた人種であると信じて疑わないジュリオにとってルルーシュたちマナを使えない人間たちに敗北することなど決して認めたくない事実だった。
『苦戦してるようだなジュリオ陛下』
「え、エンブリヲ様・・・」
　艦橋のモニターからラグナメイル《ヒステリカ》に乗っているエンブリヲからの通信が来たジュリオは思わず立ち上がり縋るようにエンブリヲに声をかける。
「え、エンブリヲ様、私はどうすれば・・・」
『心配する必要は無いさ。ルルーシュを殺すための策は既に用意してあるじゃないか』
　エンブリヲの言葉にジュリオはハッとなり、後方に待機させていたある1隻の小型艦に乗せている小娘共の存在を思い出した。
「し、しかしあの小僧があの小娘たちを盾にしたところで動きを止めるのでしょうか・・・？」

『問題ないさ。あの少女たちはルルーシュにとってのアキレス腱のような存在だ。彼女たちを使えばこの程度の危機など容易く解決できるさ』

エンブリヲからの話を聞くうちに徐々に青ざめた表情から一転して嬉々とした表情に変わり始めルルーシュの悲痛な顔を浮かべるのを想像しただけで笑いが混み上がりそうになるのを耐える。

『では頼んだよジュリオ陛下』

エンブリヲは最後にそう言い残すと通信を切った。黒くなったモニターを暫く見つめたあとジュリオは部下たちに指示を出し始める。その選択が、彼の死をより残虐なものにすることに気づかずに・・・